京都府遺跡調査概報

第 29 冊

丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡

昭和61・62年度

(1) 高山古墳群・高山遺跡

(2) 普甲古墳群・稲荷古墳群

(3) 新ケ尾東古墳群

(4) 鳥取城跡

(5) アバ田古墳群

1988

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

(1) 高山12号墳出土金銅装双龍環頭大刀柄頭

(2) 高山12号墳出土特殊扁壺

序

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターでは，京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施し，その活用及び研究を行い，先人の遺した文化財を大切にする考え方の普及育成に努めるべく，常に努力いたしております。当調査研究センターも発足して7年が過ぎ，年々事業量が増加していくなかで，一層精密な調査を実施し，一層正確な記録を作成し，これらを後世に伝えるように常に心がけています。そうした基本姿勢のもとで，昭和62年度に実施した発掘調査は，44件にのぼります。そのうち，本書に収めましたのは，丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡，遺跡数にして5か所の発掘調査の概要です。

当調査研究センターでは，本書を含めて，「京都府遺跡調査報告書」・「京都府埋蔵文化財情報」も刊行しております。これらが関係各位の参考に供され，斯学向上の一助となれば幸いです。

なお，本書に掲載した調査の実施にあたりましては，発掘調査を委託された農林水産省近畿農政局をはじめとする関係諸機関の御協力を受けただけでなく，酷暑・極寒の中で多くの方がたが熱心に作業に従事していただきましたことを特記して，これらの方がたに厚くお礼申し上げます。

昭和63年3月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長　福　山　敏　男

凡　　例

1．本冊に収めたのは，「丹後国営農地開発事業（丹後東部・西部地区）関係遺跡 昭和61・62年度発掘調査」の概要である。

2．丹後国営農地開発事業関係遺跡の所在地，調査期間，担当者は，付表1のとおりである。執筆者については，本文の各節の末尾に記した。

3．発掘調査に係る経費は，農林水産省近畿農政局が負担した。

4．本冊の編集には，調査第1課資料係が当たった。

目　　次

はじめに…… 1
(1)　高山古墳群・高山遺跡…… 3
　1．位置と環境…… 3
　2．調査経過…… 5
　3．古墳群・遺跡の分布…… 7
　4．調査概要…… 9
　5．まとめ……95
(2)　普甲古墳群・稲荷古墳群…… 104
　1．位置と環境…… 104
　2．調査経過…… 106
　3．古墳群の分布…… 106
　4．調査概要…… 109
　5．出土遺物…… 123
　6．まとめ…… 128
(3)　新ケ尾東古墳群…… 131
　1．位置と環境…… 131
　2．調査経過…… 133
　3．調査概要…… 133
　4．まとめ…… 148
(4)　鳥取城跡…… 150
　1．位置と環境…… 150
　2．遺跡の概要…… 150
　3．まとめ…… 152
(5)　アバ田古墳群…… 153
　1．位置と環境…… 153
　2．調査の経過…… 155
　3．遺跡の概要…… 155
　4．まとめ…… 175

挿 図 目 次

(1) 高山古墳群・高山遺跡

第 1 図　周辺遺跡分布図…… 4
第 2 図　丘陵・古墳遺跡分布図…… 7
第 3 図　高山 3 号墳地形図……10
第 4 図　高山 3 号墳石室実測図……11
第 5 図　高山 3 号墳石室断面図……13
第 6 図　高山 3 号墳石室奥壁断面図……14
第 7 図　高山 3 号墳閉塞石実測図……14
第 8 図　高山 3 号墳遺物出土状況(1)……15
第 9 図　高山 3 号墳遺物出土状況(2)……16
第 10 図　高山 3 号墳出土遺物実測図(1)……17
第 11 図　高山 3 号墳出土遺物実測図(2)……20
第 12 図　高山 3 号墳出土遺物実測図(3)……21
第 13 図　高山 3 号墳出土遺物実測図(4)鏃……22
第 14 図　高山 3 号墳出土遺物実測図(5)……23
第 15 図　高山 3 号墳出土遺物実測図(6)留金具……24
第 16 図　高山 3 号墳出土遺物実測図(7)鋲……25
第 17 図　高山 3 号墳出土遺物実測図(8)玉類……26
第 18 図　高山 4 号墳地形図……29
第 19 図　高山 4 号墳石室断面図……29
第 20 図　高山 4 号墳石室実測図……30
第 21 図　高山 4 号墳遺物出土状況……31
第 22 図　高山 4 号墳出土遺物実測図(1)……33
第 23 図　高山 4 号墳出土遺物実測図(2)……34
第 24 図　高山 4 号墳出土遺物実測図(3)……35
第 25 図　高山 5 号墳地形図および火葬墓・土葬墓実測図……36
第 26 図　高山 5 号墳石室実測図……37
第 27 図　高山 5 号墳石室断面図……38

第 28 図　高山 5 号墳閉塞石実測図……39
第 29 図　高山 5 号墳遺物出土状況……40
第 30 図　高山 5 号墳出土遺物実測図(1)……41
第 31 図　高山 5 号墳出土遺物実測図(2)……42
第 32 図　高山 6 号墳地形図……43
第 33 図　高山 6 号墳石室実測図……44
第 34 図　高山 6 号墳石室断面図……45
第 35 図　高山 6 号墳閉塞石実測図……45
第 36 図　高山 6 号墳遺物出土状況(1)……46
第 37 図　高山 6 号墳遺物出土状況(2)……46
第 38 図　高山 6 号墳出土遺物実測図(1)……47
第 39 図　高山 6 号墳出土遺物実測図(2)……49
第 40 図　高山 6 号墳出土遺物実測図(3)……50
第 41 図　試掘地A(高山遺跡)住居跡実測図……52
第 42 図　住居跡出土遺物実測図……53
第 43 図　試掘地B地形図……54
第 44 図　出土古銭拓影……56
第 45 図　試掘地A南端地形層・土葬墓実測図……58
第 46 図　高山 7 号墳地形図……59
第 47 図　高山 7 号墳石室実測図……60
第 48 図　高山 7 号墳閉塞石実測図……61
第 49 図　高山 7 号墳遺物出土状況……61
第 50 図　高山 7 号墳出土遺物実測図(1)……62
第 51 図　高山 7 号墳出土遺物実測図(2)……63
第 52 図　高山 8 号墳地形図……64
第 53 図　高山11号墳地形図……65
第 54 図　高山12・13号墳地形図……66
第 55 図　高山12号墳石室実測図……67
第 56 図　高山12号墳石室断面図……70
第 57 図　高山12号墳閉塞実測図……72
第 58 図　高山12号墳遺物出土状況(1)……73
第 59 図　高山12号墳遺物出土状況(2)……74

第 60 図　高山12号墳出土遺物実測図(1)……76
第 61 図　高山12号墳出土遺物実測図(2)……77
第 62 図　高山12号墳出土遺物実測図(3)……79
第 63 図　高山12号墳出土遺物実測図(4)……81
第 64 図　高山12号墳出土遺物実測図(5)……82
第 65 図　高山12号墳出土遺物実測図(6)……83
第 66 図　高山12号墳出土遺物実測図(7)……86
第 67 図　高山12号墳出土遺物実測図(8)……88
第 68 図　高山12号墳出土遺物実測図(9)……89
第 69 図　高山12号墳出土遺物実測図(10)……90
第 70 図　高山12号墳出土遺物実測図(11)……93
第 71 図　高山12号墳出土遺物実測図(12)……95
第 72 図　高山12号墳出土遺物実測図(13)……96
第 73 図　高山12号墳出土遺物実測図(14)……99

(2)普甲古墳群・稲荷古墳群

第 74 図　周辺主要遺跡分布図…… 105
第 75 図　古墳群分布図(1)…… 107
第 76 図　古墳群分布図(2)…… 108
第 77 図　普甲 1 号墳第 1 主体部実測図…… 109
第 78 図　普甲 1 号墳第 2 ・ 3 主体部実測図…… 109
第 79 図　普甲 1 号墳第 4 主体部実測図…… 110
第 80 図　普甲 1 号墳第 5 主体部実測図…… 110
第 81 図　普甲古墳群地形図…… 111
第 82 図　普甲 1 号墳第 6 主体部・土坑 1 ・ 2 実測図…… 113
第 83 図　普甲 1 号墳第 7 主体部実測図…… 113
第 84 図　普甲 2 号墳主体部実測図…… 114
第 85 図　普甲 3 号墳第 1 ・ 2 ・ 3 主体部実測図…… 115
第 86 図　普甲 3 号墳第 4 主体部実測図…… 116
第 87 図　普甲 4 号墳主体部実測図…… 117
第 88 図　普甲 5 号墳主体部実測図…… 118
第 89 図　普甲 6 号墳主体部実測図…… 119
第 90 図　普甲 7 号墳主体部実測図…… 120

第 91 図　稲荷15号墳地形図…… 121
第 92 図　稲荷15号墳主体部実測図…… 121
第 93 図　稲荷17号墳地形図…… 122
第 94 図　稲荷18・19号墳地形図…… 122
第 95 図　稲荷19号墳主体部実測図…… 122
第 96 図　出土遺物実測図(1)…… 123
第 97 図　出土遺物実測図(2)…… 124
第 98 図　出土遺物実測図(3)…… 125
第 99 図　出土遺物実測図(4)…… 126
第 100 図　出土遺物実測図(5)…… 127

(3)新ケ尾東古墳群

第 101 図　周辺遺跡分布図…… 132
第 102 図　新ケ尾・新ケ尾東古墳群分布図…… 133
第 103 図　新ケ尾東８・９・10号墳地形図…… 134
第 104 図　新ケ尾東８号墳主体部実測図…… 135
第 105 図　新ケ尾東８号墳出土遺物実測図…… 136
第 106 図　新ケ尾東８号墳火葬墓実測図…… 137
第 107 図　火葬墓出土遺物実測図…… 137
第 108 図　新ケ尾東９号墳主体部実測図…… 138
第 109 図　新ケ尾東９号墳出土遺物実測図(1)…… 139
第 110 図　新ケ尾東９号墳出土遺物実測図(2)…… 139
第 111 図　新ケ尾東10号墳石室実測図…… 141
第 112 図　新ケ尾東10号墳閉塞石実測図…… 142
第 113 図　新ケ尾東10号墳遺物出土状況…… 143
第 114 図　新ケ尾東10号墳出土遺物実測図(1)…… 145
第 115 図　新ケ尾東10号墳出土遺物実測図(2)…… 147
第 116 図　新ケ尾東10号墳出土遺物実測図(3)…… 148

(4)鳥取城跡

第 117 図　調査地位置図…… 150
第 118 図　鳥取城跡地形測量図…… 151
第 119 図　トレンチ実測図…… 151
第 120 図　出土遺物実測図…… 152

(5)アバ田古墳群

第121図　調査地位置図…… 153
第122図　新庄1団地内遺跡分布図…… 154
第123図　アバ田古墳群地形測量図…… 156
第124図　アバ田1号墳墳丘断面図…… 157
第125図　アバ田1号墳石室実測図…… 158
第126図　アバ田1号墳遺物出土状態図…… 160
第127図　アバ田1号墳出土遺物実測図(1)…… 161
第128図　アバ田1号墳出土遺物実測図(2)…… 162
第129図　アバ田2号墳墳丘断面図…… 164
第130図　アバ田2号墳石室実測図…… 165
第131図　アバ田2号墳遺物出土状態図…… 166
第132図　アバ田2号墳出土遺物実測図(1)…… 168
第133図　アバ田2号墳出土遺物実測図(2)…… 169
第134図　アバ田2号墳出土遺物実測図(3)…… 170
第135図　アバ田2号墳出土遺物実測図(4)…… 171
第136図　アバ田2号墳出土遺物実測図(5)…… 173
第137図　アバ田2号墳出土遺物実測図(6)…… 174
第138図　アバ田2号墳出土遺物実測図(7)…… 175
第139図　2号墳築造時の堆積状況…… 177
第140図　1号墳築造時の堆積状況…… 178

付 表 目 次

付 表 1　昭和61・62年度国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表…… 1
付 表 2　国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表…… 2

(1)高山古墳群・高山遺跡

付 表 3　高山3号墳出土玉類観察表……27
付 表 4　高山6号墳出土玉類観察表……50
付 表 5　出土古銭一覧表……56
付 表 6　双龍環頭大刀柄頭計測値……82
付 表 7　高山12号墳出土玉類観察表……97

(2)普甲古墳群・稲荷古墳群

付 表 8　普甲古墳群出土玉類計測表…… 130

(5)アバ田古墳群

付 表 9　新庄1団地内遺跡一覧表…… 153
付 表 10　石室築造に用いた石材…… 179

図 版 目 次

(1)　高山古墳群・高山遺跡

図版第1　(1)高山3号墳調査前全景(南東から)　(2)高山3号墳天井石(南東から)
図版第2　(1)高山3号墳石室全景(南南西から)
　　(2)高山3号墳棺台周辺遺物出土状況(南南西から)
図版第3　(1)高山3号墳棺台周辺遺物出土状況部分(南南西から)
　　(2)高山3号墳玉類出土状況(東北東から)
図版第4　(1)高山3号墳閉塞石内側遺物出土状況(北から)
　　(2)高山3号墳閉塞状況(南南西から)
図版第5　(1)高山4号墳調査前全景(西から)　(2)高山4号墳石室全景(西から)
図版第6　(1)高山4号墳玄門部遺物出土状況(東から)
　　(2)高山4号墳溝全景(南から)

図版第７　(1)高山５号墳調査前全景(南東から)
(2)高山５号墳石室全景(南東から)
図版第８　(1)高山５号墳玄室敷石(南東から)
(2)高山５号墳袖石付近遺物出土状況(東から)
図版第９　(1)高山６号墳調査前全景(南東から)
(2)高山６号墳石室全景(南東から)
図版第10　(1)高山６号墳閉塞部付近遺物出土状況(北西から)
(2)高山６号墳奥壁付近遺物出土状況(南東から)
図版第11　(1)試掘地Ａ(高山遺跡)住居跡全景(北西から)
(2)試掘地Ａ(高山遺跡)石組みカマド(南西から)
図版第12　(1)高山４号墳周辺の積石・集石(北東から)
(2)高山４号墳周辺の積石・集石(北から)
図版第13　(1)高山５号墳周囲集石全景(北東から)
(2)高山５号墳周囲集石９部分(西から)
図版第14　(1)高山５号墳周囲の集石除去後の墓坑(北東から)
(2)高山５号墳周囲の集石墓坑９の人骨出土状況(北東から)
図版第15　(1)高山７号墳調査前全景(北西から)
(2)高山７号墳石室全景(南南西から)
図版第16　(1)高山７号墳閉塞状況(南南西から)
(2)高山７号墳遺物出土状況(西から)
図版第17　(1)高山12号墳調査前全景(北東から)　(2)高山12号墳石室全景(南から)
図版第18　(1)高山12号墳東側壁内傾状況(南から)
(2)高山12号墳東側壁内傾状況(北から)
図版第19　(1)高山12号墳環頭大刀柄頭龍文出土状況(北西から)
(2)高山12号墳石材除去後の東側壁玄室床面石列(南から)
図版第20　(1)高山12号墳環頭大刀柄頭出土状況(東から)
(2)高山12号墳袖石付近遺物出土状況(北東から)
図版第21　(1)高山12号墳玄門部遺物出土状況(北西から)
(2)高山12号墳玄門部西側遺物出土状況(北東から)
図版第22　(1)高山12号墳玄室内遺物出土状況(北から)
(2)高山12号墳袖石部分遺物出土状況(北東から)
図版第23　(1)高山12号墳閉塞状況(南から)

(2)高山12号墳石室前面遺物出土状況(北西から)
図版第24　(1)高山12号墳玄室奥壁(南から)
(2)高山12号墳玄室基底石鑿跡(北東から)
図版第25　(1)高山12号墳玄室と袖石(北から)　(2)高山12号墳石室全景(南から)
図版第26　3号墳出土土器(1)
図版第27　3号墳出土土器(2)
図版第28　4号墳出土土器
図版第29　5号墳出土土器
図版第30　5・6号墳出土土器
図版第31　7・12号墳出土土器
図版第32　12号墳出土土器(1)
図版第33　12号墳出土土器(2)
図版第34　12号墳・住居跡出土土器
図版第35　出土遺物(1)
図版第36　出土遺物(2)
図版第37　出土遺物(3)
図版第38　出土遺物(4)
図版第39　出土遺物(5)
図版第40　出土遺物(6)
図版第41　出土遺物(7)
図版第42　出土遺物(8)
図版第43　出土遺物(9)
図版第44　出土遺物(10)

(2)　**普甲古墳群・稲荷古墳群**

図版第45　(1)普甲1～3号墳調査前(東から)　(2)普甲1～3号墳調査後(西から)
図版第46　(1)普甲1号墳第1主体部　(2)普甲1号墳第2・3主体部
図版第47　(1)普甲1号墳第4主体部　(2)普甲1号墳第7主体部
図版第48　(1)普甲1号墳第6主体部　(2)普甲1号墳第2主体部玉類出土状況
図版第49　(1)普甲2号墳主体部　(2)普甲1号墳第5主体部
図版第50　(1)普甲3号墳第1～3主体部　(2)普甲3号墳第4主体部(南から)
図版第51　(1)普甲4号墳主体部　(2)普甲4号墳玉類出土状況
図版第52　(1)普甲4号墳(南から)　(2)普甲4～7号墳遠景(東から)

図版第53　(1)普甲５・６・７号墳(西から)　(2)普甲５号墳主体部
図版第54　(1)普甲６号墳主体部　(2)普甲７号墳主体部
図版第55　(1)稲荷15号墳(西から)　(2)稲荷15号墳主体部
図版第56　(1)稲荷17号墳調査前(東から)　(2)稲荷17号墳調査後(西から)
図版第57　出土遺物(1)
図版第58　出土遺物(2)
図版第59　出土遺物(3)

(3)　**新ケ尾東古墳群**

図版第60　(1)新ケ尾東８号墳調査前全景(北西から)
　　(2)新ケ尾東８号墳火葬骨出土状況(南から)
図版第61　(1)新ケ尾東８号墳第１主体部(北東から)
　　(2)新ケ尾東８号墳第２主体部(北東から)
図版第62　(1)新ケ尾東９号墳調査前全景(東南東から)
　　(2)新ケ尾東９号墳主体部全景(東南東から)
図版第63　(1)新ケ尾東９号墳第１・２主体部，右が第１主体部(北東から)
　　(2)新ケ尾東９号墳第３主体部(北から)
図版第64　(1)新ケ尾東10号墳調査前全景(西北西から)
　　(2)新ケ尾東10号墳石室全景(南から)
図版第65　(1)新ケ尾東10号墳遺物出土状況(南から)
　　(2)新ケ尾東10号墳遺物出土状況(西から)
図版第66　(1)新ケ尾東10号墳石室全景(北から)
　　(2)新ケ尾東10号墳閉塞状況(南から)
図版第67　出土遺物(1)
図版第68　出土遺物(2)
図版第69　出土遺物(3)
図版第70　出土遺物(4)

(4)　**鳥取城跡**

図版第71　(1)鳥取城跡遠景(西から)　(2)第１トレンチ主要部全景(南東から)
図版第72　(1)SB02 全景(東から)　(2)SB03・SK01 全景(南から)

(5)　**アバ田古墳群**

図版第73　(1)１号墳調査前全景(東から)　(2)１号墳石室全景(北から)
図版第74　(1)１号墳石室内遺物出土状態(南から)　(2)１号墳石室全景(北から)

図版第75　(1) 2 号墳調査前全景(北東から)　(2) 2 号墳石室全景(北東から)
図版第76　(1) 2 号墳石室内遺物出土状態(羨道部から)
(2) 2 号墳石室内遺物出土状態(玄門部)
図版第77　1 号墳出土遺物(1)
図版第78　1 号墳出土遺物(2)
図版第79　2 号墳出土遺物(1)
図版第80　2 号墳出土遺物(2)
図版第81　2 号墳出土遺物(3)

丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡 昭和61・62年度発掘調査概要

はじめに

本概要報告は，農林水産省近畿農政局が計画，推進している丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)の開発実施に伴い，昭和61・62年度中に発掘調査を実施した京都府竹野郡丹後町高山古墳群・高山遺跡，竹野郡弥栄町井辺普甲・稲荷古墳群，弥栄町吉沢新ケ尾東古墳群，熊野郡久美浜町浦明鳥取城跡，久美浜町新庄アバ田古墳群の発掘調査概要である。

付表1　昭和61・62年度国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査期間	担当者
1	高山(たかやま)古墳群	京都府竹野郡丹後町 徳光小字高山他	昭和61年7月19日 ～昭和62年3月14日 昭和62年4月13日 ～昭和62年5月28日 昭和62年6月18日 ～昭和63年9月24日	主任調査員　小山　雅人 調査員　増田　孝彦 調査第1係長　辻本　和美 調査員　増田　孝彦 森　正
2	普甲(ふとう)古墳群 稲荷(いなり)古墳群	京都府竹野郡弥栄町 井辺小字普甲他	昭和62年6月1日 ～昭和62年12月9日	調査第1係長　辻本　和美 調査員　増田　孝彦 森　正
3	新ケ尾(しんお)東古墳群	京都府竹野郡弥栄町 吉沢小字半坂他	昭和62年10月6日 ～昭和63年1月25日	調査第1係長　辻本　和美 調査員　増田　孝彦 森　正
4	鳥取(とつとり)城跡	京都府熊野郡久美浜町 浦明小字鳥取	昭和62年5月18日 ～昭和62年6月24日	調査第1係長　辻本　和美 調査員　引原　茂治 荒川　史
5	アバ田古墳群	京都府熊野郡久美浜町 新庄小字アバ田	昭和62年7月9日 ～昭和62年11月11日	調査第1係長　辻本　和美 調査員　荒川　史

調査は，近畿農政局丹後開拓事業所の依頼を受けて，(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した。国営農地開発事業に伴う発掘調査は，当調査研究センターでは昭和60年度から開始し，付表2の調査を実施し多大な成果[注1]があがっている。

現地調査は，昭和61年度には当調査研究センター調査課主任調査員小山雅人，同調査員増田孝彦があたり，昭和62年度には，調査第2課調査第1係長辻本和美，同調査員増田孝彦・荒川　史・森　　正があたった。

本概要報告の執筆は「はじめに」を増田が，東部地区の「高山古墳群・高山遺跡」・「新ケ尾東古墳群」を主として増田が担当し，「普甲・稲荷古墳群」を森が担当した。なお，高山古墳群の「位置と環境」については，大崎康文・松室孝樹(京都教育大学学生)が，出土遺物の「土器類」については森が担当し，新ケ尾東古墳群の「位置と環境」は松井政子(橘女子大学卒業生)が，「出土遺物」については佐伯英樹(花園大学学生)が，普甲・稲荷古墳群の「位置と環境」については笠原勝彦(仏教大学学生)が，西部地区の「鳥取城跡」・「アバ田古墳群」は荒川が執筆した。

調査期間中，地元有志の方々や学生諸氏には，作業員および補助員として作業に従事していただいた[注2]。また，調査にあたっては，丹後町教育委員会，弥栄町教育委員会，久美浜町教育委員会をはじめとする関係諸機関の御協力を得ることができ，現地においても多くの方がたの御協力と御指導を賜った。あらためて感謝の意を表したい。

なお，調査に係る経費は，全額農林水産省近畿農政局が負担した。　　(増田孝彦)

付表2　国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表

番号	遺　跡　名	所在地	調査期間	概　　要
1	有明古墳群・横穴群	大宮町三坂	昭和60年10月～昭和61年3月	古墳2基(4世紀後半～5世紀) 横穴3基(6世紀末～7世紀中葉)
2	桃山古墳群	峰山町内記	昭和60年11月～昭和61年3月	古墳2基(6世紀中葉)
3	宮の森古墳群	弥栄町鳥取	昭和61年4月～昭和61年7月	古墳4基(5世紀～6世紀中葉)
4	ゲンギョウの山古墳群	弥栄町鳥取	昭和61年4月～昭和61年10月	古墳9基(4世紀後半・7世紀前半)

(1) 高山古墳群・高山遺跡

1. 位置と環境

高山古墳群は，京都府竹野郡丹後町徳光小字高山他に所在する。丹後町は，丹後半島の北端で日本海に面しており，西は網野町，南は弥栄町，東は伊根町に接している。町内中央には，丹後半島最大の河川である竹野川が北流しており，その周辺に沖積平野を形成している。当古墳群は，その中で西から東に向かい，河口部より3.5km上流で竹野川に合流する徳良川の左岸丘陵上に分布している。

本古墳群周辺の歴史的環境を概観すると，宇川の河口部で縄文時代前期にさかのぼる平遺跡がその初現である(注3)。竹野川河口部では，竹野遺跡で縄文時代後期の遺物が出土している(注4)。

弥生時代には，前期に竹野遺跡において集落が営まれるが，中期には一度断絶しており，中期末から後期にかけて再び人々の生活の舞台となっている。墳墓の様相は，先年調査の行われた大山墳墓群(注5)において，うかがうことができる。竹野川に向かってのびる低位丘陵上に，10基の方形台状墓が確認されており，中期以降に比定されている。そのほかは明確ではないが，近年の分布調査で同様の低位丘陵上に台状墓と考えられるものが数多く確認されている。

古墳時代になると，河口部右岸の丘陵を利用して大型前方後円墳である神明山古墳(全長約190m)が築造される。段築・葺石・埴輪といった外表施設を完備し，内部施設は竪穴式石室と推定されている。畿内大王墓に匹敵する規模と内容をそなえた日本海沿岸最大級の前方後円墳である。4世紀後半に築造されたものと考えられている。神明山古墳の北側には中期大型円墳で長持形石棺を直葬する産土山古墳(全長約50m)(注6)が築造されており，5世紀中葉頃に比定されている。また願興寺古墳群・桝塚古墳など方墳が分布している点は，この地域の特徴である。後期では，横穴式石室を内部主体とする古墳が10数基以下という小グループをなして分布する。大成古墳群・片山古墳群・矢畑古墳群・三宅古墳群・鳥越古墳群・西小田古墳群等がある。このうち，河口部右岸の海岸に突き出た台地上に分布する大成古墳群(注7)は，13基で構成されており，6世紀末から7世紀初頭頃に築造されている。片山1号墳は，こうもりの穴古墳ともよばれており，その石室規模は丹後地域において最大級である。本古墳群と徳良川を挟んだ対岸丘陵上には，小行地古墳群・七ツ塚古墳群等の古墳群もあり，比較的古墳の密集した地域となっている。　(大崎康文・松室孝樹)

第1図　周辺遺跡分布図（1/50,000）

1. 高山古墳群	2. 段ナル古墳群	3. 長田遺跡	4. 奥山古墳群
5. 奥山遺跡	6. 取越古墳群	7. 小行池古墳群	8. 七ツ塚古墳群
9. 川向遺跡	10. 桝塚古墳	11. 大成古墳群	12. 産土山古墳
13. 片山古墳群	14. 竹野遺跡	15. 神明山古墳	16. 土馬出土地
17. 丸山古墳	18. 願興寺古墳群	19. 岩木遺跡	20. 矢畑遺跡
21. 吉永遺跡	22. アマカオカ古墳	23. 馬場の内古墳	24. 古銭出土地
25. 大山北古墳群	26. 大山墳墓群	27. 大山遺跡	28. 三宅古墳群
29. 宮の谷古墳	30. 鳥越古墳群	31. 愛宕山古墳群	32. 西小田古墳群

2. 調 査 経 過

高山古墳群は，昭和47年度版「京都府遺跡地図」では，高山古墳群として3基，さらに周辺で椿原・荒神山古墳の5基の存在が知られていた。その後，「丹後国営農地開発事業」に先だち，昭和57年度に京都府教育委員会が実施した分布調査による[注8]と，高山古墳群(5基・古墳状隆起1か所・平坦地形1か所)・椿原古墳(1基)・荒神山古墳の計8基の古墳が確認されていた。

高山古墳群の調査は，2年度にわたり実施した。調査開始時には，前述した5基の古墳(1・3～6号墳)・平坦地形(試掘地A)・古墳状隆起(試掘地B)であったが，1号墳の伐採を行ったところ，その南側において2号墳を確認した。また，これらの古墳周囲や周辺では，集石・積石状をなす墓地と思われるものも多数確認された。古墳の分布状況や，団地造成予定地が広範囲にわたることなどから，未確認古墳・遺跡が存在することが懸念されたが，雑草が繁茂する7月から調査を開始したため分布調査を行うことができず，雑草の枯れる冬場を待ち造成予定地内全域の調査を行った。その結果，6号墳南側において比較的大きな石材が露出する7・8・9号墳を，石材の露出は認められなかったが，4号墳西側で山道により墳丘が二分されたのではないかと思われる10号墳をそれぞれ確認した。また，3号墳北方の谷一つ隔てた対岸の丘陵では，7・8・9号墳と同様の形態をなす11・12号墳も認められた。13号墳は，本来12号墳であったが，地形的な優位性から誤認し，調査最盛期に土地所有者より「天井石を運び出した古墳と違う。」と指摘を受け，急拠，周辺の伐採を行い，開墾により削平され，わずかに石材の露出する古墳を確認した。これによって，調査中のものを12号墳，伐採し新たに確認したものを13号墳とした。

調査は，昭和61・62年度に実施した。昭和61年度調査は，1～6号墳および試掘地A・B，古墳周囲・周辺に広がる集石・積石がその対象となった。このうち，1・2号墳は京都府教育委員会が，残りを当調査研究センターが分担して行った。

調査では，古墳の埋葬施設を検出するとともに，その築造方法を明らかにし，周辺の遺構の有無を確認することを主な目的として，古墳周辺も掘削を行った。試掘地および集石・積石部分の掘削も行ったため調査面積は2,200m^{2}にもおよんだ。

現地調査は，伐採作業から着手し，一部伐採の終了した7月19日より地形測量を開始した。地形測量は団地造成用測量杭を基準として行った平板測量(1/50，20cm等高線)である。掘削作業は，7月24日に器材を搬入し，26日から作業を開始した。掘削面積が広大なことと，掘削場所が離れていることから，墳丘の表土をすべて排除し，埋葬施設を確認してから次の場所に移るという方法をとり，順次これをくり返した。しかし，調査前に予想した以上に石室の保存状況が悪く，天井石の落ち込み，側壁の倒壊，開墾による石室の破壊，

石室上に巨木が存在し，その根による石室の変形などがあり，調査上危険となる石材の除去にかなりの時間と労力を費した。その結果，４基の横穴式石室を内部主体とする古墳，住居跡１基(高山遺跡)，火葬墓４基，土葬墓14基を検出した。実測作業，写真撮影はその都度行い，昭和62年２月28日にはすべての現地作業を終了した。現地説明会は，昭和62年５月20日に昭和62年度調査の７号墳終了に伴い同時に行った。

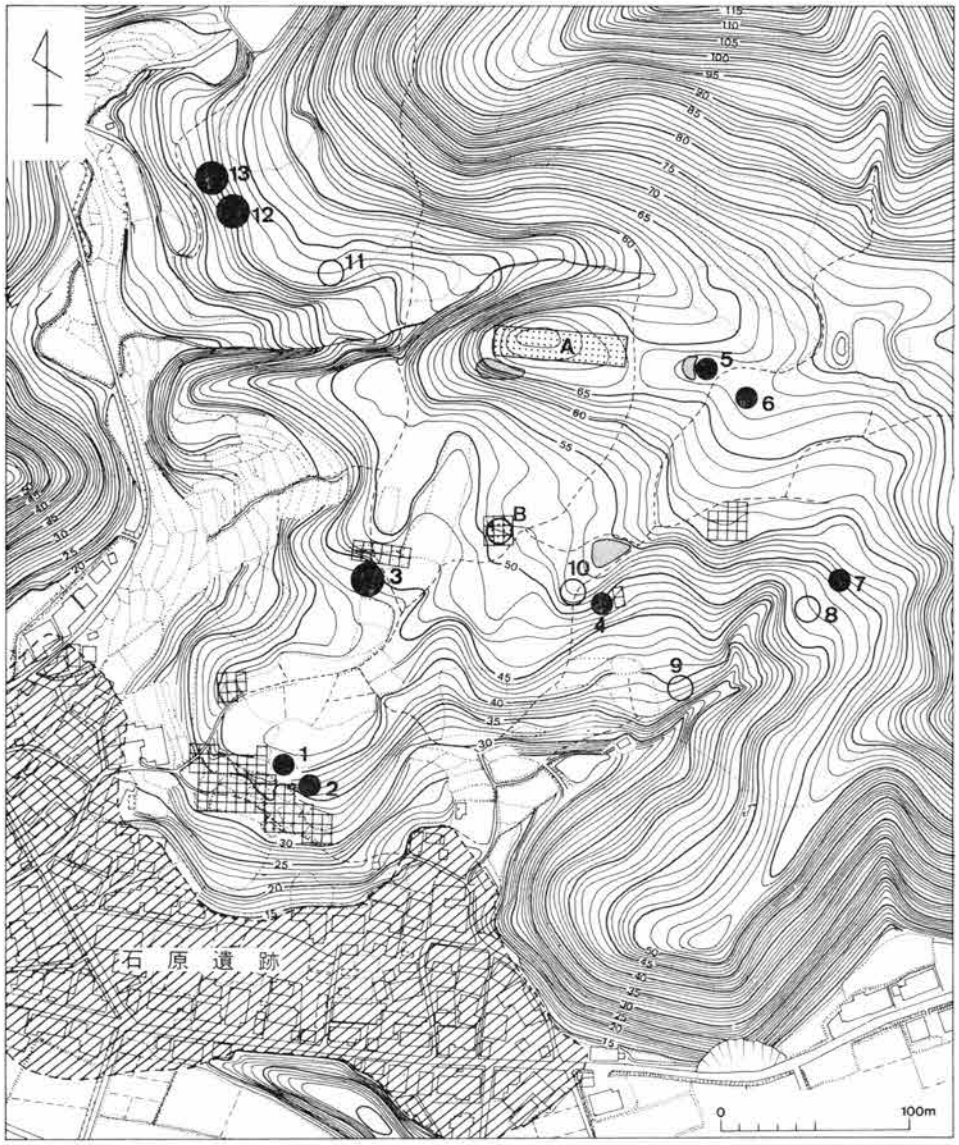
昭和62年度調査は，当初7～10号墳までであったが，７号墳調査終了時に新たに工事の関係により11・12号墳がその対象に含まれることになった。

調査は，9・10号墳を京都府教育委員会が，残りを当調査研究センターが分担して行った。7・8号墳の調査は，昭和62年４月14日より地形測量(1/50，20cm等高線)を実施し，掘削作業は４月17日より開始した。その結果，７号墳ではほとんど基底石しか残らない横穴式石室１基，８号墳は自然地形であることが判明した。現地説明会は，昭和61年度調査と合わせて５月20日に行い，すべての現地作業は５月28日に終了した。11・12号墳の調査は，６月10日より伐採を開始し，６月18・19日の２日間地形測量(1/50，25cm等高線)を実施し，掘削作業には６月22日より入った。その結果，11号墳は自然地形であることが判明したが，12号墳は，開墾や竹林があるため墳丘が大きく削られ，当初予想した規模よりかなり大きくなることが明らかとなり，追加伐採・地形測量を行い古墳周囲の開墾による段々畑まで掘削を強いられることになった。そのため62年度調査の掘削面積は約1,200m^{2}にもおよんだ。石室の輪郭が大よそつかめ，石室内部の掘削に着手したが，７月10日に丹後半島では２例目となる金銅装双龍環頭大刀柄頭２口が羨道部閉塞石上より出土した。環頭柄頭のみの出土であり，古墳(石室)の概要は未確認であった。そのため，玄室内の調査を先行させたが，調査が進むにつれ，石室東側壁が異常に内傾し，倒壊の危険性が生じてきた。調査を一旦中断し，倒壊の恐れのある石材を除去したのち，玄室内の掘削を開始したが，12号墳の石室は，丹後半島でも最大級クラスの石室と判明し，古墳の概要のつかめた８月10日に新聞発表を行った。また，８月20日には全国で７例目の出土となった特殊扁壺についても新聞発表を行った。現地説明会は，８月23日に行った。高山12号墳は，貴重な遺物，丹後半島でも最大級クラスの石室が検出されたことで，関係諸機関協議の上，保存されることが決定した。そのため，調査は墳丘・石室を破壊しない最小限度の調査にとどめ，埋め戻すこととなった。埋め戻し作業は，現状では石室が倒壊するため，石室の最上段の石材を露出させ，石室の輪郭がわかるように，墳丘の一部断ち割り作業と並行して８月28日より土納袋約1,400枚を使い，９月19日まで埋め戻し作業を行い，９月24日にはすべての現地作業を終了した。

3. 古墳群・遺跡の分布

高山古墳群・高山遺跡は，徳良川左岸の全体的にゆるやかな低丘陵の標高37～70m付近に分布し，周辺の平地との比高差は最高所で約55mである。

この丘陵は，古くから開墾されているようであるが，丘陵全体の大規模な開墾は戦前～戦後にかけて行われており，昭和38年の豪雪により丘陵上の大半の畑は放置されている。



集石積石　　江戸時代中期以降の墓地

第2図　丘陵・古墳遺跡分布図

この丘陵上にもっとも早く足跡が残されたのは，高山1号墳盛土中より出土した磨製石斧があげられるが，その後は，古墳が築造されるまで，さらには中世・近世墓が造られるまでその間を欠くが，この丘陵の開発が本格化するのは，古墳が築造され出してからである。また，中世墓・近世墓は，その大半が古墳周囲・周辺に造られており，墓域の認識があったようで，もっとも新しい開墾でもこのことが受け継がれていたためか破壊をまぬがれている。古墳に関する地元の伝承では，3号墳が「天皇さん」，5号墳が「この木(椎)を切ると腹が痛くなる」と言われており，3号墳では最近まで祠を祭っていた。このように3・5号墳については墓の認識が残っており，開墾も受けず天井石も完存していたが，他の古墳については，伝承はされておらず，開墾により石室が石塊として残っていても，古墳とは認識されていない。このことは，小字石原という地名があるくらい石の多い所で，調査中，丘陵全体に安山岩・凝灰岩の露出が認められた。3・5号墳を除く古墳の石材は，その大半が，開墾時に庭石として持ち去られたようであるが，石室内部には手が入っておらず，遺物は全調査古墳とも比較的良好な保存状況を保っていた。

高山古墳群は，南西に向かって派生する谷一つ隔てた2つの丘陵上に分布しており，北側の尾根には12・13号墳および椿原古墳が尾根先端付近に位置している。南側尾根には，先端付近に1・2号墳，尾根の中央の張り出し部分に3・4号墳，最高所に5・6号墳があり，7号墳は，この南側尾根とさらに南側にのびる尾根との中間，谷部の始まり部分に位置する。この7号墳南側の尾根稜部には，木棺直葬墳と考えられる段ナル古墳群(5基)もある。日本海(丹後町砂方)に最短距離で通じる旧街道沿いにある12・13号墳が群中最大規模を誇るが，それに近い中央部に位置する3号墳が大型墳であるが，あとは規模も小さい。また，丘陵北西，東・南端に位置するものは，互いに近接して築かれているが，中央部の3・4・7号墳は単独である。また，これらの古墳間はもっとも短い1・3号墳間でも直線距離で100mも離れており，通常の群集墳と呼ばれるものに対し分散している。築造状況も，1・5・6号墳は尾根稜部の自然地形の起伏を利用して造られているが，他の古墳は，尾根先端・張り出した部分のゆるやかな斜面を利用している。

調査した古墳は，いずれも横穴式石室を内部主体とし，開墾による変形も認められるがいずれも円墳で，墳丘は，12号墳の直径18mを最高に大半の古墳は12m前後である。石室規模も12号墳の全長12.15m，3号墳の10mを最高とし，他は6m前後の規模となっている。

古墳以外の遺跡としては，造成地北端の試掘地A(高山遺跡)で石組みのカマドを持つ住居跡1基が検出された。丘陵上には他に住居跡は認められず，単独で特異な状況を示している。

古墳時代以降のものとしては，古墳周囲・周辺に広がる集石・積石遺構が多数存在する。これらは，現在墓地として利用されているところは江戸時代中期以降のものであり，これより古いと思われるものは一定の集まりをもって，古墳周囲や周辺に造られている。これらの時期については，一部不明な点もあるが，火葬墓と土葬墓の2種類があり，火葬墓については，北宋・明銭を伴うことや，周辺より天正11・12(1583・4)年銘の一石五輪塔が出土したことにより中世墓と考えられる。土葬墓については，墓石のない段階(江戸中期以前)が考えられる。これらの集石・積石についても，地元では墓という伝承は残っていない。丘陵奥深くまで墓地が造られていることについては，5・6号墳より奥に数軒単位で集落が形成されていたという伝承があり，それに伴う墓地であるかも知れない。また，徳良川を挟んだ対岸にある徳運寺は，寺伝によれば150年程前には高山の丘陵上にあり，焼失により現在の位置に移ったとあり，丘陵全体が古代より奥津城となっていたようで，丘陵各所や古墳周囲には多数の一石五輪塔・石仏が散在している。この消失した徳運寺の位置については，小字椿原に所在し，12・13号墳近辺とされているが，一石五輪塔・石仏が散在するのみで位置の確定はできなかった。

また，造成地外ではあるが，高山団地造成工事に伴う道路建設や，周辺の遺物散布調査により，高山古墳群眼下には，比較的広範囲に広がると思われる石原遺跡(古墳時代後期～奈良時代)が存在し，徳良川流域は遺跡の密集地となっている。

4. 調 査 概 要

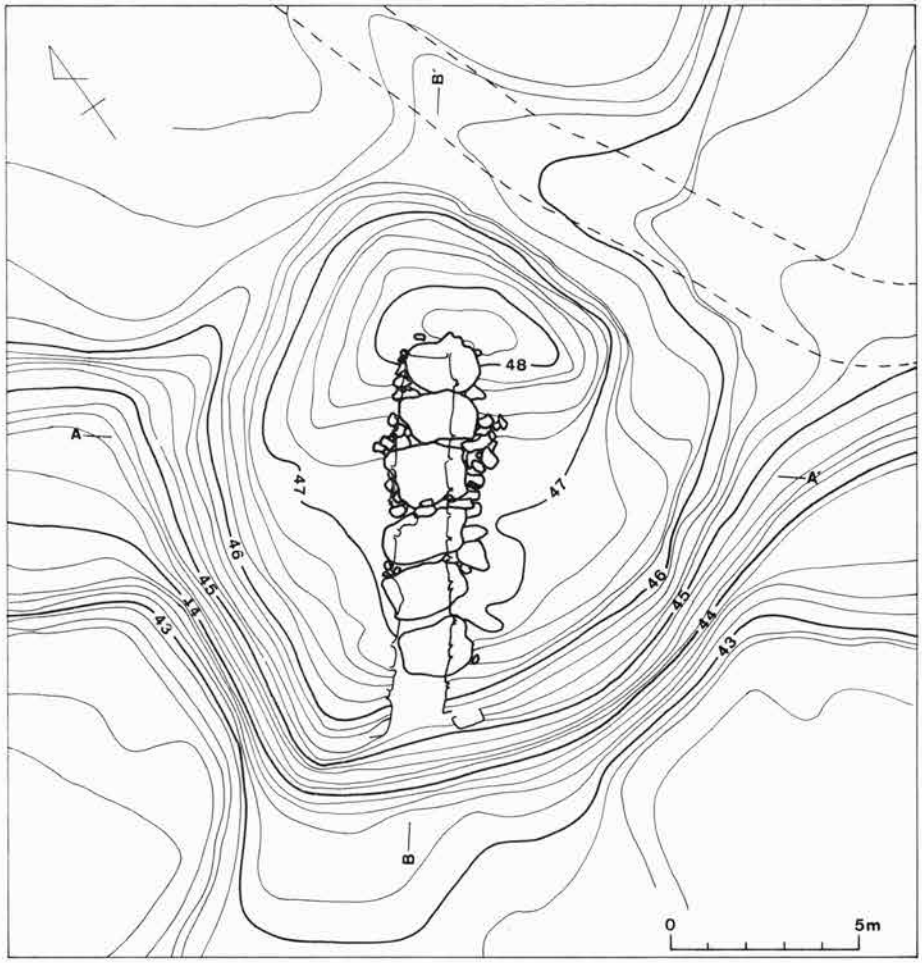
①高山3号墳

墳丘(第3図)　3号墳は，1号墳の北方100mの尾根が小さく張り出した部分に位置する。墳丘は，南西・南東側基底部を開墾により，尾根高位側は山道により削られ，墳頂部も南西側1/2は盛土が削られ天井石が4石露出していた。墳頂部には祠が祭られ，山道と墳丘との間には，一石五輪塔，石仏が約40個体分置かれていた。

墳丘自体は，開墾により円形であったものが五角形に変形し，尾根高位側には本来溝が設けてあったと思われるが，山道による削平や，北側が墓地となっていることから，溝の痕跡さえ残っていなかった。谷側に面するため墳丘が大きく見えるが，開墾により基底部以下を約1.5m程削られているため，墳丘がさらに大きく見える。古墳の範囲を確定できる痕跡が残っていないため，石室・地形から復元すると3号墳は直径約14～15m・高さ約3.5m程の規模を有していたものと思われる。

墳丘の盛土は，石室の構築とともに行われている。

なお，削平された墳頂部からは多数の須恵器甕片が出土しており，何らかの祭祀が行わ

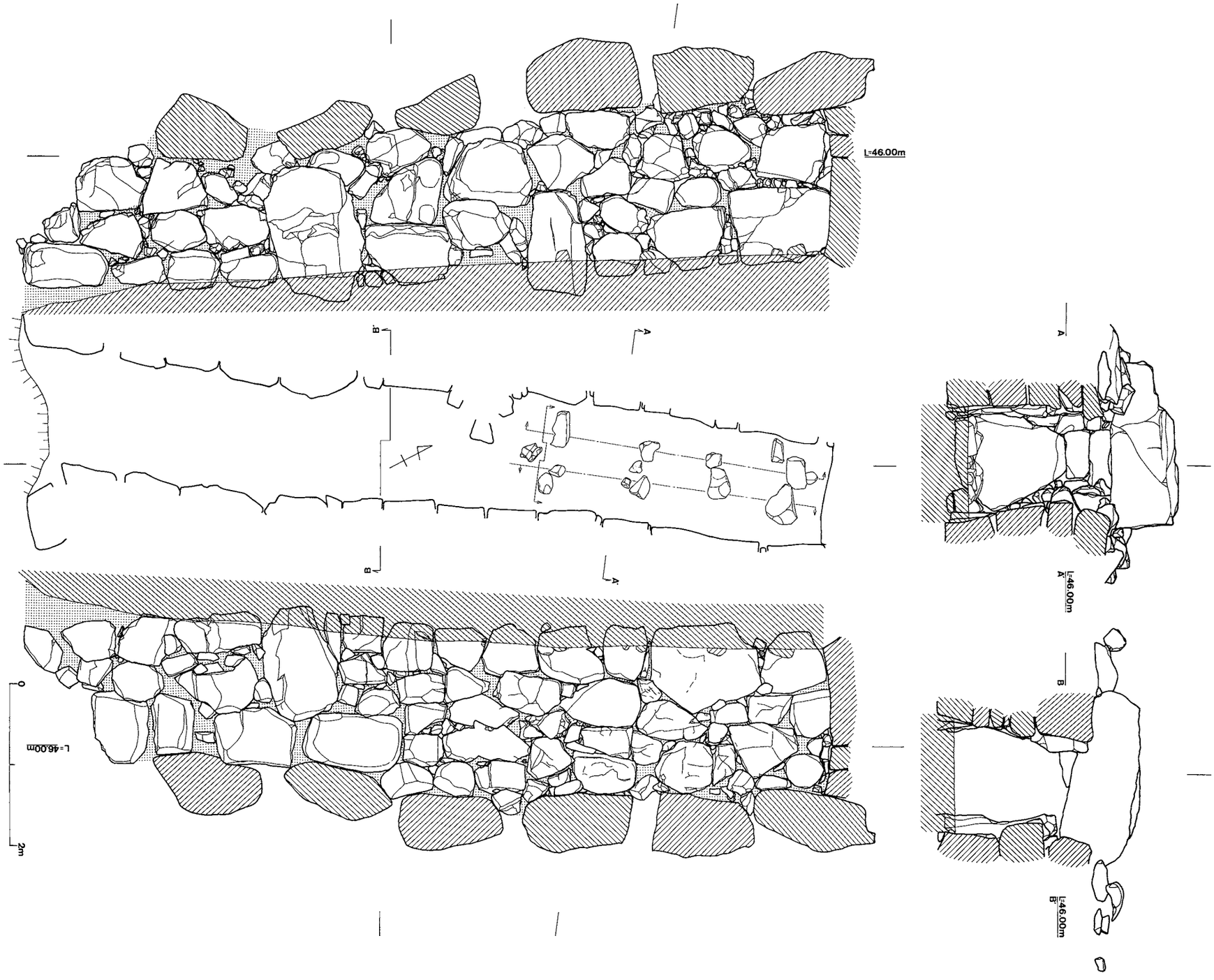


第3図　高山3号墳地形図

れていた可能性が考えられる。

埋葬施設(第4～7図)　本古墳の埋葬施設は，無袖式横穴式石室である。石材は付近一帯で採取できる安山岩を使用している。石室は，天井石が6石残存していたが，内部は完全に土砂が堆積していた。また，北西側壁は，上方ほど外側に開いており，閉塞部付近には椎の巨木があり，天井石が割れたり，動いている状態であった。そのため，奥壁側の2石を残し，調査上危険となる天井石4石は除去した。本概要報告に載せた天井石の断面図は，前記した理由によりすべて側壁上で実測したものを掲載した。

石室は，南西方向に開口し，玄室の主軸は磁北によればN35°Wをさす。石室の全長は10m，奥壁幅1.24m，閉塞部幅1.3m，側壁最前端での幅1.88mを測る。奥壁での天井石までの高さ1.8mを測る。



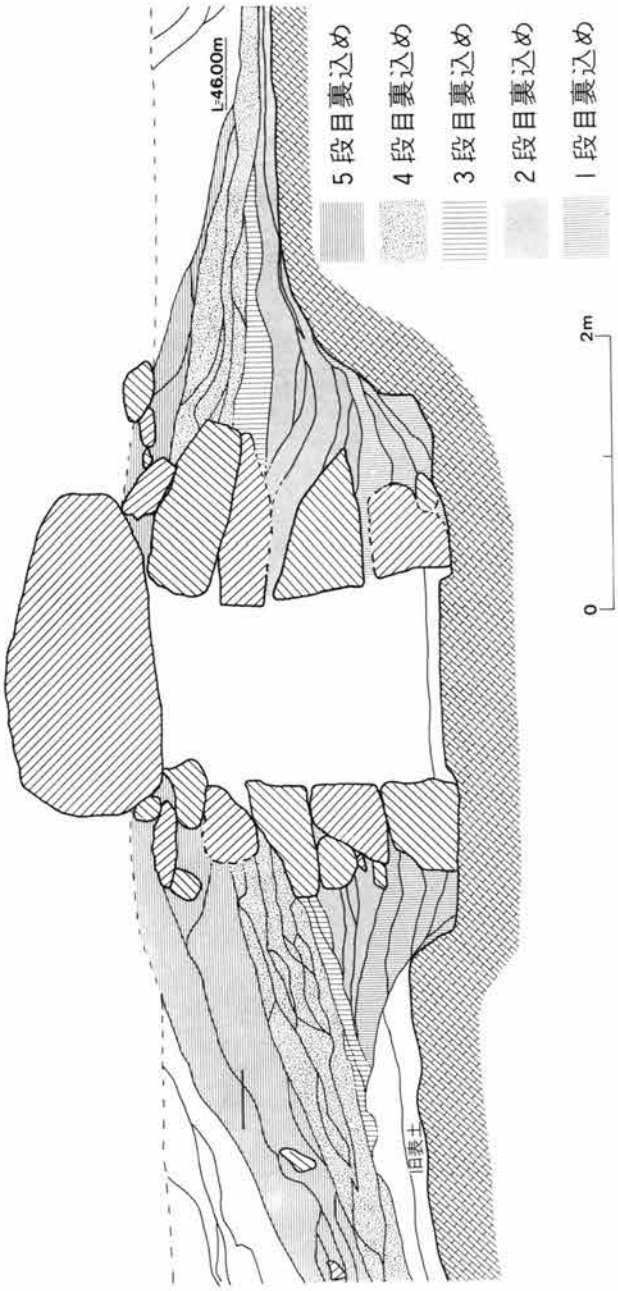
第4図　高山3号墳石室実測図

石室を構築するにあたっては，谷に面する位置にあることから，石室奥壁，南東側壁側は地山を削り整地し，北西側壁側は黒褐色土の旧表土上に盛土してから「コ」の字形の尾根に平行する墓坑を掘る。墓坑は，奥壁側のみ2段に掘りくぼめられており，上半はゆるやかであるが，奥壁基底石分だけはほぼ垂直である。裏込めの状況は，いずれも黄褐色粘土と黒褐色土が交互に入る縞状堆積で薄くつき固められている。また，丘陵の傾斜が南西下がりのため，両側壁最前端の石材は墓坑内に納まらず，盛土の上に直接積んでいる。

奥壁は，最下段に幅1.2m，高さ1.22mの扁平な石を立て，天井石下までの中央部分は，さらに扁平な石材を2石積み，両側の隙間をやや小ぶりの石で埋めている。

側壁は，南東側が14石・南西側が10石で基底を構成する。基底石と天井石下の最上段までは，大小さまざまな石材を乱積みしている。両側壁とも全体的に，石材と石材の隙間には，小型の石を詰めず，土が充塡されただけとなっており，やや雑な印象を受ける。

玄室と羨道の境をなすと思われる部分には，両



第5図　高山3号墳石室断面図

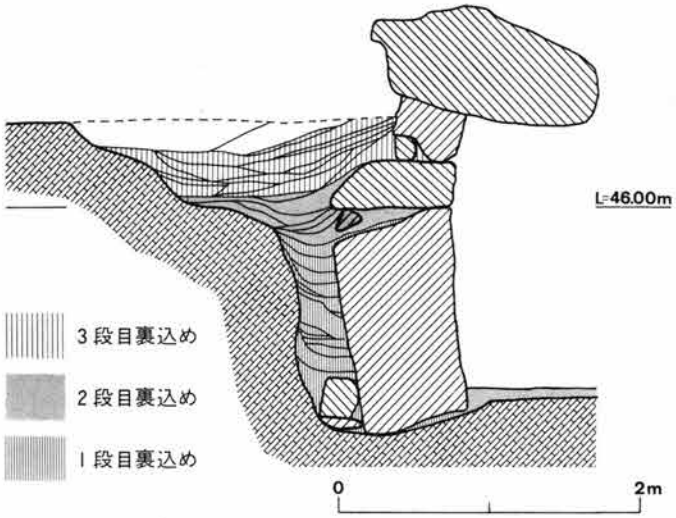
側壁とも閉塞部内側に，大型の石材を立てている。また，玄室内でも南西側壁側のみ，奥壁と閉塞部中間の基底石にもやや大型の石材を立てている。

石室の平面形は，閉塞部までは，奥壁部が狭く，閉塞部が広がっており，閉塞部より石室最前端まではまっすぐにのびている。

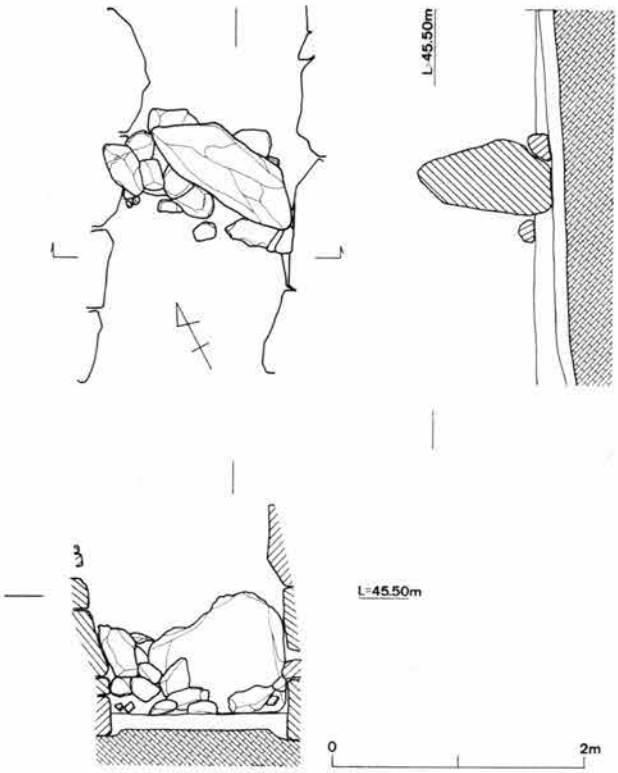
石室全体が，南西下がりの傾斜をもつため排水溝等の施設は認められなかった。

また，玄室中央部に立てられた石材より奥壁までの中央部には，一列2～3石を配し，4列に並ぶ棺台を検出した。遺物出土状況からすると，奥壁側の1列は先のもので，残る3列が最終追葬面のものと考えられる。

閉塞は，玄室との境をなすと考えられる立積みした石材のすぐ外側において1.3m×1.1mの凝灰岩の一枚石を立て，周囲に中型の石材を並べ補強し閉塞していた。閉塞石は，初葬時の面



第6図　高山3号墳石室奥壁断面図



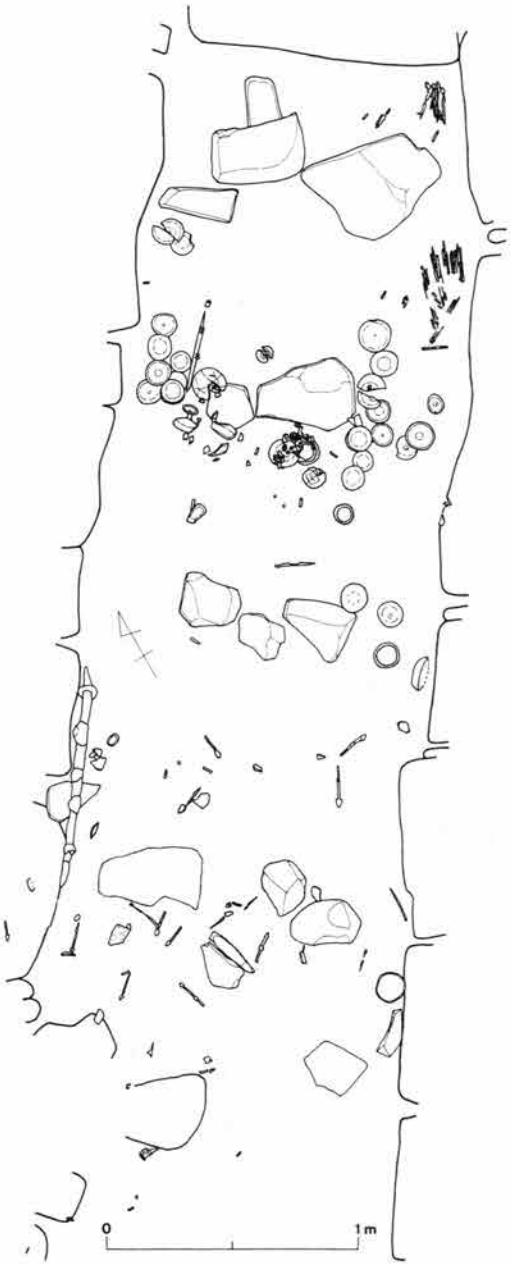
第7図　高山3号墳閉塞石実測図

に石材を置き整地し面を整えている。この閉塞は,後世に再利用された時に,一部削り取られ,周囲にその石が多数散乱していた。石室の再利用を示す痕跡としては閉塞石付近より10世紀頃に比定される糸切り底をもつ須恵器杯身が,石室床面より約50cm上面で検出された。

遺物出土状況(第8・9図)　石室内から出土した遺物の総数は約240点にのぼる。遺物の残存状況は鉄鏃類を除き良好で,特に最終追葬の段階の遺物は,埋葬された時のそのままの形で検出できた。

石室内の遺物は,棺台中央部を中心とする一群,棺台南西端の一群,閉塞石内側の一群,閉塞石外側の一群との4群にわけられる。

棺台中央部の遺物は,木棺両側に並べられていたと思われる須恵器杯身・杯蓋類が,またこれらに挟まれた中央部では,金環・勾玉・管玉・切子玉・ガラス玉がまとまって出土した。鉄器類は,北西側壁側の土器の一群の中に,方頭柄頭・小刀が,南東側壁側では,奥壁寄りで鉄鏃が20～30本単位で束になり2か所から出土した。



第8図　高山3号墳遺物出土状況(1)

棺台南西端の遺物は,鉄器類が中心で,最終追葬時に埋葬されたと思われるものは,北西側壁横で出土した直刀で,鉄鏃・馬具類は初葬時のものと考えられ,追葬時にかたづける際に散在したようで,分散し破片化して出土した。

閉塞石内側から出土したものは,いずれも初葬時の遺物と考えられ,直刀4振りおよび

須恵器・馬具類・鉄鏃が出土したが，土器類・鉄鏃類は大半が破片化し，いずれも追葬時の整地層内から出土しており，追葬時にかたづけられ集められたものと思われる。この閉塞石内側より出土した鉄刀の中には刀装具に銀装を使用したものが1点認められた。

閉塞石外側の一群も，閉塞石内側のものと同様で，追葬時の整地層内より出土しており，大半が破片である。これらの遺物は，最終的には，閉塞石内側の一群のものと接合できた。　　（増田孝彦）

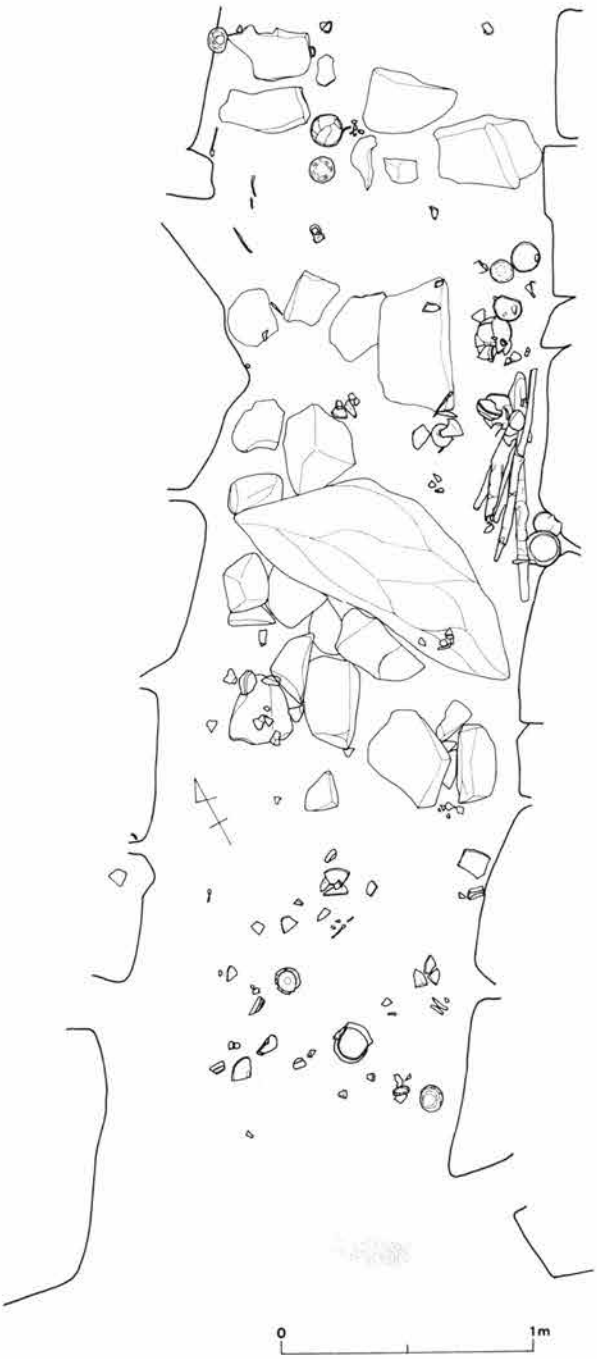
出　土　遺　物

a 土器（第9図）

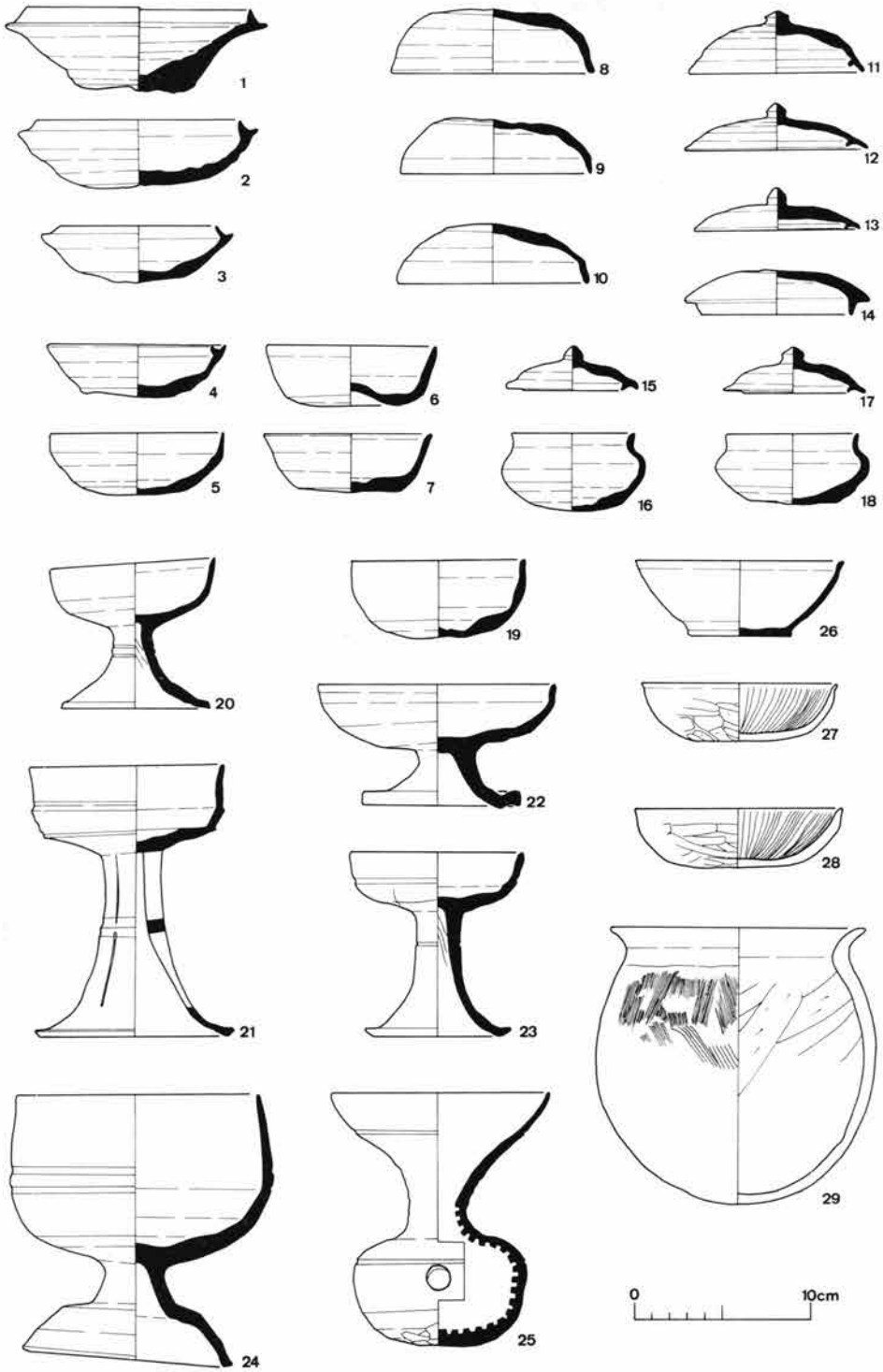
石室内及び，石室前面から総数約70点が出土している。その内訳は，須恵器では杯身(17点)，杯蓋(22点)，高杯(8点)，椀(2点)，椀蓋(1点)，台付椀(2点)，短頸壺(2点)，壺蓋(2点)，甕(1点)，平瓶(1点)がある。土師器では杯(9点)，甕(2点)がある。

須恵器

杯身(1～7)　口縁部に立ち上がりをもつもの(Ⅰ類-1～4)と立ち上がりをもたず単純口



第9図　高山3号墳遺物出土状況（2）



第10図　高山3号墳出土遺物実測図(1)

縁であるもの(Ⅱ類-5～7)の2種に大きく分類できる。Ⅰ類は，口径13cm程度のものから，9cm程度に矮小化したものもある。1は口径最大のもので，内面には，マキアゲ，ミズビキの痕跡が段となって明瞭に残る。底部もヘラ切り未調整で，平らであり特徴的な形状を呈する。矮小化したものには，4のように，極めて短く，内傾する立ち上がりをもつものもある。底部は，いずれもヘラ切り未調整である。Ⅱ類では，平底のもの(6・7)と，丸みをおびた底部をもつもの(5)がある。5は，杯蓋12とセットをなす。Ⅰ類は11点，Ⅱ類は6点ある。

杯蓋(8～13)　杯身Ⅰ類と組みあう，単純口縁のもの(Ⅰ類)と，天井部につまみ，口縁部にかえりをもつもの(Ⅱ類)に分類できる。Ⅰ類は，天井部ヘラ切り未調整である。Ⅰ類は，13点，Ⅱ類は9点出土している。Ⅰ類の中には，Ⅱ類の身となるものもあると思われるが，セット関係が不明のため，蓋としておく。

高杯(20～23)　いずれも無蓋高杯であるが，長脚のものと短脚のものに分類できる。長脚のものの中で21は，2段スカシを三方にもつ。23は杯底部にヘラ記号「メ」を刻む。短脚のものは，長脚のものに比べ胎土が悪く，粗雑なつくりである。

椀(19・26)　19は，口径に比べやや深いものである。底部は，粗雑なヘラ削りを行う。26は，石室再利用時のものである。底部には，糸切り痕が残る。

椀蓋(14)　口径が小さく，かえりが下方へ長くのびるものである。天井部はヘラ切り未調整である。

台付椀(24)　丸みをおびる杯底部に，やや内傾して，直線的にのびる口縁部をもつ。体部には2条の沈線を施す。脚部は，中位で段をなして屈曲する。

短頸壺(16・18)　法量に若干の差があるが，胎土，焼成とも同様である。外面には自然釉が付着しており，その他の要素を含めて考えても，同時焼成によるものとしてよい。底部下半には，ヘラ削りを行う。

壺蓋(15・17)　それぞれ短頸壺とセットになるものである。胎土・焼成ともに共通し，それぞれセットとなる壺にかぶせて焼成を行った状況が，色調より判明する。

甕(25)　1点のみの出土である。扁球形の体部に，ラッパ状に開く口頸部をもつ。底部は，手持ちヘラ削りを行う。

土　師　器

杯(27・28)　底部はやや平らで，内湾気味にのびる口縁部をもつ。体部内面には，放射状の暗文を施し，外面は手持ちヘラ削りを行う。胎土はいずれも精良である。

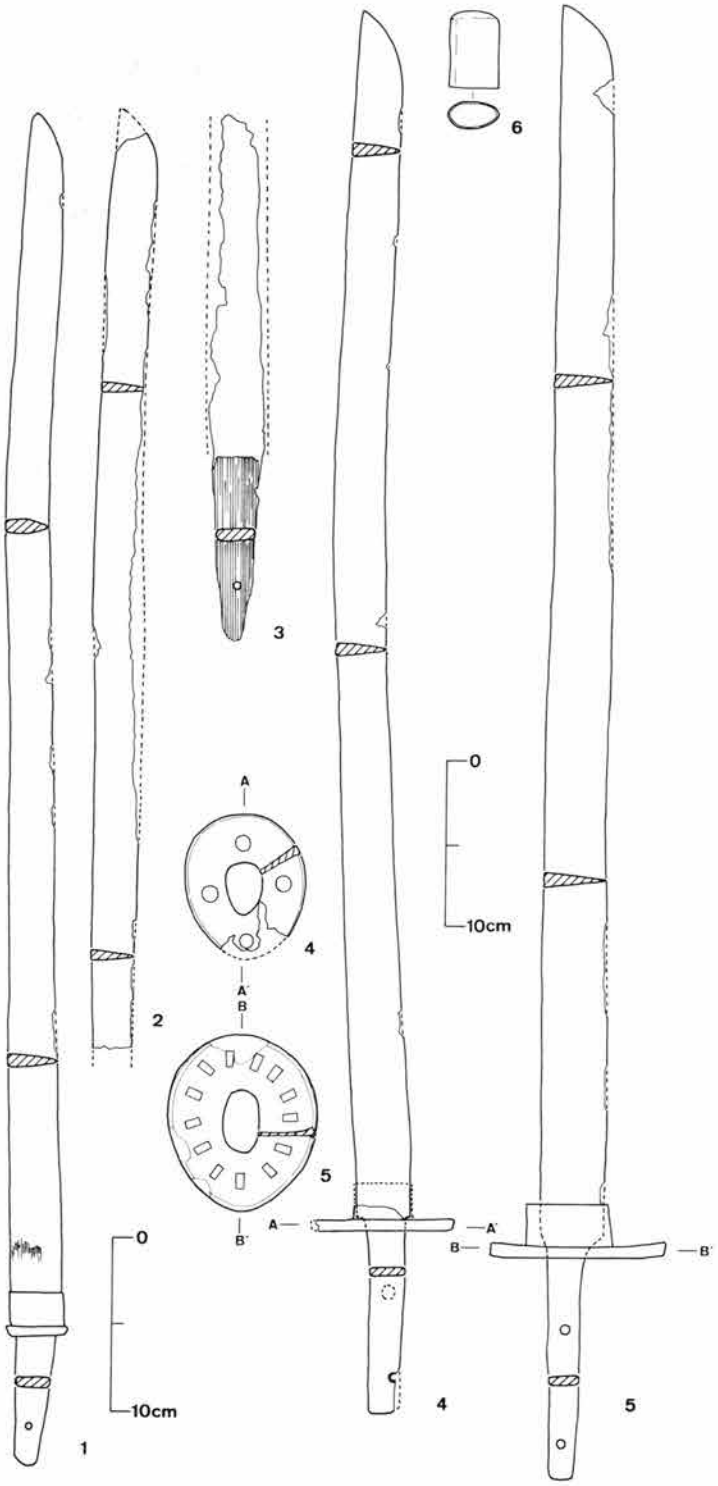
甕(29)　法量の違う2点が出土している。29は，大きい方であり口径14.2cm・器高15.6cmを測る。胎土中には砂粒を多く含み，明らかに杯の胎土とは異なる。外面ハケ調整，内

面はヘラ削りを行う。

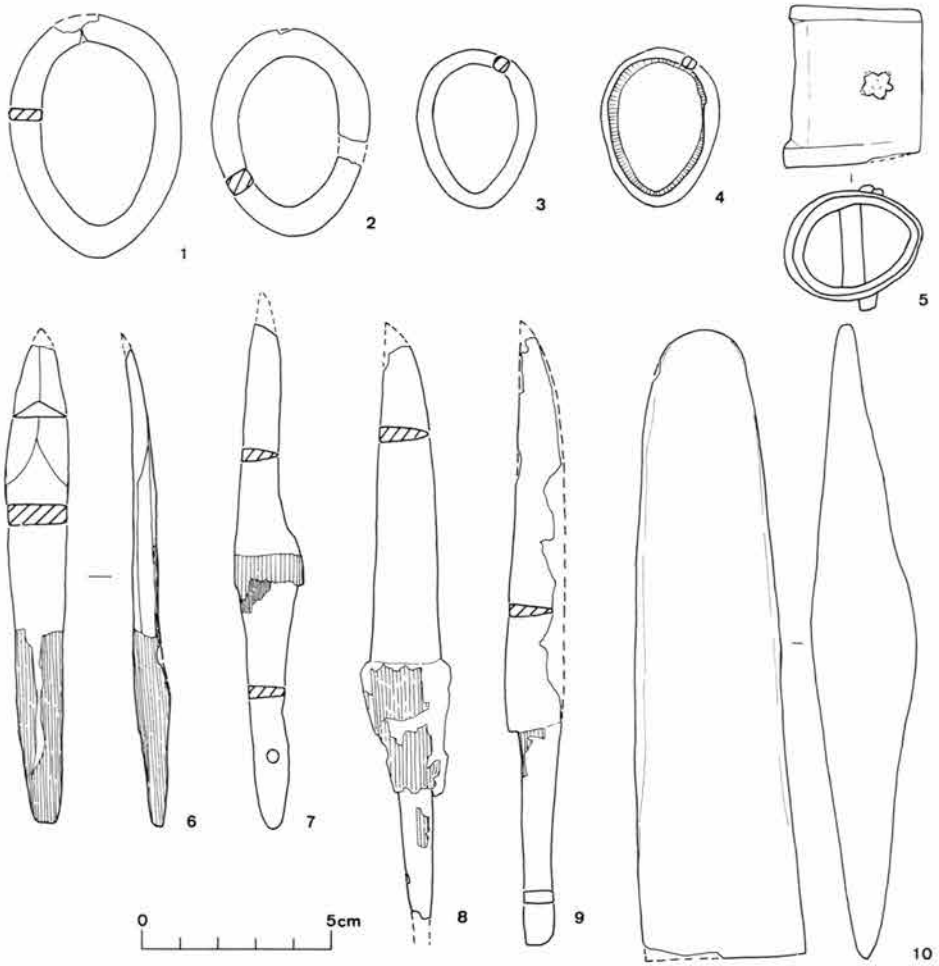
以上が3号墳出土土器の概略であるが，その出土位置と対応させると，羨道部出土の一群及び玄室内閉塞石内側にかたずけられた一群中に，1・2・8・9・21・23・24等の遺物がある。これらの中では，杯身1・2に古相が認められる。高杯21も同時期に属すると思われる。台付椀24については，杯との併行関係が不明瞭であり所属時期を限定できないが，杯1・2と併行するものと考えて大過なかろう。また奥壁側の一群には，3～6・10～18・27・28等がある。この土器群中には，3号墳において最も新相を示すものであり，その出土状況から推しても，最終追葬に伴うものと考えられる。土師器杯は，出土状況からみてこれらと同時期になるものと考えられる。これらの土器を陶邑窯の編年と対応させると，最古の一群は，田辺編年TK209型式(注9)，中村編年のⅡ型式(注10)5段階に併行するものである。最新の一群は，同じくTK217型式，Ⅲ-1段階に併行するものである。以上の併行関係より，6世紀末ないし，7世紀初頭に築造され，数回の追葬が行われた後，7世紀中葉頃に最終追葬が行われたものと考えられる。さらに10世紀頃，石室の再利用が行われたものと考えられる。（森　正）

b 鉄器(第11～16図，図版第35)　3号墳より出土した鉄製品には，直刀・刀装具・鉄鏃の武器類，鉈・鉄斧の工具類，鉸具，鐙等の馬具類がある。

直刀(第11図，図版第35)　図化できたものは4点であるが，錆化が著しく刀身が層状に剝離して復元が困難な個体もあるが，実際は，7～8点ほど副葬されていたと考えられる。また，層状に剝離した破片から想像すれば，図化できた全長75cm以上となる大刀とそれ以下のものとに分けられるようである。1は全長75.7cm，刀身断面は二等辺三角形を呈し，切先近くがやや湾曲する。刀身幅は切先近くで2.3cm・厚さ0.7cm，関近くで幅2.9cm・厚さ0.8cmを測る。茎部断面は長方形を呈し，幅2cm・厚さ0.5cmを測り，目釘が残存する。関の部分は，鎺と喰出鐔が一体化した銀装であり，両関と思われるが形状は不明である。鎺は薄い銀の板を筒状に曲げ関部分に装着した後，喰出鍔を取り付ける。鎺は刀身に密着している。この直刀は閉塞石内側の4本集められていたうちの1本である。刀装具に銀装を施すものは丹後地域では中郡峰山町新治の桃谷1号墳(注11)と熊野郡久美浜町須田の湯舟坂2号墳がある(注12)。2も同じく閉塞石内側より出土したもので，切先と茎を欠損する。刀身幅2.4cm・厚さ0.6cm・現存長51cmを測るが，実際は62～65cm程あったものと推定される。3は，玄室中央の北西壁付近より層状に剝離した刀身片とともに出土したものである。刀身はほとんど原形をとどめていないが，茎部に柄の木質が残り，目釘が確認できる。4は棺台南西側北西側壁寄りで出土したもので全長87.1cm，刀身長74.8cm，切先近くで幅2.9cm・厚さ0.9cm，関近くで幅3.3cm・厚さ1cmを測る。断面は二等辺三角形を呈する。

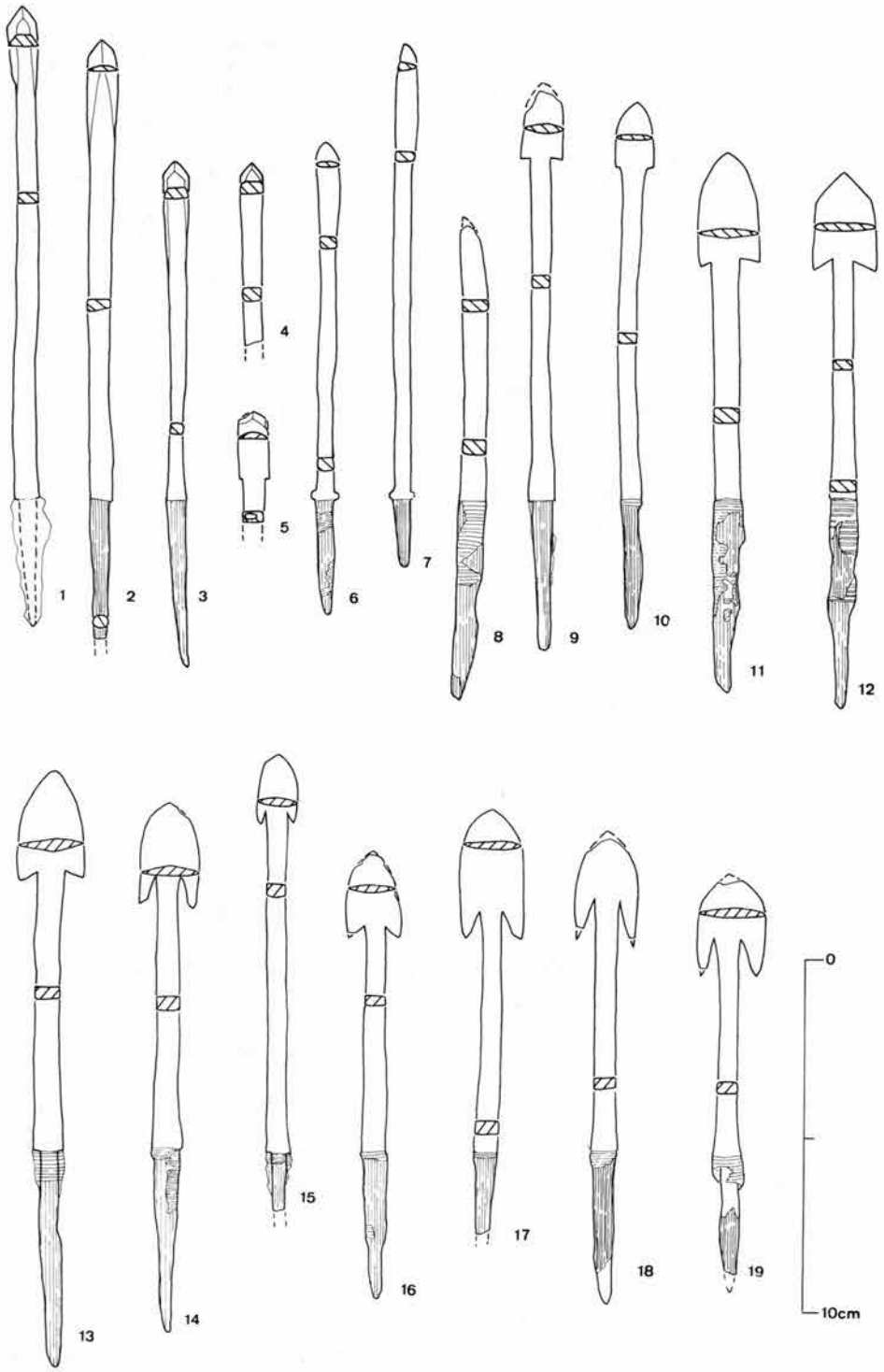


第11図　高山3号墳出土遺物実測図(2)

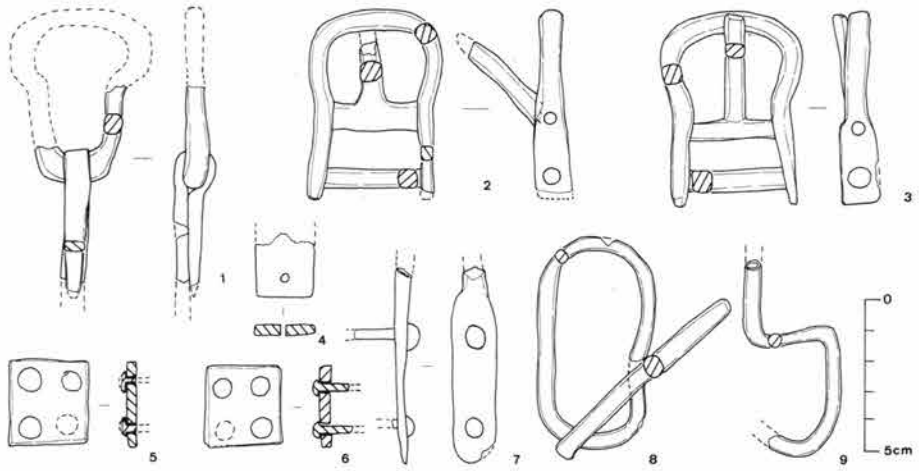


第12図　高山3号墳出土遺物実測図(3)

茎は長さ12.3cm，断面は長方形を呈し，中央部で幅2.1cm・厚さ0.5cmを測る。目釘穴は2か所あるが，茎先端側のものは，中央よりややズレている。関は両関であるが，小さく切り込まれている。鐔4は，一部欠損するが，長径8.5cm・短径7.5cm，厚さは中央孔部で0.2cm，縁部は両側に短く突出し段をもっており，厚さ0.6cmを測る板状のものである。上下，左右に，直径0.8～1cmの円形透窓を4孔穿つ。5は全長92.5cm・刀身長76.2cm，断面は二等辺三角形を呈し，切先近くで幅3.5cm・厚さ0.9cm，関付近で幅4cm・厚さ1cmを測る。茎は長さ12.5cm，断面は長方形を呈し，幅1.9cm，厚さ0.6cmを測り目釘が2本残存する。関は，棟，刃側も斜めの削り関である。鋒は幅5.2cm・厚さ0.3cmの断面倒卵形のものである。鐔5は長径10.9cm・短径5.1cmを測る大型のもので，中央孔付近での厚さ0.15cm，縁部は，内側が三角形状に突出し，厚さ0.7cmの板状を呈し，周囲に0.9cm×0.5cmの長方形の透窓を13孔穿つ。閉塞石内側より出土したものである。



第13図　高山3号墳出土遺物実測図(4) 鏃



第14図　高山3号墳出土遺物実測図(5)

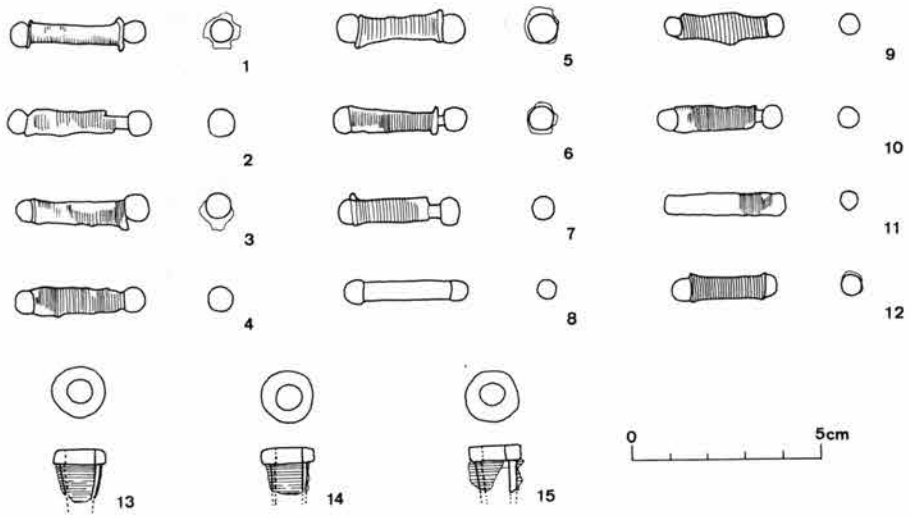
6は，鞘尻金具で閉塞石内側より出土したものである。長さ4.4cmで，断面は楕円形を呈する。鞘木の差し込み口での長径2.9cm・短径1.5cm・厚さ0.6cm程である。

刀装具(第12図，図版第36)　1～4は，長径6.2～4.1cm，短径4.5～2.2cmを測り，倒卵形のリング状を呈するものである。1・2は，断面が長方形で，3・4は方形をなす。その形態から1・2は柄縁，3・4は鞘口・責金具等が考えられる。

方頭大刀柄頭(第12図，図版第36)　5は，卵形の断面で筒状をなし，断面中央には目釘が残る。外面には，片面に目釘中心よりズレた位置に花形の装飾が見られ，反対側は釘状の突起となっている。表面に一部緑錆があり，鉄地金銅張りであったと考えられる。棺台北西側の土器集中部分で小刀とともに出土したが，閉塞石内側にかたづけられた状態で出土した刀装具に銀装を施したもの(第10図1)に対応するものと考えられる。

刀子(第12図，図版第36)　刀子は4点出土したが，1点は切先のみなのでここでは3点を図示した。7は全長13.4cm・刀部幅1cm・厚さ0.3cm，断面はややふくらむ二等辺三角形を呈する。刀身・茎とも関近くがもっとも広く，茎先にかけ徐々に細くなり茎先は鋭りぎみである。目釘穴が1か所認められる。関の形状は，柄の木質が残るため不明である。8は，切先と茎の一部を欠損する。現存長15.1cm，切先近くの断面はややふくらむ二等辺三角形で，幅1.2cm・厚さ0.4cmを測る。茎に柄の木質が残存するため関の形状は不明であるが，両関である可能性が高い。9は，刃部の遺存状態が悪く，現存長15.9cm，関は棟側のみにつく。

工具(第12図，図版第40)　6は鉈で，切先を欠損する。現存長12.6cm。刃部はやや上方にそり断面は三角形を呈する。刃部中央幅1.9cm・厚さ0.4cmを測る。柄の木質が残存する。10は鉄斧で，全長16.6cm・幅は刃部で4.2cm・中央幅3.8cm。上端は丸くつくられる。



第15図　高山３号墳出土遺物実測図（6）留金具

縦断面は，ひし形をなし中央幅2.8cmで最大であり，両側がすぼまる形状をなす。

鉄鏃（第13図）　鉄鏃の総数は，鏃身の数から約70点と考えられる。鏃身の形態からⅠ～Ⅳ類に大別できる。

Ⅰ類（１～６）　総数12点出土し，大型と小型のものがある。長頸鏃で鏃身部の両側に刃をもつものである。鏃身断面は台形を呈するものが多く，棘状突起をもつもの（６）は１点のみである。

Ⅱ類（７・８）　２点出土した。長頸鏃で鏃身の片側に両面から刃をつけるもので，関はつかない。７は棘状突起を有する。

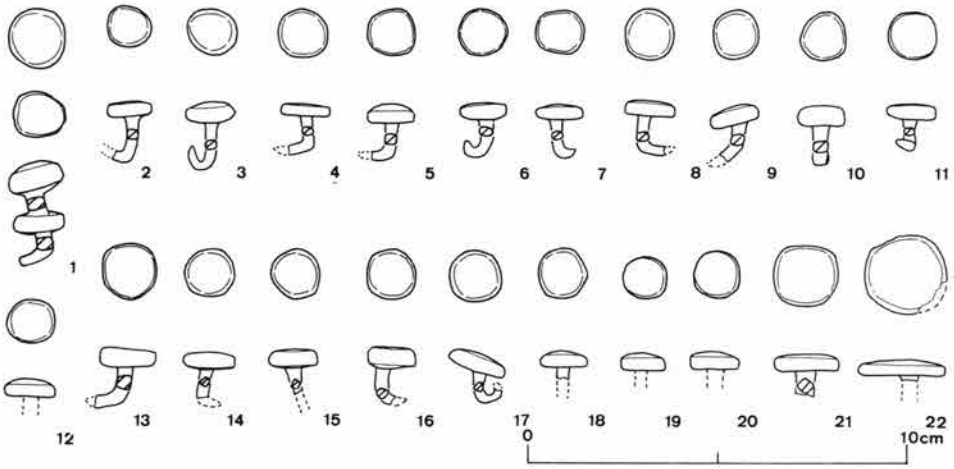
Ⅲ類（９～13・15・16）　鏃が大型のもの21点，小型のもの８点，計29点が出土した。いずれも長頸鏃で鏃身は五角形に近い。逆刺が短いものと関だけのものがある。棘状突起は有さない。

Ⅳ類（14・17～19）　総数21点出土した。長頸鏃で鏃身の形態は柳葉式で逆刺をもち，棘状突起は有さない。

馬具（第14図）　馬具は，鞍金具・鉸具・鐙・留金具がある。

鞍金具（１）　凸字形の輪金，足からなる。輪金の環部，足のＬ字状に折り曲げる部分を欠損する。いずれも鉄製で，足は両端を細くした扁平な鉄棒で，輪金の基部に搦める。座金具を介して木製鞍橋に打ち込まれていたと思われる。座金具は欠損する。

鉸具（２・３・８）　基部の開いた輪金に，Ｔ字形の刺金と，段をつけ両端を細くした鉄棒を孔にさしこみ，輪金の外側に突出した鉄棒の先端を叩き留める。１は，全長6.5cm，輪金の環部幅4.5cm，断面は一辺0.6cmの隅丸方形の断面。基部は0.4cm×1.2cmの長方形



第16図　高山3号墳出土遺物実測図(7)鋲

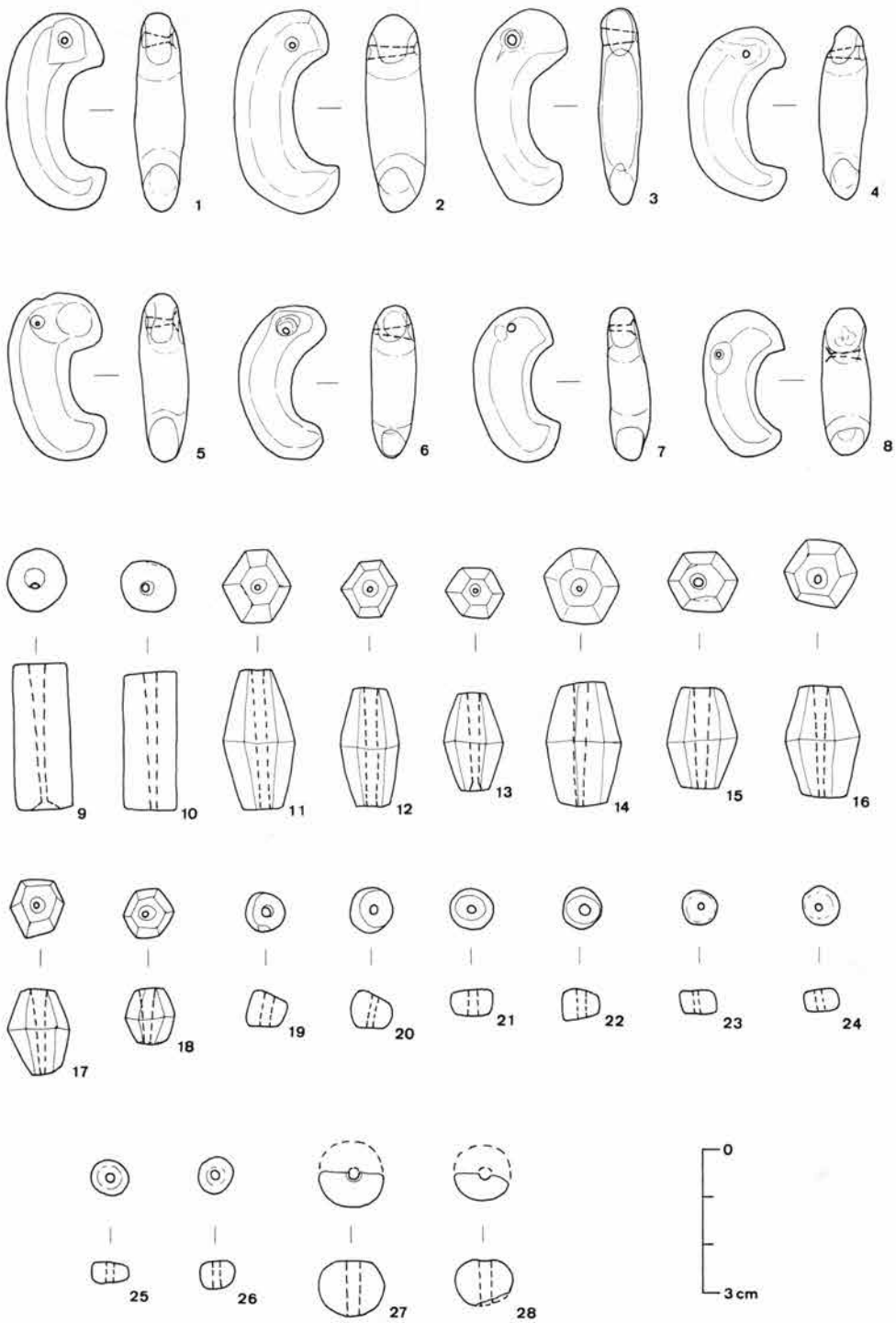
断面をなす。2も同じつくりのもので全長6.5cm，環部幅4.8cmを測る。8は0.4cm×0.6cmの鉄棒を折り曲げて輪金をつくり，基部に長さ7.5cmの鉄棒の端をまきつけて刺金とする。全長7cm。

革金具(4～6)　4・5は4鋲を持つもので，地板は2.5cm×2.6cmの方形で，鉄製円頭鋲を4鋲打つ。裏面には皮革の痕跡が残る。鋲脚の先端をいずれも欠く。

鐙(7)　数点破片が存在するが，いずれもその部位を断定することができないが，約1組分存在する。図示したものは，脚部先端のみの破片で，脚は幅広で短く，扁平な断面をなす。木製壺鐙をはさみ込み，左右各々2本の釘を打ち込み固定していたと思われる。現存長6.5cm。

不明鉄製品(9)　直径0.5cmの鉄棒を3か所折り曲げ「ㄴ」字形をなすが，両先端を欠損しており原形は不明である。

留金具(第15図，図版第41)　棺台南東側，土器集中部分から鉄鏃が集中する部分にかけて出土したもので総数12点を数える。出土状況は，分散しており一定の集まりは認められず，50cm×70cm四方に分散しており，うち1点は，玉類が集中する部分からも出土している。初葬時の遺物が追葬時にかたづけられ分散したものと思われる。金具は長さ2.8～3.8cm・径5mm程度の小さなものである。両側に5～6mmの円形の頭部をもつ。両頭間には，金具に直交する形で木質が残存するが，頭部に木質は残存しない。この種の留金具については，鉄製留金形小品[注14]として報告されているが，その用途については不明な点がある。これらとは別に，同じような用途を帯びていたと思われる留金具(第15図13～15)がある。円筒形の形をなし，頭部は円形で，中央に孔があり本体も中空となっており，金具に対し，直角方向に木目が残る。いずれも先端を欠損するが，前記した留金具同様，両側とも同じ



第17図　高山3号墳出土遺物実測図(8)玉類

付表3　高山3号墳出土玉類観察表(単位：cm)　※本表の No. は，第17図に対応

No	器　種	長	径	孔　径	色　調	備　考
1	瑪瑙製勾玉	4.02	1.02	0.28～0.13	淡赤黄褐色	頭部赤褐色
2	〃	4.00	1.17	0.31～0.19	淡黄褐色	
3	〃	4.00	1.00	0.40～0.20	〃	
4	〃	3.52	0.95	0.31～0.13	赤褐色	
5	〃	3.56	0.95	0.29～0.11	淡黄褐色	
6	〃	3.18	1.02	0.36～0.15	暗赤褐色	
7	〃	3.15	0.93	0.34～0.17	淡黄褐色	
8	〃	3.00	1.03	0.30～0.12	淡赤褐色	
9	碧玉製管玉	3.00	1.09	0.38～0.19	濃緑色	
10	〃	2.78	1.03	0.28～0.12	〃	
11	水晶製切子玉	2.93	1.65	0.39～0.17	透　明	
12	〃	2.39	1.43	0.40～0.11	〃	
13	〃	2.35	1.32	0.42～0.18	〃	
14	〃	2.50	1.52	0.40～0.13	〃	
15	〃	2.02	1.38	0.33～0.16	〃	
16	〃	2.27	1.44	0.38～0.19	〃	
17	〃	1.73	1.33	0.34～0.12	〃	
18	〃	1.11	1.11	0.32～0.12	〃	
19	ガラス製小玉	0.52	0.85	0.23	濃紺色	気泡は穴と平行，透明度低い，両小口平坦
20	〃	0.65	0.97	0.25	暗青色	透明度低い，両小口未整形
21	〃	0.58	0.90	0.24	〃	気泡は穴と平行，透明度低い，両小口平坦
22	〃	0.66	0.82	0.20	濃紺色	気泡は穴と平行，透明度低い，両小口平坦
23	〃	0.52	0.73	0.16	〃	気泡は穴と平行，透明度低い，両小口平坦
24	〃	0.49	0.79	0.15	〃	気泡は穴と平行，透明度低い，両小口平坦
25	〃	0.44	0.72	0.20	暗青色	気泡は穴と平行，透明度低い，両小口平坦
26	〃	0.55	0.76	0.18	濃紺色	気泡は穴と平行，透明度低い，両小口平坦
27	〃	(1.10)	(1.31)	(0.25)	緑白色	半分欠損・風化著しい
28	〃	(0.75)	(1.08)	(0.30)	〃	〃　〃
—	〃	0.50	0.80	0.14	濃紺色	気泡は穴と平行，透明度低い，両小口平坦

形状であったかどうかは不明である。内部が中空であることから，木製品に装着されたのち，この孔に何らかのものを差し込み，装飾を施していたとも考えられる。棺台中央，閉塞石内側の遺物集中部分及び閉塞石外側より各1点ずつ出土したものである。

鋲(第15図，図版第41)　石室前面の追葬時にかき出され，細片化した土器類とともに一括して出土した。直径1.2～2.2cmの円形の頭部をもつ。足はいずれも「L」・「U」字形に折り曲げている。折り曲げた部分と頭部の間が0.6～1cmほどしかなく，皮革痕等は認められなかったが，皮紐の飾金具と考えられる。1は，二段になっており，長い足に別に頭部だけを挿入して皮紐を固定したものと思われ，1も同様の痕跡が残る。皮紐が交差する部分に使用されたものと思われる。

装身具(第17図，図版第43・44)　装身具として玉類・金環が出土した。いずれも，奥壁より2列目の棺台付近より出土したもので，埋葬時の状況をよくとどめていた。

玉類(第16図1～28)　玉類の計測値は付表3に示したとおりである。

1～8は，瑪瑙製勾玉である。「C」字形を呈し，全体に丸味を帯び比較的ていねいに仕上げられているが，一部未加工面が残るものもある。いずれも片面穿孔である。形態に顕著な差は認められないが，大きさによって全長4～4.02cm(1・2・3)，3.52～3.56cm(4・5)，3～3.18cmの3種に分けられる。

9・10は碧玉製管玉で2点のみの出土である。濃緑色を呈し，ていねいに仕上げられている。2点とも片面穿孔である。

11～18は，水晶製切子玉である。11は全長2.93cmを測る最大のもので，118は全長1.1cmの最小のものであるが，全長と径が同じであり，他の切子玉に比してずんぐりしている。

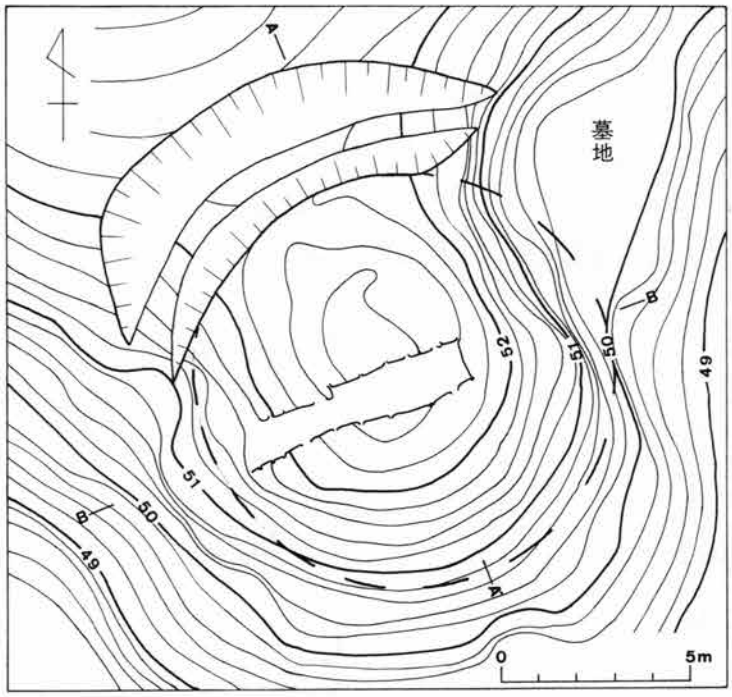
19～28は，ガラス製小玉である。色調は，濃紺色を呈するもの(19・22～24・26)と，暗青色を呈するもの(20・21・25)がある。全体的にていねいな仕上げであるが，20は両小口が未整形である。27・28は，いずれも1/2を欠損し，風化が著しい。緑白色を呈し，0.5cm程度の粒状の集まりが認められる。

これらとは別に，玉類が集中する部分より南側10cmと20cmの所では，風化しバラバラとなったガラス粒(淡緑白色)が多数認められた。一部原形を復元できる個体が認められ，それによれば，直径1.5～2mm・厚さ1.2～1.8mm程度の小さい玉が復元できたが，個体数については不明である。

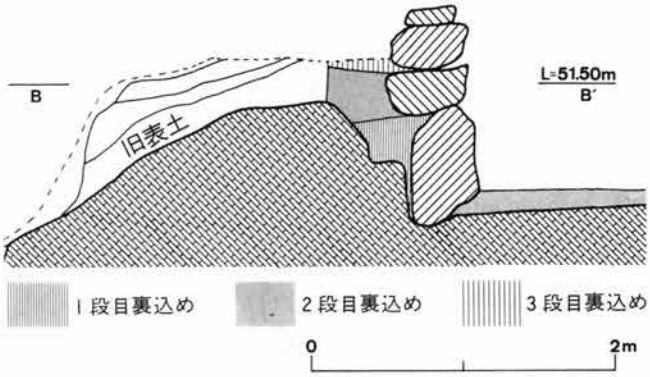
(増田孝彦)

②高山4号墳

墳丘(第18図)　3号墳の東方120mの尾根が南東へ小さく張り出した稜部に位置する。墳丘は，古墳群中もっともよく残っており，基底部を確認することができたが，北東側は墓地となっているため墳丘の一部が削られている。また，墳頂部においては，開墾により



第18図　高山4号墳地形図



第19図　高山4号墳石室断面図

一部削平されているが，天井石に阻まれ開墾途中で放棄されている。

墳丘北側には，尾根と区画する幅3.5m・深さ1mのやや円形を描く溝が存在する。谷に面するため，墳丘が大きく見える。直径11m，南側からの残存高2mの規模を有する。

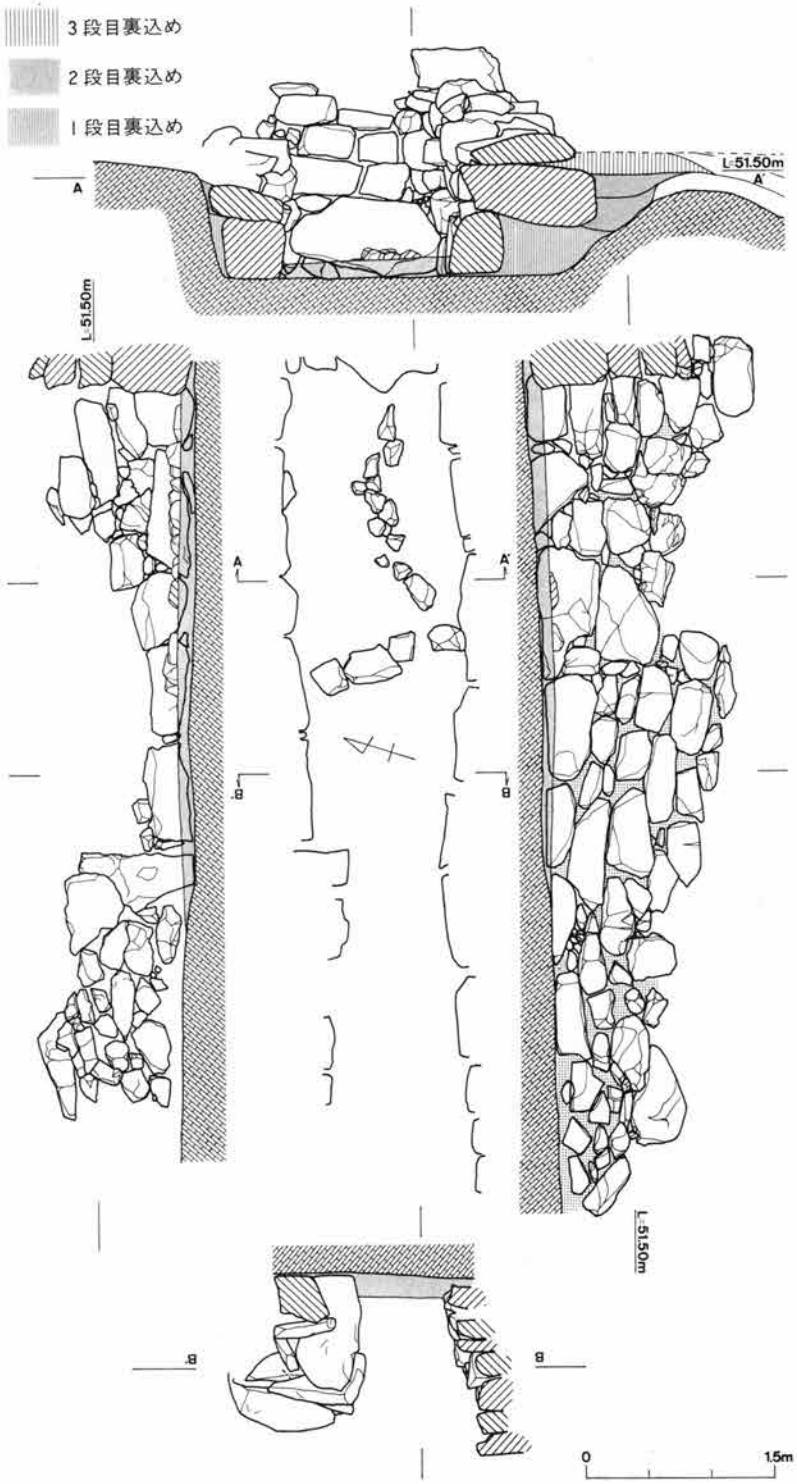
墳丘の盛土は，石室の構築とともに行われている。

なお，墳頂部北西側および溝中からは，少量ではあるが，須恵器甕片・杯身片が出土しており，何らかの祭祀が行われていた可能性がある。

埋葬施設(第19・20図)

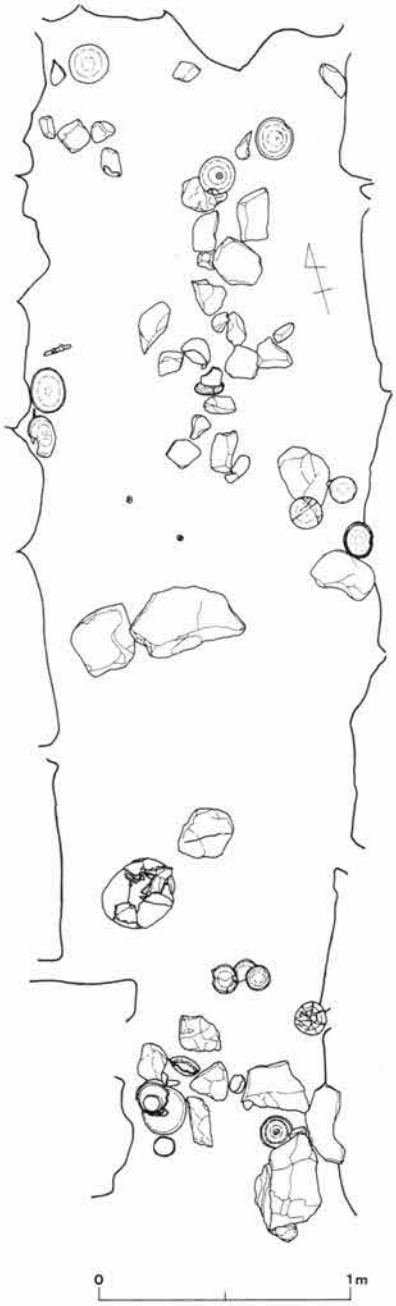
4号墳の埋葬施設は，奥壁から羨道に向かって右側に袖をもつ片袖式横穴式石室である。使用されている石材は，3号墳同様，付近一帯で広く採取できる安山岩である。石室は天井石まで残存していたが，石材が内部に落ち込み土砂が完全に堆積していた。開墾による石室の破壊具合は，玄室北側壁側がもっとも激しい。そのため，内部に落ち込んでいた羨道部の天井石も含め6石と，玄室北側壁2/3は基底石を残しすべてを除去した。

石室は，南西方向に開口し，玄室の主軸は，磁北によればN72°Eをとり尾根に直交する。



第20図　高山4号墳石室実測図

石室の全長6.33m，玄室長3.62m，奥壁幅1.18m，玄室最大幅1.4mで中央部が膨らむ。羨道は，羨道部最前端まで2.76m，玄門幅0.75mで，羨道最前端側にバチ状に開いている。玄室側壁の現存する最高所まで1.8mを測る。



第21図　高山4号墳遺物出土状況

石室を構築するにあたっては，尾根高位側は石室南側の旧表土面まで地山を削り整地したのち，溝を設け，「コ」字形の尾根に直交する墓坑を掘る。この旧表土層(黒褐色土)には炭等の炭化物が含まれており，古墳築造に際し山焼きを行っている可能性がある。墓坑は，南側は旧表土(黒褐色土)より掘り込まれゆるやかな傾斜をもつが，北側はほぼ垂直に掘り込まれる。奥壁側は二段に掘りくぼめられており，上半はゆるやかであるが，下半はほぼ垂直に掘り込まれる。裏込めの状況は，いずれも黄褐色粘土と，薄く部分的に黒褐色土が交互に入る縞状堆積でつき固められている。袖石より西側羨道部は，掘形より床面が下方にあり，石材が浮いている。羨道部床面はほぼ水平であるが，基底石が大きくなる袖石付近からは一段掘形が深くなっている。

奥壁は，幅1.2m・高さ0.61mの扁平で比較的大きめの石材を横位置に据え基底石とし，2段目からは，扁平な石材2石を横積みし，4段分が残存する。

玄室側壁は，両側ともやや大きめの石材5石により基底を構成する。二段目より最上段までは，ところどころ大きめの石材が混じる部分も認められるが，基底石より小ぶりの石材を用いている。石材と石材の隙間は，ほとんど埋められておらず，空間があき土で充塡されている。

玄室の平面形は長方形をなし，中央部がやや膨む。床面積4.49m^2。排水溝等の施設は認められない。

玄室床面には，棺台となるような施設は認められなかったが，木棺周囲を石材により囲ったと思われる石組みが認められた。

羨道部は，両側壁とも大半さまざまな石材を用いるが，概して玄室で使用されている石材よりも小さい。南側壁玄門側基底石２石のみが，玄室基底石延長線上に置かれ石材も大きいが，あとは大小さまざまであり，乱雑に積まれ石材と石材の隙間が大きくあいている。両側壁とも，最上段にはやや大きめの石材を，横置きしている。

袖石は，方形のやや大型の石材１石により構成され，平坦面の広い方を奥壁側に向けている。

羨道部にも排水溝等の施設は，認められなかった。

遺物出土状況(第21図)　石室内より出土した遺物は，総数約24点である。それらは，木棺を囲ったと思われる石組周辺，石組内部，袖石・玄門付近から出土したものと３群に分けられる。

石組み周辺では，奥壁付近より築造時の杯身・杯蓋，追葬時の杯身が出土し，東壁付近からは，追葬時の須恵器・土師器が出土した。

石組み内部からは，西側寄りで初葬時の須恵器杯身・杯蓋と刀子が１か所に集中して認められ，金環が扁平な石材を配した付近で出土した。

袖石・玄門付近では，袖石内側で横瓶・玄門付近では，積み重ねられたり，閉塞石中に積み上げられ残存する石材の間にはさまったような状態で出土している。

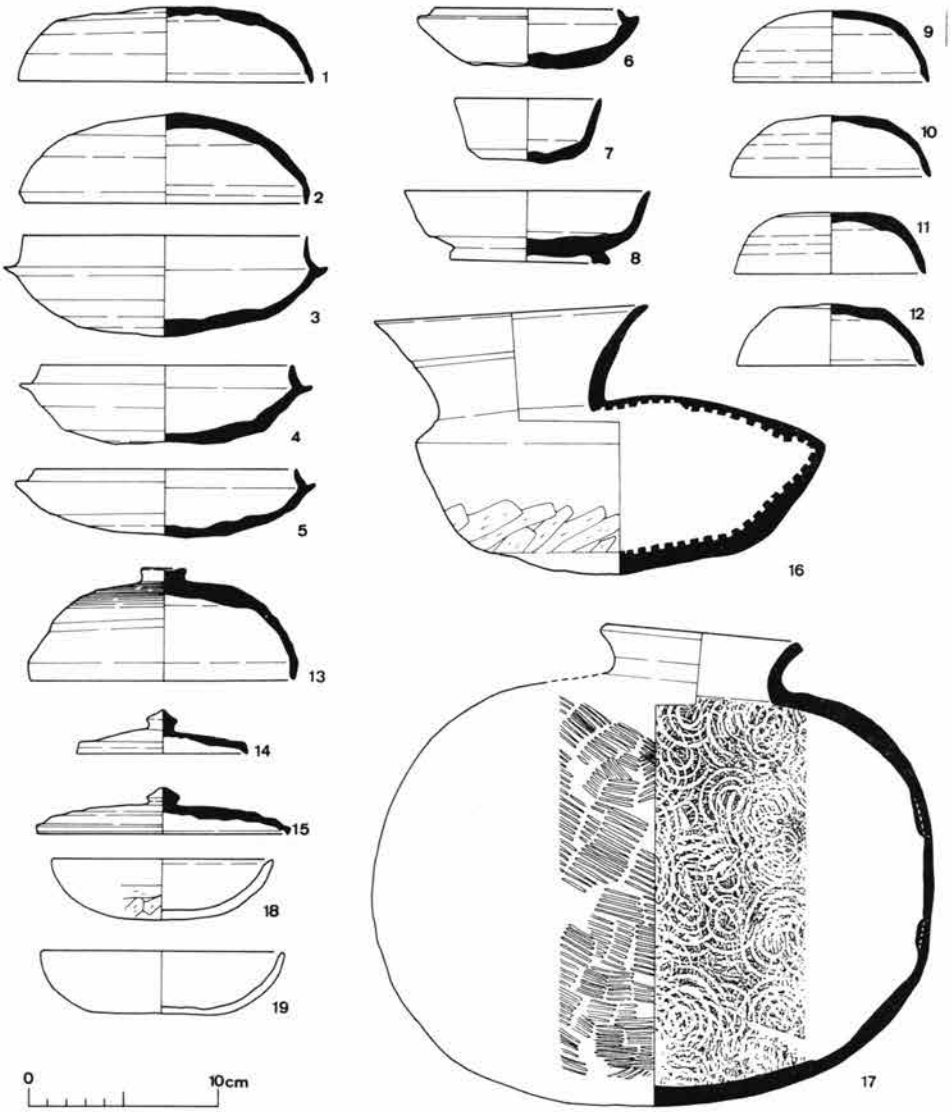
玄室内の出土状況からすると，追葬面としては確実に検出できなかったが，初葬・追葬ともほぼ同じ面に共存していたとも考えられ，棺台状を呈する扁平な石，それよりやや小さい玄室中央主軸上に並ぶ石材とは性格が異なるものと考えられる。出土した初葬時と考えられる遺物は，いずれもほぼ同じ高さで，中央の石室主軸上に並ぶ石材よりも低いところから出土しており，追葬時の遺物は，この石材と同レベル位で出土している。また，この扁平な石材と，主軸上に並ぶ石材と比した場合，主軸上に並ぶものの方がやや低く，出土状況と合わすと初葬時の施設と考えられる。扁平な石材は，追葬時に新たに運び込まれ，棺台として利用したと思われるが，それに対応する奥壁側の棺台は確認できなかった。

（増田孝彦）

出　土　遺　物

a 土器(第21図)

石室内からは，20点の土器が出土している。そのうちわけは，須恵器では杯身（６点），杯蓋（９点），横瓶（１点），平瓶（１点）で，土師器では杯（３点）である。



第22図　高山4号墳出土遺物実測図(1)

須　恵　器

杯身(3～8)　杯身は，その形態により3種類に分類できる。Ⅰ類は，口縁部に立ち上がりをもつもの(3・4・5・6)である。Ⅱ類は，平らな底部に，外上方へ直線的にのびる口縁部をもつもの(7)である。Ⅲ類は平らな底部に高台をもつもの(8)である。Ⅰ類では，口径によりさらに細分できる。3は，口径が最も大きく，14.9cmを測る。立ち上がりは，上方へ長くのび，つくりもていねいである。4・5は，前者よりやや小さく口径13cm前後である。6は，矮小化したものであり口径9.8cmを測り，底部はヘラ切り未調整である。

Ⅱ類は1点のみであり，口径7.4cmを測る小型品である。Ⅲ類も1点のみであり，底部がやや内側に，外方へふんばる高台をもつ。

杯蓋(1・2・9～15)　その形態により3種類に分類できる。Ⅰ類は，杯身Ⅰ類に組み合うもの(1・2・9～12)である。Ⅱ類は，Ⅰ類よりやや器高が高く，天井部にはつまみをもつもの(13)である。Ⅲ類は平らな天井部につまみをもち，口縁端部が下方へ屈曲し，段をなすものである。Ⅰ類は，口径によりさらに細分でき，口径の大きいもの(1・2)は，口縁部内面にごくわずかな段を残す。Ⅱ類は1点のみの出土であり，天井部にはカキ目を施す。器高が高いため，甕の蓋になるのかも知れないが，組み合うものの出土はなく，杯蓋としておく。Ⅲ類は，天井部に宝珠形のつまみをもち，口径の違いにより大小2種に細分できる。14は，口径9.0cmを測り杯身7とセットをなす。

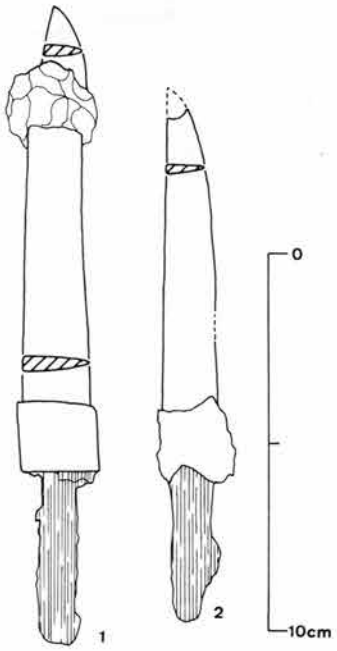
横瓶(17)　扁球形の体部に，短く外反する口頸部をもつ。体部外面は平行タタキ，内面には，同心円形のあて具痕が残る。

平瓶(16)　肩の鋭く張った体部に，大きく外反して開く口頸部をもつ。体部下半は，不定方向の粗い手持ちヘラ削りを行う。

土　師　器

杯(18・19)　双方とも器表の風化が著しく，18の外面にヘラ削りを行っているのがかろうじて判明する。

以上が4号墳出土土器の概略である。初葬時の遺物としては，杯身(3)・杯蓋(1)をあげ得る。これらは田辺編年TK43型式，中村編年Ⅱ-4段階に併行するものと考えられる。杯蓋(2)及び杯身(4・5)は，前者より新しい段階に位置づけることができ，TK209型式・Ⅱ-5段階に併行するものと考えられる。さらに，矮小化した杯の一群(6・9～12)は，TK217型式・Ⅱ-6段階に併行すると考え得る。杯身(7・8)及び杯蓋(14・15)は，平瓶とともに最終追葬時の遺物と考えられ，いずれも崩れた閉塞石の上から出土している。TK48型式・Ⅳ-1段階に併行するものと考えられる。以上の併行関係により，6世紀後半には築造され7世紀後半の最終追葬を含め，少なくとも3次の追葬が行われたものと考えられる。　(森　正)

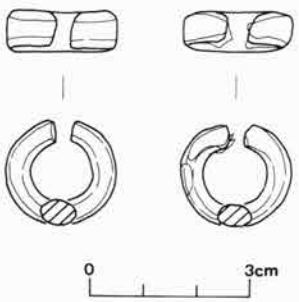


第23図　高山4号墳出土遺物実測図(2)

b 鉄製品(第22図，図版第40)　4号墳より出土した

鉄製品はほとんどなく，刀子２点が出土したのみである。

１の刀子は，切先付近で錆による変形が認められる以外，完形をとどめている。現存長16.8cmであるが，変形しているため，全長は17.0cm程と推定される。関付近での幅1.8cm・厚さ0.4cmを測り，刃部の断面は二等辺三角形を呈する。関部分がもっとも幅広く，先端に向かうに従い徐々に細くなる。両関と思われ，関から木質が付着しており，関まで柄に挿入されている。関から外に出た刃部の長さは約10.6cm程あったものと思われる。柄は幅1.8cm・厚さ0.1cmの鉄板を曲げた柄縁金具で締められる。茎は幅1cm・厚さ0.5cmを測る。目釘等は認められない。



第24図　高山４号墳出土遺物実測図(3)

２は，１と同様のものであるが，切先の一部を欠く。残存長13.6cm，復元長は14.2cm程度と推定される。切先より1.5cmの所での幅1.1cm・厚さ0.2cm，刃部断面は二等辺三角形を呈する。関部分が幅1.5cmで，切先に向かうに従い徐々に細くなる。両関と思われ，関から木質が付着しており，関まで柄に挿入されている。関から切先までは，8.6cm程あったものと推定される。柄は１と同様，幅1.6cm・厚さ0.1cmの鉄板を曲げた柄縁金具で締められる。茎は先が細く，関の部分で幅1.3cm・厚さ0.25cmで最大となる。目釘等は認められなかった。

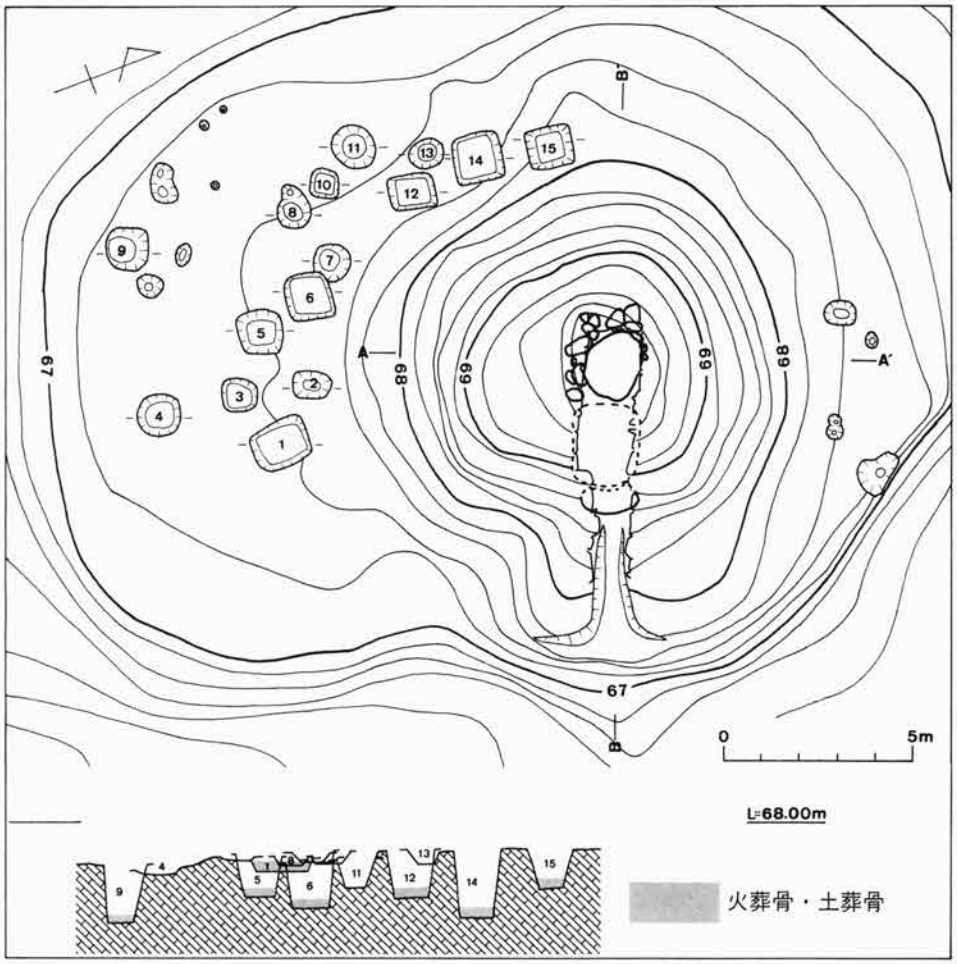
１・２とも，西側壁寄りで出土したものである。

c 装身具(第23図)　金環２点が出土したのみである。いずれも玄室内の扁平な石材の北側において出土した対をなすものである。１・２とも銅地金張りの金環で，地金の銅はすべて中実である。両端を丸く仕上げた直径6mm前後の銅地金を，長径2.9cm・短径2.8cmのほぼ円形の「C」字形に曲げ，表面に金の薄板を貼りつけたものであるが，２は，金箔が一部はがれたところが見られるが，両者とも遺存状況は良好である。　(増田孝彦)

③高山５号墳

墳丘(第24図)　３号墳の北西210mのところに位置する。この付近一帯は，６号墳東方から試掘地A(高山遺跡)にかけて平坦な地形を呈しており，自然地形がところどころに小さく起伏している。５号墳は，この自然地形の小起伏を利用して築かれているが，墳丘は南・西側に火葬墓・土葬墓が存在するため，それにより基底部が削られている。墳頂部は，石室全体の盛土がなくなり，天井石・側壁が露出していた。奥壁天井石南側には，天井石にもたれかけるようにして石仏・一石五輪塔が25個体分置かれていた。

墳丘自体は，自然地形の起伏部分を利用しているため，考えられる墳丘基底部よりさら



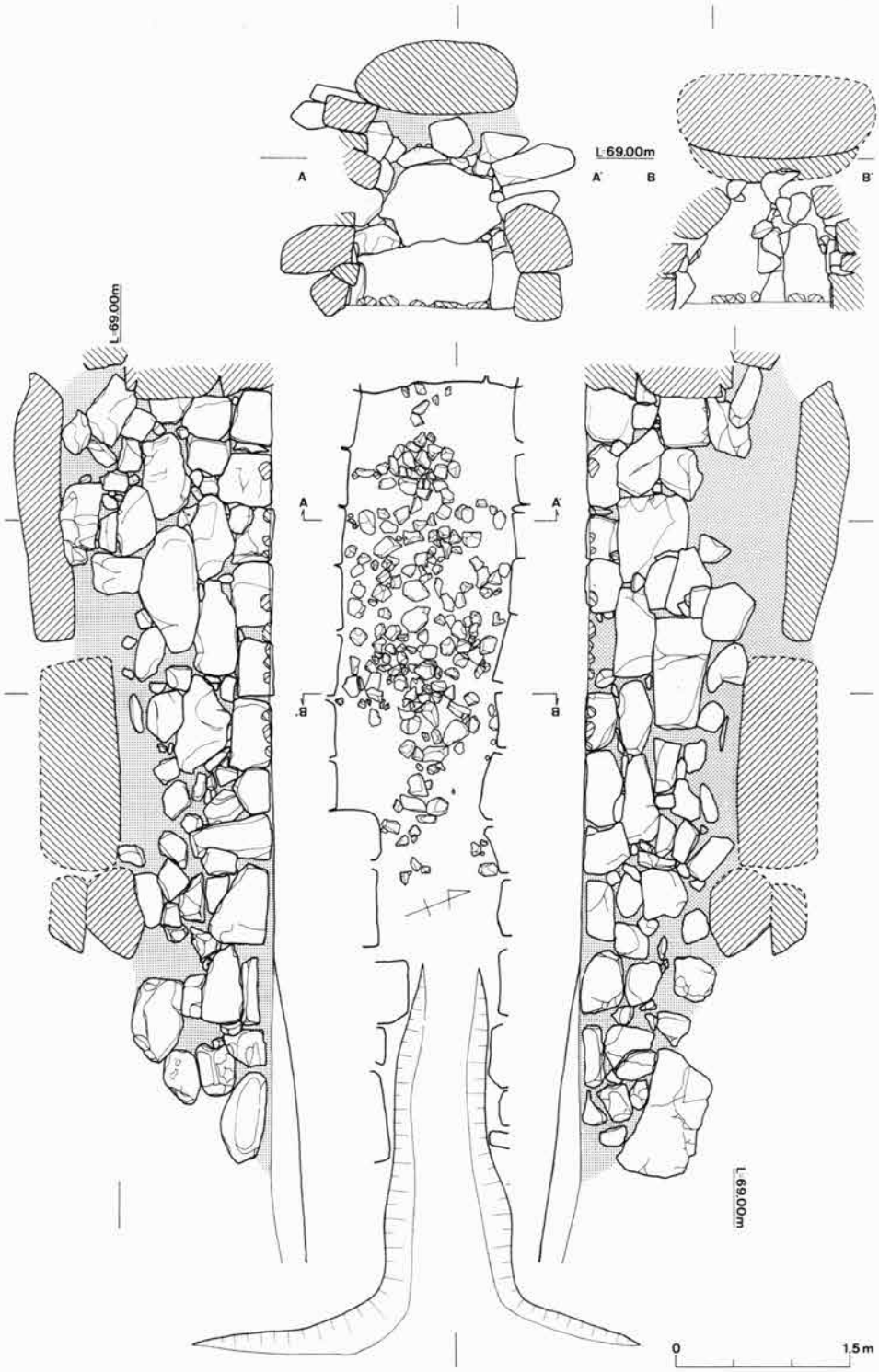
第25図　高山5号墳地形図および火葬墓・土葬墓実測図

に一段(約1m)程下がったところが周辺の平坦地となっているため，見た目では実際の規模よりも大きく見える。よく整った円形を呈するが，後世の墓地造成等により墳丘基底部が削られており，古墳の範囲を確定できる痕跡を残していない。そのため石室規模，地形等から考えると，直径12mの円墳が推定される。残存する高さは，露出した天井石の上端まで2mを測る。

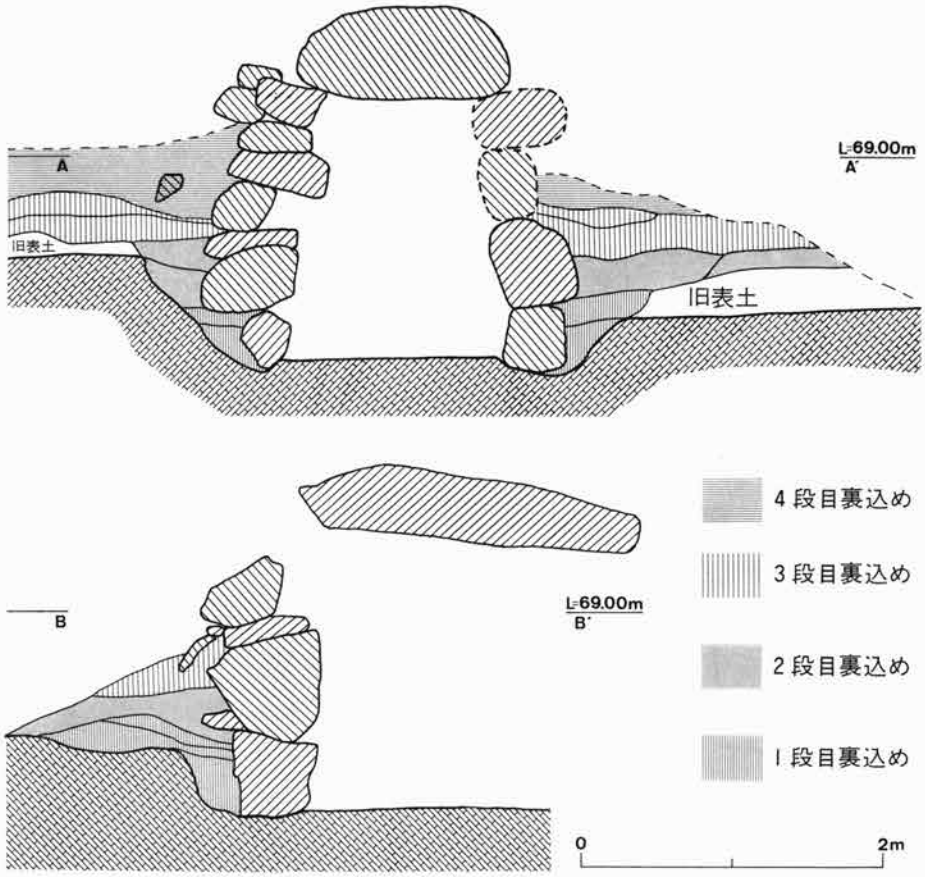
墳丘の盛土は，石室の構築とともに行われている。

埋葬施設(第26・27・28図)　本古墳の埋葬施設は，奥壁から羨道に向かって右側に袖をもつ片袖式横穴式石室である。使用されている石材は，付近一帯で採取できる安山岩と凝灰岩である。石室の大半は，安山岩で構成されるが，部分的に凝灰岩を使用している。

石室には，天井石が3石残存していたが，内部は完全に土砂が堆積していた。また，玄



第26図　高山墳5号墳石室実測図

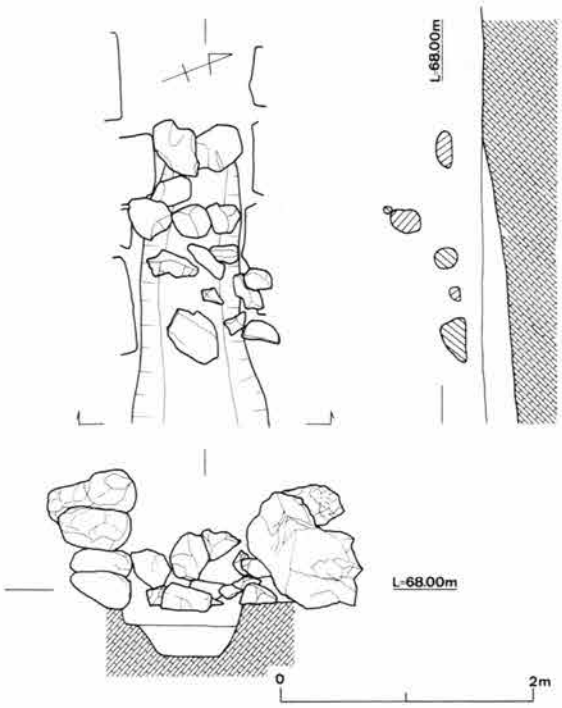


第27図　高山5号墳石室断面図

室中央部から玄門部上には椎の巨木があり，天井石が動いたり，玄室より羨道に向かって左側壁は，石室内に50cmも内傾している状態であった。そのため，本概要報告に載せた左側壁は，石室中軸線より実測したものである。調査は，羨道側から石室内部の堆積土の除去を開始したが，前記した理由により，内傾した側壁が倒壊する危険性が生じてきたため，玄室奥壁側天井石を除去し，奥壁側からも堆積土を除去することとした。なお，この天井石を除去する時点で左側壁最上段の2石は，石室内にズレ込んでいたため，これも除去した。石室実測図には図化していない。

石室は，東南東方向に開口し，玄室の主軸は磁北によればN67°Wに置く。石室は，全長6.68m，玄室長3.7m・奥壁幅1.4mを測る。椎木下にあたる玄門付近は，ゆがみが生じ，石材が内部にせり出し狭くなっている。羨道は，羨道部最前端まで3m・玄門幅1.0m・最前端での幅1.0mを測る。玄室奥壁での天井石までの高さ1.8mを測る。

石室は，自然地形の起伏部分を利用して構築されているが，墓坑を掘る前に，ほぼ墓坑



第28図　高山5号墳閉塞石実測図

掘形面を同じ高さまで整地してから掘り込んでいる。すなわち，奥壁側は，自然地形の起伏が大きかったようで，地山を削り出し，右側壁側は旧表土から，左側壁側は旧表土面に盛土した後「コ」字形の墓坑を掘る。墓坑は，両側壁側はゆるやかに掘り込まれるが，奥壁は二段に掘り込まれ，上方は浅くかなりゆるやかであるが，基底石分にあたる下方は，急に掘り込まれている。裏込めの状況は，地山である黄褐色粘土と薄く部分的に黒褐色土が入る縞状堆積で薄くつき固められている。袖石より羨道部最前端までは，床面より掘形が上面にあり，石材が浮いたような状態を示す。

奥壁は，基底は大小2石により構成され，二段目も同様に積まれるが，三段目より天井石までは小さめの石材により積まれており，天井石下まで4段程度積み上げている。

玄室側壁は，両側壁ともやや小ぶりの石材5石により基底を構成する。側壁は4～5段積み上げているが，両側壁とも2・3段目には，やや大きめの石材1・2石を混ぜ積み上げているが，他は大小さまざまな石材を乱積みする。石材と石材の隙間は，基底石および2段目までは，小石により比較的よく埋められているが，3段目より上方は土が充塡されただけとなっており，雑な印象を受ける。積み方も奥壁側ほどていねいで，玄門付近ほど雑になり，側壁中に石材が少なくなる。奥壁側は数段横目地が通るのがわかるが，玄門付近では最下段を除き，規則性が認められない。袖石と右側壁の間は，最下段を除き，二段目からは石を積め込んだような状態を示し，左側壁3段目より上方も同じような状態をなす。また，椎の巨木によるためか，両側壁とも，面がそろわず石材の凹凸が激しい。

玄室の平面形は，本来羨道部と左側壁側は一直線上につながっていたと考えられるが，現状では，玄門部でややすぼまる長方形をなす。床面積5.28m²を測る。

玄室内奥壁より玄門部までの床面には，拳大～20cm×28cmの周辺に分布する自然石を，地山面に敷きつめているが，奥壁両隅，袖石付近には礫が敷かれておらず，空間があいて

第29図　高山5号墳遺物出土状況

おり，玄室中央部分のみ密集している。この礫を除去し床面の精査を行ったが，排水溝等の施設は有していなかった。

羨道部は，5石の基底により構成されているが，両側壁とも大小さまざまな石材を用い乱積みするが，石材と石材の隙間が大きくあき，積み方にも規則性が認められない。玄室同様，凝灰岩を一部使用している。積み方を見る限りでは，玄室と羨道とはまったく異なり，その境目には，小さな石が積め込まれており，玄室完成後，羨道部を継ぎ足したような積み方をしている。

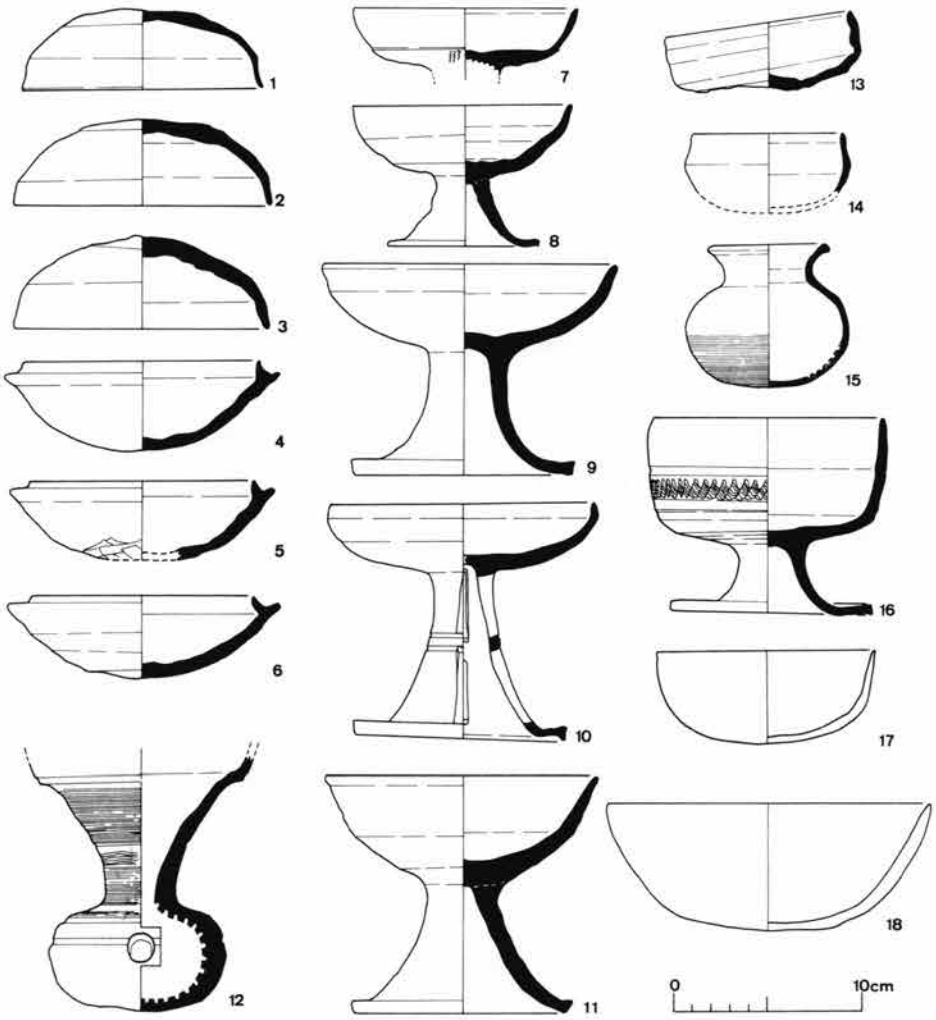
袖石は，玄室側壁に使用されている中規模程度の石材を用い基底石とし，2段目はかなり小さい石材を積むが，基底石上に乗らず浮いており，天井石下までは積み上げておらず，石材のない空間となっている。羨道部には，中央より石室前面にラッパ状に広がる排水溝が検出された。

閉塞石は，この排水溝の始まり部分において凝灰岩・安山岩を混ぜた二段ほど残存していた。溝を一旦埋めてから閉塞しており，閉塞石の大半は，石室前面の溝がラッパ状に広がる部分において，須恵器片とともに多数検出した。再利用された痕跡がないため，追葬時，もしくは何らかの理由により壊されたものと思われる。

遺物出土状況(第29図)　石室内より出土した遺物の総数は約25点である。それらは，奥壁付近・袖石付近で出土した2群に分けられ，玄室中央付近では遺物はまったく出土しなかった。

奥壁付近では，少量の須恵器(杯身・杯蓋・台付盌)と鉄鏃類が出土した。いずれも分散しており，鉄器類については細片化したものが大半であるが，本古墳から出土した鉄器類はすべてここより出土している。

袖石付近のものは，須恵器・土師器の土器類のみの出土であるが，重なり合ったり，積



第30図　高山5号墳出土遺物実測図(1)

み上げられたりした状態であり，破損しているものも多くあり，かたづけられたような状況を示していた。

その他，前記したが石室前面の閉塞石残骸の中からも少量の須恵器が出土している。

(増田孝彦)

出土遺物　5号墳から出土した遺物には，須恵器・土師器の土器類，鉄鏃等の鉄製品がある。

a 土器(第30図，図版第29・30)

石室内からは，18点の土器が出土している。その内訳は，須恵器では杯身(3点)・杯蓋(5点)・高杯(5点)・椀(1点)・台付椀(1点)・甕(1点)である。土師器では，椀(2点)

がある。その他，石室外の遺物として，須恵器杯(13)と小壺(15)がある。

須　恵　器

杯身(4～6・13)　その形態によって2種に分類できる。Ⅰ類は，口縁部に立ち上がりをもつもの(4～6)であり，Ⅱ類は平らな底部に直立する口縁部をもつもの(13)である。Ⅰ類はいずれも短く内傾する立ち上がりをもつ。底部は，5が手持ちヘラケズリを行う以外は，ヘラ切り未調整である。

杯蓋(1～3)　いずれも，杯身Ⅰ類の蓋となるものである。1は肩部がやや鋭く屈曲するが，天井部はすべてヘラ切り未調整である。

高杯(7～11)　いずれも無蓋高杯であり，7以外は完形に復元できた。10は脚部に2段スカシを2方にもつ。杯部の形態は，7以外はいずれも内湾気味にのびる口縁部をもつものである。7は，体部下半に櫛状工具による刺突文を施す。8～11はいずれも焼成不良であり，灰白色を呈する。

椀(14)　やや深く，強いナデによって外反する口縁部をもつ。破片1点のみ出土した。

台付椀(16)　杯部は深く，上方へ直線的にのびる口縁部をもつ。体部には2条の沈線を施し，その間に櫛状工具の刺突による波状文を施す。

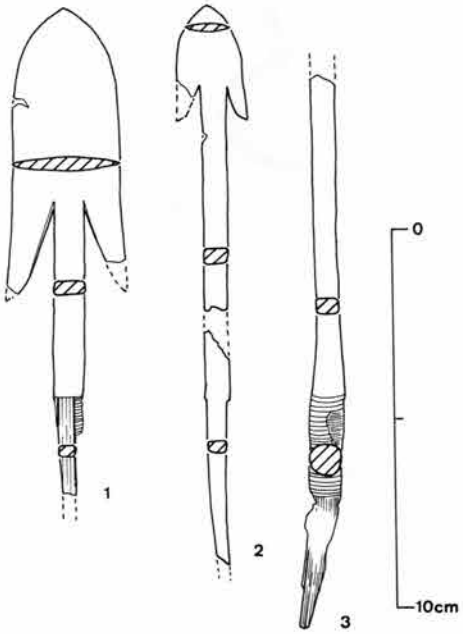
甕(12)　扁球形の体部に，外反してのびる口頸部をもつ。頸部上方では屈曲して段をなしているが，口縁部は欠損しており不明である。頸部にはカキ目を施す。底部は粗雑な手持ちケズリを行っており表面は凹凸がはげしい。

小壺(15)　体部はやや扁球形であり，外反する口縁部をもつ。体部下半には，カキ目を施す。

土　師　器

椀(17・18)　2点のみの出土である。器表はいずれも風化が著しく，調整等は不明である。18は，内外面ともに赤色顔料が塗布されている。

以上が5号墳出土土器の概略である。これらの中では，玄室袖石付近の一群に含まれる杯Ⅰ類(4～6)及び高杯(9～11)が古相を示し，初葬時の遺物と考え得る。これらは田辺編年TK209型式，中村編年Ⅱ-5段



第31図　高山5号墳出土遺物実測図(2)

階に併行するものと考えられる。新しい時期のものとしては，杯身13や小型化した高杯8をあげられるが，いまひとつ判然としない。TK217型式・Ⅱ-5ないしⅢ-1段階に併行するものと考えておく。

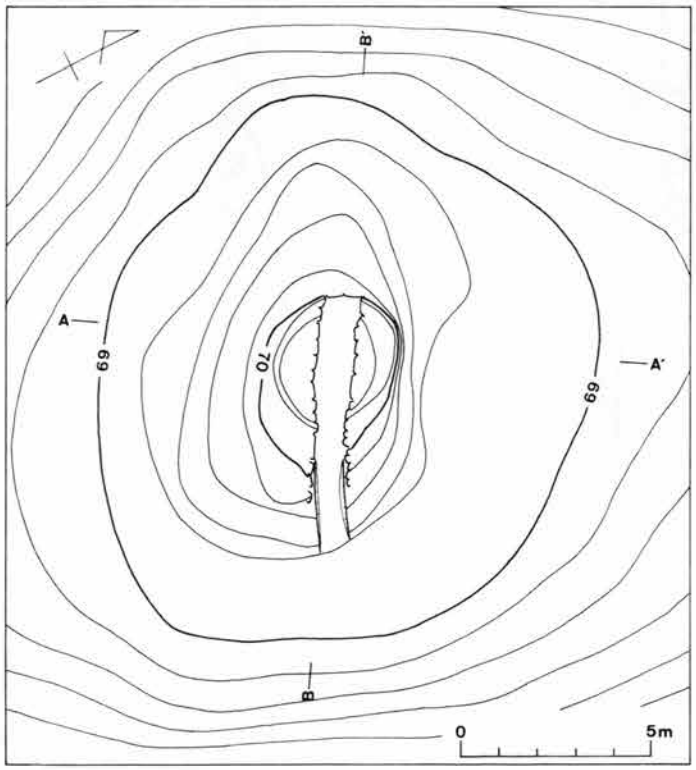
以上の併行関係より，6世紀末ないし7世紀初頭には築造され，7世紀前半に追葬が行われたものと考えられる。　(森　正)

b 鉄製品(第31図)　出土した鉄製品は大半が細片化していたが，量はさほど多くはなく，すべて鉄鏃と思われる。図化できたものは3点だけであるが，鉄製品の保有量は，4号墳と同様少ない。

1は，短茎柳葉式の鏃で，外側に長く開く逆刺をもつ。鏃身の幅の広いものである。矢柄の一部が残存し，矢柄から外に出る部分の長さは，10.3cmである。2は，長頸鏃で鏃身の形態は柳葉式で逆刺をもつ。棘状突起は有さない。3は長頸鏃であるが，鏃身を欠損する。矢柄が残存し，矢柄の端には樹皮を巻く。矢柄の直径は0.8cmである。　(増田孝彦)

④高山6号墳

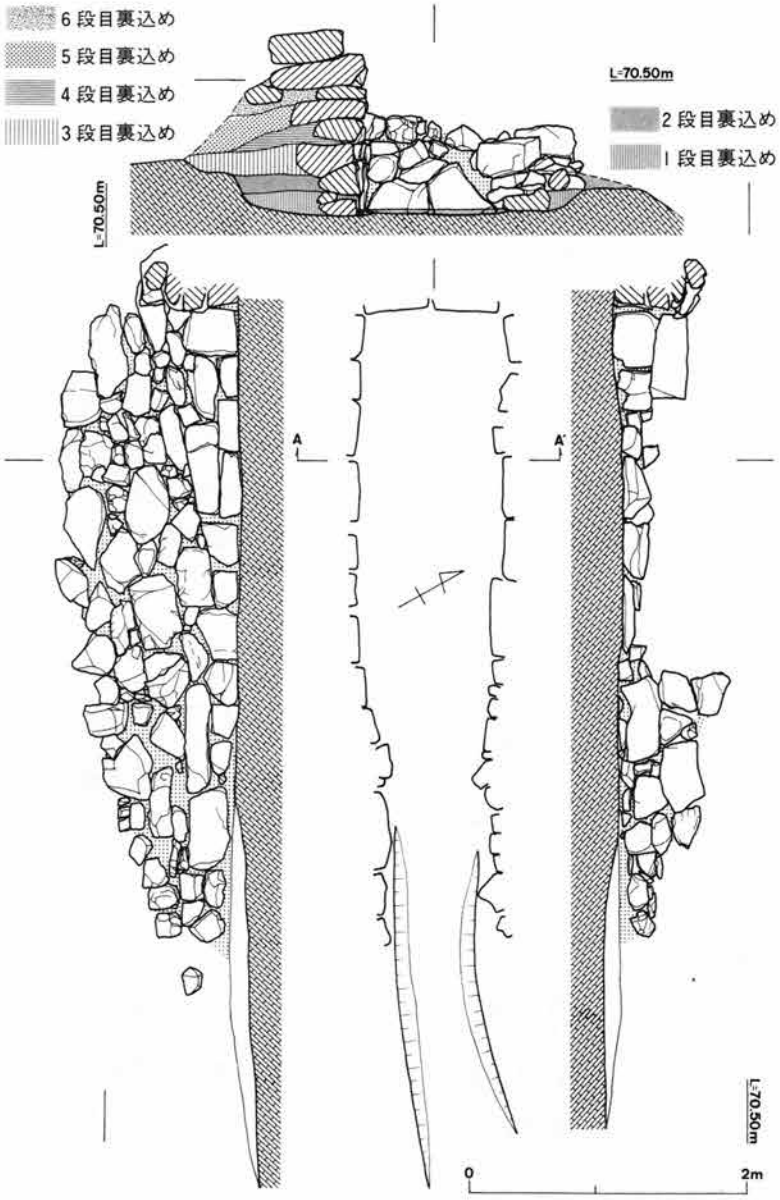
墳丘(第31図)　5号墳の南東30mの自然地形が小さく起伏する部分に位置する。古墳周囲は，すべて畑地として開墾されており，墳丘全体が削られ石室のみが残存していた。



第32図　高山6号墳地形図

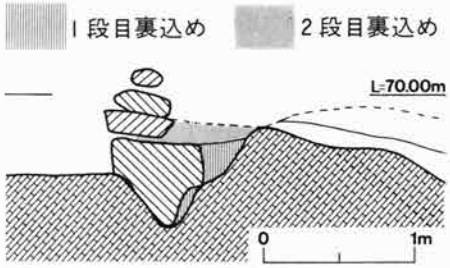
墳丘は，全体が削られているため，基底部すら残っておらず，古墳の範囲を知ることはできない。石室の規模からすると，直径8～9m程の古墳であったと推定される。高さについては，全く不明である。

墳丘の盛土は，石室の構築とともに並行して行われているようである。

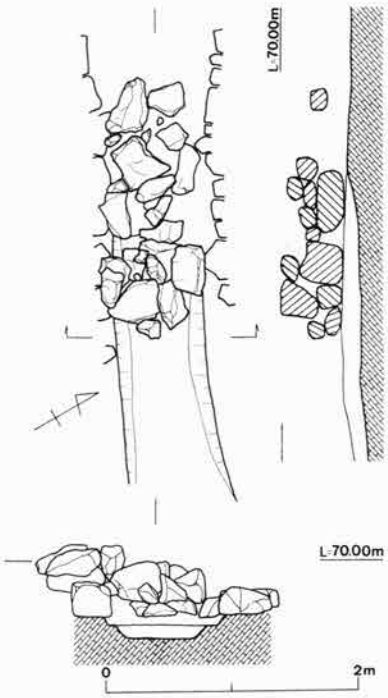


第33図　高山6号墳石室実測図

埋葬施設(第33～35図)　本古墳の埋葬施設は，無袖式横穴式石室である。使用されている石材は，5号墳同様，付近一帯で採取できる安山岩と凝灰岩である。石室の大半は安山岩で構成されるが，部分的に凝灰岩を使用しているが，その度合は，使用された個体数としては古墳群中もっとも多い。また，石室に使用されている石材は，古墳群中もっとも小さい石材により構築されている。



第34図　高山6号墳石室断面図



第35図　高山6号墳閉塞石実測図

石室には，天井石が残存していなかったが，代ってその残骸と思われるものや，側壁の倒壊したもので内部が埋まっており，堆積土よりも石材の方が多いといったような状態であった。これらを除去すると，石室の輪郭が現われてきたが，側壁は南西側壁はよく残存していたが，北西側壁はほとんど基底石しか残っていなかった。このことからすると，開墾による石室の破壊は，北西側より行われたものと思われる。

石室は，東南東に開口し，玄室の主軸は磁北によればN61°Wに置く。石室全長5.4m・奥壁幅1.15m・閉塞部幅0.82m・羨道部最前端での幅0.95mを測る。残存する側壁のもっとも高いところまで約1.4m。

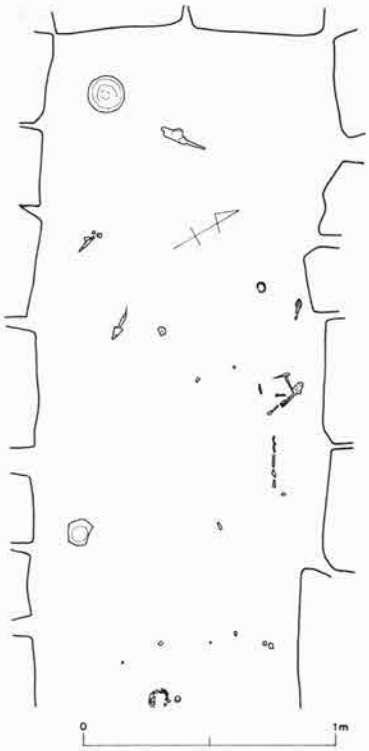
石室を構築するにあたっては，自然地形の起伏を利用しているため，墓坑を掘る前に，周囲を同じ高さに整地してから掘り込んだと思われるが，北東側は削平され不明であるが，南西側は地山を削平し，奥壁側は旧表土面より「コ」字形の墓坑を穿つ。墓坑は，北東側を除き，二段に掘り込まれているが，南西側は石材の大きさよりも掘形がかなり大きくなっている。奥壁側は，基底石が逆三角形をなしているため，掘形の段にその角をあて固定している。

裏込めの状況は，黄褐色粘土(地山)と薄く部分的に黒褐色土が入る縞状堆積で，薄くつき固められる。また，閉塞部より石室最前端までは，掘形よりも石室床面が低く，石材が浮いたような状態を呈する。

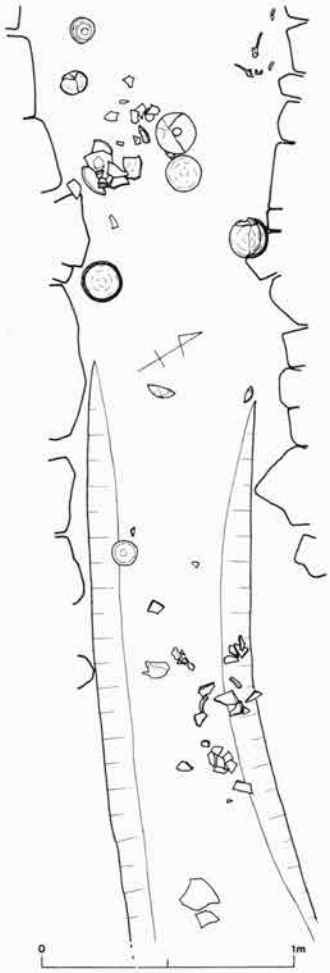
奥壁は，基底を2石で構成し，2段目より上方は比較的小さい石材を用い，4段残存する。

側壁は，南西壁は13石，北東壁は約16石で基底を構成する。基底石より最上段までは，大小さまざまな石材を用い乱積みする。一見乱雑に積まれているようであるが，よく見ると横目地が数段とおる。

玄室と羨道の境をなすと思われる部分は，石室幅が急激に狭くなるとともに，両側壁とも二段目に大きめの扁平な石材を横積みし区画しているようである。この部分を境にして，



第36図　高山6号墳遺物出土状況(1)



第37図　高山6号墳遺物出土状況(2)

羨道側の石材は全体的に小型化している。

石室の平面形は，奥壁側が広く，閉塞部の扁平な石を横積みしたところまで徐々にすぼまる袋状をなし，羨道部は直線的にのびている。この横積みしたところまでの玄室床面積は3.74m^{2}である。玄室内には，棺台等の施設は認められなかった。

玄室と羨道の境をなすと思われる，横積みした石材の南北端の床面には，羨道幅いっぱいに広がる深さ約15cmの排水溝が設けられている。排水溝は，羨道最前端よりもさらに1.9m南西側にやや開きぎみにのびている。

閉塞は，この溝の始まり部分において，凝灰岩・安山岩の大小の石材を取り混ぜ3段程度が残存しており，一旦排水溝を羨道床面まで埋めた後，積み上げている。

遺物出土状況(第36・37図)　石室内より出土した遺物の総数は約50点にのぼる。鉄製品は，大半が細片化して分散していたが，土器類は比較的まとまって出土している。これらの遺物は，玄室内を中心とするもの，閉塞石周辺，排水溝内より出土したものの3群に分けられる。

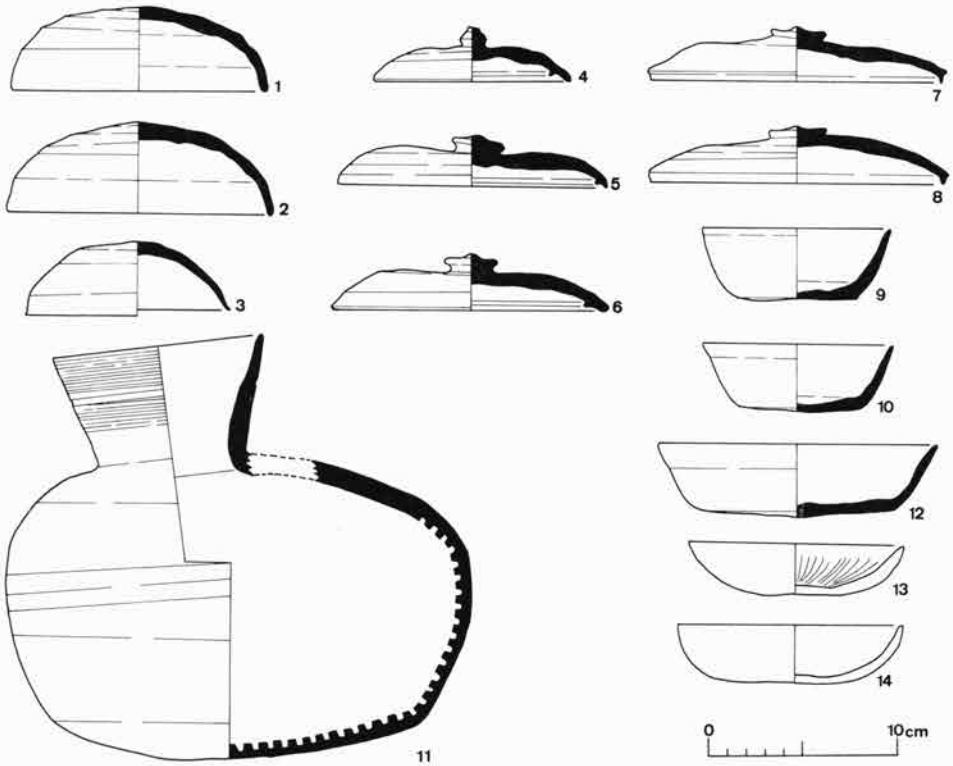
玄室内より出土したものは，大半が鉄製品であるが，破片化し分散している。奥壁に向かった左隅では，初葬時の須恵器杯蓋が出土し，その横では小刀が出土している。玄室中央北東側壁寄りでは，鉄鏃類に混じって，少量の馬具および銀環・玉環の装身具が出土したがいずれも原位置を保っていない。

閉塞石周辺では，大半が玄室内側より出土しているが，初葬時と考えられる須恵器は閉塞石下より出土した。閉塞石内側より出土した遺物は，いずれも重ねられたり積み上げられたような状態であり，一部は破片化していた。これらの遺物に混じって少量の馬具類も出土している。

排水溝内より出土したものは，平瓶，杯蓋，少量の鉄鏃片があるが，平瓶は，破片化，分散し溝内に埋まっていたものである。石室内がかたづけられた際に分散し，溝内に埋まったものであろうか。 (増田孝彦)

出土遺物　5号墳から出土した遺物には，須恵器・土師器の土器類と，小刀・鉄鏃・馬具等の鉄製品，銀環・勾玉・管玉等の装身具類がある。

a 土器(第37図，図版第30)　石室内からは，14点の土器が出土している。その内訳は，



第38図　高山6号墳出土遺物実測図(1)

須恵器では杯身(3点)，杯蓋(8点)，平瓶(1点)である。土師器では，杯(2点)がある。

須　恵　器

杯身(9～12)　平らな底部に，外上方へ直線的にのびる口縁部をもつものである。口径によって2種に分類できる。9・10は口径10cm程度の小型のものであり，12は口径14.8cmを測るやや大型のものである。焼成はいずれも良好である。

杯蓋(1～8)　形態によって3種に分類できる。Ⅰ類は，立ち上がりをもつ身に組みあうもの(1～3)である。Ⅱ類は，天井部につまみ，口縁部内面には短いかえりをもつもの(4～6)がある。Ⅲ類は，天井部につまみをもち，口縁端部は下方に屈曲し段をなすもの(7，8)である。Ⅰ類は，口径によってさらに細分できる。1・2は口径14cm程度であり，最も古相を示すものである。天井部のヘラケズリはていねいに行われており，5号墳出土の杯蓋(第30図1～3)に比べ若干古く位置づけられる。Ⅱ類も口径によりさらに細分できる。矮小化した4と，再び口径の大型化がみられ，つまみも扁平な擬宝珠形となった5・6である。

平瓶(11)　体部は全体に丸みをおび，肩も鈍い。口頸部は，やや開き気味に直線的にのび，中位には沈線，ほぼ全体にカキ目を施す。

土　師　器

杯(13・14)　2点出土しており，13は内面に放射状の暗文を施す。14は，器表の風化が著しいが，暗文は無いようである。やや深く，平らな底部をもつ。

以上が，6号墳出土土器の概略である。これらの中で，杯蓋Ⅰ類(1・2)は，田辺編年TK209型式，中村編年Ⅱ-5段階の中でも古い段階に併行するものと考えられる。杯蓋Ⅱ類の4は，TK217型式，Ⅲ-1段階，杯蓋(5～8)は，TK48型式・Ⅲ-3及びⅣ-1段階にそれぞれ併行するものと考えられる。以上の併行関係より，6世紀末ないし7世紀初頭頃に築造され，7世紀後半まで2回ないし3回の追葬が行われたものと考えることができる。

(森　正)

b 鉄製品(第39図)　鉄製品には鉄鏃・小刀・刀子の武器類，鐙・鉸具の馬具類，釘類が出土している。小刀は遺存状況が悪いため図化しなかった。全長約50cm程を測る。

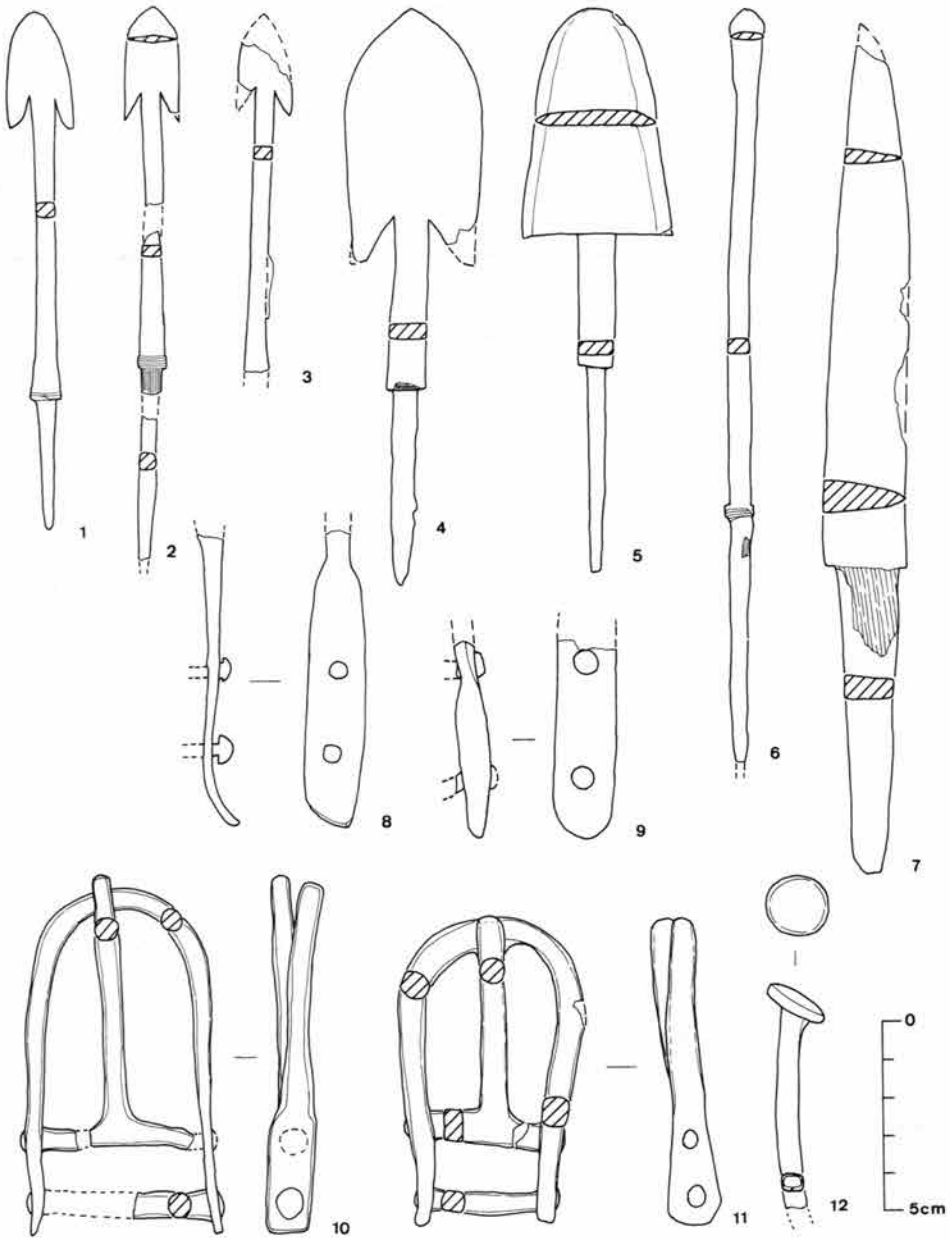
鉄鏃(1～6)　鉄鏃の総数は，鏃身の数から約13点と考えられる。鏃身の形態から3種類に大別できる。

Ⅰ類(1～3)　総数5点出土した。長頸鏃で鏃身の形態は柳葉式で，逆刺をもつ。棘状突起は有さない。矢柄より外に出る部分の長さは，1で10cm，2で9.2cmである。

Ⅱ類(4・5)　柳葉式に近いが鏃身の幅が広いもので，総数3点出土した。逆刺をもつものは2点出土したが(4)，逆刺をもたないもの(5)がある。いずれも棘状突起は有さない。

4は，全長15.1cm，矢柄の外に出る部分の長さ10cm。同じく5は14.8cm，9.4cmを測る。

Ⅲ類(6)　長頸鏃で，鏃身の両側に刃をもつもので，関はなく切先近くの断面はレンズ状を呈し，頸部と茎の境には棘状突起をもつ。棘状突起部分にわずかに樹皮が残る。茎先を欠くが，全長20cmと推定され，矢柄より外に出る部分の長さ13.2cmを測る。

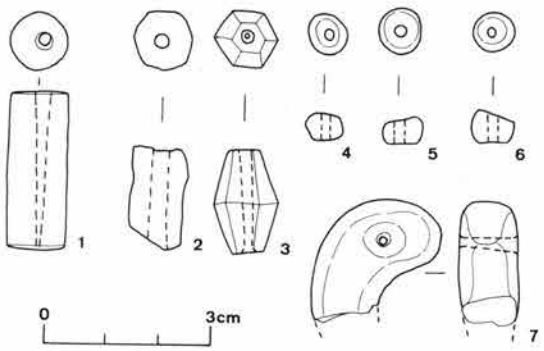


第39図　高山6号墳出土遺物実測図(2)

付表４　　高山６号墳出土玉類観察表(単位：cm)

No.	器　種	長	径	孔　径	色　調	備　考
1	碧玉製管玉	3.01	1.13	0.34～0.11	濃緑色	
2	土製管玉	(1.86)	(1.02)	0.30	暗褐色	表面摩耗・両端欠損
3	水晶製切子玉	1.83	1.66	0.34～0.14	透　明	
4	ガラス製小玉	0.61	0.70	0.20	濃紺色	気泡は穴と平行，透明度低い，表面摩耗，両小口平坦
5	〃	0.45	0.79	0.20	〃	気泡は穴と平行，透明度低い，両小口平坦
6	〃	0.61	0.85	0.20	〃	気泡は穴と平行，透明度低い，両小口平坦
7	碧玉製勾玉	(2.40)	1.01	0.31～0.18	濃緑色	胴部下半欠損

刀子(７)　玄室中央北東側壁より出土したもので，１点のみの出土である。切先・刃部の一部を欠くが，全長22.5cm程と推定される。両関で，関から切先にかけて徐々に細くなる。刃部断面は，丸味を帯びた二等辺三角形をなし，関部分で最大となり幅2.2cm・厚さ0.8cmを測る。関の部分から木質が付着している。



第40図　　高山６号墳出土遺物実測図(3)

茎は長さ8.2cm，関部分でその幅は最大となるが，関から3cmの部分では，断面が台形をなし，幅1.3cm・厚さ棟側0.6cm・刃側0.5cmを測る。

鐙(８・９)　数点破片が存在するが，いずれもその部位を断定することができないが，約１組分が存在する。図示したものは，脚部先端のみの破片である。脚は幅広で短く，扁平な断面をもつもの(８)と，ややふくらむもの(９)があり，８は脚先端が外側に反っている。いずれも木製鐙をはさみ込み，左右各々２本の釘を打ち込み固定していたと思われる。８は現存長7.8cm・幅1.6cm，９は，現存長5.2cm・幅1.6cmを測る。玄室中央・北東側壁より出土した。

鈴具(10・11)　基部の開いた輪金に，Ｔ字形刺金と，段をつけ両端を細くした鉄棒を差し込み，輪金の外側に突出した鉄棒の先端を叩きとめる。10の方がやや大きく，Ｔ字型刺金・鉄棒の一部を欠く。10は全長9.2cm，輪金の環部幅4.8cm，断面は径0.5cmの円形，基部は0.3cm×1.2cmの長方形断面，11も同じつくりで，全長8.4cm，環部幅５cm，断面は

0.8cmの円形，基部中央で0.5cm×1.2cmの長方形断面。基部先端は広がる。10は，玄室中央北東側壁から，11は閉塞石内側の土器集中部分より出土した。

釘(12)　数本玄室内より散乱して出土したが，いずれも頭部を欠損し，小片化したものであり，原形をとどめない。図示したものは唯一頭部の残るものであるが，足の一部を欠損する。頭部平面形は円形をなし，断面は長方形を呈する鍛造品である。木目が存在しないため，使用された棺材の木目方向，厚さについては不明である。現存長6cmを測る。

c 装身具(第39図，図版第44)　装身具として玉類と銀環がある。

玉類(1～7)　いずれも玄室中央北東側壁の鉄製品が多く散乱したところより出土したものである。玉類の計測値は，付表4の観察表に記載した。

1は，碧玉製管玉で色調は濃緑色を呈し，全体的にていねいに仕上げられている。2は土製管玉で暗褐色を呈し，表面は磨耗が激しく，両端を欠損する。3は水晶製切子玉でややいびつな六面体をなす。4～6は，ガラス製小玉であり，いずれも濃紺色を呈する。7は，碧玉製勾玉で，色調は濃緑色を呈し，非常に美しく仕上げられているが，胴部下半を欠損する。

その他，床面精査中に土製管玉ではないかと思われるものも数点認められたが，風化が著しく，管玉とは断定するまでには至らなかった。　(増田孝彦)

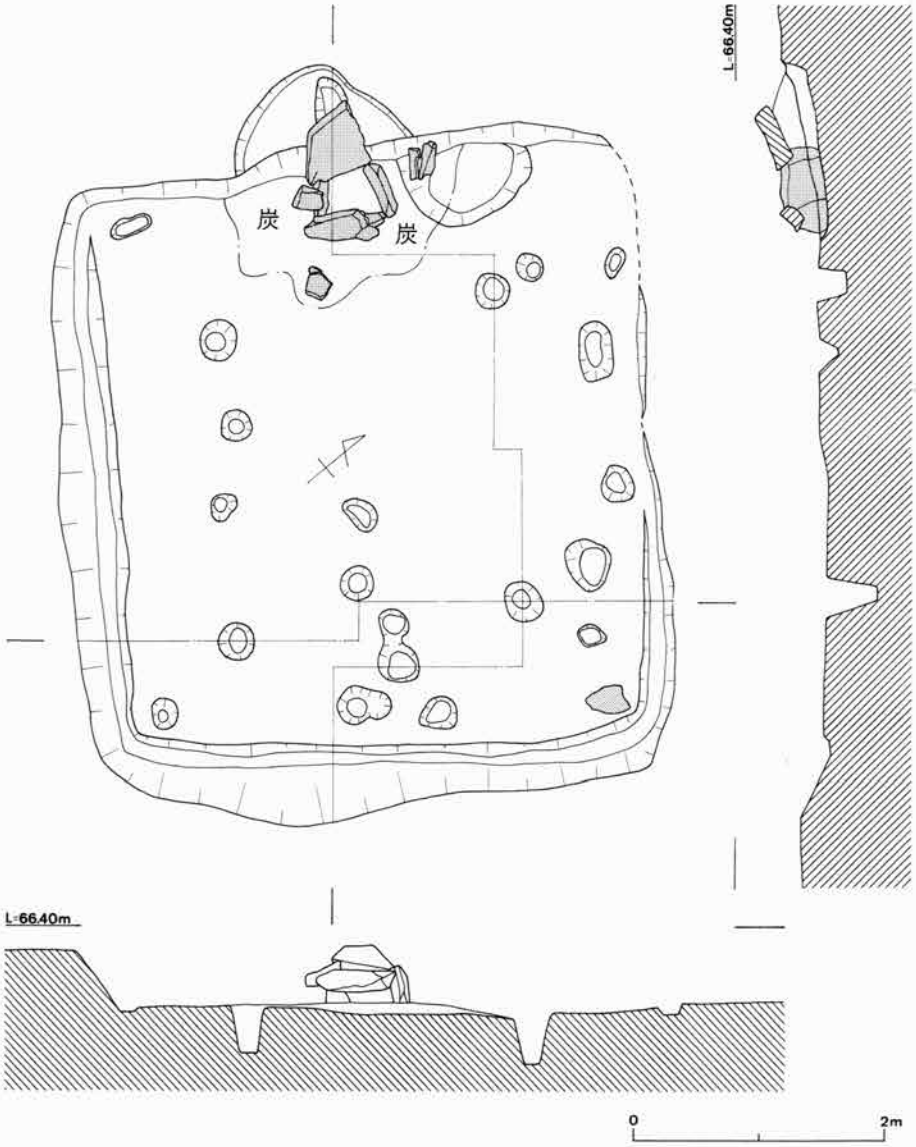
⑤試掘地A(高山遺跡)(第2図)

5号墳の北方100mに位置する。この地は，6号墳北東よりゆるやかにのびてきた自然地形の先端にあたり，周囲よりも最高所で4m程台地状に高くなっている。この台地状に高くなった部分は，西から東にかけゆるやかな傾斜をもつが，北・東側は谷となっており，急崖な自然地形を呈する。この台地上に高くなった部分は，5・6号墳同様，造成予定地最高所の標高70mに位置する。台地・台地周辺はすべて畑として開墾され畝跡がよく残る。

調査は，この台地状の平坦部を貫通する幅2.5m×長さ40mの試掘トレンチを設定し掘削を行った。開墾土を除去した段階で，台地状に起伏した地形が，周辺の地形と同化する東端の崖上において，トレンチ北壁寄りでは扁平な石3石を配した石組みが検出され，周辺では炭混りの黒色土が全面に広がっていた。そのため，周辺の拡張を行い遺構の存在を確認することとした。

その結果，黒色土の広がりは方形の住居跡であることが判明し，トレンチ北壁寄りで検出された石組はカマドであることが明らかとなった。

住居跡(第41図)は，開墾により北東側掘形がほとんど残存していないが，5m×4.7mの規模を有し，残りのよい南西側からの深さは0.5mを測る。住居跡内部には，カマドが設け

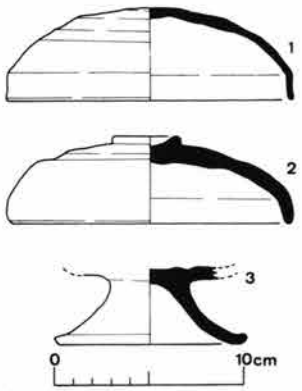


第41図　試掘地A（高山遺跡）住居跡実測図

られている北西辺を除き，幅約20cm・深さ5～10cmの排出溝が「⊔」字形に設けられている。住居対角線上がほぼ方位を差す。

北西辺中央部には，安山岩・凝灰岩を用いた石組みのカマドが作り付けられており，カマド周辺からは，多量の炭が出土している。カマドは，北西辺住居肩部より外側へ幅1.4m・奥行き0.7mを半円状に掘り広げている。さらに石材を置くため，住居床面より6cm掘り下げた後，カマド側壁となる安山岩の扁平な石材を，「ハ」字形になる2石を横置きし，

周囲に粘土を充塡し固定する。煙道は，カマド側壁から外側に向かって約0.6mのびるが，カマド側壁設置後粘土を充塡する際に同時に煙道も作っている。カマド天井部は，安山岩の扁平な一枚石を置くが，この一枚石は約1/2が住居北西側壁より外側に出ている。焚口部分は，土器を置けるようカマド両側壁南東端には「井」字状に凝灰岩の細長い石材を置いている。凝灰岩を用いるのは，安山岩に比べ耐火性にすぐれているためと考えられる。



第42図　住居跡出土遺物実測図

また，カマド右横には，幅約1m・深さ約15cm程の炭を多く含むくぼみが認められた。用途は不明であるが，内部に埋まっているものが炭ばかりであるため，火消し場とも考えられる。

柱穴は，19か所検出したが，主柱は4本である。住居内からは，南西壁排水溝中より須恵器杯蓋，住居内東角より須恵器杯身が，住居中央部分より，須恵器高杯脚部・細片化した土師器甕片が出土した。また，カマド内部，周辺からも細片化した土師器甕の出土が認められた。

通常の住居跡1基を調査した場合に出土する遺物の量からすると非常に少量であり，また，カマド内部があまり焼けていないことなどからすると，定住していたのではなく，臨時的に短期間のみ使用されていたものと思われる。

単独で住居が検出されたため，他にも住居が存在する可能性が考えられることから，台地状に隆起する西側および5号墳から続く平坦地をも含めて，2m四方の試掘グリッドを25か所設定し掘削を行った。大半の試掘グリッドが表土下30cmで地山面となり，遺物すら出土しなかった。

高山遺跡は，丘陵最高所に石組のカマドを持ち，単独で存在する特異な住居となっている。

（増田孝彦）

出土遺物(第42図，図版第34)

住居跡床面からは，3点の須恵器が出土している。杯蓋2点，高杯脚部1点である。土師器は細片のため図化し得なかった。

杯蓋(1・2)　1は，口縁部に強いナデを加えており，肩部に鈍い稜をもつ。天井部はヘラケズリを行う。2は，天井部に中央のくぼんだ扁平なつまみをもつ。天井部内面には，同心円あて具の痕跡が，ナデ消されてはいるが残っている。焼成はあまく，灰白色を呈するものである。

高杯(3)　脚部のみの破片である。低いもので，外反気味に開く。

第43図　試掘地B地形図

本住居跡出土遺物は，以上のとおりであるが，これらは田辺編年TK209型式，中村編年Ⅱ-5段階にほぼ併行するものと考えられる。6世紀末ないし，7世紀初頭のある時期にごく短期間使用されたものと考え得る。

（森　正）

⑥試掘地B（第43図）

3号墳の北東方80mの位置にあり，直径20m・高さ2mの古墳状隆起をなしていた。中央より，西半分は平坦地形であり，江戸時代中期～明治までの墓地となっており，東側は大正～現代までの墓地となっていた。また，北側では，4号墳横や5号墳周囲で見られた集石が認められた。中央部分には3・5号墳同様，椎の巨木が立っており，椎木周囲には，石仏・一石五輪塔が約20個体分置かれていた。調査は，両側の墓地を避ける形で，墓地に挟まれた中央部分に幅2.2m×長さ9.6mの試掘トレンチを設け掘削を行った。

その結果，表土下20cmで地山面となり，古墳は存在せず，自然地形であることが明らかとなった。ただ，北半分の集石が認められた場所では，1m×1.3m程の墓坑が検出されたが，5号墳・試掘地A南端で土葬墓の調査は行ったため，あえて掘削はしなかった。

なお，椎木周辺に存在した石仏・一石五輪塔を調査中に，高山丘陵中最も古い，延宝3(1675)年銘の墓石を確認した。

（増田孝彦）

⑦集石・積石状遺構の調査

高山丘陵上には，各所において集石・積石状を呈する遺構が認められる。これらは，古墳周囲，古墳近くで認められたり，あるいは現在の墓地と共存していたりする。また，まったく別の場所に少数の集石で構成される場合もある。

これらのものを立地する条件により分けてみると，(a)古墳周囲・周辺に存在し，その近辺が現在の墓地となっており，石仏，一石五輪塔が置いてある。(b)古墳周囲・周辺であり石仏・一石五輪塔を置くが，現在墓地となっていない。(c)現在の墓地と共存，(d)

まったく独立のものとに分けられる。(a)については大半がそうであり，1・3・4号墳がそれにあたるが，4号墳周辺のものは，石仏・一石五輪塔を有さない。(b)は，12・5号墳であり，(c)は試掘地Bおよび9号墳北西方の6号墳よりのびてきた尾根の先端にある墓地が相当する。(d)は，試掘地A南端である。調査結果から見れば，これらはいずれも，中世～近世墓地であり，丘陵上各所に分散していることなどからすると，丘陵上にいくつかに分散していた集落があった可能性もあり，現在，徳良川を挟んだ高山丘陵の対岸にある徳運寺は寺伝によると，約150年前に焼失し現在の地に移ったとあり，前身は，小字名では椿原，高山12号墳近辺がそれにあたるが，正確な位置は不明である。これらのことと，墓地が各所に分散していることとは無関係ではあるまい。

調査は，造成工事により破壊される部分を中心に行ったが，試掘地Bについては，すでに，5号墳横，試掘地A南端により調査結果を知り得たのであえて掘削は行わなかった。また，6号墳南側尾根先端のものは，現代の墓と共存しておりこれも調査は行っていない。調査を実施したのは，4号墳周辺にある集積・積石と，5号墳周囲の集石・試掘地A南端の集石であり前記した調査を行わなかった分以外については，造成予定地外である。

4号墳周辺の集石・積石

4号墳北側20mのところに位置し，丘陵各所で認められる円礫・角礫の自然石(一部河原石)を用いて，一辺1m四方ないしは，直径1m程度の集石が集合して，幅6m×長さ12m・高さ1m程の集石・積石群を形成したものである。各区画はさまざまで，大小とり混ぜた石材で区画するもの，小礫や円礫・角礫だけのものなど多様であり，それらが約40ほど集まっていた。また，この集石・積石群の南西側7mのところには，これらとは別に完全に独立した直径3m・高さ1mの積石塚様のものも存在した。

これらの集石・積石については，地元では一字一石経が出土した，経塚であるという伝承が残っていた。

調査は，経塚であることも想定して，一石一石丹念に調査を行ったが，経塚の石は出土せず，集石による区画部分からも何も出土しなかった。ただ，集石，積石をすべて除去したところ，地山削平面において，北宋銭1枚(第44図2，図版第42)とごくわずかの陶器片が出土した。これらのことや，5号墳周囲で火葬墓が存在することや，火葬墓内には無遺物のものもあることなどからすると，火葬骨を木櫃等に納め安置した後，周囲に石を並べ積み上げていったとも考えられる。　(増田孝彦)

5号墳周囲の集石(第25図)

5号墳西側・南裾部に広がるもので，約1m程度の円形・方形の集石が約20か所ほど認められた。これらの集石は，河原石・小礫・角礫・大小さまざまな石材を用いて区画して

いる。これらの集石と5号墳の間や，5号墳天井石南側には一石五輪塔・石仏が約13個体分置かれていたが，古墳調査中や，集石群中からも一石五輪塔・石仏の一部が出土し，最終的には25個体分近くになった。

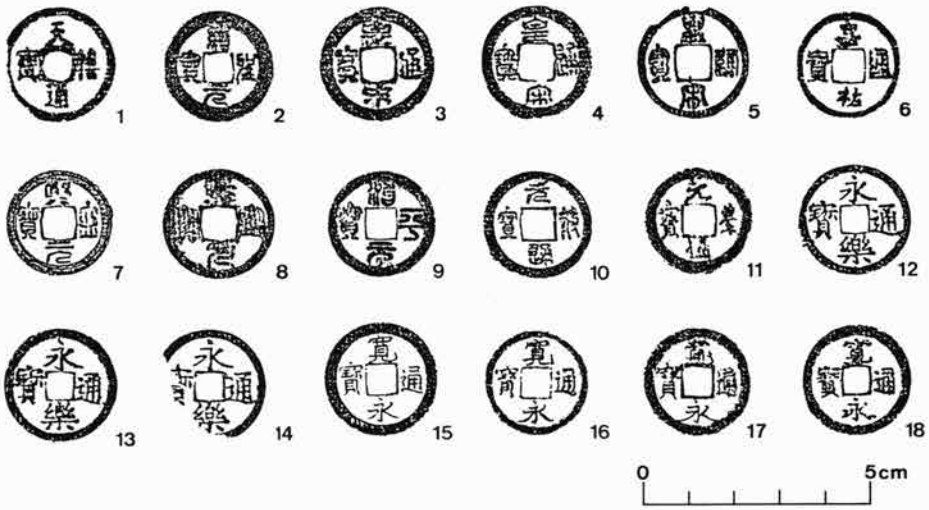
集石は，墳丘南側のものについては，市松文様状に配置され，西側北端付近に位置するものについては，広い範囲に河原石の小礫を並べ，その上に一辺30cm程度の礫を4石ほど集めた20か所の区画が認められた。

これらの集石を除去すると，すぐ掘形が検出できたが，墓坑平面形は，円・円形に近いものと，隅丸方・長方形のものとが認められた。規模の大きいものについては，大半が方形である。また，市松文様状に配された集石の下からは，墓坑のないものがみられた。4号墳周辺の集石・積石で見られたものと同様の形態を取るものであろうか。

これらの墓坑は，火葬墓と土葬墓の2種類があり，土坑だけのものもある。

付表5　出土古銭一覧表

遺物番号	名称	初鋳年次	国名	読
1	天禧通宝	1017	宋	順1 $\frac{2}{4}$ 3
2	天聖元宝	1023	宋	順
3	皇宋通宝	1038	宋	対1 $\frac{3}{4}$ 2
4	皇宋通宝	1038	宋	対
5	皇宋通宝	1038	宋	対
6	嘉祐通宝	1056	宋	対
7	熙寧元宝	1068	宋	順
8	熙寧元宝	1068	宋	順
9	熙寧元宝	1068	宋	順
10	元符通宝	1098	宋	順
11	元豊通宝	1078	宋	順
12	永楽通宝	1408	明	対
13～18	寛永通宝		日本	対



第44図　出土古銭拓影

火葬墓(第25図)1・3・7・8は，墓坑が円形をなすものと，方形をなすものとがあり，円形をなすものは，直径0.8～1m程であるが，方形をなす1の場合，墓坑掘形が，1.4m×1m，深さ約30cmを測るが，火葬墓の掘形は全体的に浅くなっている。内部には火葬骨が認められたが，炭・焼土を伴うもの(1)と，火葬骨と少量の炭を伴うもの(3・7・8)がある。もっとも残存状況のよい1の場合，墓坑側壁が若干焼けており，床面には火葬骨が多量に置かれ，その上には炭が掘形内全面に充填されていた。この炭は丸太のまま炭化しており，墓坑内に火をつけたあと土をかぶせたため，炭化したものと考えられる。

火葬墓内の出土遺物は，1から火葬骨とともに北宋・明銭11枚(第44図2～12)が出土したが，3・7・8からは，少量の火葬骨しか認められなかった。

土葬墓は，いずれも隅丸長方形の平面形をなすが，墓坑は14の一辺1.3m×1.4m，深さ1.7mを最高に，最小のものは19の一辺1m×1.1m，深さは5の1.1mがもっとも浅い。人骨の出土した墓坑は5・6・9・12・14・15である。墓坑内より出土した遺物は，人骨以外に5・6・9からは，寛永通宝が各3枚ずつある。14からは，寛永通宝6枚(第44図，図版第42)および土師皿1枚が出土した。これら以外の墓坑は人骨のみの出土である。また，5・9・14からは釘が各4本ずつ出土している。

上記した墓坑以外に，土坑だけ確認したものがあるが，いずれも浅く円形をなす。11が深さ1mともっとも深いが墓坑であったかどうかは不明である。

これらの火葬墓・土葬墓の時期については，火葬墓は，調査中に出土した一石五輪塔に天正11・12(1583・1584)年銘のあるものがあることや，北宋・明銭を出土していることから，中世墓(安土・桃山時代頃)に埋葬されたものと考えられる。

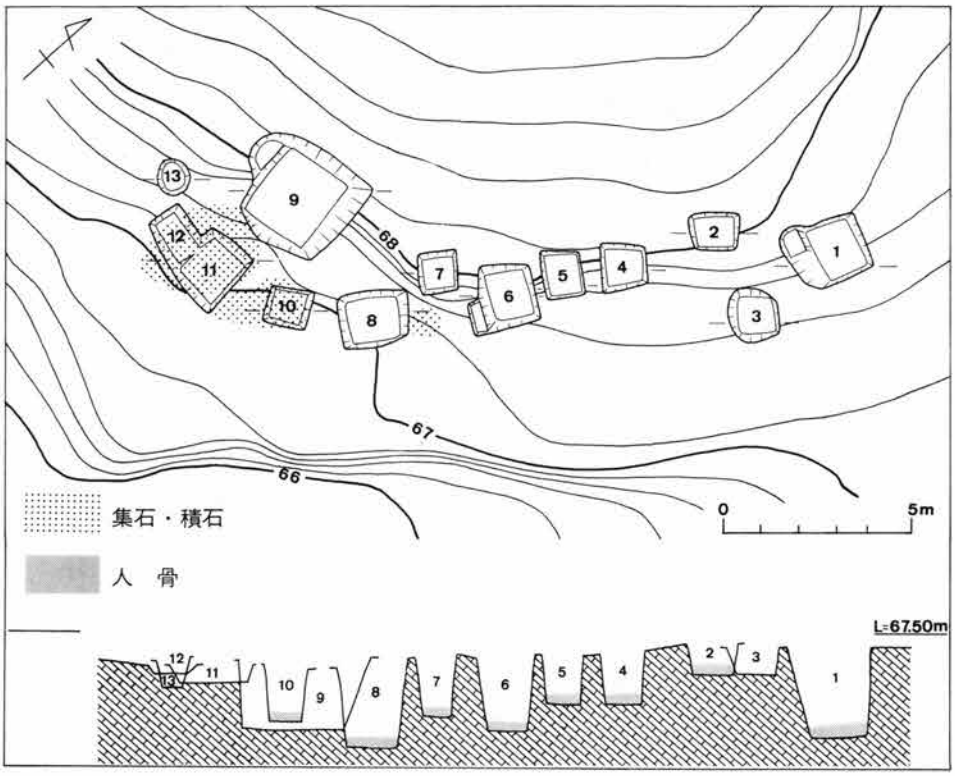
土葬墓については，江戸時代中期以降の墓地は現在使用されている墓地にあり，もっとも古い墓石は試掘地Bの延宝3(1675)年であり，このことから考えると，墓石をもたない段階(江戸時代中期以前)が考えられる。　(増田孝彦)

試掘地A南端(第45図)

住居跡を検出した高山遺跡の西側30mの丘陵平坦部が傾斜し始める肩部に位置し，試掘地Aの台地状に高くなる裾部分を，幅7m・長さ23mにわたって削り出し平坦な段を設けていた。5号墳周囲の集石同様，2か所の集石と1か所の積石が認められた。

集石・表土除去後，墓坑が検出されたが，墓坑は集石・積石の存在しなかったところからも検出され，削り出した平坦部全体に広がっており13か所を検出した。いずれも，土葬墓である。

墓坑平面は，円形をなすものと方形をなすものとがある。円形をなすもの(13)，方形でも浅いもの(11・12)からは人骨は出土しておらず，墓坑であったかどうかは疑わしい。ま



第45図　　試掘地A　南端地形層・土葬墓実測図

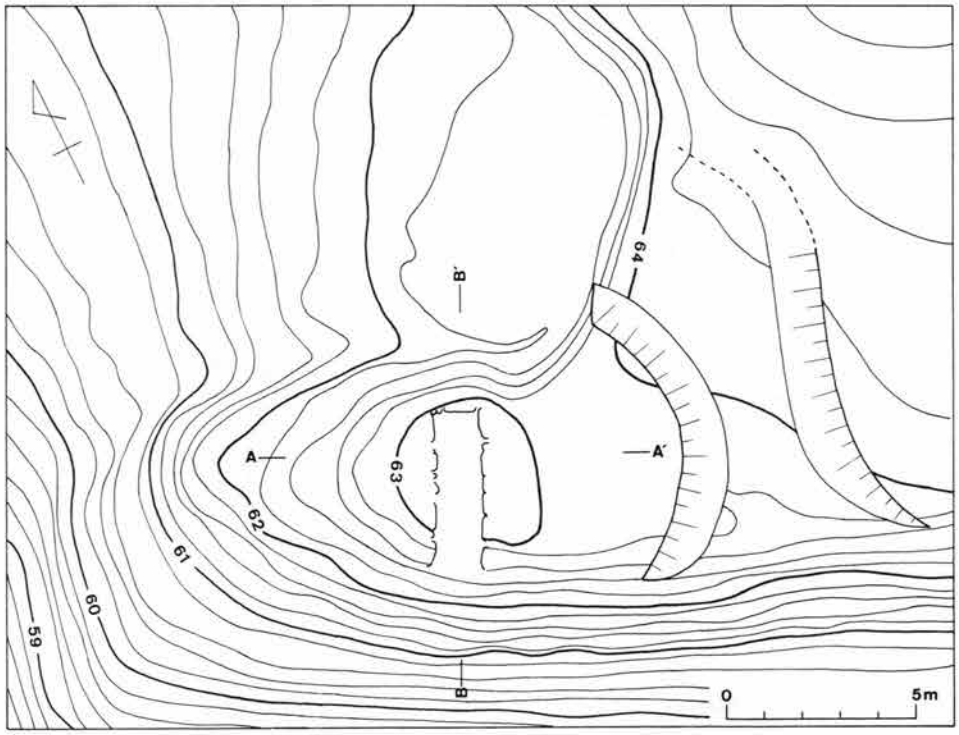
た，2と同規模である3からも人骨が出土せず，最大規模を誇る9からも人骨は出土していない。

人骨の出土した墓坑は，1・6の一辺1.8m×1.4mを最大に，最小のものは，2・10の一辺1m×1.1mの規模を有する。深さも1の2.3mを最高に，2の0.8mがもっとも浅い。各墓坑底面からは，人骨が多量に出土したが，このうち1・6・8からは，寛永通宝が各1枚ずつ出土し，7・8・10からは釘も出土した。

築造時期については，5号墳周囲のものと同様に，墓石を持たない段階(江戸時代中期以前)と考えたい。　　(増田孝彦)

⑧高山7号墳

墳丘(第46図)　6号墳の南東約100mに位置する。谷に向かって張り出した尾根が，下降傾斜を始める肩部に位置する。南側は開墾により土を削り取られ，急崖な地形となり，削り取った土は，8号墳との間のくぼみに埋め畑地を作っている。南側を除く古墳の3周は，いずれも畑地としてよく開墾されており，畝跡や段を残している。そのため墳丘全体が平坦化しており，石室により開墾できなかった分は，石材(奥壁)が露出していた。



第46図　高 山 7 号 墳 地 形 図

墳丘が四周とも削られており古墳の範囲を知る術もないが，石室の規模からすると，直径約8m程の古墳であったと推定される。高さについては不明である。

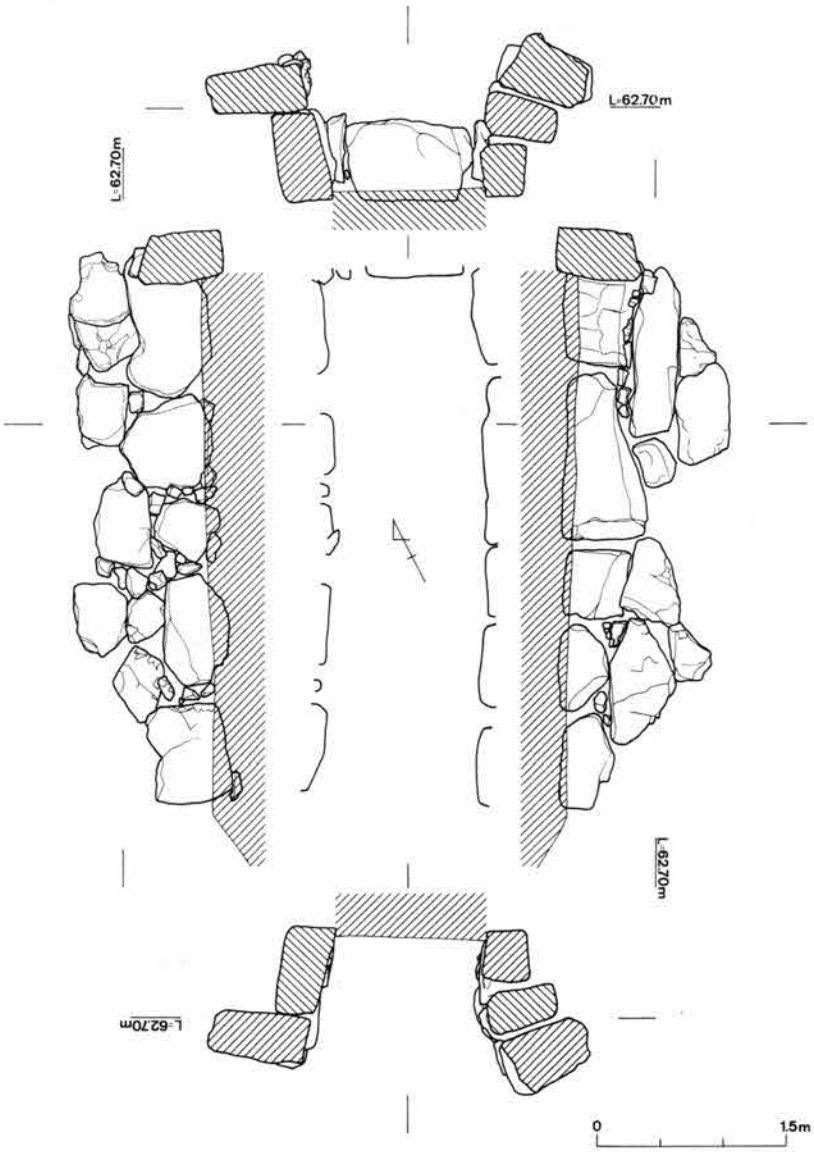
石室東側には，尾根と区画するために設けられたと思われる幅4.2m・深さ約50cmの円を描く溝状の施設が認められる。北側についてはこの溝状の施設が続いていたと思われるが，開墾により削平され残存していない。また，この溝状の施設は，石室の規模から想像される古墳規模よりもかなり大きくなっている。

開墾が石室基底石付近にまでおよんでいることから，墳丘の盛土は確認できなかった。

埋葬施設(第47・48図)　本古墳の埋葬施設は，無袖式横穴式石室である。使用されている石材は，他の古墳同様，付近一帯で採取できる安山岩と凝灰岩である。石室の大半は安山岩で構成されるが，石材の隙間に詰められている石材には凝灰岩が見られる。

石室には，天井石は残存していなかったが，代ってその残骸と思われるものや，開墾により倒壊した側壁等により，内部が完全に埋まっていた。これらを除去すると，石室の輪郭が現われてきたが，側壁は開墾によるためか，両側壁とも全体的に外反していた。

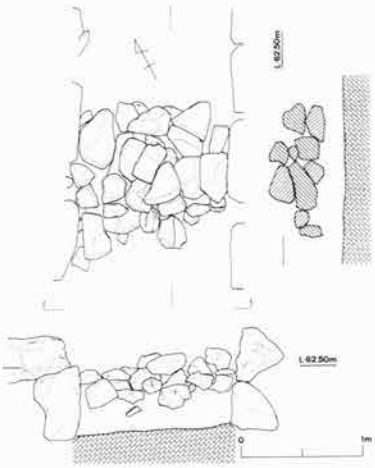
石室は，谷に平行する南南西に開口し，石室主軸は磁北によればN26°Eに置く。石室前面斜面が削られており，現存する石室全長より，もう少し大きくなるようである。石室現



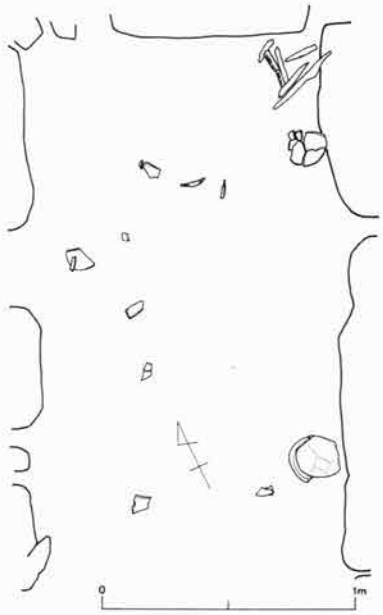
第47図　高山7号墳石室実測図

存長4.2m・奥壁幅1.2m・石室最前端の幅1.32m・残存する側壁のもっとも高いところまで約1.2mを測る。

石室を構築するにあたっては，尾根稜部を削り出し，墓坑を掘る周囲を同じ高さにしてから「コ」字形の墓坑を掘り込んだと思われるが，開墾により削平されてしまい詳細は不明である。わずかに掘形が残る南東・北西側壁側を見た場合，両側ともゆるやかな傾斜をもつ掘形となっている。



第48図　高山7号墳閉塞石実測図



第49図　高山7号墳遺物出土状況

裏込めの状況も，他の古墳と同様で，黄褐色粘土(地山)に薄く部分的に黒褐色土が入る縞状堆積をなし，薄くつき固められている。

奥壁は，基底石のみ残存しており，石室幅よりやや小さめの石材を側壁完成後，横置きし南東側壁側に密着させるが，北西側壁側にはその隙間に細長い扁平な石材を詰めている。

両側壁とも，5石で基底を構成するが，奥壁側に使用されている石材は，大きめのものを用いる。また，北東側壁最前端の石材と，南東側壁中央に位置する石材は，他の基底石が横置きするのに対し立てている。また，両側壁を比べた場合，基底石と基底石の隙間は，北西壁側がよく埋められているのに対し，南東側壁側は空間があいている。二段目より上方は，北西側壁がほぼ同規模程度の石材を用いるのに対し，南東側壁は，大小さまざまな石材を用い，両側壁とも3段分の石材が残存する。

玄室と羨道とを区別するような，明確な平面形，石材の積み方，施設等は有していない。また，棺台となるような施設も検出できなかった。

石室の平面形は，長方形をなしており，北西側壁最前端の石材がやや西側に開いている。高山古墳群中もっとも規模の小さい石室である。石室床面は，南南西下がりの傾斜をもつため，排水溝等の施設は有していなかった。

閉塞は，石室最前端から2石目の基底石まで長さ約1.3mにわたり閉塞されていた。玄室側はていねいに面をそろえ，約3段が残存していたが，遺物検出面よりも浮いた形となる。追葬面としては確認できなかったが，追葬時に整地した上に置いたものと考えられる。

この閉塞石内側は，後世に火葬墓として利用されており，北西側壁中央基底石付近に閉塞石を利用した区画が認められた。区画は，約60cm四方のもので二段ほど石が積まれており，中央部に火葬骨片が比較的多く密集していた。遺物は出土していない。

遺物出土状況(第49図)　石室内から出土した遺物の総数は約30点で，調査した古墳中もっとも少ない。大半の遺物は細片化していた。これらの遺物は，奥壁南東隅を中心とするもの，玄室内全域に分散して出土したもの，閉塞石外側から出土したものとに分けられる。

玄室南東隅から出土したものは，すべて直刀であり，奥壁隅にかたづけられ，立てかけられていた。出土状況からすると5～6本の刀が想像されるが，大半が層状に剝離しており，実際の本数は不明である。

玄室内に分散するものは，奥壁寄りの中央部で刀子が出土し，土器類は大半が破片化し分散していた。いずれも追葬時の遺物である。南東側壁中央部からは，築造時の須恵器杯身・杯蓋が1セット出土した。

閉塞石外側から出土したものは，いずれも追葬時の遺物と考えられるもので，玄室内で出土したもの同様，破片化していた。これらの遺物は，玄室内出土のものと接合できた。

このように，遺物が破片化したり，少量しか出土しないことは，閉塞石内側で見られた火葬墓として石室を再利用する段階で石室内の整理が行われたためとも考えられる。

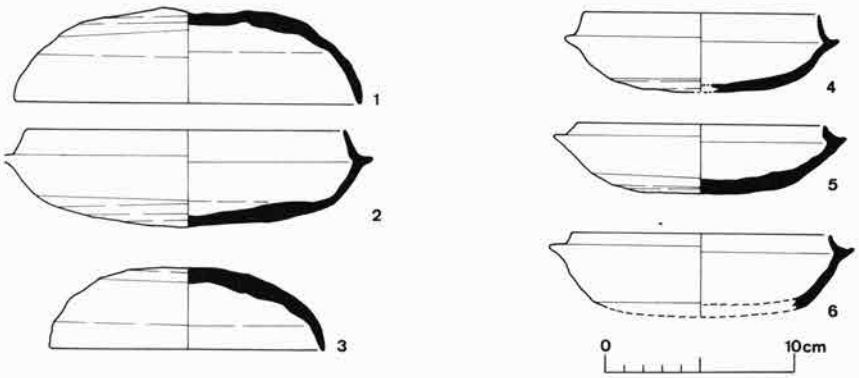
(増田孝彦)

出土遺物　7号墳より出土した遺物には，須恵器・土師器の土器類と，鉄鏃・刀子・直刀等の鉄製品があるが，土師器および鉄鏃については細片であり，図化しなかった。

a 土器(第50図，図版第31)　石室内からは6点の須恵器が出土しており，その内訳は，杯身(4点)・杯蓋(2点)である。

杯身(2・4～6)　いずれも立ち上がりをもつものである。なかでも2は，口径16.8cmと大型である。立ち上がりは内傾してやや長くのびるものであり，底部にはヘラケズリを行う。4は破片であるが，2と同じく7号墳の中では古段階に位置づけられる。

杯蓋(1・3)　1は，杯身2とセットをなすものである。同じく大型のもので，天井部にはヘラケズリを行う。天井部には同心円あて具の痕跡が残る。口径の大きさという点に



第50図　高山7号墳出土遺物実測図(1)

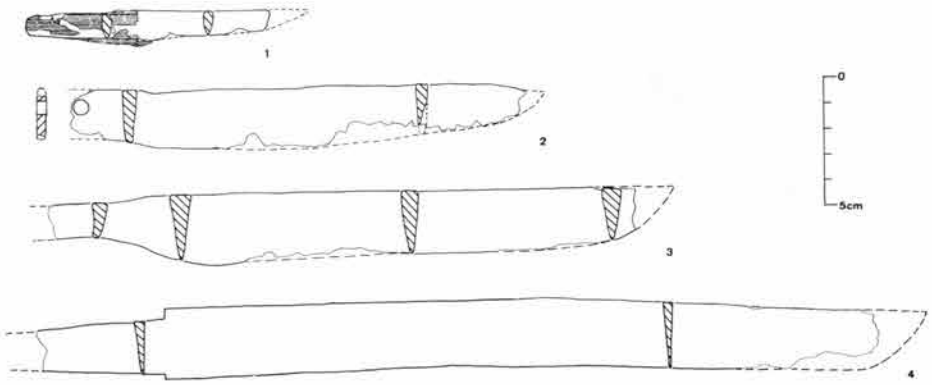
おいては，４号墳出土の杯(１・３)と近いが，調整等粗雑な仕上げであり口縁端部内面の段が消失している点等，４号墳出土の方が古い要素を残しているものと考えられる。

以上が７号墳出土土器の概略である。杯蓋１・杯身２・４は，田辺編年TK43型式，中村編年Ⅱ-4段階に併行するものと考え得る。杯身５・６は，追葬に伴うものと考えられ，TK209型式，Ⅱ-5段階に併行するものと位置づけられる。出土遺物は，きわめて少量ではあるが，以上の併行関係より７号墳は，６世紀後半頃に築造され，６世紀末ないし７世紀初頭に追葬が行われたものと考えられる。　(森　正)

b 鉄製品(第51図)　刀子と小刀が図化できたが，刀類については，層状に剝離し図化できなかったものが多数ある。

刀子(1)　切先を欠失しており，現存長は9.8cmである。刃部の断面は，中央部がややふくらむ二等辺三角形を呈し，関から先端へ3cmの部分では幅1cm，厚さ0.4cmである。刃部の幅は関の部分で最大となり1.3cmを測る。関は，両関で直角に切り込んでいる。茎は，長さ4.5cm，関寄りの部分で幅1cm，厚さ0.4cmを測る。目釘は認められない。

小刀(２・３・４)　１は，切先・刃部・茎の一部を欠失しており，現存長18.1cm。刀身の断面は二等辺三角形を呈している。刀身幅については，刃部が欠損しているため不明である。関は認められないが，関に相当する部分において，刀身と茎の境目に段差がついている。この段差のつく部分での茎幅2cm，断面は台形をなし棟側厚さ0.6cm・刃側0.3cmを測る。残存する茎先端に径0.6cmの目釘穴が認められる。実際の全長は約25cm程と推定される。奥壁南東隅より出土したものである。２は，切先・刃部・茎の一部を欠失しており，残存長23.3cmを測る。刀身の断面は，二等辺三角形を呈している。中央付近での刀身幅は，2.5cm，厚さ7mmを測り，刀身幅に対して断面がかなり厚くなっている。関は，削り関で棟側はほとんど削られないが，刃部側が大きく削られている。茎は，やや変形した台形の



第51図　高山７号墳出土遺物実測図(2)

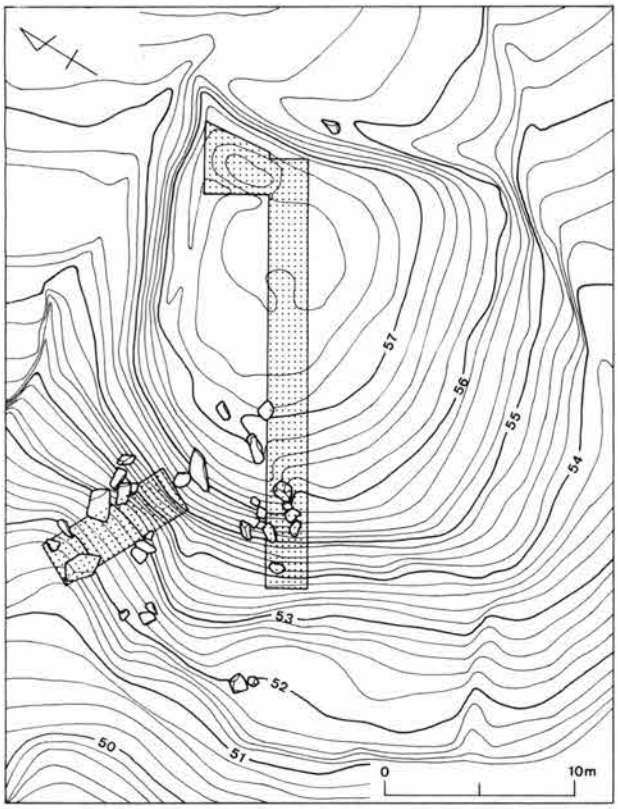
断面をもち，幅1.4cm・厚さは棟側0.6cm・刃側0.3cmを測る。復元全長は約30cm程と推定される。奥壁南東隅より出土した。3は，切先・茎の一部を欠失しており，現存長33.4cmを測る。刀身は，断面二等辺三角形を呈し，切先近くで幅2.8cm・厚さ0.4cmを測る。刀身幅に対し，断面はかなり薄造りである。関は，両関であり棟側が0.4cm，刃側が0.2cm直角に切り込まれる。茎は，5.1cm残存するが，その幅は関の部分で最大となり，茎先にかけて徐々に細くなるようである。関より1cmのところで，茎幅2.1cm，厚さ0.4cmの二等辺三角形の断面をなす。復元全長は約35cm程と推定される。

図化した刀は，いずれも復元全長が25cm・30cm・35cmと小さく小刀である。

（増田孝彦）

⑨高山8号墳（第52図）

7号墳の南西側20mに位置し，谷部に張り出した尾根先端でもある。調査前の段階では，直径20m以上・高さ3m以上のかなり大きな古墳状隆起をなしており，北西側には，尾根と区画したと思われる幅8m程の溝状のくぼみも認められた。墳頂部から西側斜面にかけては，石材が露出しており，石組み状をなすことや，石組み状の最上段には，かなり巨大な天井石状の石材が認められたことから，高さ2m以上の西側に開口する，横穴式石室の存在が予想された。また，古墳状隆起北隅には，拳大の石を約70cmほど積みあげ長径2m・短径1m程の積石状のものも認められた。古墳状隆起の頂部および周辺ともよく開墾されており，各所に畝跡が認められた。



第52図　高山8号墳地形図

調査は，古墳状隆起をなす中央部に，幅2m×長さ23mのトレンチと，西側斜面に露出する石組み状の内側に幅2.5m×長さ7.5mのトレンチ

を設定し掘削を行った。

その結果，中央部に設定したトレンチでは開墾面下が，石組み内側のトレンチでは表土直下が黄褐色粘土の地山面となっており，自然地形であることが明らかとなった。

また，積石状部分でも，石材除去後開墾面にあたり，開墾土上に積石が作られていることから，開墾中あるいは耕作中に出た小礫を集めたものと思われる。　　(増田孝彦)

⑩高山11号墳(第53図)

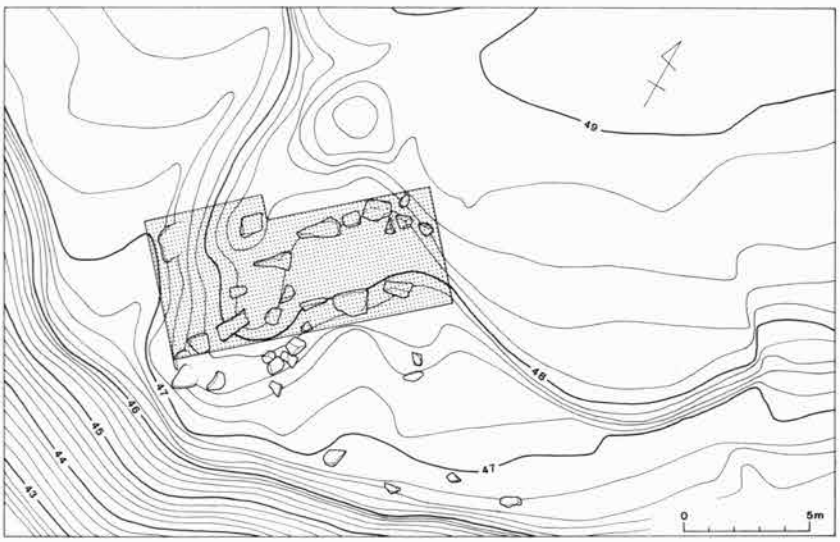
3号墳の北方160mの高山遺跡下方の谷一つ隔てた対岸の丘陵上に位置する。8号墳同様，開墾により石室が露出したような石組み状をなしていた。石組みの方向から南西に開口する横穴式石室の存在が予想された。また，石組み周囲は開墾されているのに，石組み状をなす部分だけ，6号墳で認められたように残されており，周囲の畑の中に突出したような形をしていた。また，この石組みの北西横には，8号墳で見られたものと同様の拳大の礫を積み上げた直径3.5m・高さ約80cm程の積石状のものも認められた。

調査は，石組み状を呈する石材を包み込むような形で，幅4.7m×長さ11.5mのトレンチを設定し掘削を開始した。

その結果，表土直下がすぐ地山面となっており，8号墳同様自然地形であることが明らかとなった。積石状を呈するものについても同様で，開墾土上に乗せられており，耕作中に出た礫を集めたものと思われる。　　(増田孝彦)

⑪高山12号墳

墳丘(第54図)　11号墳の北西50mの尾根先端のやや広くなったところに位置する。団地



第53図　高山11号墳地形図

造成予定地最北西端でもある。高山古墳群中では13号墳ともども，もっとも奥まったところに位置するが，両古墳下方には，日本海(丹後町砂方)に最短距離で通じる旧街道が通じており，立地的には要地にある。

墳丘は，北側が竹林となっており，西・南側は開墾により墳丘が削られ，段々畑が作られているため，基底部が削られ部分的にしか残存していなかった。墳頂部は，削平され平坦化しており，奥壁の一部および東側壁の一部の石材が露出していた。南側においては，風化の著しい天井石１石も認められた。

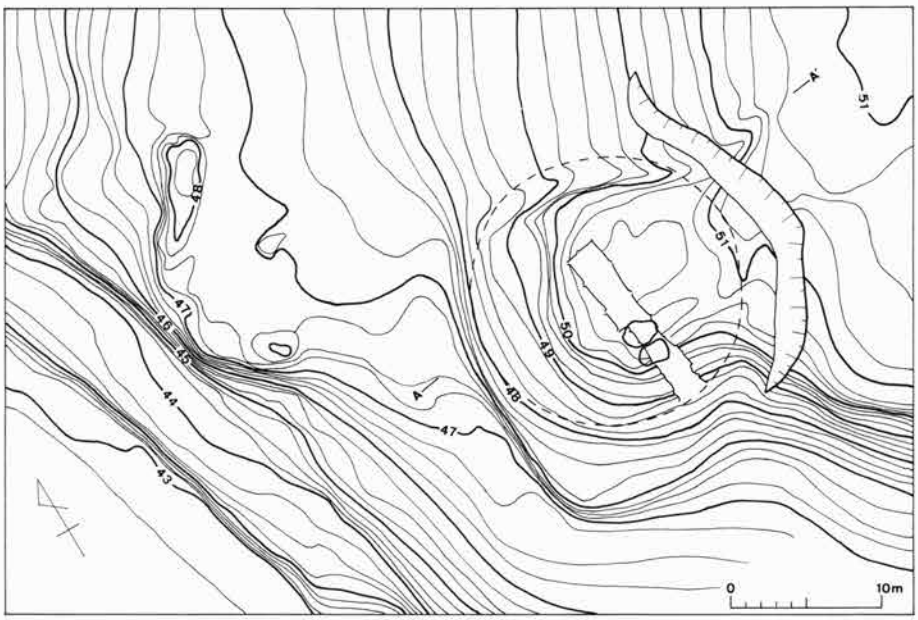
墳丘東側には，尾根と区画する幅約6m・深さ1.6mの円形を描く溝が設けられている。

尾根先端に位置することや，周辺が段々畑として開墾されていることから，墳丘は実際の規模よりもかなり大きく見える。部分的に残る墳丘基底部および溝の円弧からすると，12号墳は直径18m，西側からの残存高約2.5mとなり，高山古墳群中最大規模を有する。

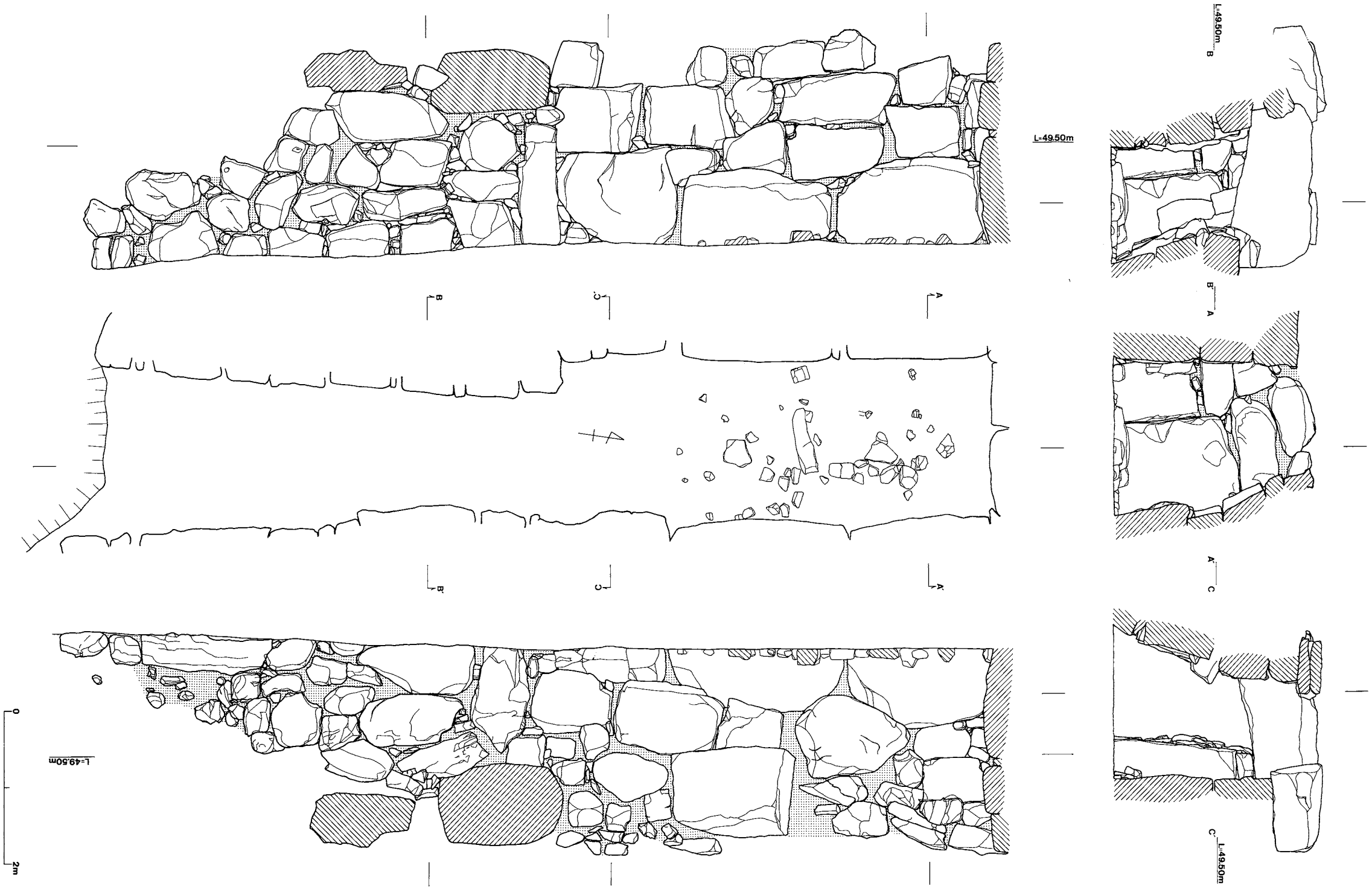
墳丘の盛土は，石室完成後に盛土を施しており，３号墳と同じ造り方をなす。

なお，削平された北側や，溝中からは須恵器甕・杯身片が多数出土しており，何らかの祭祀が墳丘上で行われていた可能性がある。

埋葬施設(第55～57図)　本古墳の埋葬施設は，奥壁から羨道に向かって右側に袖をもつ片袖式横穴式石室である。使用されている石材は，付近一帯で採取できる安山岩・凝灰岩の転石を用いるが，一部安山岩には割石，凝灰岩には鑿による加工がなされたものが使用



第54図　　高山12・13号墳地形図（右が12号墳）



第55図　高 山 12 号 墳 石 室 実 測 図

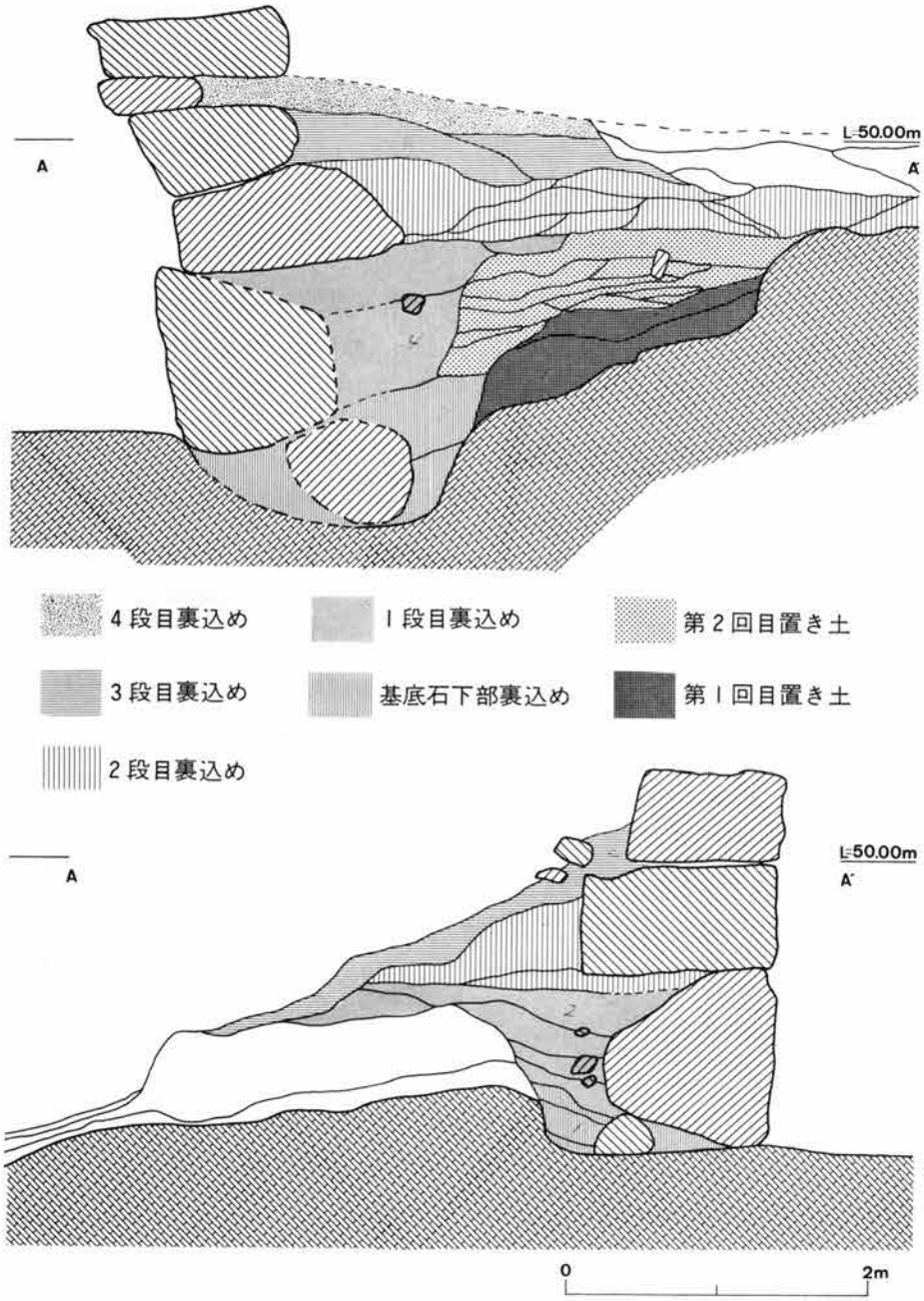
されている。石室羨道部には天井石が2石架構されていたが，玄室天井石は過去に庭石としてすべて取り去られており，石室内部には，完全に土砂が堆積していた。

また，石室全体が異常に西側に傾いており，上方ほどその傾きは大きく，羨道部では逆「ハ」字形に開き，玄室内では東側壁が中央付近までズレ込んでいた。このズレのもっとも激しい部分では，東西両側壁最上段の幅が90cmしか離れていなかった。このため，玄室が倒壊・羨道部天井石が落下する危険性が生じてきたため，羨道部外側の天井石1石と，玄室内奥壁寄りの側壁の一部を残し，玄門部までの東側壁は基底石を残しすべて除去した。本概要報告に載せた東側壁および天井石の図は，除去前の内傾した状態のまま掲載した。

石室はほぼ南に開口し，玄室の主軸は磁北によればN10°Wをさす。石室の全長12.15m・玄室長5.7m，玄室奥壁幅2.1m，袖部での幅2.25m，羨道長6.45m，羨道幅は玄門部で1.7m，最前端で2.22mを測る。

12号墳は保存されることが決定したため，墳丘の断ち割りは両側壁側のみ実施したものであり，全体については不明な点もある。両側壁の断面から見た場合，石室を構築するにあたっては，尾根高位側は地山を削り整地し，低位側は旧表土面に盛土を施した後，尾根に直交する「コ」字型の墓坑を掘るが，他の古墳でみられたような，墓坑掘形面をほとんど同じ高さに整地してから墓坑を穿つことをしておらず，整地面が約50cm，尾根高位側の方が高い。西側墓坑掘形は，ゆるい傾斜で「L」字状に掘り込まれ，基底石を安定させるため比較的小さな石材を置き一旦基底石の形状に土を充塡し，たたきしめた後，基底石を置き，順に上段まで積み上げていく。東側壁側は，西側壁側と異なり，二段に広く掘り込まれる墓坑をもち，基底石設置部分はさらに深く掘り込まれているが，通常の墓坑と異なり，地山を掘り込み墓坑を穿ったあと，尾根低位側に傾斜するように第1回目置き土をし，さらにその第1回目置き土を切り込み，墓坑を穿ち，底面に大型の石材を置き，基底石の形状に合わせ，土を充塡する。さらに，第1回目置き土の上にさらに第2回目置き土を行い，それを切り込み基底石を置く。次にまた，置き土・墓坑を掘り2段目石材を積み上げる。3段目より上方は，西側壁と同様に積み上げる。このように置き土と置き土を切り込み石材を入れる墓坑を掘ることをくり返したのは，置き土が西側壁築造のための石材搬入路として使われた可能性がある。そのために一段積み上げることに置き土が切られたと考えられる。裏込めの状況及び置き土も同様の堆積をなしており，黄褐色粘土(地山)と黒褐色土が薄く交互に入る縞状堆積で薄くつき固められている。

奥壁は，扁平な長方形の大型の石材と中型の石材2石を立てて置き基底とし，二段目からはやや小型で扁平な長方形の石材2石を横置きし，全体で3段積まれ奥壁が構成されて



第56図　高山12号墳石室断面図

いる。使用されている石材は基底石の東側の大型の石材が凝灰岩であり，表面には鑿による扁平に削られた痕跡が残る。他の石材はすべて安山岩である。

玄室両側壁とも，大型の扁平な長方形の石材3石を横置きし基底を構成する。基底石に

使用されている石材は，両側壁とも奥壁側2石は凝灰岩である。この凝灰岩は，鑿により表面を扁平に削った痕跡がみられる。玄門側の1石は両側壁とも安山岩を使用するが，東側壁側の基底石は玄室内に内傾しているため，図面上では小さく見えるが，実際は凝灰岩と同規模程度の石材が用いられている。二段目より最上段までは，西側壁の場合中型の扁平な長方形の石材を横長に置き，水平に4段ほど積み上げる。この中型の石材の中には，割石と思われる扁平な面をもつ石材2石も含まれている。最上段は，過去の採石により，石材が存在しない部分もあり凹凸が認められる。東側壁は，奥壁側基底石を除く2石がすべて内傾しているため，それにより側壁全体が，玄室内にズレ込んで来ており，石材が正位置にはないが，西側壁同様2段目は中型の扁平な石材を横長に置くが，奥壁側のみやや小ぶりの石を用いて最上段まで積み上げている。3段目以上は，全体的に小ぶりの安山岩・凝灰岩の石材を用いるが，玄室中央部分に用いられた石材1石のみ大型である。なお，現存する西側壁袖部最上段の石材からすると，羨道部原位置を保つ天井石上面よりも，約20cm高くなっており，他の現存する側壁最上段の石材と同じ高さになることから，この石材の上に天井石が架構されていたものと考えられる。従って，羨道部の天井部よりも玄室側天井部の方が，約1m高くなりかなり広い玄室空間をもっていたものと推定される。羨道部に架構されていた天井石の規模からすると玄室には4石の天井石が架構されていたと考えられる。

玄室の平面形は，基底石が内傾しているためややいびつであるが，本来は整った長方形であったと思われる。このズレた分を原位置に戻して床面積を計算すると約12.37m^{2}となる。

玄室の床面には，棺台として使用されていたと思われる安山岩や凝灰岩の小型の石材が散乱していたが，棺台を特定するには至らなかった。ただ，玄室中央より奥壁寄りで，幅約20cm×長さ約90cmの長方形の凝灰岩の石材が玄室に直交して置かれており，それよりも奥壁側には石材を並べたような状態を示しているようにも見えることから，木棺安置部分のみ礫を置いていたとも考えられる。玄室床面は，ほぼ水平な面を保つが，排水溝等は認められなかった。

羨道部の平面形は，石室主軸線に対して両側壁とも開口部に向かって「ハ」字型に広がる平面形をなす。

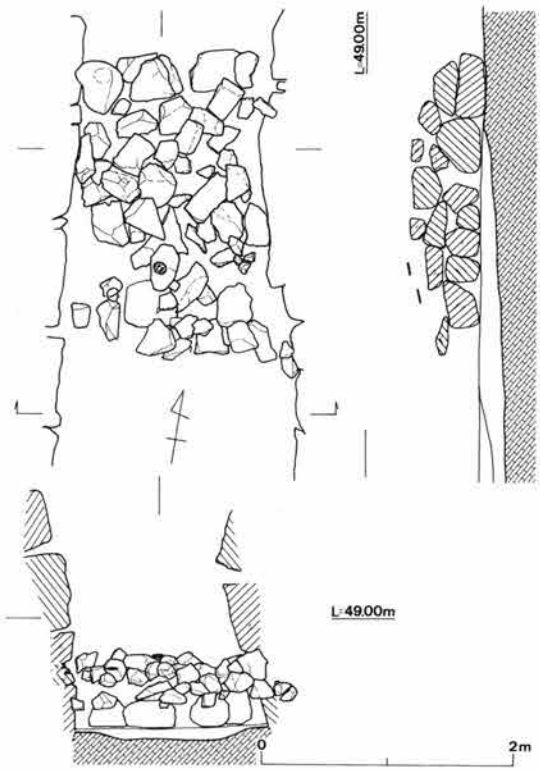
羨道東側壁は，中・小型の石材8石で基底を構成する。玄門部は，袖石と同じように，幅約65cm・床面からの高さ約1.4mの石材を立てているが，他の基底石は横長に据えている。また，玄室基底石が玄門部にまで及んでいるため，この玄門部に立てた石材は，袖石と対にならず，開口部側に約60cm程ずれている。二段目より上方は，中・小型の石材を積

み上げる。石材と石材の隙間は，小石は詰められておらず土が充塡されただけとなっている。

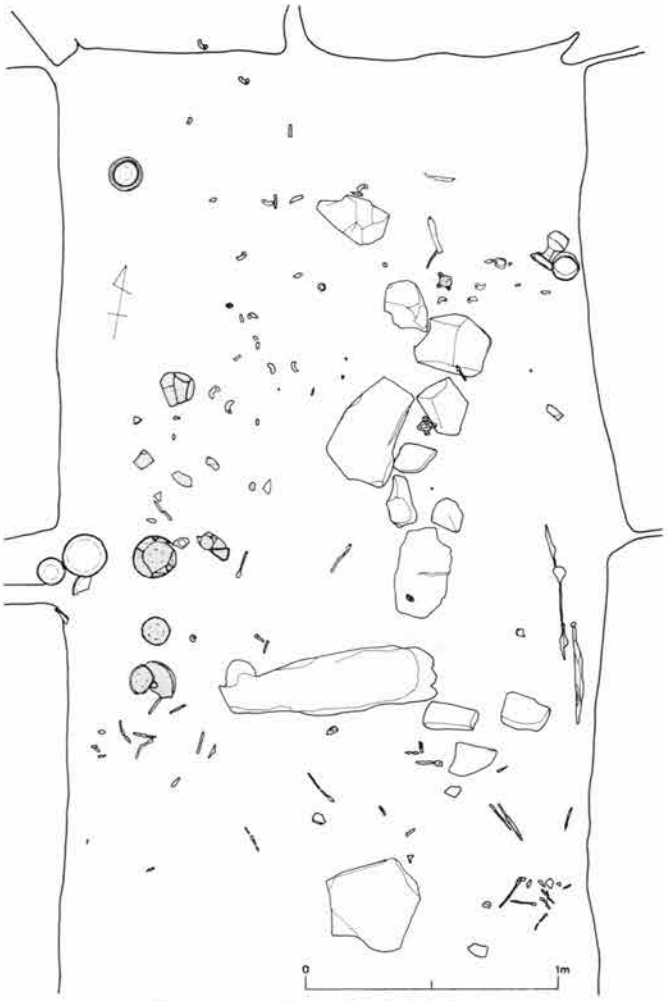
羨道西側壁は，東側壁よりもやや短い。袖石は，幅約60cm，床面からの高さ約1.6mを測る方柱状の石材を立てている。基底は7石で構成され，天井石下まではほぼ同じ中型の石材を積み上げるが，東側壁に比して積み方がていねいで横目地がきれいに通る。なお，天井石下には，やや大きめの石材が用いられている。

羨道部最前端には，外側と約15cm程の段差があり，掘形等も存在しないことから，築造時から現在の規模であったと思われる。また，羨道両側壁とも，開口部より約2.4m程石室寄りでは，二段目の石材からやや積み方に変化があり，羨道端側にあたる天井石に向かって，約60°程の角度をもって積み上げられている。このことから考えると，天井石は築造時から現存していた2石しか架構されていなかったとも推定される。羨道部は，玄門付近よりやや斜め傾斜で石室前面に向かってのびているため，排水溝等の施設は設けられていない。

閉塞は，玄門部より外側に向かって1～3.2mの間に3段程度残存する閉塞石が認められた。玄室側にあたる石材は，面がそろえられ，石材に隙間を持たせないように，やや大きめの石材で積み上げるが，玄門部より2m外側の石材からは，大小さまざまな石材が散乱した状態である。この大きめの石材は，床面に据えられるものと，羨道中央部の浅いくぼみを整地した後，置かれるものとがある。散乱する石材中からは，多量の遺物が出土するが，追葬時に玄室内をかたづけた際の遺物が混入したものか，その上に新たに広範囲にわたる閉塞を作ったものか，さらに後の追葬時に壊されたものか不明である。また，平面的にみた場合，玄門より2.5mの位置までは，石材のまとまりが，認められることや，環頭大刀柄頭2口が，



第57図　高山12号墳閉塞実測図



第58図　高山12号墳遺物出土状況(1)

散乱する石材上に乗っていることからすれば，初葬時の閉塞を壊し，それと同時に遺物が混入し，その上に新たに閉塞を行い，さらに追葬される際に閉塞が壊され，玄室内の整理が行われ，環頭柄頭もその際にかたづけられたと思われる。

遺物出土状況（第58・59図）　石室内から出土した遺物の総数は約260点以上にのぼる。遺物の残存状況は，鉄製品を除き，良好な遺存状況であったが細片化した土器類も多かった。

遺物は，玄室中央付近よりやや奥壁よりの，棺台として使用されていたと思われる石材周辺と，袖石・玄門部から閉塞石までの間，玄室中央西側壁寄り，閉塞石中，閉塞石から開口部までの間，石室前面の5群から出土している。

棺台として使われたと思われる石材周辺では，西側壁の奥壁より，1・2石目の基底石の間付近より，最終追葬段階の遺物と思われる土師器類が一括して出土したが，一部二次的な移動を受け散乱している。石室に直交する凝灰岩の長方形の石材周辺からは，鉄鏃・釘等の鉄器類が散乱していた。この長方形の石材より奥壁に向かって平行にのびる石材周辺からは，多量の勾玉・管玉・切子玉・ガラス・金環の装身具類が出土したが，広範囲に分散しており，まとまりは認められなかった。また，この石材の隙間からは，鉄地金銅張辻金具や革金具の馬具類が少量出土した。東側壁側においては，須恵器甕・杯身が認められただけで長方形の石材付近からは，不明鉄製品，小刀が出土した。西壁奥壁付近では須恵

第59図　高山12号墳遺物出土状況(2)

器杯身が認められた。

玄室中央西壁寄りでは，直刀と少量の鉄鏃類が認められただけで，玄室中央・東壁寄りとも遺物はなく，空白となっている。

袖石・玄門部から閉塞石までの遺物は，袖石付近において，刀数本，刀子などの武器類が立てかけられたり，横置きされており，それらに混じって，鞍・鞍座金具，轡などの馬具類や鉄鏃・釘も少量出土した。土器類は甕・瑳・台付盌・平瓶・長頸壺・少量の杯身・杯蓋が出土した。

玄門から閉塞石までの間で多量の遺物が出土した。土器類については，大半が両側壁側に寄せられており，東側壁側は完形品で占められ，西側壁側のものは，破片化していた。東側壁側のものは，杯身・杯蓋がもっとも多く，高杯・台付盌・特殊扁壺などの器種も少量含まれる。それらは，いずれも重ねられたり，積み上げられたりしており，二次的な移動を受けたもので，玄室内が整理されたときに集められたものである。西側壁側の遺物は，細片化していたが，横瓶２個体・甕２個体の破片があり，それらは玄室前面・羨道部より出土したものと接合でき，東側壁側のもの同様，二次的な移動を受けた際に壊れたものである。その他，杯身・杯蓋類も出土したが，前記した横瓶・甕の出土した高さよりも低いところから出土しており，これらは完形品である。また，東側壁の土器集中部分より，２か所に分かれて，閉塞石上面より出土した金銅装双龍環頭大刀柄

頭の龍文がほぼ1頭分出土したが，集中する土器群の高さよりやや高いところと低いところの2か所よりみつかった。両側壁に挟まれた玄門中央部からは，1・2点の土器類(杯身)を除き，多量の鉄製品が出土した。刀装具・刀子・鉄鏃の武器類・革金具・鉸具・鐙・轡等の馬具類，勾玉・切子玉・ガラス玉・金環の装身具に混じり出土している。いずれも細片化したものが多く，両側壁同様，二次的な移動を受けたものである。

閉塞石中からは，閉塞石の間・閉塞中・閉塞石除去後の床面近くからも出土した。いずれも鉄製品のみの出土であり，鐙・鞍・革金具・鉸具等の馬具類，鉄鏃・刀装具等が出土したが，鉄鏃類については破片化していた。

閉塞石から開口部までの間の遺物は，完形品はなく，須恵器杯身・杯蓋の細片化したものが大半であった。

石室前面より出土した遺物は，須恵器・甕・横瓶等大型品が多く，いずれも石室前面に，広範囲にわたって散乱していた。これらの遺物に混じって，須恵器甕・杯身・杯蓋等も少量であるが出土している。また，勾玉1点もこれらの中から出土している。いずれも，石室内よりかき出されたような状態を示しており，石室前面に置かれているような状態を示すものはなかった。 (増田孝彦)

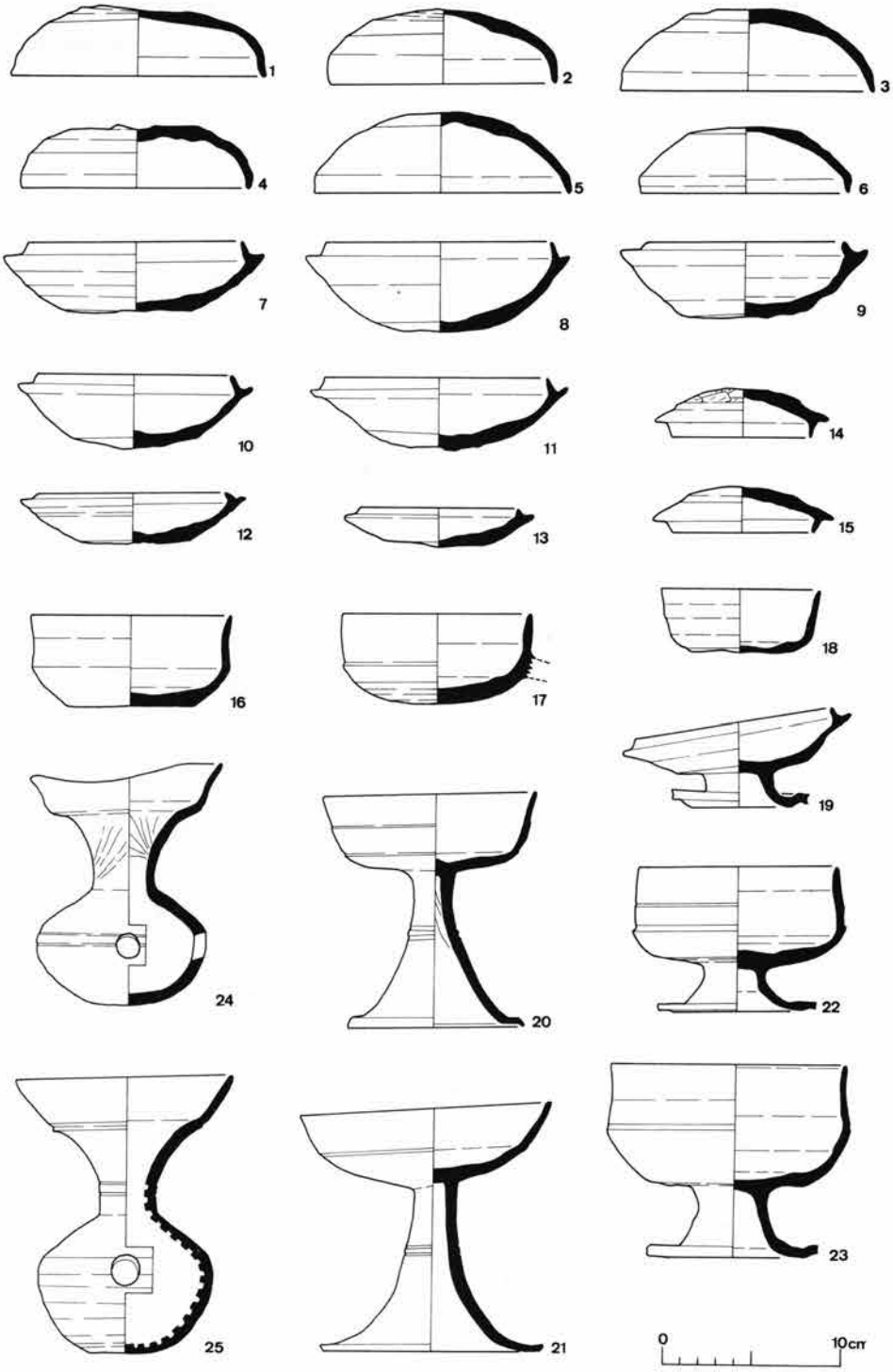
出土遺物 12号墳より出土した遺物には，須恵器・土師器の土器類，金銅装双龍環頭大刀柄頭・直刀・刀子・鉄鏃等の武器類，鐙・鞍・轡・鉸具・革金具等の馬具類，金環・勾玉・切子玉等の装身具がある。

a 土器(第60～62図) 石室内及び前庭部から出土した土器は，完形または完形に近く復元できたものが101点ある。その他復元できない破片も含めると130点近い数になる。その内訳は，須恵器では杯身(24点)，杯蓋(28点)，高杯(8点)，椀(8点)，椀蓋(2点)・台付椀(2点)，甕(8点)，短頸壺(5点)，長頸壺(1点)，特殊扁壺(1点)，甕(5点)，横瓶(3点)である。土師器では，杯(4点)，台付杯(2点)，同蓋(3点)である。

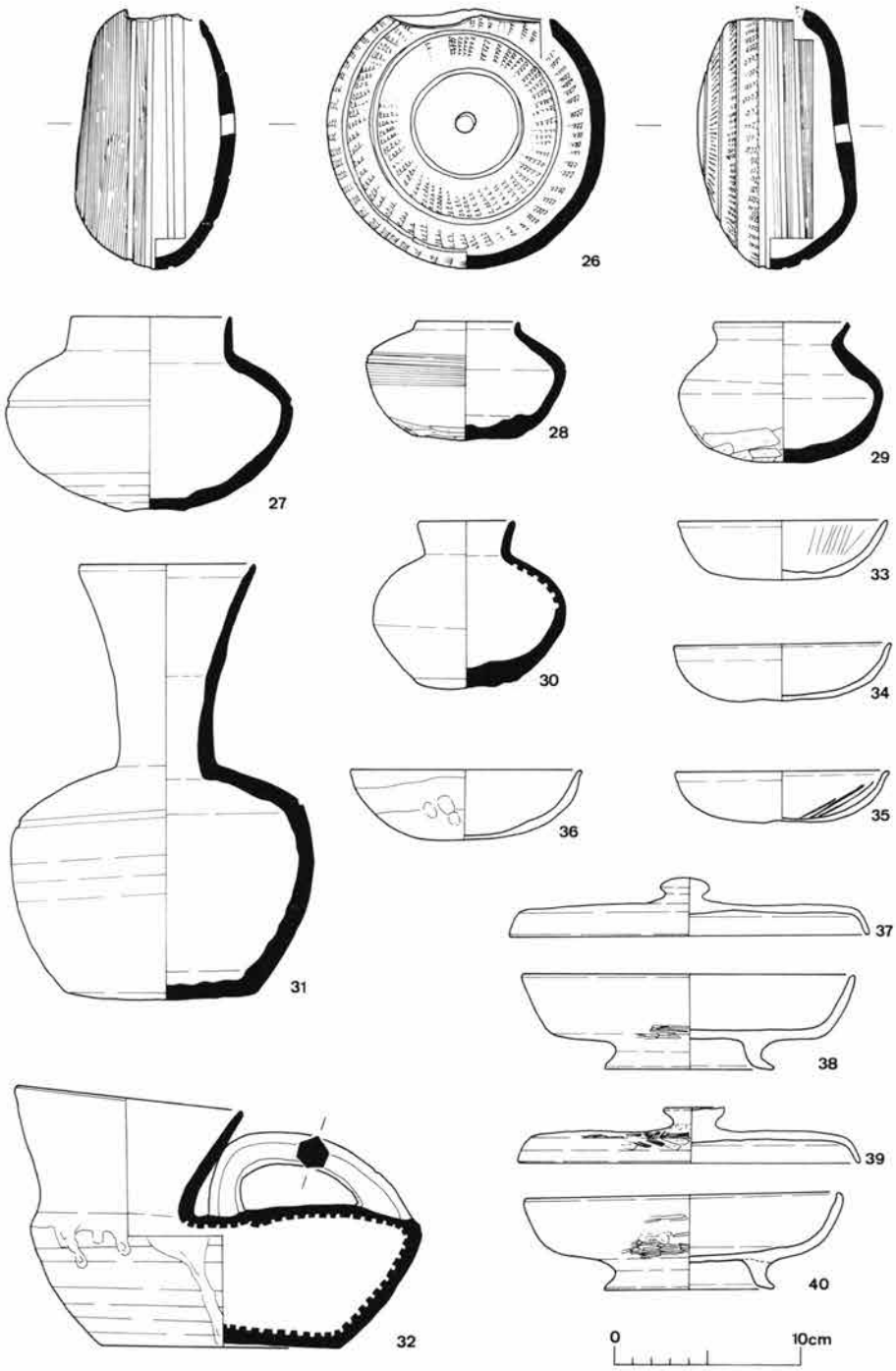
須　恵　器

杯身(7～13) 杯身は，形態により2種類に分類できる。Ⅰ類は，口縁部に立ち上がりをもつもの(7～13)である。Ⅱ類は，平らな底部に，上方へ直線的にのびる口縁部をもつもの(18)で，1点のみの出土である。Ⅰ類には，口径12cm程度のものから，9cm程度に矮小化したものまである。13のように非常に矮小化したものもあり，蓋とすべきものも含まれている可能性もあるが，使用状況も不明であり，組み合う身もないことから現段階では身としておく。底部はいずれもヘラ切り未調整である。

杯蓋(1～6) いずれも立ち上がりをもつ杯身に組み合うものである。これらの中では，玄門付近の一群中に含まれる1・2は，粗雑ながらも天井部にヘラケズリを行っており，若



第60図　高山12号墳出土遺物実測図(1)



第61図　高山12号墳出土遺物実測図(2)

干古い要素が認められる。その他は，いずれもヘラ切り未調整であり，6のように矮小化したものも含まれている。

高杯(19～21)　無蓋高杯と有蓋高杯がある。無蓋高杯では，杯部の形態によって2種に細分できる。杯底部は平らで，外上方へ直線的にのびる口縁部をもつもの(20)と，丸みをおびる杯底部に，内湾気味にのびる口縁部をもつもの(21)である。有蓋高杯は，1点のみ出土しており，脚部は焼けひずんでいるが，低く開くものである。杯部口縁は，短く内傾する立ち上がりをもつ。

椀(16・17)　口径に比べ深いものである。17は，体部中位に把手をもつものである。底部にはヘラケズリを行っており，他のものに比べていねいなつくりである。

椀蓋(14・15)　天井部は丸みをおびており，口縁部内面には下方へやや長くのびるかえりをもつ。14は天井部に手持ちケズリを行う。

台付椀(22・23)　法量の違う2点が出土している。体部には22で2条，23では1条の沈線をめぐらせる。脚部はいずれも低く開き，端部に面をもつものである。

甕(24・25)　扁球形の体部に，細い頸からラッパ状に開く口頸部をもつ。25は体部下半にヘラ削りを行っている。

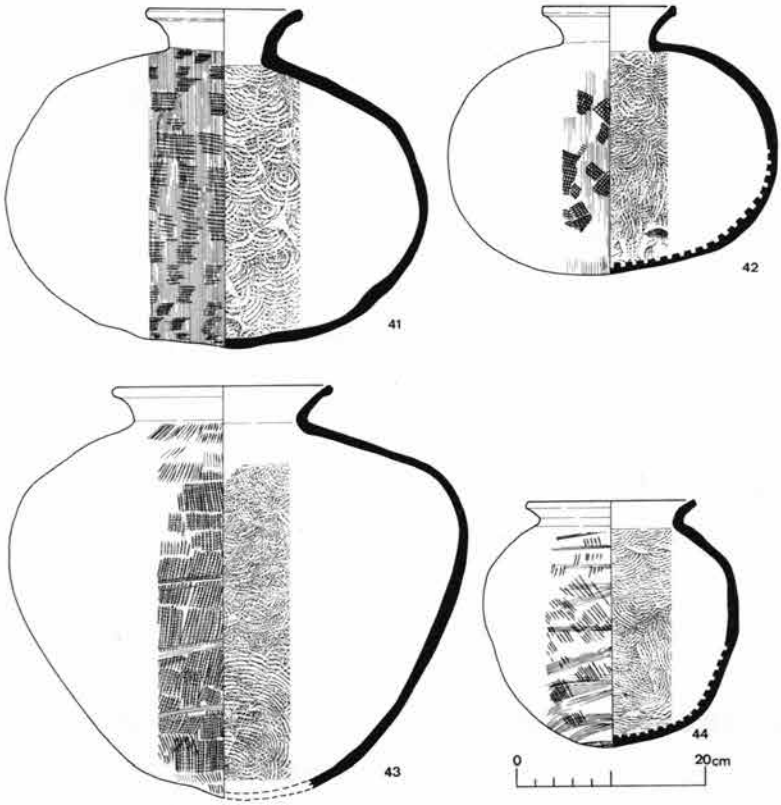
短頸壺(27～30)　27が口径85cmを測る以外は，すべて小型品である。27は肩部に沈線をめぐらせており，直立する口頸部をもつ。30は，他にくらべやや長めにのびる口頸部をもつものである。

長頸壺(31)　玄室内袖石付近から出土したものである。底部は平らであるが，体部は全体に丸みをおびており，肩部には沈線をめぐらせる。口頸部は，外反気味にのびるものである。

特殊扁壺(26)　提瓶の体部のような形状を呈しており，口縁部はヘラ状の工具によって切り取っているため面が残る。前面は，口縁部をのぞくとほぼ正円形を呈しており，4条の沈線によって4区分し，その間を中心部以外に，櫛状工具による刺突文を連続させて，文様をつくる。背面はカキ目を施す。前面・背面ともに中央部に穿孔を行う。

甕(43・44)　石室内から出土したものは追葬の際に持ち込まれたと思われる44のみであり，残りはすべて前庭部において破片となっていた。43は大型品であり器高43.6cm・体部最大径48.4cmを測る。外面には格子状タタキの痕跡が残る。44は，外面に目の粗い平行タタキの痕跡を残す。

横瓶(41・42)　41は大型のものであり，体部両端はややとがった感じとなっている。体部外面には，平行タタキの後カキ目を施す。42の体部はよく丸みをおびており，外面には，格子状タタキの後カキ目を施す。



第62図　高山12号墳出土遺物実測図(3)

土　師　器

杯(33～36)　33～35は，やや平らな底部に内湾気味にのびる口縁部をもつ。34は，器表風化が著しく不明であるが，内面には放射状暗文を施す。36は，底部に丸みをおびており外面には，接合痕，指頭圧痕が残る。焼成はややあまく，淡橙色を呈する。

台付杯(38・40)　杯底部は平らであり，外上方へ直線にのびる口縁部をもつ。杯底部には，外反して開く短い脚部を接合する。杯部外面はヘラミガキを行っており，内面はていねいなナデにより仕上げている。胎土は精良であり明橙色を呈する。

同蓋(37・39)　台付杯の蓋である。天井部は平らであり，中央につまみを付す。つまみの形状は，扁平な擬宝珠形を呈するもの(37)と中央の凹んだもの(39)がある。外面はヘラケズリを行っている。

以上が，12号墳出土土器の概略である。本古墳出土土器の中では，玄門部出土の杯蓋1や，羨道部出土の杯蓋2が天井部にヘラ削りを行うなど，若干古い要素を残すものもあるが，その他3・4・5・7・8・9・10・11を含め，田辺編年TK209型式，中村編年Ⅱ-5段階よ

りさかのぼる資料はない。杯蓋6，杯身12・13・18など矮小化した一群は田辺編年TK217型，中村編年Ⅱ-6段階に併行するものと考えられる。他の器形について杯との併行関係は出土状況が悪いこともあり，明確にはし得ないが，おおむねは，杯類の示す時期におさまるものである。ただ，須恵器長頸壺(31)，甕(44)，土師器台付杯のセット(37～40)については，上記遺物群より時期は下るものである。須恵器については特定するのは難しいが，TK48型式，Ⅲ-3段階に併行するものと考えておく。土師器については，前記須恵器に併行するか，あるいはさらに下る時期のものと思われる。以上の併行関係より，土器からみた当古墳の年代観を示すと，6世紀末ないし7世紀初頭に築造され，7世紀前半に数次の追葬を行い，さらに7世紀末ないし8世紀に入ってから最終追葬を行ったものと考えられる。　(森　正)

b 鉄製品(第65～71図)

本古墳より出土した鉄製品類は，武器類・馬具類・不明鉄製品・釘がある。

武器類は，金銅装双龍環頭大刀柄頭(2点)，金銅装喰出鐔(1点)，円頭大刀柄頭(1点)，直刀(約10点)，鞘尻金具(1点)，刀装具(4点)，刀子(6点)，鉄鏃(102点)が副葬されていた。

金銅装双龍環頭大刀柄頭(第63図，巻頭口絵)　石室開口部より，約2.5m玄室寄りの羨道部床面より50cm上方の散乱した閉塞石上より，環頭柄頭2点がほぼ同じ高さで0.4m離れて出土した。1点は双龍環頭(A)であったが，残る1点は環体(B)のみであった。B環頭の龍文については，閉塞石内側の玄門部付近3か所からその部分が出土し，ほぼ一頭分が復元できた。環頭のみの出土であることや，龍文が脱落し細片化していることなどから，追葬時に石室内が整理された際に分散したものと思われる。大刀については，玄室内，羨道部，石室前面の精査を行ったが存在しなかった。

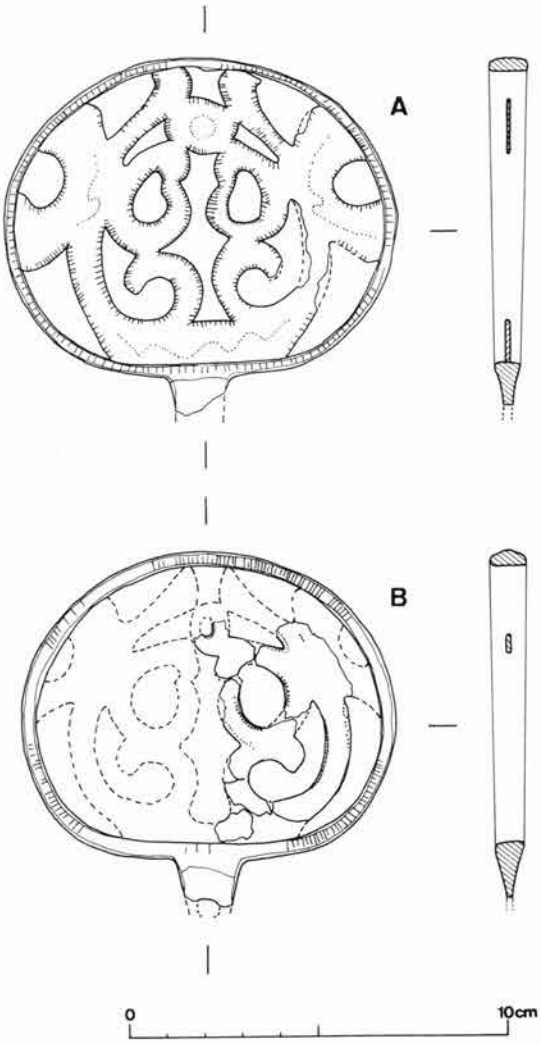
環頭柄頭の計測値は付表6に示したとおりである。

A・B環頭とも，環体はやや下半が膨む楕円形に作り，環体側面には細かい刻み目を施す。環体の厚さは，B環頭の方がやや厚くなる。

龍文は，扁平な厚さ0.12cmの銅板に透彫りし，鍍金を施した1対の龍が向かい合い玉を噛む形状を表すが，形式的にはかなり退化したものである。A環頭では龍周囲に向かい刻み目が施され，玉内部・龍体部・基部には列点が認められる。B環頭では龍周囲には刻み目を施さず，代って列点が認められるが，体部・基部にはA環頭のように列点はみられない。玉はA環頭が列点で表現されていたのに対し，B環頭では透文となっている。鍍金の状態は，環体・龍体部とも，A環頭が良好で，B環頭では，環体はほとんど欠落しているが，龍体部は残存状況にくらべ残りはよいと言える。A・B環頭とも，環体・龍体は別

作りで，枘により結合されており，環体内側にはめ込む。茎は両環頭とも先端を欠くが，B環頭では，目釘穴の一部が認められる。この目釘穴のところでの厚さは0.2cmしかなく，薄くつくられている。また，茎は，筒金具に隠れるため，鍍金がほとんど施されていない。

型式年代は，久美浜町「湯舟坂2号墳」の環頭大刀編年(新納泉氏[注13])では，Ⅳ式(代表例：千葉県木更津市金鈴塚古墳)とされている。龍文が退化し，双龍環頭の編年ではもっとも新しい時期に属するもので，7世紀前半頃に比定されている。なお，出土遺物からすれば7世紀初頭と考えられる。



第63図　高山12号墳出土遺物実測図(4)

双龍・双鳳環頭大刀については，日本国内で60例近くが出土しているが，このうち京都府下出土の双龍環頭は，久美浜町湯舟坂2号墳(4龍)と，夜久野町今西中出土の2例がある。また，本古墳のように，同一古墳から複数の環頭大刀が出土した例としては，千葉県木更津市金鈴塚古墳[注14]，静岡県山ノ崎古墳[注15]の2例が知られている。

金銅装喰出鐔(第64図)　閉塞石中より出土したもので，環頭大刀の装具の一つであったと思われるもので，金銅製で喰出鐔とよばれるもので，長径5.2cm・短径3.7cmの倒卵型をなし，厚さ0.2cmの銅板である。鎺等は検出できなかった。

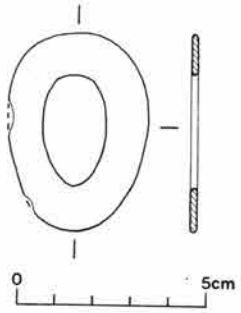
直刀(第65図，図版第35)　図化できたものは7点であるが，全体的に残存状況が悪く，大半の刀は層状に剝離しており，原形をとどめていない。わずかに残存していた切先からすると10点は確実であるが，実数については不明である。また，刀は大

・中・小の３種類が副葬されていたようである。

１は，現存長86cmで茎先を一部欠く。鐔から先に出る部分は75cmである。刀身長は鎺・鐔が錆着しているため不明であるが，約73.5cm程と考えられる。刀身断面は二等辺三角形を呈し，切先近くでの幅2.6cm・厚さ0.5cm，中央部で幅3cm・厚さ0.6cm，関近くで幅3.2cm・厚さ0.8cmを測る。刃部と切先の境目は角がつかず丸くなっている。関は棟と刃部の両側につくと思われるが，どのような形状であるかは不明である。茎が棟側に寄っているため，関は刃部側の方が大きく作られていると思われる。関の部分には，幅1.6cm・厚さ0.15cmの鉄板を断面倒卵形の筒状に曲げた鎺につつまれる。その一端は鐔と接している。鐔は，長径7.2cm・短径5.9cm・厚さ0.4cmの板状を呈する。茎は，刀身にくらべてやや細く，茎中央付近での幅1.5cm・厚さ0.5cmを測り，目釘が残る。玄室中央付近の西側壁より出土したものである。

付表６　双龍環頭大刀柄頭計測値

	A環頭	B環頭
縦	8.7cm	8.0cm
横	10.4cm	10cm
幅	0.9cm	0.9cm
厚	0.3cm	0.5cm
茎　幅	1.6cm	1.9cm
茎現存長	1.0cm	1.2cm
重　量	43g	54g



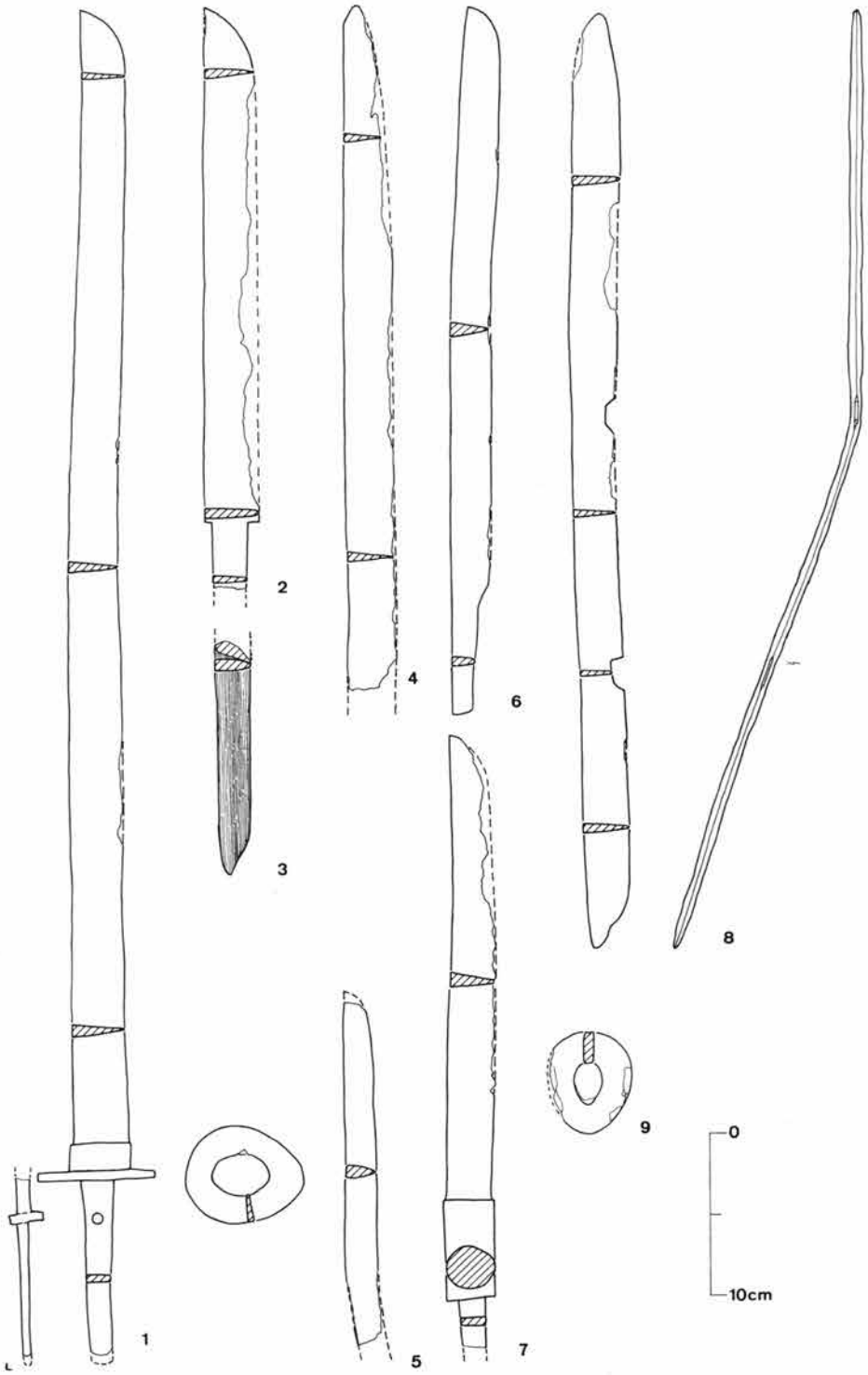
第64図　高山12号墳出土遺物実測図(5)

２は，刃部，茎の一部を欠失する。現存長34.8cm。刀身断面は二等辺三角形を呈し，切先近くで幅2.9cm・厚さ0.6cm，関近くで幅3.3cm・厚さ0.6cmを測る。切先と刃部の境目は角がつかず丸くなっている。関は，両関で棟側が0.5cm，刃部側が0.7cmを直角に切り込む。関より切先までの刀身長は約31cmである。茎は，直線的に茎先に向かってのびるようであるが，現存する先端付近での幅2cm，台形状の断面をなし棟側厚さ0.5cm，刃側0.3cmを測る。袖石部分に立てかけられた状態で出土したものである。

３は，茎のみの破片であるが，茎先端が尖り，全面に木質が付着している。目釘等は木質により不明である。関側の断面を見ると，台形状をなしており，棟側0.7cm・刃側0.3cmの厚さを測る。玄門部中央の鉄器集中部分より出土した。

４は，刀身のみの破片であり，現存長41cmを測る。刀身断面は二等辺三角形を呈し，厚さ0.6cmを測る。切先が刃側に寄るため棟に段がついているが，この部分が欠損しているのかどうかは不明である。袖部より出土した。

５は，刀身のみの破片であり，現存長21cmを測る。刀身中央部での断面は，中央部がややふくらむ二等辺三角形を呈し，厚さ0.8cmを測る。欠損する関側において途中より湾曲



第65図　高山12号墳出土遺物実測図(6)

する。

6は，刃部の一部を欠損する。全長41cm，刀身断面は二等辺三角形を呈し，刀身中央部での幅2.5cm・厚さ0.8cmを測る。中央部分でやや湾曲している。関は，棟側では認められず，刀身から茎先にかけ徐々に細くなるが，刃側は斜めに切り込まれている。茎中央部での幅1.4cm，断面は台形状を呈し，棟側0.6cm，刃側0.3cmを測る。袖部より出土した。

7は，刃部で，茎の一部を欠失するもので，現存長37cmを測る。刀身長は，柄縁金具があるため不明であるが，約28cm程と推定される。刀身断面は二等辺三角形を呈し，刀身中央部での幅約2.8cm・厚さ0.9cmを測る。関の形状は柄縁金具により不明である。柄縁金具は刃部側がやや尖る長径2.9cm・短径2.7cmのほぼ円形を呈し，関部分まで覆われているようである。銹着により，使用された鉄板等の厚さは不明である。茎は，この柄縁金具より外へ約3cm程突出しているが，突出した中央付近での幅1.5cm，断面はほぼ長方形を呈し，厚さ0.5cmを測る。

8は，不明鉄製品である。「く」字状に曲がる全長58cmのものである。刀身を2本合わせたような形状をなし，両端に切先がつく。刃側の「く」字状に屈曲する部分には，幅2cm・深さ0.6cmにわたり「⊔」字形に刃部が切り込まれている。この屈曲した部分より下方14cmのところでも，屈曲部と同じような切り込みが1か所認められる。両切り込み中間部分や切先側では，断面は二等辺三角形を呈し，幅2.8～3cm・厚さ0.6cmを測る。「⊔」字状に切り込まれた部分は，断面台形状を呈し，幅2cm・棟側厚さ0.4cm・刃側0.2cmを測る。「⊔」字状に切り込まれた部分を除きすべて刃がついている。

9は，鐔で，玄門部中央の鉄器集中部分より出土した。縁を一部欠失する。長径6.2cm・短径約5.1cmの倒卵形を呈する。断面は，銹によりふくれ上り，厚さ0.7cmの板状をなすが，本来の厚さは0.4～0.5cm程と思われる。

刀装具（第66図1～4，図版第36）　いずれも玄門部中央の鉄器集中部分より出土したものである。1・2は，倒卵形のリング状をなすものである。1は長径7.3cm・短径4.9cm，断面は台形状をなし，厚さ0.8cm，上辺側の長径6.9cmを測る。2は，1よりもやや小型で，長径6.5cm・短径4.8cmを測り，上端のみ断面が台形で，他は方形をなす。厚さ0.8cm。3・4は，やや小さいものでリング状をなすが，3は楕円形，4は倒卵型をなす。3は，長径4.2cm・短径2.8cm，断面はリングに対し直交する形で長方形をなし，0.6cmを測る。4は，長径4.2cm・短径2.7cm，断面はリングに平行する形で長方形をなし，厚さ0.4cmを測る。1～4とも木質等は残存していないが，その形態から1・2は，柄縁，3・4は責金具等が考えられる。

円頭大刀柄頭（第66図5，図版第36）　玄門部中央の鉄器集中部分より出土した小型の柄

頭である。長さ4.8cm，断面は楕円形を呈する。柄木を差し込んだ部分で，長径3.8cm・短径2.8cm・厚さ0.4cm程である。中に円形の棒状の突起があり，柄木に差し込み固定しており，目釘等はない。

鞘尻金具(第66図6，図版第36)　玄門部中央の鉄器集中部分より出土した小型の鞘尻金具である。長さ4.8cm，断面は楕円形を呈する。鞘木の差し込み口での長径3.5cm・短径2.7cm・厚さ0.5～0.6cm程である。鞘木を差し込み目釘で固定したようで，差し込み口より0.8cmのところに径0.5cm程の目釘が残り，突出した部分は，叩きつぶしている。

刀子(第66図7～10，図版第36)　図化できたものは4点であるが，切先，茎の小片があり復元可能と思われ，実数は10点前後になると思われる。

1は，玄門中央部の鉄器集中部分より出土したもので，刃部のみの破片である。現存長11cm，刃部の断面は二等辺三角形をなし，刃部先端付近での幅1.1cm・厚さ0.5cm，刃部に対しかなり厚くなっている。

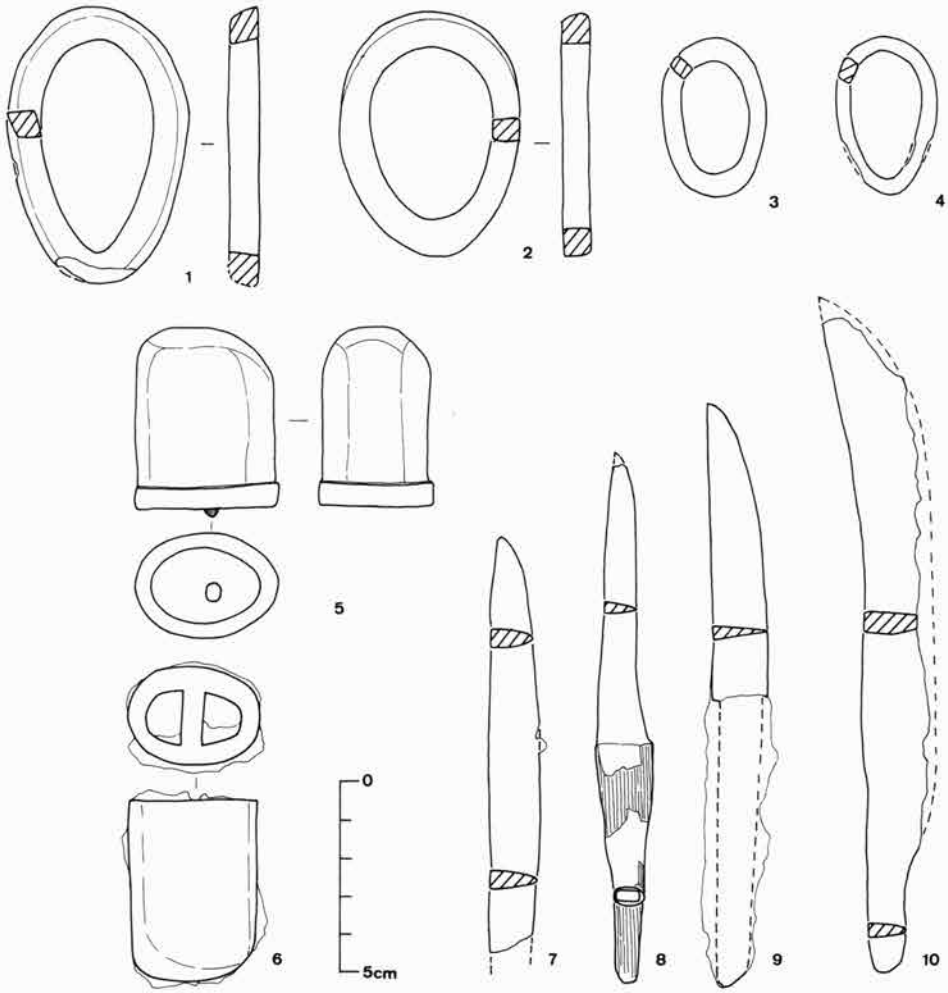
8は，玄室内の不明鉄製品南側70cmのところで出土したもので，切先の一部のみ欠失する。現存長13.7cm，刃部の断面は二等辺三角形を呈し，刃部中央での幅0.9cm・厚さ0.35cmである。刃部の幅は関部分で最大となる。関は，茎全体に柄の木質が付着しているため形状は不明である。目釘等も認められない。細身の刀子である。

9は，玄室主軸に平行する石材の奥壁寄りの端で出土したもので，全長約15.5cmである。刃部はやや外側にそりぎみであり，断面は二等辺三角形をなす。関近くで幅1.5cm・厚さ0.4cmを測る。刃部の幅は関部分で最大となる。茎には，黄白色の付着物で完全に覆われている。関は，この付着物により形状は不明であるが，両関と考えられる。黄白色の付着物は，鹿角製の柄と考えられる。

10は，袖石の刀が集中して立てかけられていた部分より出土したもので，刃部の大半を欠失する。現存長17.3cm，刃部中央より切先にかけては銹によるためか大きく外反する。刃部断面は銹によりふくらんでおり，厚さ0.6cmを測るが，実際は0.4cm程であったと思われる。関は，棟側は茎先にかけ徐々に細くなっていくが，刃側は，斜めに削り込む。刃部の長さに対して茎は短く，目釘穴等も見られない。茎先端付近での幅1cm，断面は台形状をなし，棟側0.4cm，刃側0.2cmを測る。

鉄鏃(第67・68図，図版第37)　鉄鏃の総数は鏃身の形態から102点と考えられるが，細片が多量にあり，実数は110点をこえると考えられる。鏃身の形態からおよそ9種類に大別できる。

Ⅰ類　44点出土した(1～9)。長頸鏃で鏃身の両側に刃をもつもので，関はなく，鏃身の断面は台形を呈するものが大半である。3点を除きすべて棘状突起をもつ。全長のわか



第66図　高山12号墳出土遺物実測図(7)

る資料は4点あり，もっとも短いものが15.1cm，長いもので16.6cmである。矢柄より外に出る長さは1の15.7cmを最大に，11.4～13.1cmまでのものと，9.7～10.5cmまでのものとに分けられるようである。

Ⅱ類　9点出土した(10・11・12)。長頸鏃で鏃身の片側に両面から刃をつけるもので，関は斜関と，関を持たないものとがある。1点のみ棘状突起をもつ。全長のわかる資料は1点で15.8cmであり，おおよそ他のものもこの数値に近いものと思われる。矢柄の外に出る部分は11cm前後と考えられる。

Ⅲ類　35点出土した(13～18)。長頸鏃で，鏃身の形態は柳葉式で逆刺をもつものである。棘状突起は有さない。全長のわかるものはなく，矢柄より外に出る部分は，9.5cm弱と考

えられ，全長は約13.5cm前後と推定される。

Ⅳ類　1点のみ出土した(19)。長頸鏃で鏃身は五角形を呈する。短い逆刺をもち，箆被部にて欠損する。

Ⅴ類　1点のみ出土した(20)。長頸鏃で，鏃身の形態は柳葉式で逆刺をもたず，斜関をつける。棘状突起は有さない。全長15.5cm，矢柄より外に出る部分は9.9cmである。

Ⅵ類　4点出土した(21)。いずれも鏃身のみの破片であり，全体像をつかむことはできないが，長頸鏃で鏃身は柳葉式で逆刺をもつ。Ⅲ類にくらべ鏃身の幅が狭く，断面は台形を呈する。箆被部にて欠損している。

Ⅶ類　7点出土した(第68図1・4・5)。平根式の短頸鏃で，切先が角ばるもので箆被部は関の部分で最大幅となる。棘状突起は有さない。全長のわかる資料は1点(1)で，13.4cm，矢柄の外に出る部分は，8.7cmである。

Ⅷ類　2点出土した(第68図2・3)。平根式の短頸鏃で，切先が丸いものである。2は，鏃身が長く棘状突起をもつ。3は，鏃身が短く棘状突起をもたない。矢柄の外に出る部分は2が7.2cm，3が5.7cmを測る。

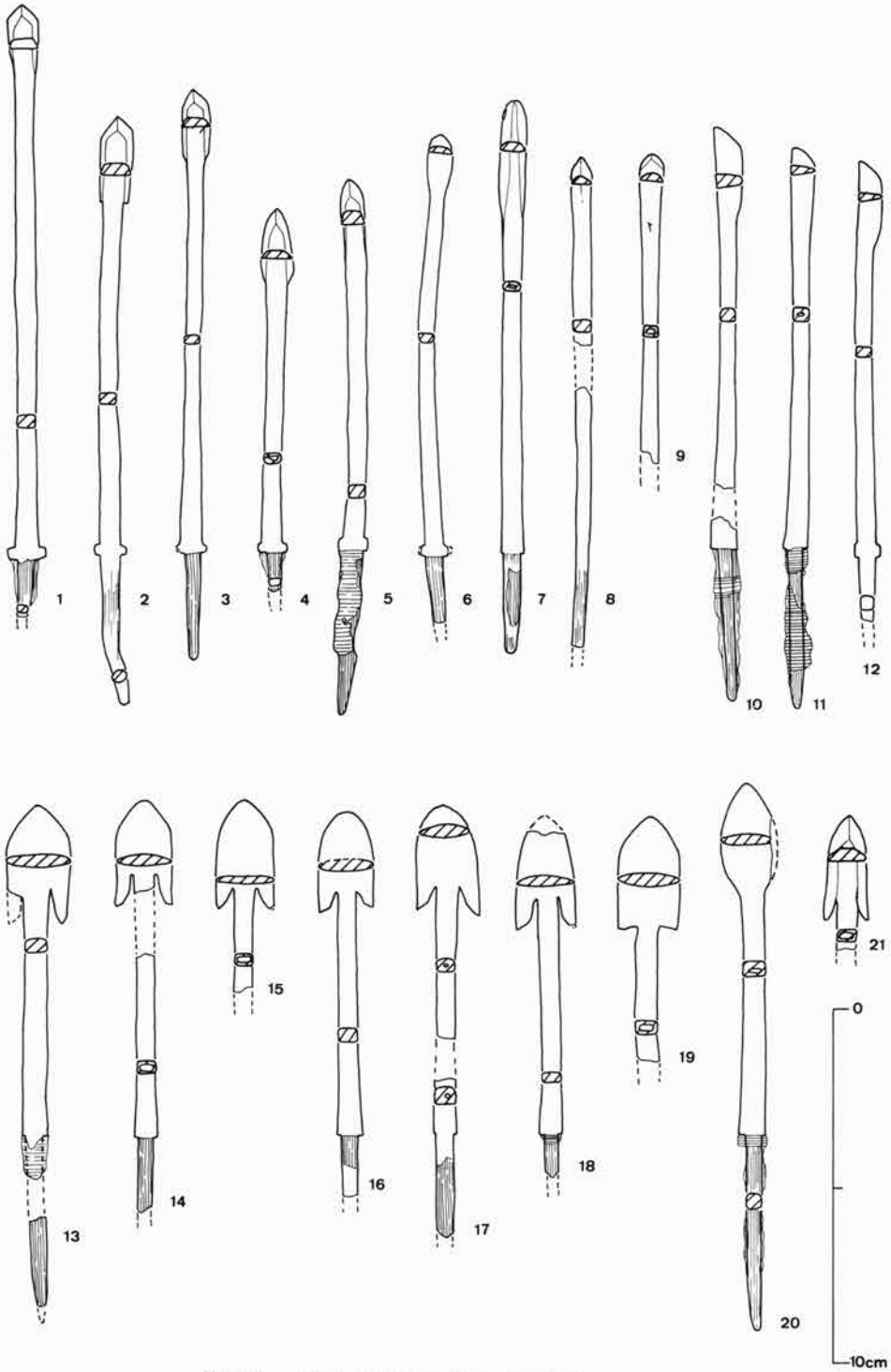
Ⅸ類　1点のみである(第68図6)。平根式の短頸鏃で大きな逆刺もち，鏃身が三角形状をなす。鏃状突起は有さない。矢柄の外に出る部分は7.7cmを測る。

以上の鉄鏃は，玄室内・玄室部中央・閉塞石中からと分散，破片化して出土したものであり，形態的には比較的バラエティーに富んでいるが，直刀と同じく組み合わせを特定できる資料とはならなかった。

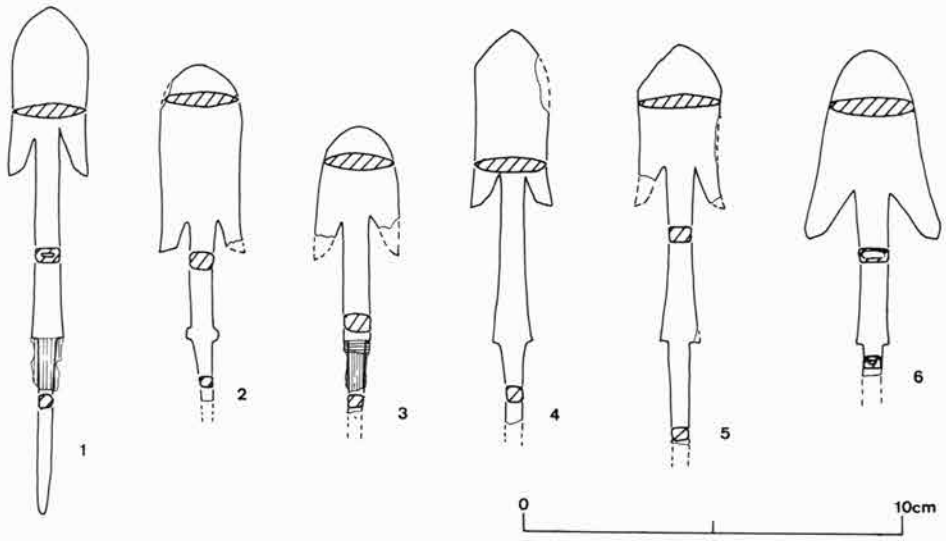
馬具類(第69・70図)　出土した馬具類は，辻金具(6点)・革金具(7点)・鋲状鉄製品(1点)・轡(3点)・鞍金具(4点)・鉸具(5点)・不明金具(1点)・鐙(10点)が副葬されていた。

辻金具(第69図1～6，図版第38)　辻金具は6点出土したが，伏鉢状のものと十字状の形状をなすものがあり，いずれも鉄地金銅張で，頭部を金銅装した鉄製円頭鋲を打つ。

1～3は，伏鉢状をなすもので，ともに4脚でありほぼ同形，同大である。真上から円形の伏鉢部を見ると，中央から下端にかけ二段の段が認められる。頂部は丸いが，2は，内部中央に釘状の突起があるため頂部中央がやや突出している。それぞれ向かい合う脚はほぼ直交するが，3は伏鉢部に亀裂が入りやや変形している。脚基部には，責金具等は残存していなかったが遊離した痕跡は認められた。脚は一端が方形をなしているが(1・3)，2については一脚欠損するため不明である。脚には，薄い金銅板をかぶせた，直径0.8～1cmの円頭鉄鋲が各々1か所ずつ配されている。1の完形品は，伏鉢部径4cm，脚を含めると径7.5cm・高さ2.5cmを測り，脚基部幅1.5cm，厚さは伏鉢部，脚とも0.4cmを測る。



第67図　高山12号墳出土遺物実測図(8)

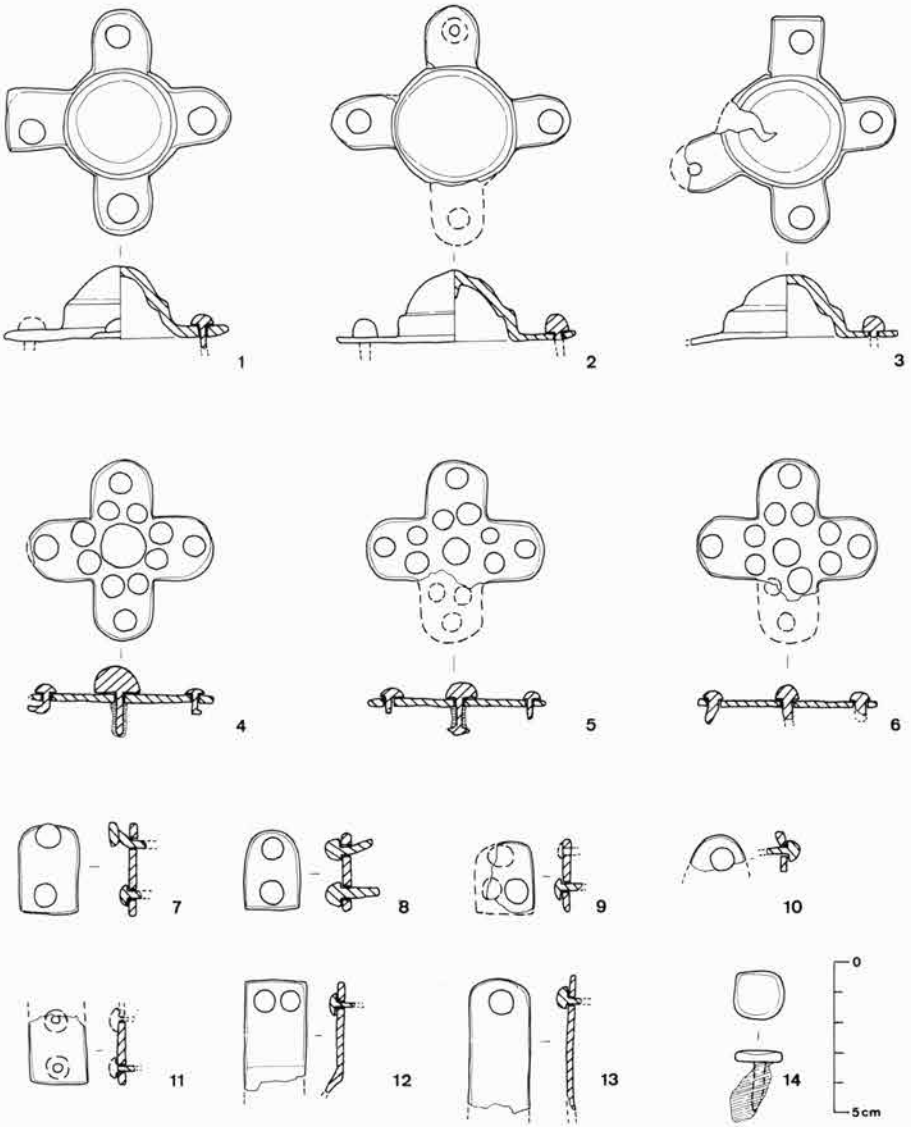


第68図　高山12号墳出土遺物実測図(9)

2・3もほぼこの数値に近いものである。1・3は玄室に平行して並ぶ石列中より出土し，2は玄門部中央の鉄器集中部分より出土した。

4～5は，十字状の辻金具である。厚さ0.25～0.3cmの鉄板の中央部に1鋲，各々4脚に3鋲ずつ配したものである。鋲はいずれも，鉄製の円頭鋲に薄い金銅板をかぶせたものである。脚は基部に鋲が打ち込まれているため，責金具等は存在せず，鋲がその代用をなしていたと考えられる。脚先端は，いずれも爪形を呈する。4は，中心部分に径1.5cm・高さ0.9cmの大きな鋲を打ち込み，各脚には径0.6～0.8cm，高さ0.2～0.3cm程の半円状の鋲を配する。5・6は，中心鋲，脚鋲とも直径にはほとんど差は認められないが，中心鋲は脚の鋲にくらべて0.2～0.3cm程高くなっている。鋲の裏面からは，足が突出するが，3の中心鋲からは足が鉄板より外へ1cm突出し，足の先端には皮帯を押さえる断面が，カマボコ状を呈する厚さ0.2cm程の鉄板が責金具としてつけられている。また，4の脚の鋲は足が「L」字形に折り曲げられ，この折り曲げられた部分と鉄板の間には皮革質が残っており，幅0.2cm弱ほど空いていることから，使用されていた革帯は0.2cm程のものと思われる。中心鋲は，これらの四脚より集まる皮帯を束ねるため足が長くなっているものと考えられる。5・6は，1脚を欠いている。4は完形品であり，全長6cm・幅6.1cm，脚基部の幅2cm・長さ2cmを測る。5・6もほぼ同形，同大である。4は，玄門部中央の鉄器集中部分から，5・6は閉塞石中より出土した。

革金具(第69図7～11，図版第38)　いずれも鉄地金銅張で，頭部を金銅装した鉄製円頭鋲を打つ。革金具はいずれも先端が爪形をなすものである。11は，先端を欠損するが，同



第69図　高山12号墳出土遺物実測図(10)

形と思われる。使用される鋲数により，2鋲のもの(7・8・10)と3鋲のもの(10)と2種類ある。2鋲のもので全体がわかるものは，7が全長2.9cm・幅2cm，8が全長2.6cm・幅1.9cmを測る。3鋲のものは破損しており不明である。いずれも頭部の直径0.7～0.8cmの円頭鋲を打つ。地板となる鉄板は，厚さ0.3cm程で，裏面には皮革質が残るが，鋲足からは皮帯の厚さは推定できなかった。7・9は，玄室奥壁寄りの石室に平行して並ぶ石列中より，8は，玄門中央の鉄器集中部分から，10・11は閉塞石中より出土した。

12・13は，形状から革金具とは考えがたく，第70図12・13等の基部に装着されていた吊

金具ではないかと考えられる。第70図14と同様に，扁平な幅2cm・厚さ0.25cmの鉄板に鋲を打ち込んだもので，12は先端が方形をなし，下半がややそり上り，先端に直径0.7cmの鋲を2本打つ。13は，先端が爪形をなしやや内湾し，先端に直径0.9cmの鋲を1本打つ。12・13とも玄門中央の鉄器集中部分より出土した。

14は鋲で，一辺1.6cmの隅丸長方形の頭部に短い足がつく。足には木質が付着する。全長2.1cmを測る。袖石の鉄器の集中部分より出土した。

轡(第70図1，図版第40)　轡の引手のみである。銜，鏡板と思われる破片もあるが，復元できない。引手先輪の一部を欠失するが，全長約15.3cmの引手に「く」字状に折れ曲った径3.4cmの引手壺をそなえる。玄門中央の鉄器集中部分より出土した。

鞍金具(第70図2～6，図版第39)　図化できたものは，円形座金具1点，鞍4点であるが，あと少し破片があり，全体で6点ほど残存していた可能性がある。

座金具(2)　鉄地金銅張の円形笠形座金具で，直径3.4cm・高さ0.7cmで頂部は平坦である。金銅板は，座金具の内側までまわり込んでいるが，内側にどの程度まで貼られていたかは不明である。袖石の立てかけられた刀とともに出土した。

鞍(3)　凸字形の輪金に，扁平な鉄棒の端を巻きつけて足としているが，足が他の鞍にくらべ細い。輪金の全長5.5cm・幅4.7cmを測る。座金具は脱落している。袖石に立てかけられた刀とともに出土した。2の座金具とセットとなる可能性もある。

鞍(4・5・6)　凸字形の輪金，足，円形笠形座金具からなる。足は細い鉄棒を輪金基部に搦め，座金具を介して木製鞍橋に打ち込んでいる。木製鞍橋から突き抜けた部分は，足を「L」字状に曲げ固定する。座金具より足が「L」字状に折り曲げられる部分までの長さは3cmほどある。このことからすると，木製鞍橋の厚さは約3cmほどであったと考えられる。座金具は，いずれも円形笠形座金具で金銅張であり，直径3.1～3.5cmを測り，5・6の頂部は平坦であるが，4は「ハ」字形に開いている。2と同様，金銅板が座金具内側にまでまわり込んでいるが，どの程度まで貼られていたかは不明である。輪金の全長は，4が5.8cm・環部幅4.2cm，5が6.4cm・4.6cm，6が6cm・4.2cmを測る。4は，玄門中央の鉄器集中部分より，5・6は閉塞石中より出土した。

鉸具(第70図9～13・15，図版第38)　9・15は同じつくりのもので，9は直径0.5～0.6cmの鉄棒を折り曲げて輪金をつくり，基部に9cm程の鉄棒の端を巻きつけて刺金とする。輪金の全長8.8cm・環部幅4.8cmを測る。12・13は，直径0.5cm程の鉄棒を「U」字形に曲げ，基部でさらに「L」字形に折り曲げる。刺金は有していない。12の全長4.8cm・幅3.4cm，13は全長3.6cm・幅3.9cmを測る。13は基部が開いている。両者とも玄門中央の鉄器集中部分より出土した。10・11は，いずれも鉄棒を凸字状に曲げ輪金をつくっていたと思

われるが，欠損している。10はやや大きく，両者とも刺金をもつかどうか不明である。10・11とも閉塞石中より出土した。

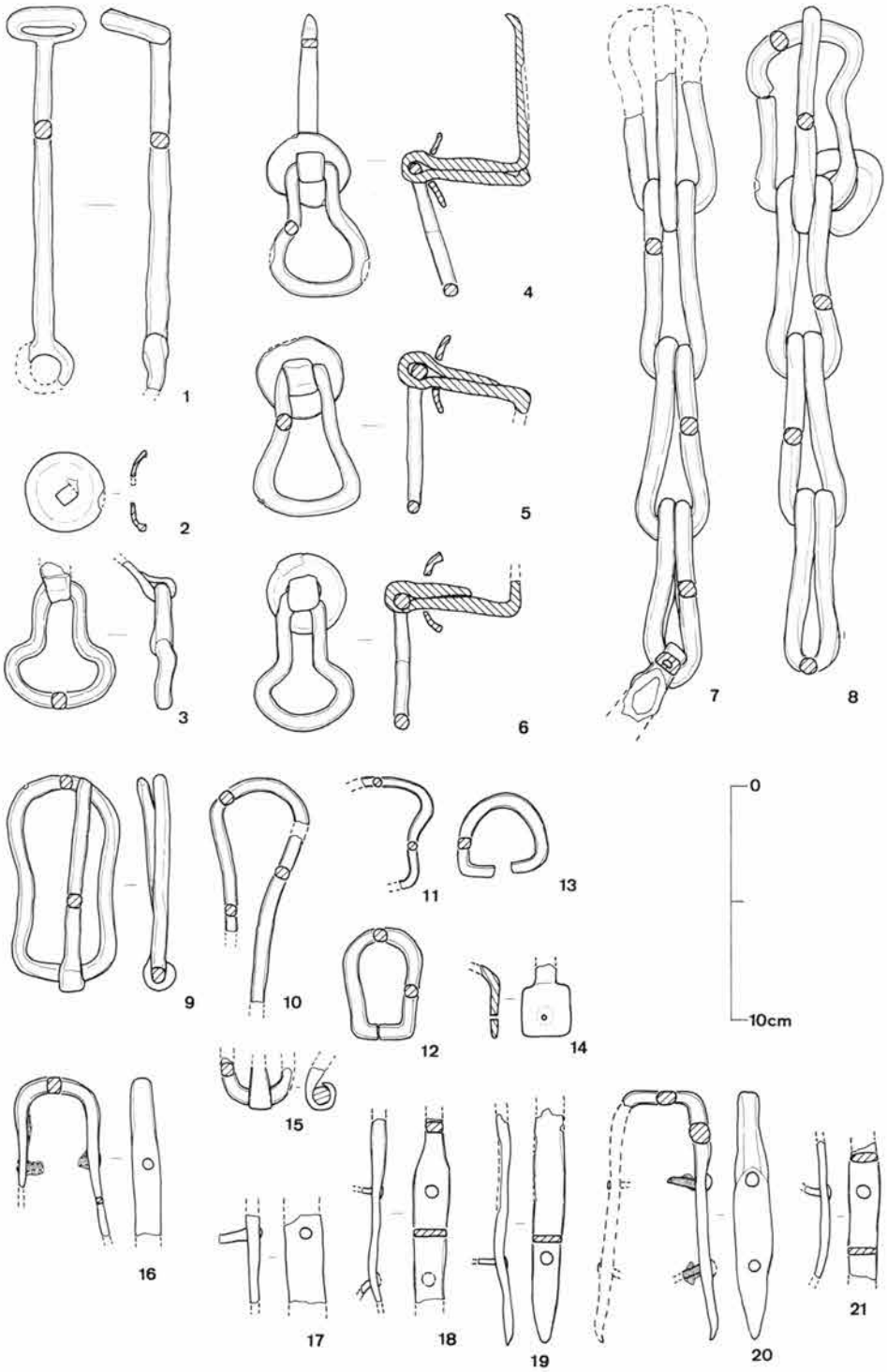
吊り金具（第70図14，図版第38）　形状から吊り金具であった可能性が考えられるもので，残存状況が良好なため鉄地金銅張の可能性もある。一辺2.1cm・厚さ0.4cmの方形の鉄板のほぼ中央に鋲を打っていたと思われる孔およびその痕跡が残る。鋲はその痕跡から直径0.7cm程のものと想像される。方形の鉄板の一端中央からは，幅0.9cmで上方へ外反しながらのびる形状を呈しており，12のような器種に巻きつけられていた可能性がある。玄門中央の鉄器集中部分より出土した。

鐙（第70図7・8・16～21，図版第40）　破片数は相当認められるが，個体数としては復元が充分でなく実数は不明であり，形状の違うもののみ図示した。

7・8一対分出土した。7は，袖石の立てかけられた刀類に混じって，8は閉塞石中より出土したものである。木製壺鐙につく金具であり，「U」字形の鐙金具を3連の兵庫鎖で連結する。7の鐙金具は，木製壺鐙をはさみこみ釘により固定していたと思われるが，脚の大半を欠失しており形態は不明である。残存部分を見ると吊手部分は，幅を狭くし断面は厚みを持たせている。兵庫鎖は，直径0.8cm程の鉄棒を曲げ作られるが，上部2本の全長は8.6cm，下部1本は8.1cmを測る。鉸具は，輪金の部分を欠失するが，8の鉸具と同規模程度のものと思われる。8は7と同じもので鐙靼金具が兵庫鎖より脱落し，鉸具と兵庫鎖の間に付着している。鐙靼金具は，7と同様屈曲部分しか残存しないが，7より幅はやや広くつくられているが，断面の厚さはさほど変わらない。兵庫鎖は上部のものが全長8.8cm，中位のものが8.3cm，下部のものが7.9cmを測り，鎖を連結した時の長さは，7が全長29cmであるのに対し，8は29cmとなる。鉸具は，直径0.8cm程の鉄棒を曲げ輪金を作る。輪金の全長8.2cm・幅5cm，刺金の長さ9.6cmを測る。

16～21は，部分であるが脚部をみると細身に作るものとやや幅広に作るものと2種類あるようである。いずれも，木製壺鐙をはさみ込んで左右から釘を打ち込み固定していたと思われるが，部分であるため，釘の本数等は不明である。全体像のつかめる20は，鐙靼金具につながると思われる「コ」字形の吊手部と壺鐙に固定するための舌状の脚部からなる。脚は「ハ」字型に開き，左右各々2本の釘を打ち固定している。釘には木質が残存する。全長10.9cmを測る。出土場所は，玄室内全域及び玄門部，閉塞石中からも出土している。

鉄釘（第71図，図版第42）　鉄釘は，大半が玄室内の棺台として用いられたと思われる。石材周辺から出土しているが，玄門部中央や，閉塞石中からも出土している。また，鉄鏃の茎先が，釘足先端が不明瞭なものも多数あり，図化できたものは，頭部が残存する12点



第70図　高山12号墳出土遺物実測図(11)

と足1点である。

頭部断面は，方形，カマボコ形ないしは半円形をなし，足断面は方形，長方形をなす鍛造品である。頭部の平面形は，楕円形(1・2～4・6・9)・隅丸方形(5・10・11)・ほぼ円形(7・8・12)をなすものがある。完形品で長さのわかるものを見ると，3種類に分かれるようである。全長12.5cm前後のもの(1・2)，10cm前後のもの(3・4・5)，9cm弱のもの(6～9)がある。これらの釘の足には銹の浸透により，本質が残存するものが見られ木目の方向が観察できた(1・3～9)。これらのうち，完形品で木目の方向・境目が区別できたものは(1・4～9)がある。それによると，棺に使用された板材の厚さは，3.9cm(1)，3～3.1cm(8・9)，2.5～2.6cm(4～7)の3種類がある。いずれもかなり厚い板材が想像されるが，充分に付着物を落とせば，軸に直交する木目については，二段階に分かれる可能性が充分ありうるが，現状では認めることができなかった。ただ，厚さ・使用されている釘の大きさからすれば3種類存在することから，木棺が3個体は存在したとも考えられる。

c 装身具　装身具は，玉類と金環が出土した。

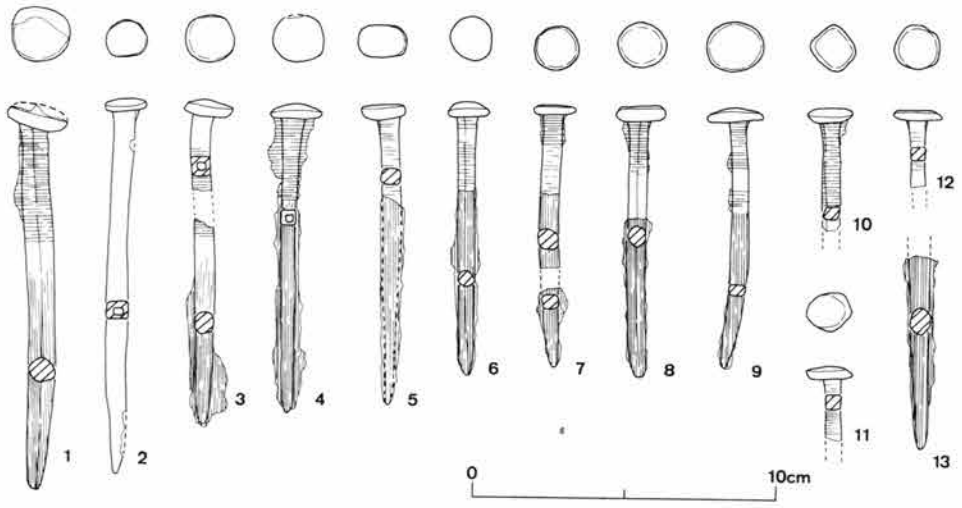
玉類(第72図，図版第43・44)　玉類は，勾玉23点，管玉3点，切子玉11点，ガラス小玉21点の総数58点が出土した。これらの玉類の計測値は付表7に示したが，実測図にはこれらのうち，勾玉14点，管玉2点，切子玉10点，ガラス小玉10点を図示した。玉類の総数の約2/3は玄室棺台として使用された石材周辺で出土したが，残りは玄門部鉄器・土器類とともに出土し，閉塞石中からや，石室前面からも出土している。

勾玉(1～13・16)　いずれも瑪瑙製であるが，4cmを越えるものが3点あり最大のものは全長4.5cmを測る。最も数が多いのは3～4cmまでのもので16点あり，3.6cm前後のものが最も多い。3cm以下のものは4点あり，最小のものは，全長2.56cmである。色調は，極端に表現すれば赤10点，黄10点，白3点となり，白色を呈するものがかなり少なく，飾る上で白は基調となるものかも知れない。

管玉(14・15)　他の玉類に比べ異常に少なく1点は欠損する3点が出土した。いずれも碧玉製管玉であり，大形のものは濃緑色を小形のものは青緑色を呈する。

切子玉(16～23)　いずれも水晶製であり，24のみ一部欠損する。最大のものは全長2.31cm，最小のものは1.31cmを測り，全体的に2cm前後のものである。

ガラス玉(24～35)　最大のものは直径1.14cmを測るが，いずれも0.63～0.94cmまでのものであり，暗青色，濃紺色，淡青色を呈するが，一部黄緑色を呈するものもある。また，これらの玉とは異なるものが1点ある。1/2を欠損するが，3号墳で出土した同じく1/2を欠損した玉とよく似ている。推定復元径0.82cm・長さ0.7cmで黄緑色で表面に白銀色の付着物がある。



第71図　高山12号墳出土遺物実測図(12)

金環(第73図，図版第44)　金環は7点出土した。いずれも銅地金貼りのものである。いずれも二次的な移動をうけており，原位置を保つものはなく，玄室棺台として使われたと思われる部分で分散して出土したものや，玄室中央部，玄門中央の鉄器集中部分から出土したものである。直径0.4～0.6cmの銅地金を「C」字形のほぼ円形に曲げ，表面に金の薄板を貼りつけたものである。地金の銅はすべて中実である。遺存状況は，金箔が一部はがれたり，亀裂が入り緑青が吹き出したり，一部欠けたものでありあまりよくない。比較的保存状況がよかったものは5・6である。これらの金環は，法量から見て直径約3.3cm程をなすもの(1・3)，直径3.8cm程のもの(2・4)，直径4.7cm程のもの(5・6)とは対をなすと考えられる。7は出土した金環中もっとも大きく長径4.8cm・短径4.4cmを測る。これと対になる金環は調査中にはみつからなかった。　(増田孝彦)

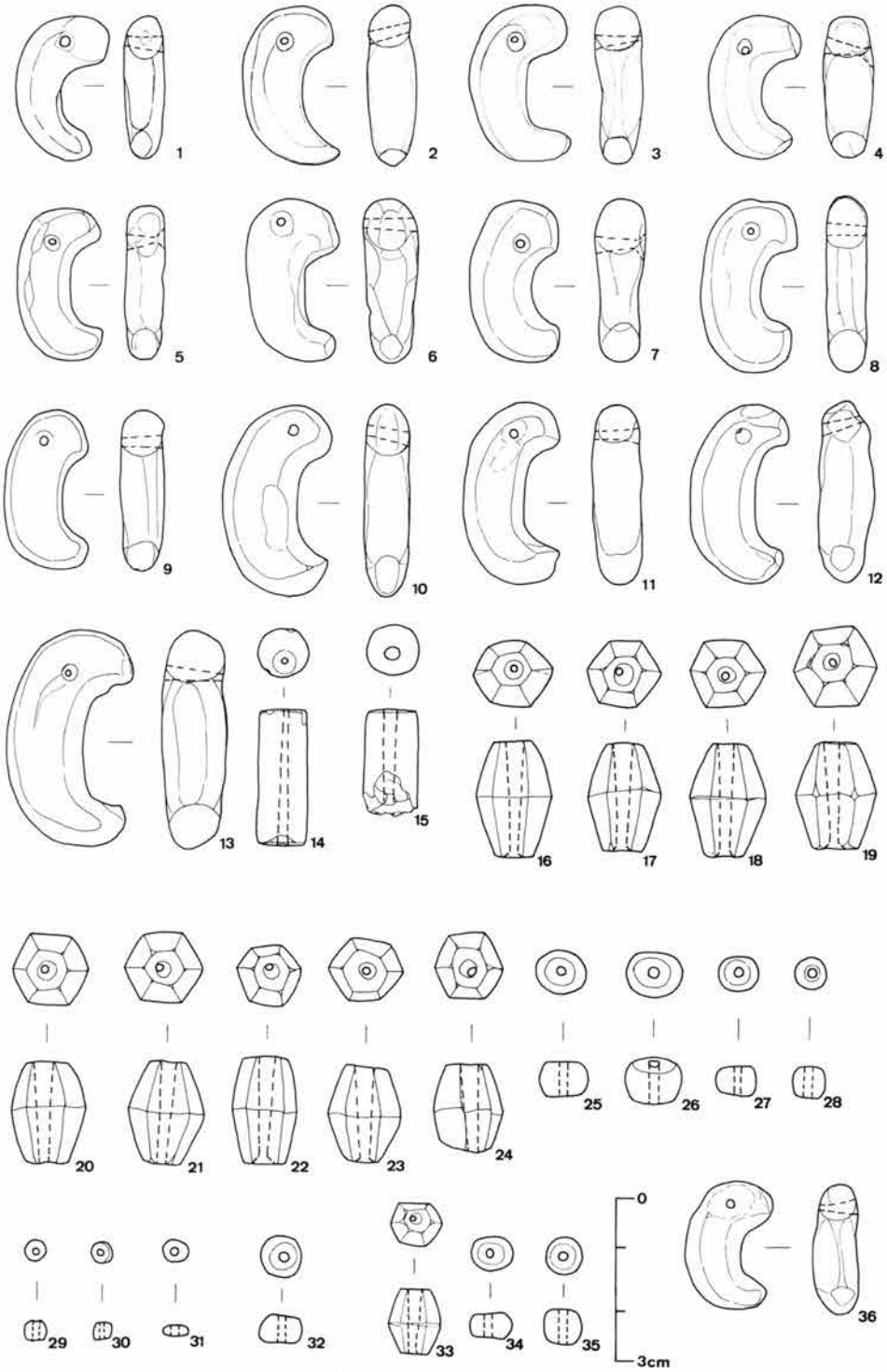
5. ま　と　め

高山古墳群・高山遺跡は，標高37～70mの北東から南西へのびる平坦な丘陵上に営まれた遺跡群である。丘陵全体が大規模な開墾を受けており，古墳の封土の大半が削られたり，天井石が持ち去られたりしているが，石室全体は開墾による一部倒壊は認められたものの，石室内部は盗掘を受けた痕跡は認められず，良好な保存状況であったといえる。

今回の調査成果について整理しておきたい。

(1) 墳丘と石室

墳丘は，自然地形の小起伏，尾根稜部を利用して築造されている。石室を構築するにあたっては，墓坑を穿つ面は，ほぼ同じ高さに整地してから掘り込むが，整地は地山削平と



第72図　高山12号墳出土遺物実測図(13)

付表7　高山12号墳出土玉類観察表(単位：cm)

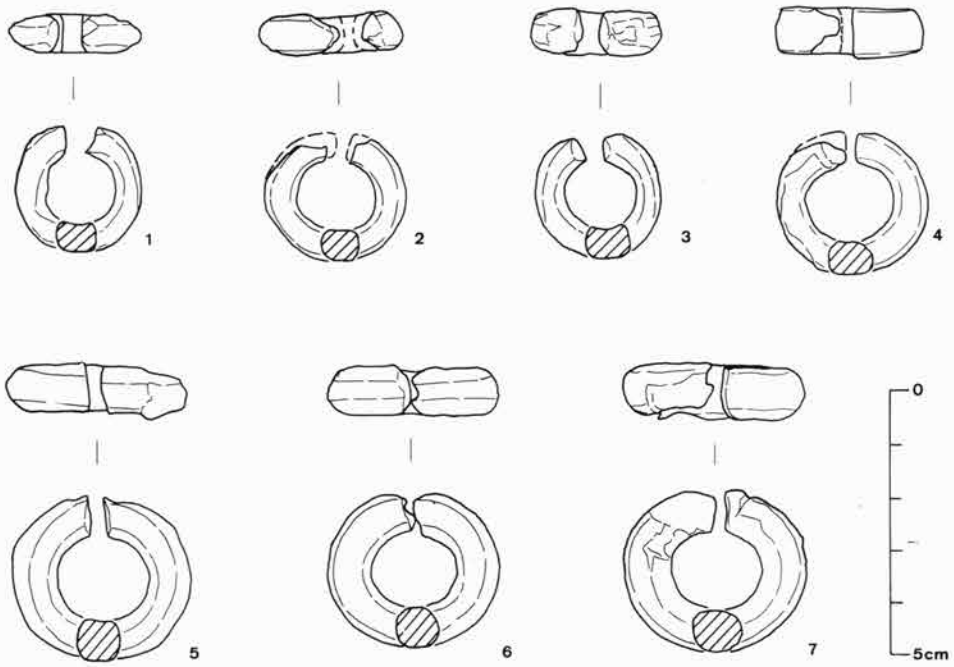
No.	器　種	長	径	孔　径	色　調	備　考	図
1	瑪瑙製勾玉	2.80	0.72	0.31～0.20	淡黄褐色	玄室石材周辺より出土	1
2	〃	3.18	0.95	0.35～0.17	〃	〃	2
3	〃	3.12	0.85	0.34～0.13	淡赤褐色	〃	3
4	〃	2.82	0.92	0.30～0.15	淡黄褐色	〃	4
5	〃	3.10	0.76	0.31～0.12	淡乳白色	〃	5
6	〃	3.36	0.98	0.35～0.16	淡赤褐色	〃	6
7	〃	3.28	0.89	0.32～0.12	淡黄褐色	〃	7
8	〃	3.48	0.81	0.38～0.19	淡赤褐色	〃	8
9	〃	3.14	0.84	0.30～0.17	淡黄褐色	〃	9
10	〃	3.81	0.77	0.29～0.15	〃	〃	10
11	〃	3.60	1.03	0.35～0.17	淡乳白色	〃	11
12	〃	3.60	1.05	0.28～0.15	淡黄褐色	〃	12
13	〃	4.30	1.25	0.40～0.19	淡赤黄褐色	〃	13
14	〃	3.12	0.82	0.31～0.14	淡黄褐色	〃	
15	〃	3.68	1.00	0.33～0.20	淡赤黄褐色	〃	
16	〃	3.10	0.92	0.28～0.10	淡赤褐色	〃	
17	〃	3.25	0.93	0.35～0.15	淡赤黄褐色	〃	
18	〃	2.56	0.82	0.29～0.13	淡黄褐色	閉塞石中出土	36
19	〃	4.01	0.92	0.40～0.18	赤褐色	〃	
20	〃	4.50	1.08	0.36～0.19	〃	前庭部出土	
21	〃	3.50	1.03	0.34～0.15	淡赤褐色	玄室奥壁付近出土	
22	〃	2.62	0.80	0.31～0.11	淡黄褐色	閉塞石下出土	
23	〃	3.28	0.80	0.30～0.17	乳灰色	玄室奥壁付近出土	
24	碧玉製管玉	2.69	0.98	0.20～0.11	濃緑色	〃	14
25	〃	(2.10)	1.04	0.27～	〃	下半部欠損	15
26	〃	1.60	0.58	0.20～0.14	青緑色	閉塞石中出土，透明感強い	
27	水晶製切子玉	2.31	1.50	0.39～0.15	透　明	玄室石材周辺出土	16
28	〃	2.20	1.42	0.48～0.16	〃	〃	17
29	〃	2.27	1.46	0.37～0.19	〃	〃	18
30	〃	2.13	1.62	0.41～0.13	〃	〃	19
31	〃	2.06	1.50	0.40～0.18	〃	〃	20
32	〃	2.08	1.46	0.36～0.18	〃	〃	21
33	〃	2.16	1.31	0.34～0.19	〃	〃	22

No.	器　　種	長	径	孔　径	色　調	備　　考	図
34	水晶製切子玉	1.98	1.40	0.40～0.17	透　明	玄室石材周辺出土	23
35	〃	1.78	1.35	0.40～0.18	〃	一部欠損	24
36	〃	1.31	0.96	0.29～0.14	〃	玄門部出土	33
37	〃	1.91	1.32	0.39～0.15	〃	羨道部出土	
38	ガラス製小玉	0.71	0.94	0.19	濃紺色	気泡は穴と平行，透明度低い。両小口平坦	25
39	〃	0.74	1.14	0.25	〃	気泡は穴と平行，透明度低い。両小口平坦	26
40	〃	0.55	0.76	0.14	〃	気泡は穴と平行，透明度低い。両小口平坦	27
41	〃	0.61	0.63	0.20	暗青色	気泡は穴と平行，透明度低い。両小口平坦	28
42	〃	0.35	0.42	0.14	黄緑色	気泡は穴と平行，透明度低い。両小口未整形	29
43	〃	0.32	0.39	0.12	〃	気泡は穴と平行，透明度低い。両小口未整形	30
44	〃	0.20	0.47	0.20	淡青色	気泡は穴と平行，透明度やや高い。両小口未整形	31
45	〃	0.55	0.80	0.13	濃紺色	玄室中央出土，気泡は穴と平行，透明度低い，両小口未整形	32
46	〃	0.47	0.81	0.16	〃	玄室中，気泡は穴と平行，透明度低い，両小口平坦	34
47	〃	0.64	0.72	0.15	〃	玄門部，気泡は穴と平行，透明度低い，両小口平坦	35
48	〃	0.46	0.81	0.20	〃	気泡は穴と平行，透明度低い，両小口平坦	
49	〃	0.52	0.81	0.30	〃	気泡は穴と平行，透明度低い，両小口平坦	
50	〃	0.54	0.72	0.16	暗青色	気泡は穴と平行，透明度低い，両小口平坦	
51	〃	(0.70)	(0.82)	(0.49)	黄緑色	半分欠損，透明度高い，表面に白銀色の付着物	
52	〃	0.45	0.76	0.23	濃紺色	前庭部出土，気泡は穴と平行，透明度低い，両小口平坦	
53	〃	0.52	0.76	0.24	〃	玄室中，気泡は穴と平行，透明度低い，両小口平坦	
54	〃	0.51	0.83	0.17	〃	玄室中，気泡は穴と平行，透明度低い，両小口平坦	

No.	器　　種	長	径	孔　径	色　調	備　　考	図
55	ガラス製小玉	0.50	0.66	0.25	濃紺色	玄門部，気泡は穴と平行，透明度低い，両小口平坦	
56	〃	0.49	0.72	0.32	〃	閉塞石下出土，気泡は穴と平行，透明度低い，両小口平坦	
57	〃	0.35	0.61	0.16	暗青色	玄室中，気泡は穴と平行，透明度低い，小口片面のみ平坦	
58	〃	0.35	0.46	0.15	淡青色	玄門部出土，透明度低い，両小口未整形	

旧表土層上への盛土からなっている。そのため，墳丘裾部を除き墳丘の大半は，盛土により築造されている。尾根稜部に位置するものについては，外部施設として尾根高位側に，墳丘裾に沿って弧を描く溝が設けられている。高山古墳群中特異な外部施設を持つものは，京都府教育委員会が調査を行った1号墳で，墳丘中位に外護列石を伴っていた。

多量の遺物が出土した3号墳・12号墳は，築造方法等については一部を除き他の古墳と大差はないが，石室規模，副葬品等からして，築造時は後期首長墓にふさわしい外観を整えていたと推察される。墳丘規模を見ると，12号墳の直径18m，3号墳の16m，1号墳の15m，他の古墳が10m前後となり，墳丘・石室の規模，副葬品などをみても権力の集中が



第73図　高山12号墳出土遺物実測図(4)

端的に現われている。

調査した古墳は，すべて横穴式石室を内部主体とするが，無袖式(3・6・7号墳)と片袖式(4・5・12号墳)のものがあり，京都府教育委員会の調査した1号墳も片袖式である。片袖式のものは，すべて奥壁より羨道に向かって右側の袖をもつ共通性が認められる。石室に使用される石材は，付近一帯で採取される安山岩と凝灰岩であるが，石室を構成する石材に一石も凝灰岩を使用しないものや(3・7号墳)，部分的に使用するもの(1・5号墳)，石材と石材の隙間だけに使用したもの(6号墳)，巨石を多用するもの(12号墳)があった。石室にまったく凝灰岩を使用しない古墳でも，閉塞石として多用されている。12号墳で凝灰岩の巨石が多用されたのは，鑿跡が残ることから，安山岩の転石の扁平な石材を入手するより，扁平な石材として加工しやすかったためと考えられる。

各石室の規模を見てみると，もっとも規模の小さい7号墳を除く4・5・6号墳は，全長5.4～6.88mの間におさまり，規模的にも使用されている石材にも極端な優劣関係は認められない。ただ，3号墳・12号墳については，明らかに他の古墳と異なる。無袖式石室で，丹後地域の大型石室としては，竹野郡網野町小浜の岡1号墳(注16)が全長10.8m，玄室長6.6m，玄室幅2.3～1.5m，玄室床面積11.8m²で環頭大刀が出土した首長墓である。3号墳は，全長10m，玄室長6.0m，玄室幅1.24～1.3m，玄室床面積(閉塞部まで)8.18m²でやや小さくなる。

12号墳(12.37m²)と同様な袖を有する大型古墳では，玄室床面積の規模からすると，丹後地域では熊野郡久美浜町須田の湯舟坂2号墳(注17)(12.4m²)，久美浜町甲山の塚ノナル古墳(13m²)，竹野郡丹後町竹野のこうもりの穴古墳(12.4m²)，丹後町竹野大成8号墳(注18)(11.4m²)，中郡大宮町新戸1号墳(12.1m²)(注19)，舞鶴市和江和江1号墳(11.7m²)があり，これらと並ぶ丹後地方でも最大級クラスの石室であることが判明した。

12号墳は，巨石を使用しているためか，墳丘裏込めの状況が他の古墳と異なっていた。すなわち，①使用される石材よりもかなり大きな墓坑を掘る。②墓坑傾斜に沿って置き土する。③この置き土を石材を置く部分だけ切り込む。④石材を置き裏込めをする。この①～④までの作業が墳丘高位側(東側壁)では3回くり返し行われていた。この置き土層は墓坑掘形の傾斜並で石室中軸線上までのびるような角度をもつが，2回目からは角度が鈍くなり，3回目の置土は地山削平面に平行している。この置き土は，石材搬入路として使用された痕跡を残すものと思われる。仮に石材搬入路として使用された場合，石室内にも土が充塡されており，石室完成後取り除かれたことになる。また，玄室内に限り見た場合西側壁が先に完成し，東側壁が最後になり，天井石が架構されたことになる。このことは，東壁奥隅に積まれている石材が小さいことからも窺われる。これらのことからすると，天

井石架構後，墳丘東側の溝が掘削され，その土砂が墳丘盛土として使用されたと推察される。また，この溝の東側には石室の用材として運ばれてきたと思われる長さ2m×幅1.3m程の扁平な安山岩が一石残されていた。12号墳は，この種の巨石古墳の築造方法を明瞭に示す貴重な一例となった。

調査したすべての古墳は，何らかの形で変形したり，倒壊寸前となっていたが，この原因として考えられることは，石材と石材の隙間を小石等で詰めておらず，土を充填しただけとなっていることがもっとも大きな要因となるが，基底石自体にも問題があるようである。基底石に大型の石材を用いても，表面積に対して奥行きがほとんどなく，薄い石材のため，安定感に欠けている。12号墳で見た場合，石室の表面にこだわったためか，石材が方形でなく，裏側が三角形状をなしている。底辺側の広い方側を石室内部に利用しているため，基底石上端が石室上方からの荷重によりすべり出たような形を呈する。他の古墳で見た場合，極端な表現をすれば，基底面に直角三角形をなす石材が比較的多く用いられており，底辺側を上端にするため，石室の荷重により逆「ハ」字形に開いたものと思われる。石室の変形については，石室自体の荷重だけでなく，地震や3号墳・5号墳のように石室上に立つ巨木による自然変形や，開墾，天井石の採石など二次的な要因も充分考えられるが，基本的には石材の積み方自体に問題があると考えられる。　　(増田孝彦)

(2) 出土遺物

古墳群から出土した遺物は膨大な量になる。これらの内訳は，須恵器・土師器の土器類と鉄製品類では鉄刀・刀子・鉄鏃等の武器類，轡・鞍・鉸具等の馬具類，鉄斧・鉋等の工具類，釘・留金具の金具類，金環・勾玉・切子玉・ガラス小玉・管玉等の装身具類である。

a 土器類

今回の調査で出土した土器は，総数261点におよぶ。そのほとんどが須恵器であり，土師器の割合は非常に低い。各古墳とも同様な状況であり，1基の古墳で杯・椀が2，3点のみの出土がほとんどである。須恵器では，蓋杯がその大半を占め，その他高杯・椀・台付椀・甕・長頸壺・短頸壺・特殊扁壺・平瓶・横瓶・甕等の器種がある。これらの中で今回特に注目されるものとして12号墳出土の特殊扁壺がある。この特殊扁壺と呼ばれているものは，京都府下では宇治市隼上り1号墳[注20]に続く2例目であり，全国でも7例目にあたるものである。この特殊扁壺を含め，特異な形態の須恵器については，その分布に偏りがあることが指摘されている[注21]。特殊扁壺の場合は，東海地方を中心に出土が知られているが，今回当地域から出土したことにより，分布圏を考えるにあたり再検討を要するものと思われる。

また，古墳群の造営時期については最も出土量の多い杯類をみると，おおむねTK43型

式からTK48型式，Ⅱ-4段階からⅣ-1段階に併行するものである。これらの中で最も古く位置づけられるものには，4号墳，7号墳出土の杯がある。しかし，高山古墳群全体でみた場合，京都府教育委員会が調査を行った1号墳出土の土器類の方がやや古い段階のものである。今回は保存のため，未調査である2号墳の時期は不明であるが，当古墳群の形成はおおむね6世紀後半頃より開始されたものと考えられる。6世紀末ないし7世紀初め頃には最も盛んに，築造及び追葬が行われており，7世紀末頃には追葬を終えている。細かな前後関係は，今後の検討課題とするが，以上が出土土器からみた高山古墳群の年代観である。　（森　正）

b 鉄製品

古墳群からは，環頭大刀柄頭，円頭・方頭大刀柄頭や刀装具に銀装を用いる装飾性の高い大刀類や，直刀・刀子，鉄鏃などの多量の武器類，轡・鞍・鉸具・革金具・鐙等の馬具類，鉄斧・鉋等の若干の工具類，釘・留金具等の金具類が出土した。馬具類については，金銅張製品が多く，装飾性の高いものである。

調査結果からすると，①装飾付大刀をもつもの，②直刀をもつもの，③刀子のみのもの，④鉄鏃のみしか有さないものの，4つの階層に分けられ，武器保有の階層性が顕著に表われており，直刀についてはさらに大・小の区別があるようである。また，馬具類については，出土する古墳も限られ，その量についても多少の差が認められる。馬具を保有する階層は，②の直刀をもつもの以上に限られ，その量により直刀の大・小に分かれる。鉄鏃の保有量も直刀の大を有するものから多くなるようで，12号墳で110本，3号墳70本と異常に多く，周辺で調査された古墳では湯舟坂2号墳と並ぶもので，環頭大刀が出土するような大型墳の中でも多い本数である。また，装飾付大刀を有する古墳（3・12号墳）からは，他の古墳とくらべ墳丘・石室規模とも大きくなり，武器の保有量の差とともに階層の差を見ることができる。1号墳の場合は，12号墳を除き片袖式の石室の中では，最大規模（全長12.15m，玄室長5.7m，玄室幅2.1～2.25m，床面積12.37m^2）を有し，鉄地金銅張雲珠，鉄地金銅張であったと思われる辻金具を有していたが，豊富な土器の量に対し武器の保有量が少なく，直刀についても小にランクされるもので3号墳より下層の階級と考えられる。

以上のように，高山古墳群中では段階の差が認められ，12号墳は古墳群中では，最上層に位置し，ア．12号墳，イ．3号墳，ウ．1号墳，エ．6号墳，オ．7号墳，カ．5号墳と分かれる。未調査（保存）古墳が2基（2・13号墳）が存在するが，使用されている石材，墳丘規模からするとイが13号墳，ウが2号墳となり，馬具を有していても直刀の大が出土するものは，古墳群中では上層に位置する。これらのことは，本古墳群だけでなく，武器が出土した古墳の階層を考えても同様なことが言え，12号墳は古墳群中で頂点に位置し，

周辺支配地域においても，軍事的に最も高い地位にあったと考えられる。

高山古墳群は，6世紀後半段階に横穴式石室を内部主体として，首長墓を含む9基の古墳が，丘陵広範囲にわたって築造されたものである。その後，7世紀代に数次にわたる追葬が行われ，もっとも長く使用されていたものは8世紀に至るまで追葬が行われている。3号墳では10世紀に再利用も行われた痕跡を残している。首長墓である12号墳は，旧街道沿いとはいえ丘陵のもっとも奥まったところに位置しており，やや不自然な感じを受ける。この地は，日本海と内陸部を結ぶ陸路の重要な位置を占めていたと思われる。

出土した環頭大刀柄頭については，「軍事政権の象徴として，大和政権から地方の政権へ下賜されたもの」とする意見と，別のルートを想定する意見がある。また，全国で7例目の出土となった，特殊扁壺については，従来，東海地方の影響を受けた地域のみ出土しており，日本海側では初の出土であり，今後その分布範囲が広がる可能性があるとともに，その地域間の交流も問題化されよう。また，古墳の分布は，通常の群集墳と異なり古墳間が大きく離れており，近接して築かれているのは，1・2号墳，5・6号墳，12・13号墳の2基一組3グループのみであり，他は単独であるといっても過言ではない。これらのことについては，造墓階層(共同体)の違いにより古墳築造場所の限定がなされているのかも知れない。

カマドを持つ住居跡については，出土した遺物およびカマド使用状況からして，ごく短期間のみ使用されたものであり，その性格等については不明である。ただ，丘陵最高所に単独で存在することから，古墳築造，古墳に関係した住居と考えられる。

集積・積石塚状のものについては，丘陵上に小集落が形成されていたことを示唆したものであり，古墳築造以後の丘陵の開発が進められていた痕跡を残すものであった。その後現代に至るまで墓地として使用され，丘陵全体が奥津城となっている。

今回の調査は，群集墳の大半を調査し，その内容を明らかにすることができたが，出土遺物が膨大であることからすべてを掲載することができなかった。鉄器類については今後整理するに従って実数は増加すると思われる。各古墳の成果についても不充分なところがあり，今後，これらの資料が整理できしだい，当調査研究センターの機関誌『京都府埋蔵文化財情報』に掲載する予定である。

(増田孝彦)

(2)　普甲古墳群・稲荷古墳群

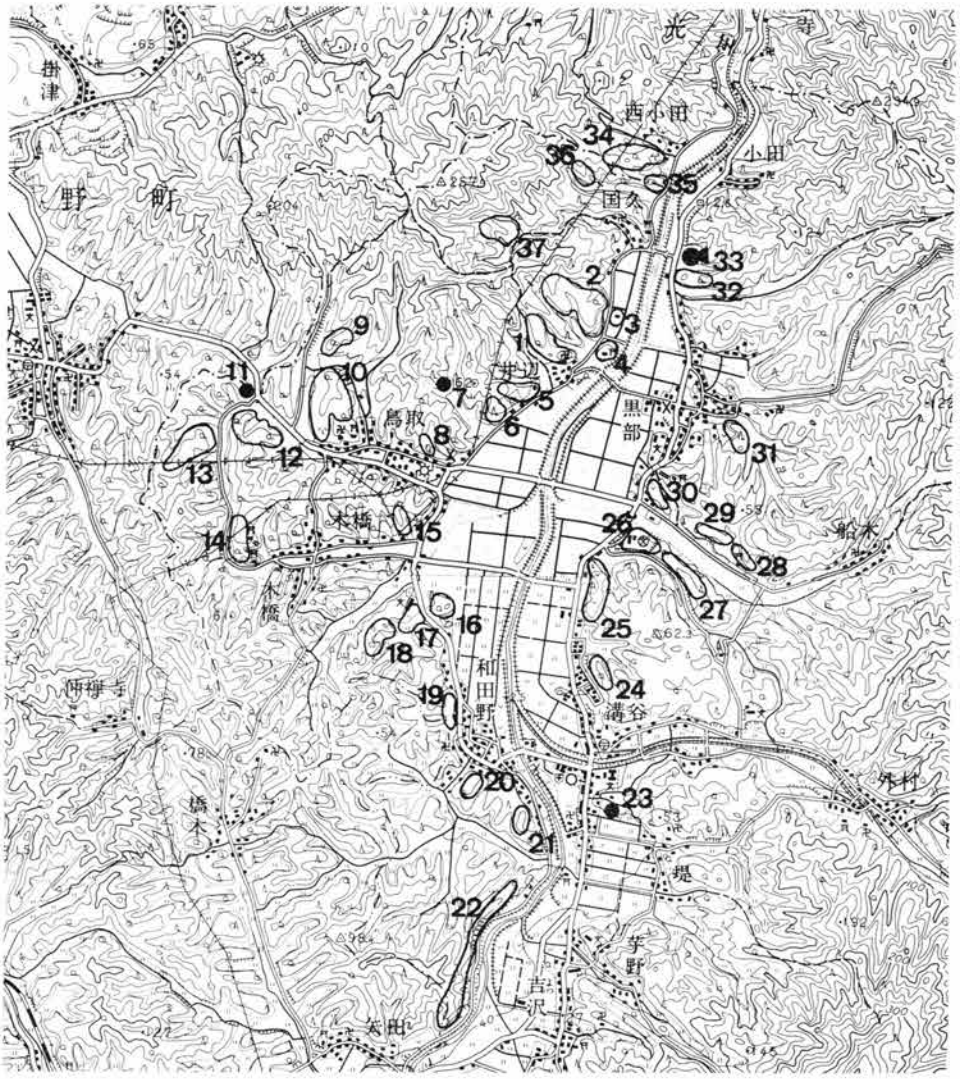
1.　位置と環境

普甲古墳群・稲荷古墳群は，京都府竹野郡弥栄町字井辺小字普甲・小普甲に所在する。弥栄町は丹後半島のほぼ中央部に位置し，当地域最大の河川であり北流して日本海に注ぐ竹野川の中流域にあたる。この竹野川が形成した沖積地を囲むように，多くの遺跡が分布する低丘陵・台地が広がっている。両古墳群は，その平野部のなかほど，左岸の井辺集落北方で東に向かってのびる低丘陵上に分布している。

弥栄町においては，旧石器・縄文時代の遺跡は確認されていない。弥生時代になると特に中期以降，右岸台地上に位置する奈具[注22]・奈具岡[注23]両遺跡の二大集落を中心に，活発な開発が行われる。奈具遺跡は中期，奈具岡遺跡は後期にそれぞれその盛期をむかえ，古墳時代以降も連綿と集落・墓域として利用されている。墳墓の様相で特筆されるのは，奈具岡遺跡から竹野川をはさむ対岸の丘陵にある坂野丘遺跡である[注24]。弥生中期から後期に比定されており，自然地形を利用した墳丘に木棺を直葬したものであるが，800個もの大量の玉類が出土している。その他の状況は，今一つ明らかでないが，丹後町大山墳墓群[注25]・大宮町帯城墳墓群等[注26]で確認されているような方形台状墓群が，丘陵上に営まれているものと考えられる。

古墳時代になると，竹野川右岸の丘陵先端部に畿内勢力との密接な関係のもとに大型前方後円墳である黒部銚子山古墳が築造される。全長105mを測り，円筒埴輪・葺石・段築をそなえる。しかし，これ以後首長墓は縮小し，当古墳群から西へ約2.5kmの網野町へぬける道沿いにあるニゴレ古墳[注27]にその姿を見ることができる。径30mの円墳で，墳丘には甲・盾・舟等の形象埴輪を樹立し，短甲・衝角付冑等の鉄製武器類が出土している。後期になると当古墳群の南3.5kmの左岸丘陵上に太田2号墳[注28]が築造される。径34mの円墳で，内部主体は木棺を直葬するものであるが，墳頂部と墳丘裾には，円筒埴輪が隙間なく並べられていた。これら首長墓と対照的に，低丘陵上には小規模な木棺直葬墳が数多く築造されている。近年これら小規模古墳の把握・調査が進みその内容が徐々に明らかになっている。ゲンギョウの山古墳群[注29]・宮の森古墳群[注30]・西小田古墳群[注31]・奈具谷古墳群[注32]・今回調査の普甲古墳群等である。これらの中には後期の築造になるものもあり，この種の墓制についてはその系譜，構造，首長墓との関係等，今後検討しなければならない問題点が多く残されている。後期古墳で横穴式石室を内部主体とするものには，塚田古墳群・石穴古墳・ゲンギョウの山1号墳等がある。

（笠原勝彦・森　　正）



第74図　周辺主要遺跡分布図 (1/50,000)

1. 普甲古墳群	2. 稲荷古墳群	3. 国原古墳群	4. 穂曽長古墳群
5. 小宮谷古墳群	6. 桑田古墳群	7. 黒奥古墳群	8. 大将軍古墳群
9. ゲンギョウの山古墳群	10. 宮の森古墳群	11. ニゴレ古墳	12. 鳥取古墳群
13. 遠所古墳群	14. 奥の院古墳群	15. 堤谷古墳群	16. 坂野丘遺跡
17. 坂野遺跡	18. オテンジ古墳群	19. 寺谷古墳群	20. 愛宕山古墳群
21. 古天皇古墳群	22. 大田古墳群	23. いもじや古墳	24. 久原古墳群
25. 奈具岡遺跡	26. 奈具遺跡	27. 奈具古墳群	28. 福西古墳群
29. 新宮古墳群	30. 新谷古墳群	31. 大内古墳群	32. 弓木古墳群
33. 黒部銚子山古墳	34. 愛宕山古墳群	35. 西小田古墳群	36. 岡田古墳群
37. 塚田古墳群			

2. 調　査　経　過

普甲古墳群・稲荷古墳群は，分布調査等によって13基・19基の古墳の存在が確認されていた。なお，昭和47年版『京都府遺跡地図』では，稲荷古墳として1基の古墳が登録されているがどの古墳に当たるのか不明である。そのうち今回の造成に係り，調査の対象となったのは，普甲古墳群では1～7号墳の7基，稲荷古墳群では15・17～19号墳の4基の古墳である。さらに，現地踏査の結果テラス状の地形や不自然な地形の認められた地点において，試掘トレンチ(A～D)を，試掘Dトレンチの南側谷部において，須恵器・土師器等の遺物散布が見られた地点に試掘Eトレンチの計5か所の試掘トレンチを設定して古墳群の調査と並行して行った。

調査は，古墳の埋葬施設を検出するとともに，古墳築造方法を明らかにすることおよび，関連遺構を確認することを主な目的として，墳丘部およびその周辺部分の掘削も行った。試掘対象地の掘削も合わせると，調査面積は両古墳群併せて約3,800m²に及んだ。

現地調査は，伐採終了を待って順次地形測量を行い，6月1日よりまず稲荷古墳群のほうから掘削を開始した。稲荷17～19号墳の位置する丘陵の稜部平坦地は，戦中・戦後の開墾の痕跡が各所みられた。また，稲荷15号墳は当初，わずかにテラス状の地形を呈していたが，1基離れて位置していることもあり，現状では古墳である可能性は低いと考えられた。さらに北側が造成対象外になっていたため試掘対象地として調査を開始した。普甲古墳群では，掘削範囲が広大であったため，すべての古墳の表土を除去した後，埋葬施設の検出・掘削作業を行った。その結果，両古墳群において木棺直葬墳11基およびこれに伴う埋葬施設17基を検出した。実測作業及び写真撮影はその都度行い，12月9日にはすべての現地作業を終了した。なお，現地説明会は11月25日に行っている。

3. 古墳群の分布

普甲・稲荷両古墳群はすでにふれたように，竹野川中流域左岸の丘陵上に位置しており，周辺の丘陵上には，同様な古墳群が比較的密に分布している。ここでは両古墳群の分布状況を概観しその特徴を指摘してみる。

①普甲古墳群(第75・76図A)

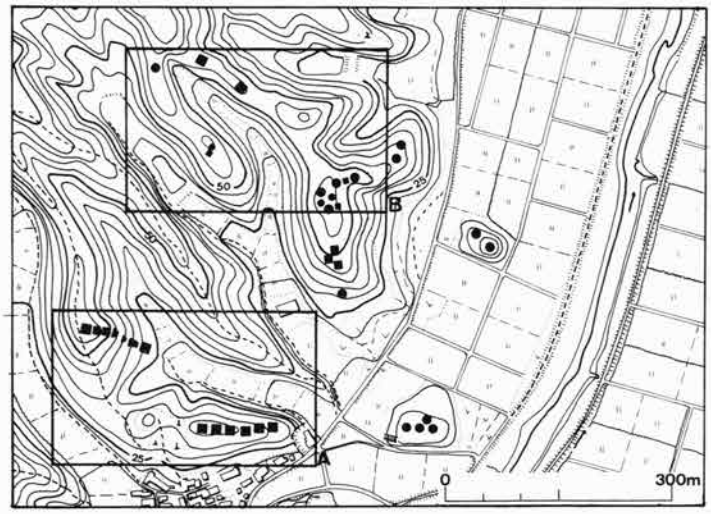
普甲古墳群は，南西に向かって派生する丘陵上に，2つの群を形成して総数13基の古墳が分布している。まず北側の一群であるが，これは今回調査の対象となったもので，1～7号墳までの7基が分布している。1～3号墳は，傾斜の緩やかな部分に位置しており，これより先端部は，急傾斜になり階段状を呈する4～7号墳が位置している。尾根基部で最高所に位置する1号墳は，標高56m付近にある。尾根先端に位置する7号墳は，標高31m

付近にあり，その比高差は約25mを測る。1号墳からは，南に向かいさらに派生する丘陵がのびておりその先端部分，井辺集落の北側に8～13号墳の6基で構成される1群がある。これらは，丘陵稜線上に連接しており，尾根主軸に直交する溝により区画されている。そのため，いずれも方形を呈するものである。規模は，1辺10m程度でありそれぞれ近似している。いずれも現状での墳丘高は0.2～0.5m程度であり，木棺直葬墳と考えられる。これらの位置する部分は丘陵上で，ほとんど傾斜のない平坦な地形である。最も先端にある13号墳のみやや下がったところにあり，標高32mを測る。

②**稲荷古墳群**(第75・76図B)

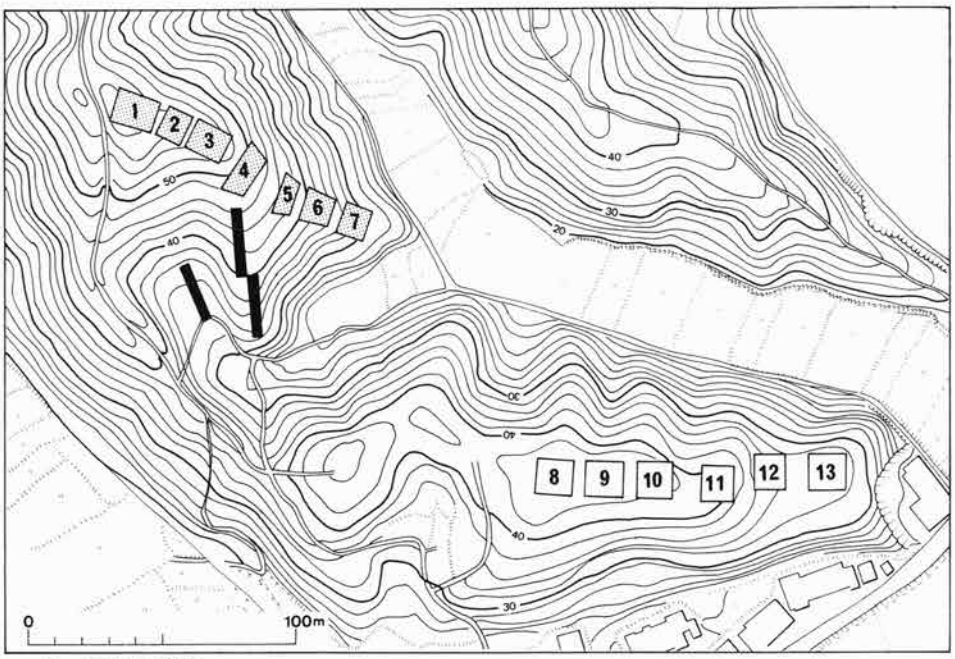
稲荷古墳群は，普甲古墳群の分布する丘陵から尾根一つ隔てた同じく南東に向かってのびる丘陵上に，総数19基の古墳が分布している。そのうち1～14号墳までは，先端部で派生する二本の尾根に分かれている。この中には径20mの円墳である1号墳や，テラス状を呈する5号墳などが混在している。15・16号墳は，前者から約150mの間隔を開けて位置する。ともに8m程度のテラス状を呈する古墳である。さらに16号墳のやや上方から派生する尾根上に17～19号墳が位置している。これらの古墳は，いずれも木棺直葬墳と考えられるが，9号墳のみ石材が露出しており横穴式石室を内部主体とするものと推定される。

以上が両古墳群の分布状況である。いずれも主な埋葬施設として木棺を採用している点は共通するが，その分布状況には幾つかの相違点が認められる。まず普甲古墳群ではすべて丘陵稜線上に連接しているのに対して，稲荷古墳群では1～5号墳のように丘陵頂部の平坦面にやや密集して分布するものや，15～19号墳のように各古墳間に距離がありまばらな分布を示すものもある。また，普甲古墳群が基本的には方形であるのに対して，稲荷古墳群では群中に明らかに盛土を持った円墳が混在している。その中には，1号墳のように径20m程の規模を持ち盟首墳的な存在も認められる。

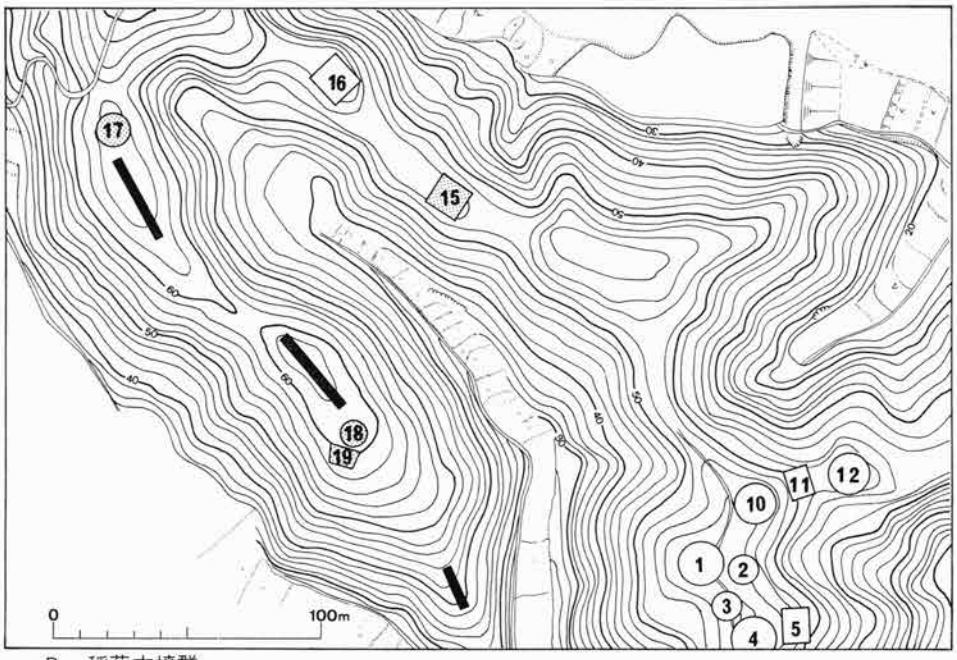


第75図　古墳群分布図(1)

(森　正)



A．普甲古墳群

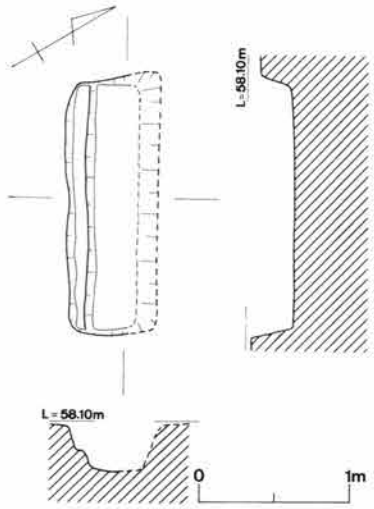


B．稲荷古墳群

第76図　古 墳 群 分 布 図 (2)

4. 調 査 概 要

①普甲1号墳　1号墳は，当古墳群の分布する尾根の基部，標高58m付近に位置する。ここでは2号墳との間は浅い溝によって区画されているが，その他は自然地形を最大限に利用しており，7基の埋葬施設と2基の小土坑が造られている。明確な墳形・墳丘を意識しておらず土坑墓群と理解できるが，ここでは記述にあたっての便宜上1号墳として扱う。

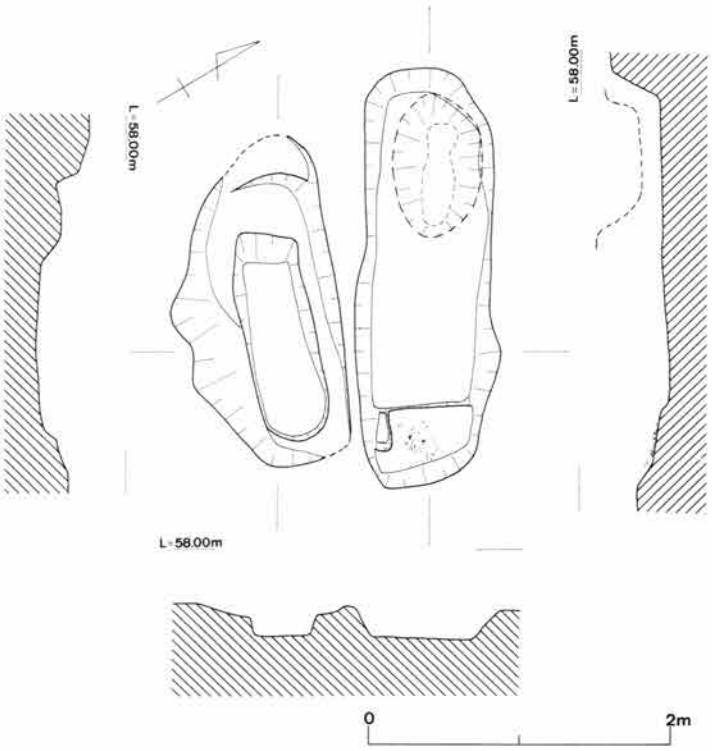


第77図　普甲1号墳第1主体部実測図

埋葬施設　尾根基部の平坦部分において5基，南側斜面に2基の埋葬施設を検出した。

第1主体部(第77図)　1号墳の最高所，平坦面のほぼ中央に位置する土坑墓である。断ち割りによって確認したため，北側の詳細は不明である。墓坑は，隅丸長方形を呈し2段掘形をもつ。長辺1.7m×短辺0.5m以上で，検出面からの深さ0.3mを測る。主軸は，尾根方向に平行にとる(N60°E)。墓坑底は，東から西に向かいわずかに傾斜する。

第2主体部(第78図)　第1主体部の東側約4m離れた地点に位置する。墓坑は，隅丸長方形を呈し，長辺2.8m×短辺0.9m，検出面からの深さ0.2mを測る。主軸は，尾根方向と平行にとる(N58°E)。東小口部には，地山を段状に削り残す施設がある。墓坑底部との比高は10cmを



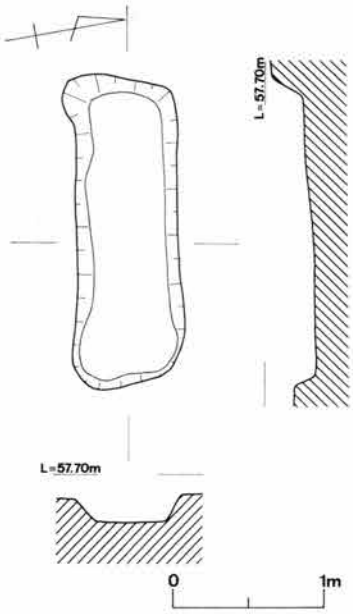
第78図　普甲1号墳第2・3主体部実測図

測る。棺の有無は，不明である。墓坑底部は，西から東に向かいわずかに傾斜する。

遺物は，滑石製玉類(勾玉２・棗玉48)が段状施設上面から出土した。墓坑内に副葬されたものである。

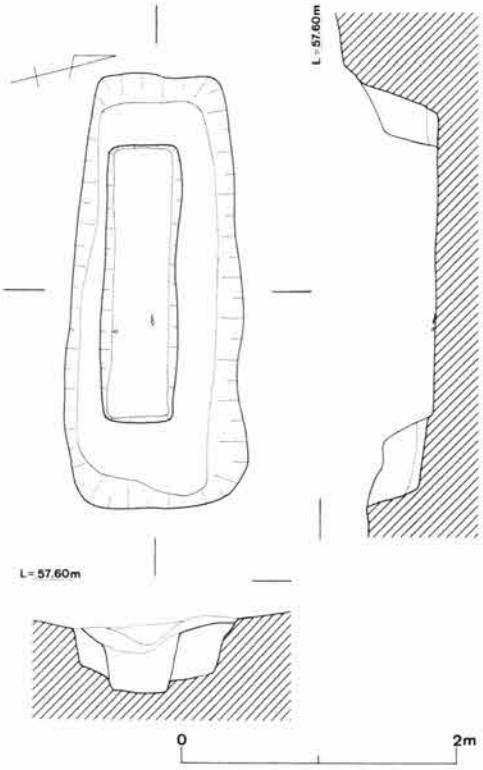
第３主体部(第78図)　第２主体部の南側に位置する土坑墓である。墓坑はいびつな隅丸長方形を呈し長辺2.1m×短辺0.9m，検出面からの深さ0.2mを測る。２段掘形である。主軸は，ほぼ尾根の方向に平行にとる(N62°E)。

第４主体部(第79図)　第３主体部の南側に位置する土坑墓である。墓坑は，隅丸長方形を呈し，長辺2.0m×短辺0.7m，検出面からの深さ0.3mを測る。主軸は，ほぼ尾根の方向に平行にとるが第３主体部より若干西に振る(N80°E)。墓坑底は西から東に向かい若干傾斜する。



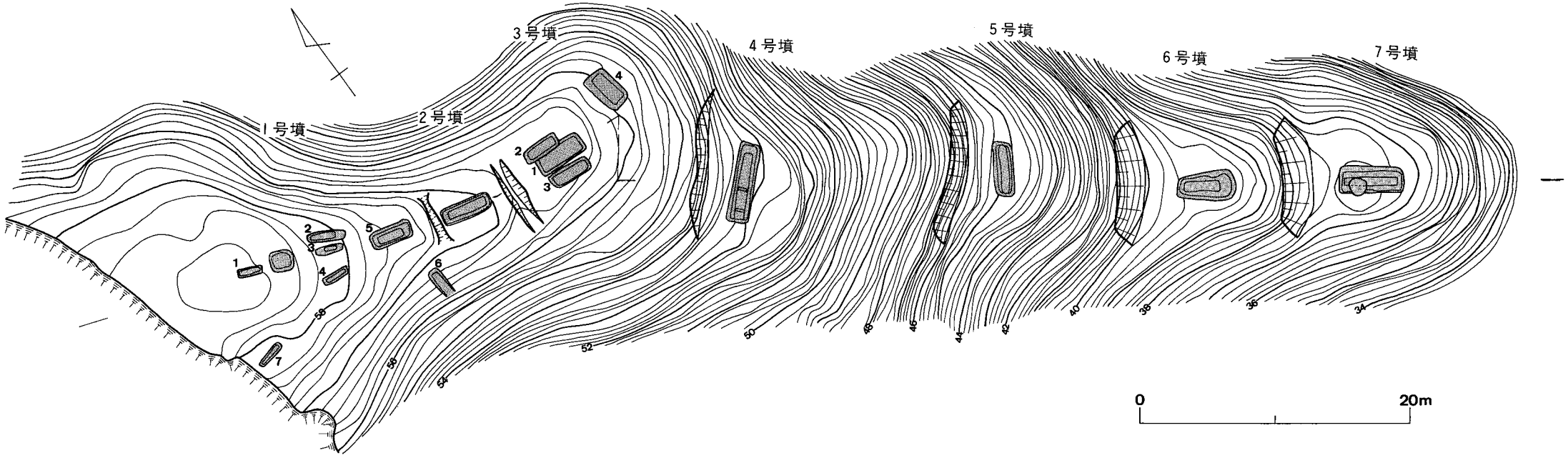
第79図　普甲１号墳第４主体部実測図

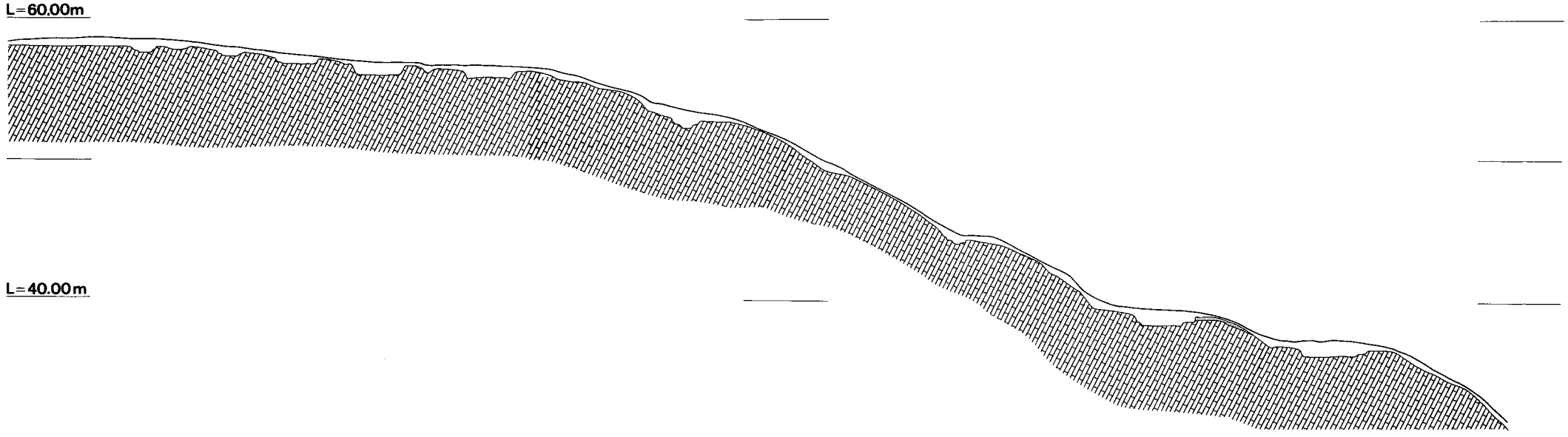
第５主体部(第80図)　第２・第３主体部の東側，１号墳ではもっとも東に位置する木棺墓である。墓坑は，地山面より２段に掘り込まれている。長辺3.1m×短辺1.2m，深さ0.7mを測り，東側がやや幅広の隅丸長方形を呈する。主軸は尾根方向に平行にとる(N75°E)。下段は，墓坑のやや南寄りにあり長辺は段をなすが，短辺は段がない。棺は，組合式木棺と推定され，長さ1.9m・幅0.4m・深さは約0.5mを測る。墓坑底部は，東から西に向かいわずかに傾斜する。１号墳の中では最も大きく，墓坑規模・木棺の状況等，２号墳主体部に類似する。遺物は，棺底中央部より針状鉄製品と不明鉄片が出土している。



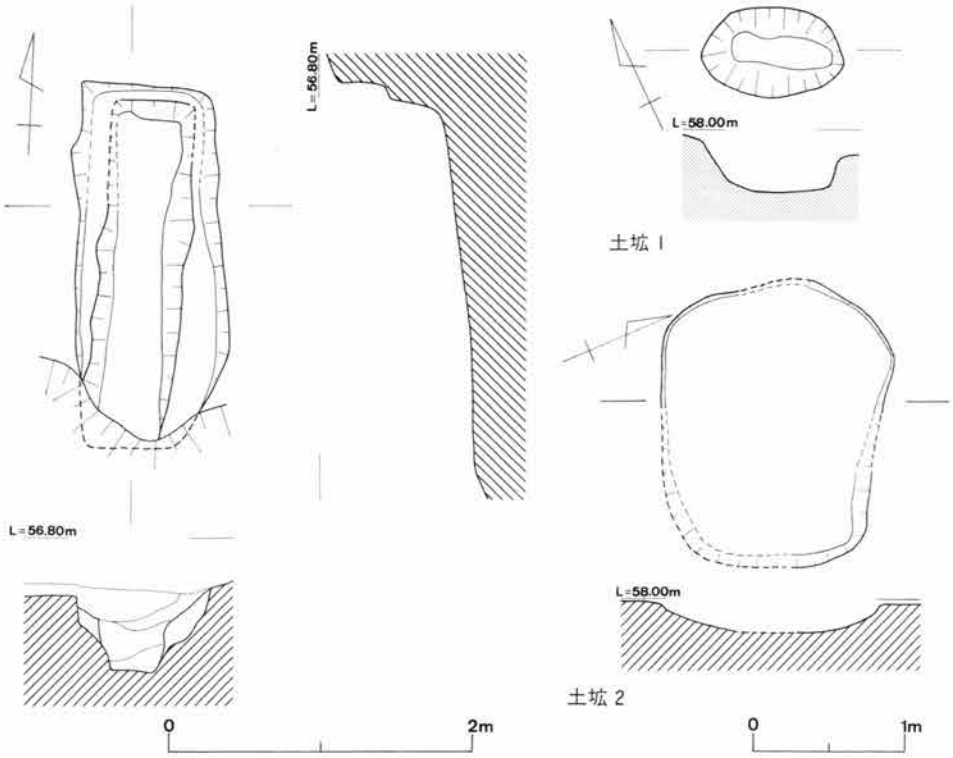
第80図　普甲１号墳第５主体部実測図

第６主体部(第82図)　第５主体部の南斜面に位置する木棺墓である。墓坑は，南端

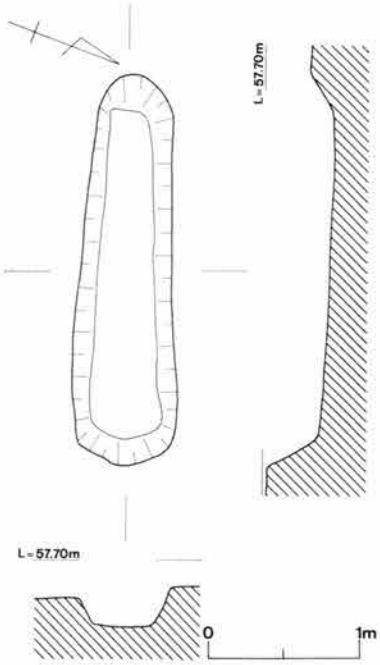




第81図　普甲古墳群地形図



第82図　普甲1号墳第6主体部・土坑1・2実測図



第83図　普甲1号墳第7主体部実測図

を流出しているが隅丸長方形を呈し，地山を2段に掘り込んでいる。長辺2.3m×短辺0.9m，深さ0.9mを測る。主軸は，尾根方向に直交する方向にとる(N3°W)。木棺は，箱形木棺と推定される。規模は，南端が流出しており，長さが不明であるが，小型の棺であったものと思われる。長さ2.0m・幅0.3m程度であろう。棺底部は，北から南に向かいわずかに傾斜する。

第7主体部(第83図)　第1主体部の南側6mの地点に位置する土坑墓である。尾根上の平坦地が南斜面に向かいわずかに傾斜しており，墓坑周辺部のみ若干平坦に造成している。墓坑は，西側短辺が丸い長方形を呈し，長さ2.6m×幅0.7m，検出面からの深さ0.4mを測る。主軸はほぼ尾根方向と平行にとるが1～5主体部よりは北側に振っている。墓坑底

部は，東から西に向かいにわずかに傾斜する。

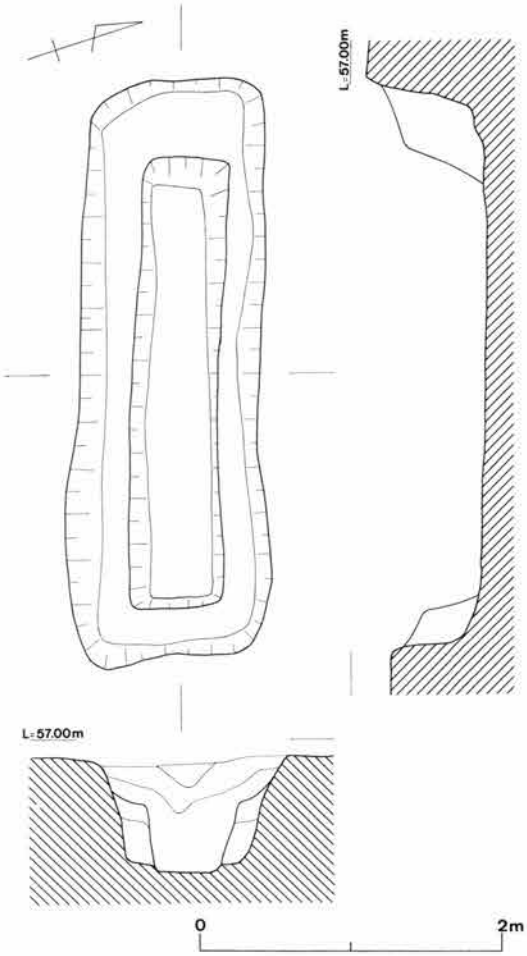
その他の遺構　1号墳では上記埋葬施設のほかに，性格不明の土坑を2基検出した。

土坑1は，第2主体部の墓坑埋土に掘り込まれている。東西に長い長楕円形を呈し，長軸0.96m・短軸0.6m・深さ0.36mを測る。土坑からは，11点の玉類(勾玉3・管玉2・小玉6)が出土した。これらの玉類は，東端で5点，南端で2点が出土したが，個々の出土レベルには約15cmの差があり土坑埋土中に混入した状況である。また，4点については埋土水洗を行った結果，確認したものである。

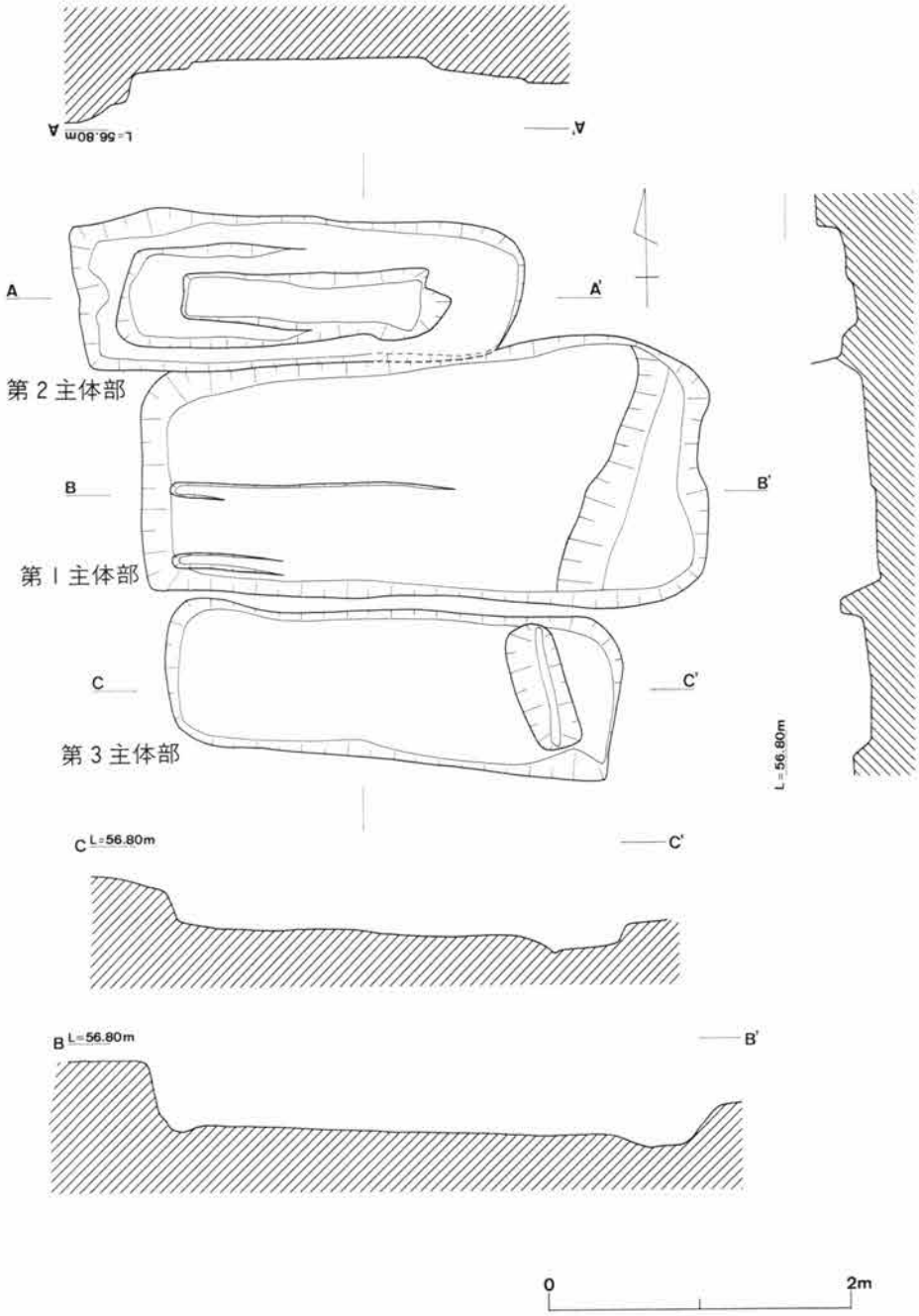
土坑2は，第1主体部と第2主体部の中間点に位置する。断ち割りの際に確認したもので，隅丸長方形を呈する。規模は，南北1.48m・東西1.92m，検出面からの深さ0.2mを測る。

②普甲2号墳(第84図)　1号墳の東，尾根稜部の平坦面に築かれている。1号墳と3号墳のほぼ中央に位置し，両古墳とは溝によって区画されている。西側の溝は幅0.4m，東側の溝は幅1.5mを測るが，特に東側の溝の断面を見ると東側の角度が緩やかであり，3号墳を意識しているものと思われる。墳丘は，地山を削り出し整形しているため溝のない南北側は，自然地形との区別がつかない。東西の溝間は5.4mを測る。

埋葬施設　二つの溝によって区画された平坦面の若干東よりに位置する木棺墓を1基検出した。墓坑は，隅丸長方形を呈し長辺3.8m×短辺1.2m，深さ0.7mを測る。主軸は，尾根方向と平行にとる(N70°W)。墓坑底部には長さ2.7m・幅0.4m・深さ0.05mの浅い掘り込みが設けられ，これと墓坑内四壁にある裏込め土によって箱形の木棺を固定させたと推定される。棺の規模は長さ3.0m・幅0.45m・深さは約0.5mを測る。墓坑底は，西から東に向かいわずかに傾斜する。



第84図　普甲2号墳主体部実測図



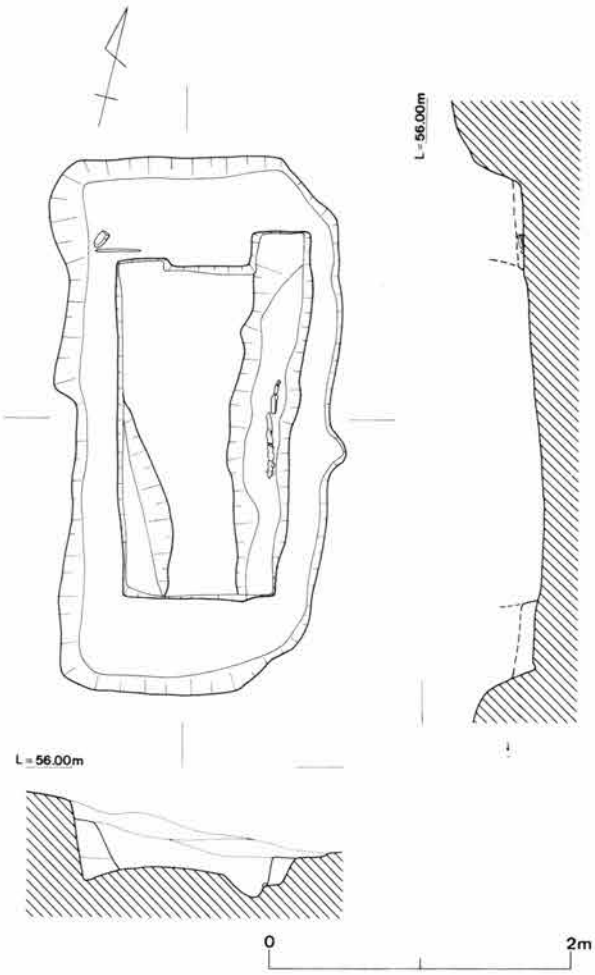
第85図　普甲3号墳第1・2・3主体部実測図

③普甲3号墳(第85・86図)

尾根が南方向に屈曲する比較的広い平坦面に位置しており，最も好立地を占める。2号墳とは溝によって区画されている。東側斜面には，標高55.6m付近で若干の傾斜点が認められるが，南北斜面には巡らず墳形はあまり意識されていないようである。

埋葬施設　墳丘の中央部で主軸を同じくする3基，東側斜面に1基の埋葬施設を検出した。

第1主体部　墳丘のほぼ中央に位置する。墓坑は，東側の膨らんだ隅丸長方形を呈し，長辺3.74m×短辺1.48m，検出面からの深さ0.28mを測る。主軸は尾根方向と平行にとる(N90°W)。墓坑底部南寄りに，幅10cm程度の溝が2本掘り込まれている。これは，木棺の側板を固定するためのものである可能性もあるが，木棺相当部の土層を断面においても確認していないので木棺を使用していたかどうか不明である。

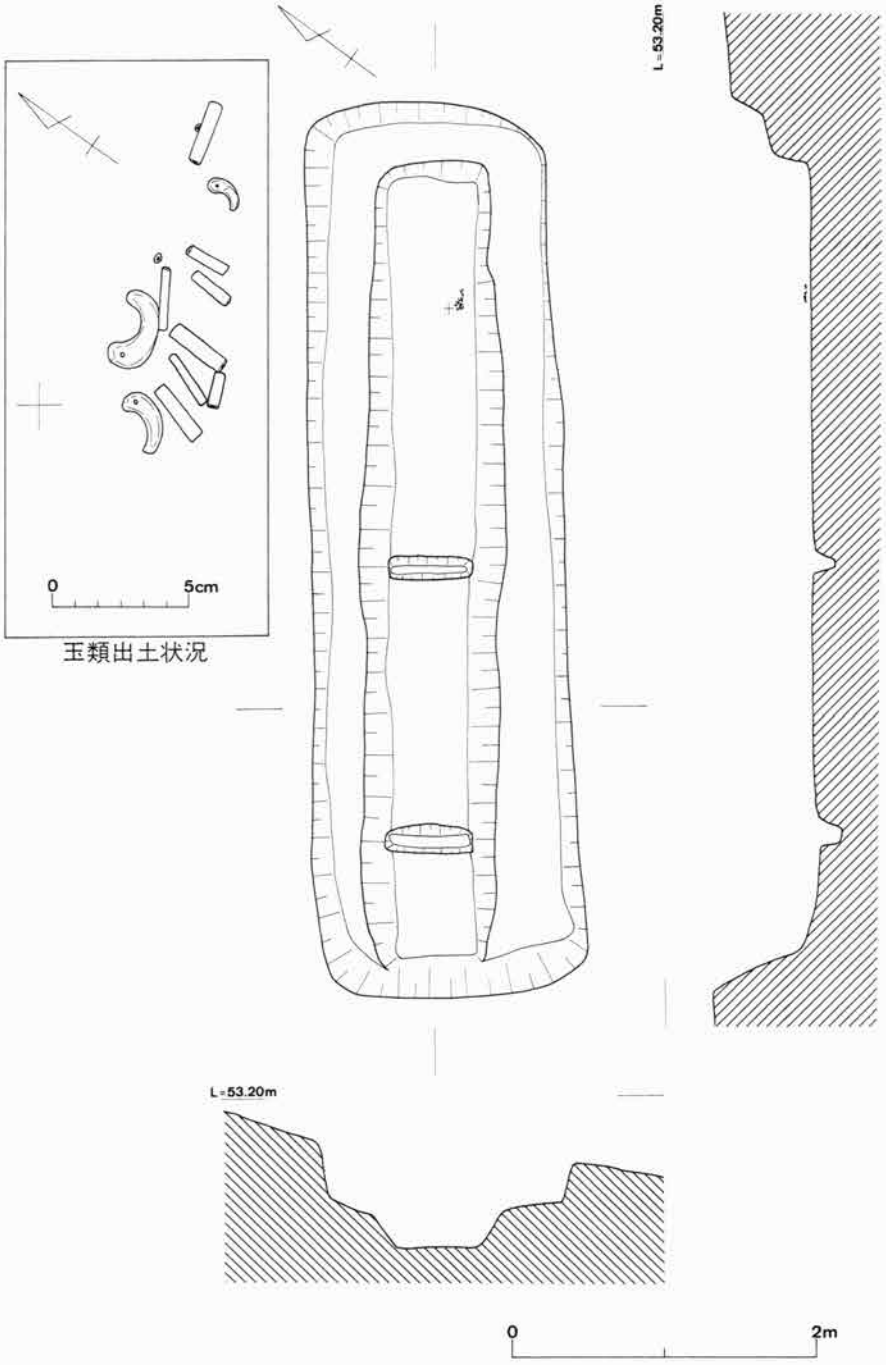


第86図　普甲3号墳第4主体部実測図

第2主体部　第1主体部の北側にあり，同方向に主軸をとる。墓坑は，隅丸長方形を呈し，長辺2.94m×短辺0.92m，検出面からの深さは0.3mを測る。東側は2段，西側は一部3段に掘り込まれている。木棺相当部分の土層は確認し得なかった。墓坑南長辺は第1主体部を切っていることから第1主体部の方が先行して造られたと考えられる。

第3主体部　第1主体部の南側に平行して設けられている。墓坑は，隅丸長方形を呈し，長辺3.0m×短辺0.95m，検出面からの深さ0.15mを測る第1・第2主体部と同様に木棺に相当する土層は確認し得なかった。第1～第3主体部では，出土遺物は全くない。

第4主体部　墳頂部より東側にやや下がった，緩やかな斜面に位置する。墓坑は，やや



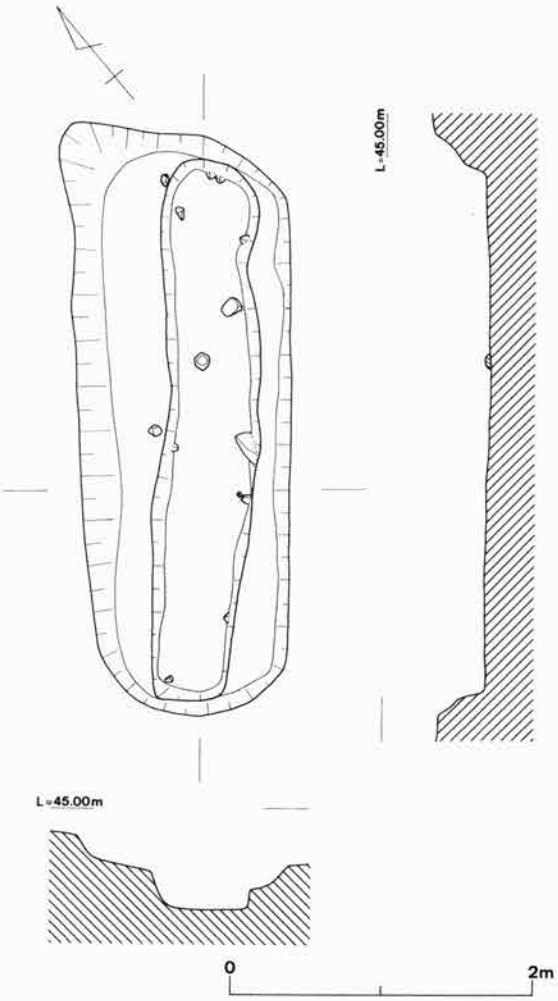
第87図　普甲4号墳主体部実測図

幅広の隅丸長方形を呈し，長辺3.54m×短辺1.66m，検出面からの深さ0.46mを測る。主軸は，尾根方向に直交させている(N13°E)。墓坑内では，木棺相当部の土層を確認しており，箱形木棺と推定できる。墓坑底は，北から南に向け傾斜する。長さ2.20m・幅1.04m・深さ約0.14mを測り，北側では両側板が小口部より突出している。遺物は，棺内東壁に鉄剣1口が切先を南に向けて置かれていた。棺外では，北側小口部分から鉄斧・鉋が1点ずつ出土した。

④**普甲4号墳**(第87図)　4号墳は，3号墳の東南，標高52.5m付近に位置する。尾根稜部を階段状に削り，南北10m・東西7mの台形を呈する平坦面を造る。顕著な盛土は認められず，北・東・南側斜面は，いずれも整形されておらず，明確な墳丘裾は意識されていない。

埋葬施設　平坦面西よりに，主軸を尾根方向に直交させる木棺墓1基を検出した(N55°E)。墓坑は，地山を2段に掘り込むもので，隅丸長方形を呈する。長辺5.96m×短辺1.68m，検出面からの深さ0.6mを測る。下段は，墓坑中央に長さ5.45m・幅1.36m・深さ0.26mにわたり掘り込まれるが，南側には段がない。下段底部には，中央と南よりに溝状の掘り込みがある。木棺に相当する土層は確認し得なかったが，底部の溝が小口板あるいは仕切り板を固定するための施設と考えられることから組合式の箱形木棺を想定できる。遺物は，平坦面の西側4号墳造成にあたり削られた崖に接して土師器3点(高杯・壺・小型丸底壺)が出土した。棺内では，北東隅から玉類13点が出土した。

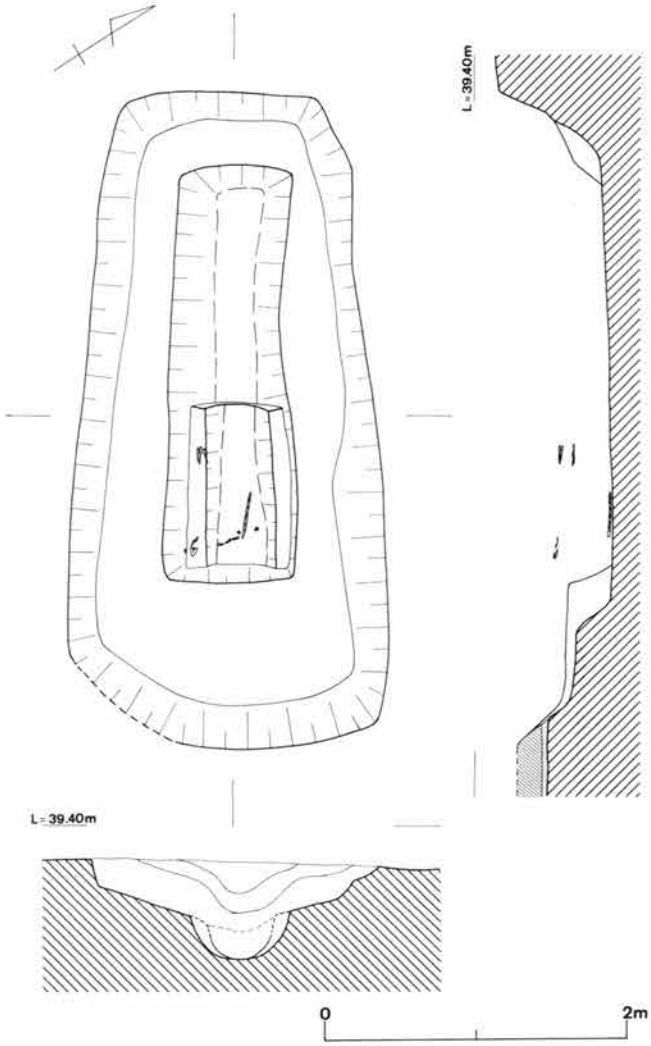
⑤**普甲5号墳**(第88図)　4号墳と同様に尾根を階段状に削りだし，平坦面を造り主体部を1基設けている。平坦部は，標高約45mで南北10m・東西5m程度の台形を呈する。



第88図　普甲5号墳主体部実測図

埋葬施設　平坦面のほぼ中央に位置し，主軸を尾根方向と直交させる(N40°E)。墓坑は，地山を2段に掘り込んでおり，北側がややいびつな隅丸長方形を呈する。長辺3.82m×短辺1.38m，検出面からの深さ0.5mを測る。木棺相当部の土層は確認し得なかったが，下段掘形から推すと箱形木棺を使用していたと考えられる。墓坑底部は北から南に向かいわずかに傾斜する。

⑥**普甲6号墳**(第89図)　同じく階段状の地形を造っているが，平坦面は4・5号墳に比べ東西方向に長い台形を呈する。標高は，約39.5mであり南北9m×東西8mを測る。また，東半部においては，20cm程度土を敷いて平坦面を確保している。南北斜面は，ほぼ自然地形のままである。



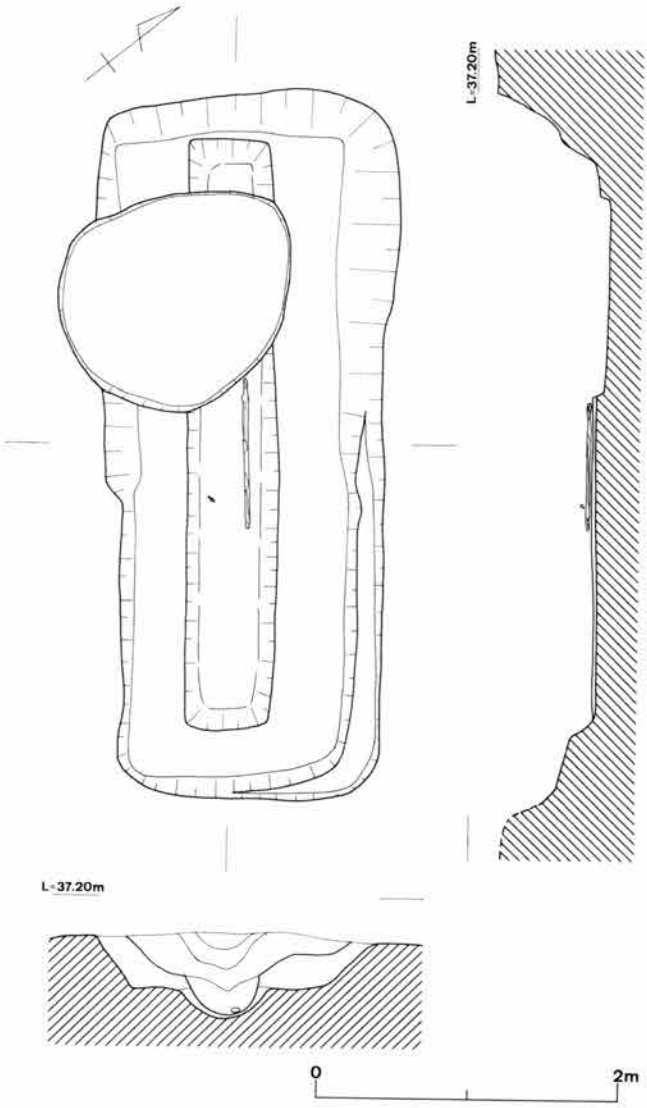
第89図　普甲6号墳主体部実測図

埋葬施設　平坦面のやや南よりに位置する木棺墓を1基検出した。墓坑は，東側が膨らむ隅丸長方形を呈し，地山を2段に掘り込む。長辺4.32m×短辺1.94m，検出面からの深さ0.7mを測る。東半部においては，造成の際の置土から掘り込んでいる。主軸は，尾根方向と平行させる(N58°W)。木棺は，墓坑下段の断面がU字形をなし，割竹形木棺と推定される。長さ2.68m・幅0.44m・検出面からの深さ0.2mを測る。また，木棺部下方には，棺を安定させるためと思われる粘質土が敷かれている。棺底は，東から西に向かいわずかに傾斜する。遺物は，棺内か

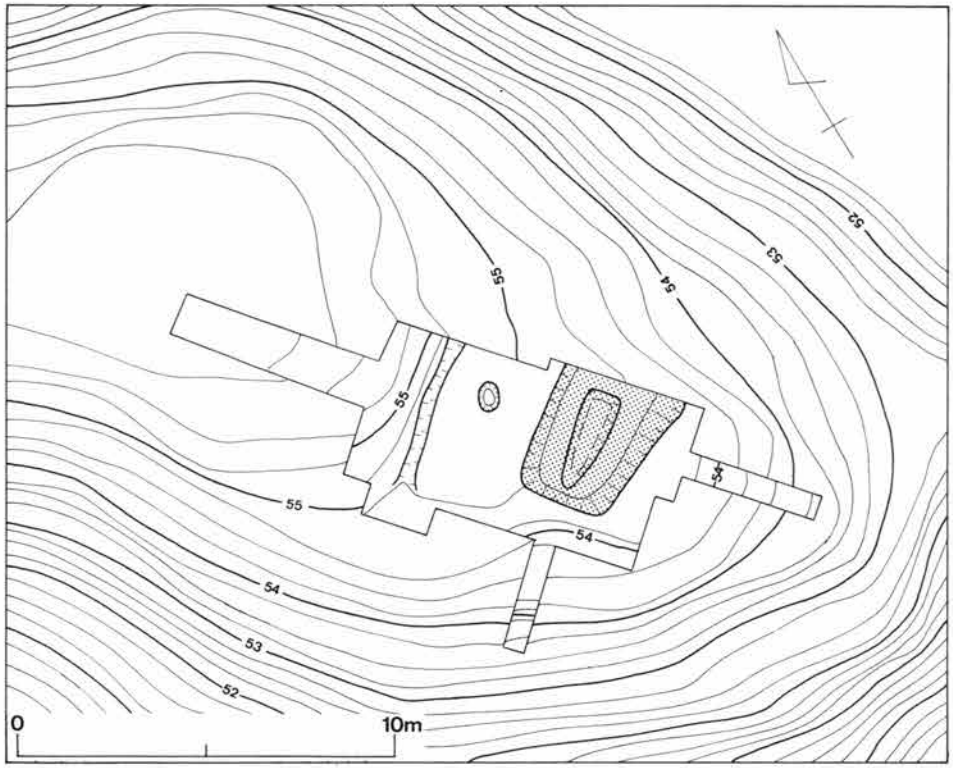
ら鉄剣１口・竪櫛２点と黒漆の被膜が出土した。鉄剣は，切先を北に向けて置かれており，南側に頭位を向けたものと推定できる。棺上ないし棺側と考えられる部分より鉄鏃７本が３群に分かれて出土した。

⑦普甲７号墳(第90図)　６号墳南東の尾根先端部，標高37m付近に位置する。墳丘は，尾根稜部を階段状に削った後，西端に浅い溝を設ける。平坦面は，南北9m・東西10mの長台形を呈する。顕著な盛土は認められず，北・東・南側斜面の整形も行っていない。

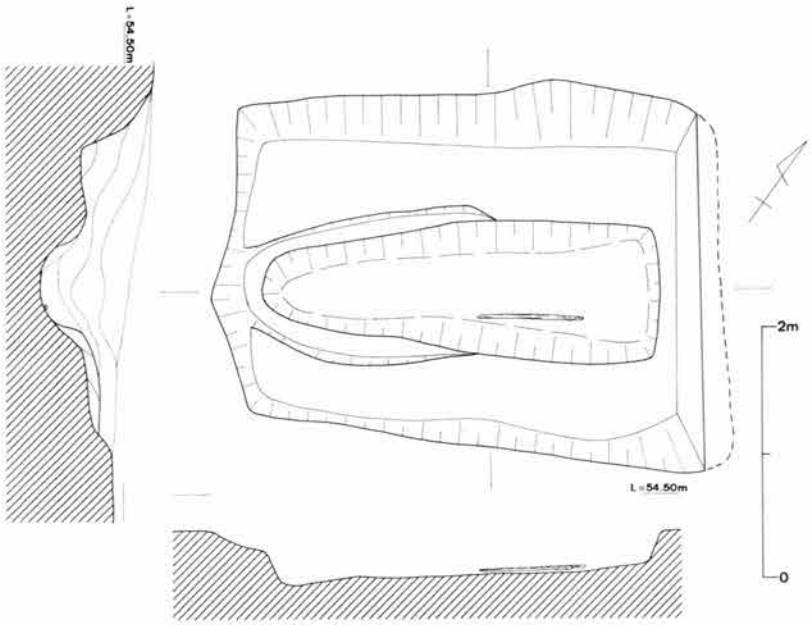
埋葬施設　平坦面のほぼ中央に位置する木棺墓を１基検出した。墓坑は，径1.5mの既掘穴によって，大きく破壊されているが，隅丸長方形を呈する。長辺4.64m×短辺1.86m，検出面からの深さ0.54mを測り，６号墳と同じく地山を２段に掘り込んでいる。主軸は，尾根方向と平行にとる(N52°W)。木棺は，墓坑下段の断面がU字形をなし，割竹形木棺と推定される。長さ3.88m・幅0.5m・深さは約0.26mを測る。棺の安置に際しては，墓坑下段に粘質土を敷き棺を安置した後，棺の四周に土を入れ固定したものと考えられる。遺物は，棺内北よりに直刀１口が切先を北に向けて置かれていた。また，鉄鏃１本が棺内中央南よりに，棺底から約5cm浮いた状態で出土した。これは，本来棺上に置かれていたものが棺の腐食にともない落ち込んだものと考えら



第90図　普甲７号墳主体部実測図



第91図　稲荷15号墳地形図



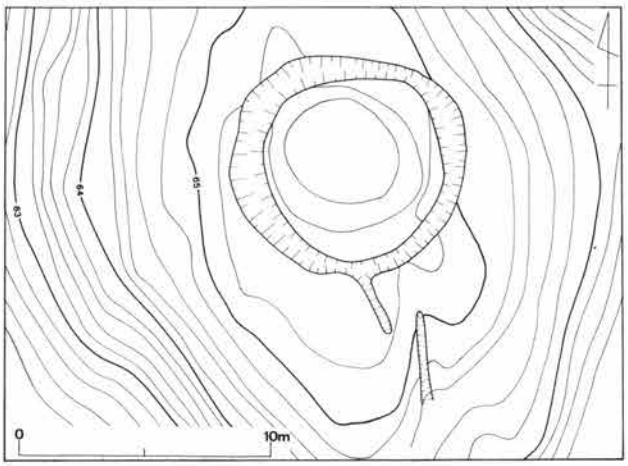
第92図　稲荷15号墳主体部実測図

れる。直刀の出土状況より，南側に頭位をおくものと推定できる。

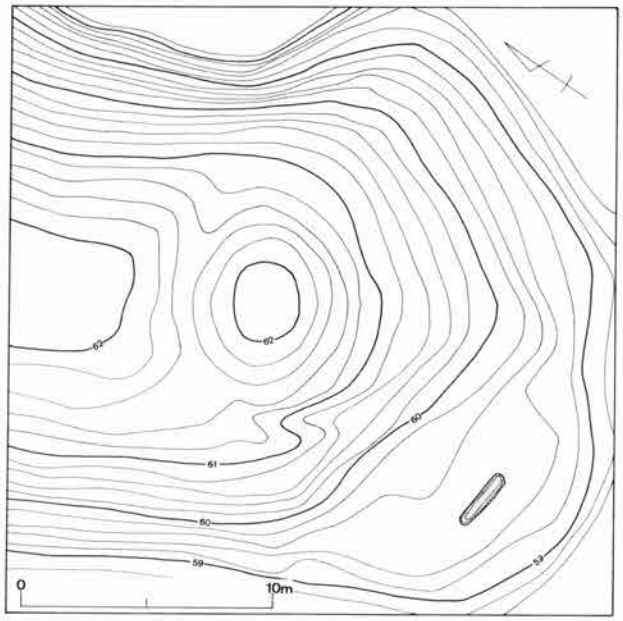
⑧**稲荷15号墳**(第91・92図)
稲荷15号墳は，1～14号墳の分布する丘陵の基部方向の標高55m付近の稜線上に位置する。墳丘は，地山の削り出しによって平坦面を造り，尾根に直交する幅約50cmの溝によって区画している。顕著な盛土は認められず，墓坑を覆う程度のものであったと考えられる。

埋葬施設　平坦面東よりで木棺墓を1基検出した。墓坑は，北側短辺を検出し得なかったが，北側が幅広い隅丸長方形を呈し，地山を2段に掘り込む。推定長4.3m・幅は北側で2.9mを測る。木棺は，墓坑下段断面がU字形をなすことから割竹形木棺と推定される。遺物は，棺内東よりで直刀1口が出土した。切先を南に置いており，墓坑底も南に傾斜していることより，北側に頭位を置くものと推定できる。

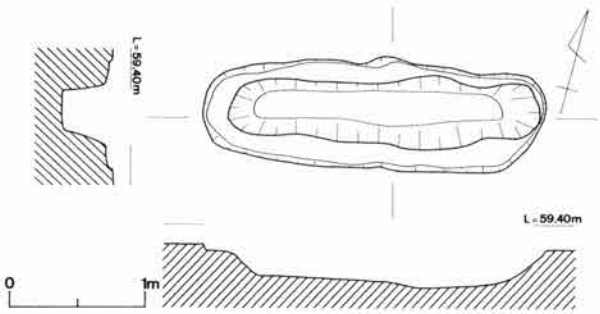
⑨**稲荷17号墳**(第93図)
17号墳は，尾根基部に位置



第93図　稲荷17号墳地形図



第94図　稲荷18・19号墳地形図



第95図　稲荷19号墳主体部実測図

する円墳である。墳丘は，開墾等によって攪乱を受けており，わずかに古墳の周溝が，残存していた。本来は，径10m程度の規模を有していたものである。主体部は，残存していなかったが，攪乱土中より鉄鏃の破片2点が出土した。また，周溝内からは，土師器椀1点が出土した。

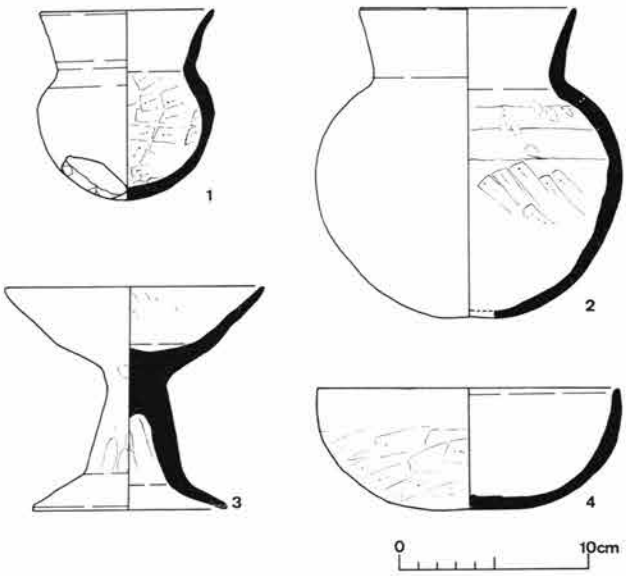
⑩**稲荷18号墳**(第94図)　18号墳は掘削前には，幅1.5m程度の溝によって尾根が切断されていたため，径8m程度の円墳と考えた。しかし，掘削の結果断面においても主体部はなかった。遺物も全く出土していない。西側の溝について疑問が残るが，当初より埋葬施設が設けられていたかどうか不明であると言わざるを得ない。

⑪**稲荷19号墳**(第94・95図)　19号墳は，18号墳の南側斜面にあり，南北8m・東西11mの台形を呈するテラス状の平坦面である。埋葬施設は，平坦面のほぼ中央において，主軸を東西にとる。長辺2.5m×短辺0.84m，検出面からの深さ0.38mを測る土坑墓である。出土遺物は無い。　(森　正・石崎善久・高野陽子)

5. 出土遺物

土器(第96図)　普甲4号墳から3点(1～3)，稲荷17号墳から1点(4)の土師器が出土している。

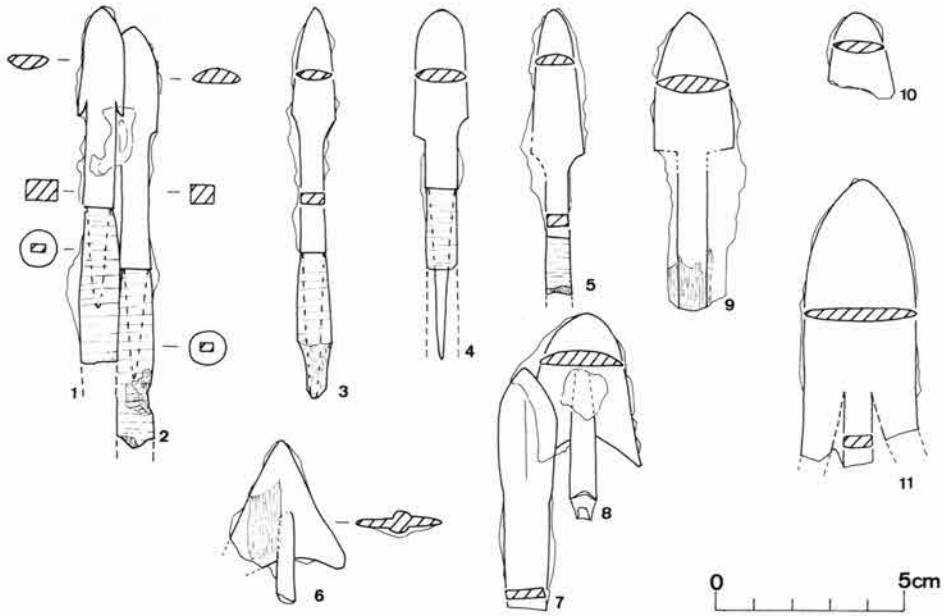
1は，小型丸底壺である。球形に近い体部に外上方に直線的にのびる口縁部もつ。口縁部は，器高の1/3程度の長さである。体部最大径は器高の1/2程度にあり，口径とほぼ等しい。外面の調整は，摩滅のため不明である。体部内面は，ヘラケズリを行う。底部には，焼成後の穿孔が行われている。淡褐色を呈する。



第96図　出土遺物実測図(1)
1～3. 普甲4号墳，　4. 稲荷17号墳

2は，直口壺である。球形に近い体部に，外上方に直線的にのびる口縁部を持つ。外面の調整は，摩滅のため不明瞭であるが，肩部にハケの痕跡が残る。内面は，ヘラケズリを行っており上半には接合痕が残る。暗褐色を呈する。

3は，高杯である。杯部は，



第97図　出土遺物実測図(2)
1～8. 普甲6号墳，9. 普甲7号墳，10・11. 稲荷17号墳

杯底部より外上方へ直線的にのびる。脚部は，中位でやや膨らみ，屈曲して広がる。調整は，摩滅のため不明である。暗褐色を呈する。

以上3点は，いずれも胎土中に砂粒を多く含み，焼成もややあまい。

4は，椀である。底部はやや丸みを帯びており，口縁端部には，内傾する面を持つ。外面体部下半には，ヘラ削りを行っている。焼成は，良好であり橙色を呈する。

鉄製品　普甲古墳群からは，鉄鏃・鉄剣・直刀・鉄斧・鉈が出土している。稲荷古墳群からは，鉄鏃・直刀が出土している。

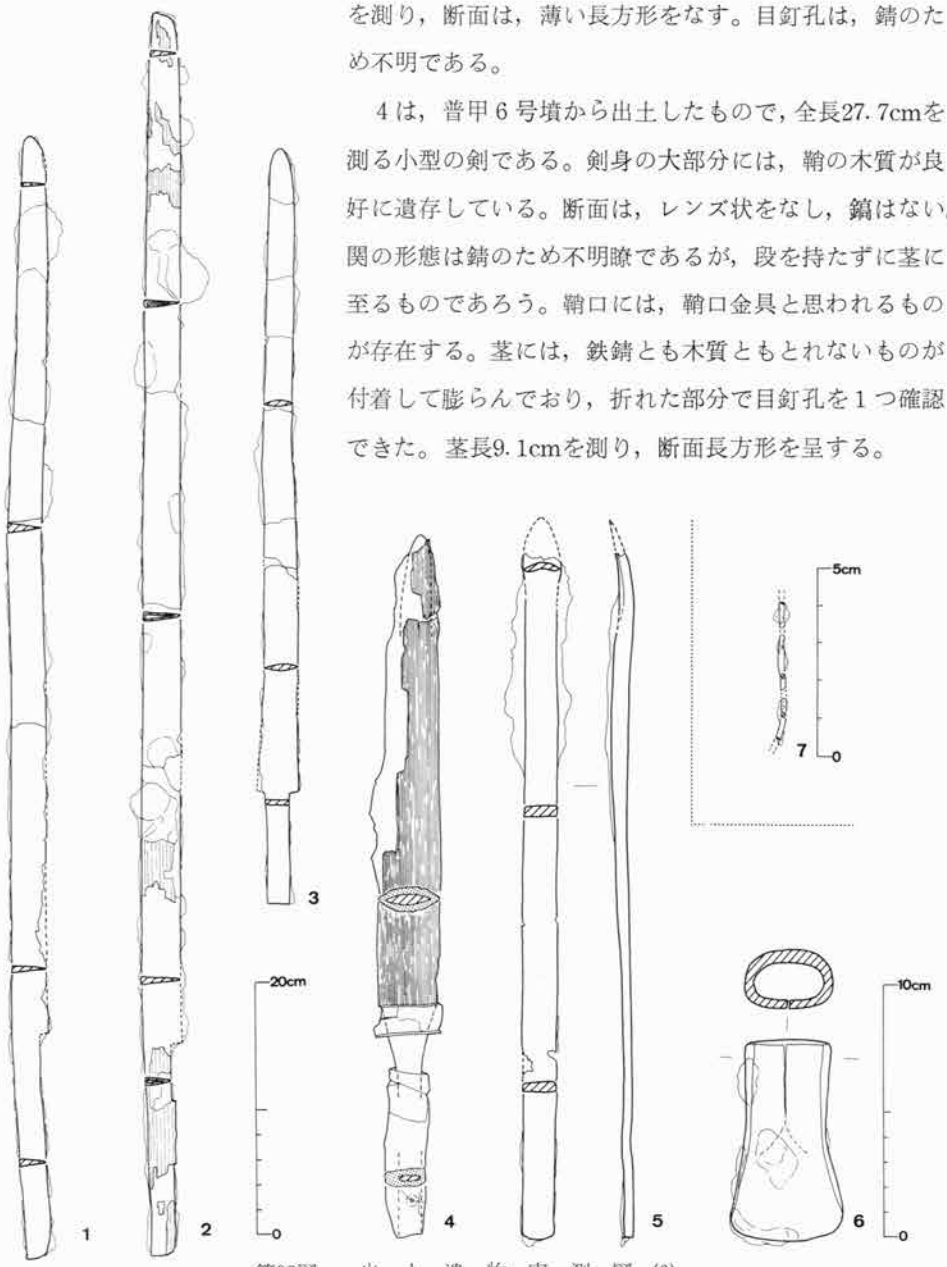
①**鉄鏃**(第97図)　1～6・8は，普甲6号墳から出土したものである。いずれも棺上あるいは棺側に1～5と6・8の2群に分かれて置かれていた。7は，鉈の刃部破片である。1～5はすべて有茎であり，鏃身の形態は柳葉腸抉式のもの(1)と，柳葉式のもの(2・4)と，三角形式のもの(3・5)に分けられる。鏃身断面は，4が両丸造りである以外は，片丸造りである。また，箆被部はいずれも短く鏃身長の2倍になるものはない。茎は，段をつけて細くなり3.5～6cmの間に納まり，矢柄を巻き付ける樹皮が，良好な状態で残る。6・8は，短茎三角形式の鏃である。いずれも逆刺をもつものであるが，6は，木質の付着や錆のため，詳細は不明である。8の断面は，片丸造りである。

9は，普甲7号墳から出土したものである。有茎三角形式鏃であり，鏃身断面は両丸造りである。茎部は，欠損しており箆被部には木質が付着している。

10・11は，稲荷17号墳から出土したものである。10は，刃部の先端のみであり，詳細は不明である。11は短茎柳葉式の鏃で，外側に長く開く逆刺をもつものである。鏃身は大型化しており，推定長12cm程度である。

②**鉄剣**(第98図3・4)　3は，普甲3号墳第4主体部から出土したものである。全長60.2cmを測り，剣身は断面レンズ状をなし鎬はない。関は，やや鈍角な段をなす。茎長8.2cmを測り，断面は，薄い長方形をなす。目釘孔は，錆のため不明である。

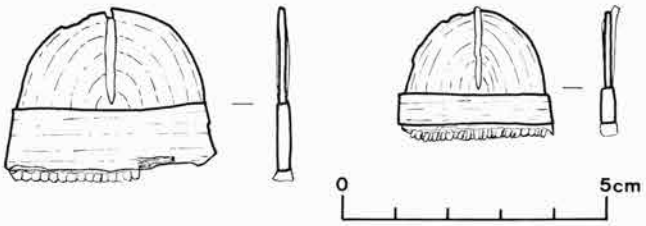
4は，普甲6号墳から出土したもので，全長27.7cmを測る小型の剣である。剣身の大部分には，鞘の木質が良好に遺存している。断面は，レンズ状をなし，鎬はない。関の形態は錆のため不明瞭であるが，段を持たずに茎に至るものであろう。鞘口には，鞘口金具と思われるものが存在する。茎には，鉄錆とも木質ともとれないものが付着して膨らんでおり，折れた部分で目釘孔を1つ確認できた。茎長9.1cmを測り，断面長方形を呈する。



第98図　出土遺物実測図(3)

③**直刀**(第98図1・2)

2は，普甲7号墳から出土したものである。全長98.9cm・身部長82.0cm・最大幅3.1cm・棟幅0.7cmを測り，鞘の木質が部分的に遺存している。茎断面は，刃部側に向かい幅狭になる。柄の木質も部分的に遺存している。茎長16.9cmを測る。



第99図　出土遺物実測図(4)

1は，稲荷15号墳から出土したものである。全長89.0cm・身部長71.0cm・最大幅2.7cm・棟幅0.6cmを測る。茎は，長さ18.0cmを測り，内反り気味である。断面は，刃部側が幅狭である。目釘は錆のため不明である。

④**鉈**(第98図5)　普甲3号墳第4主体部から出土したものである。錆のため刃部が不明瞭であるが，短い刃部とほぼ同じ幅の長い茎部を持つ。全長約28.7cm・刃部長2.9cm・茎部最大幅1.4cmを測る。

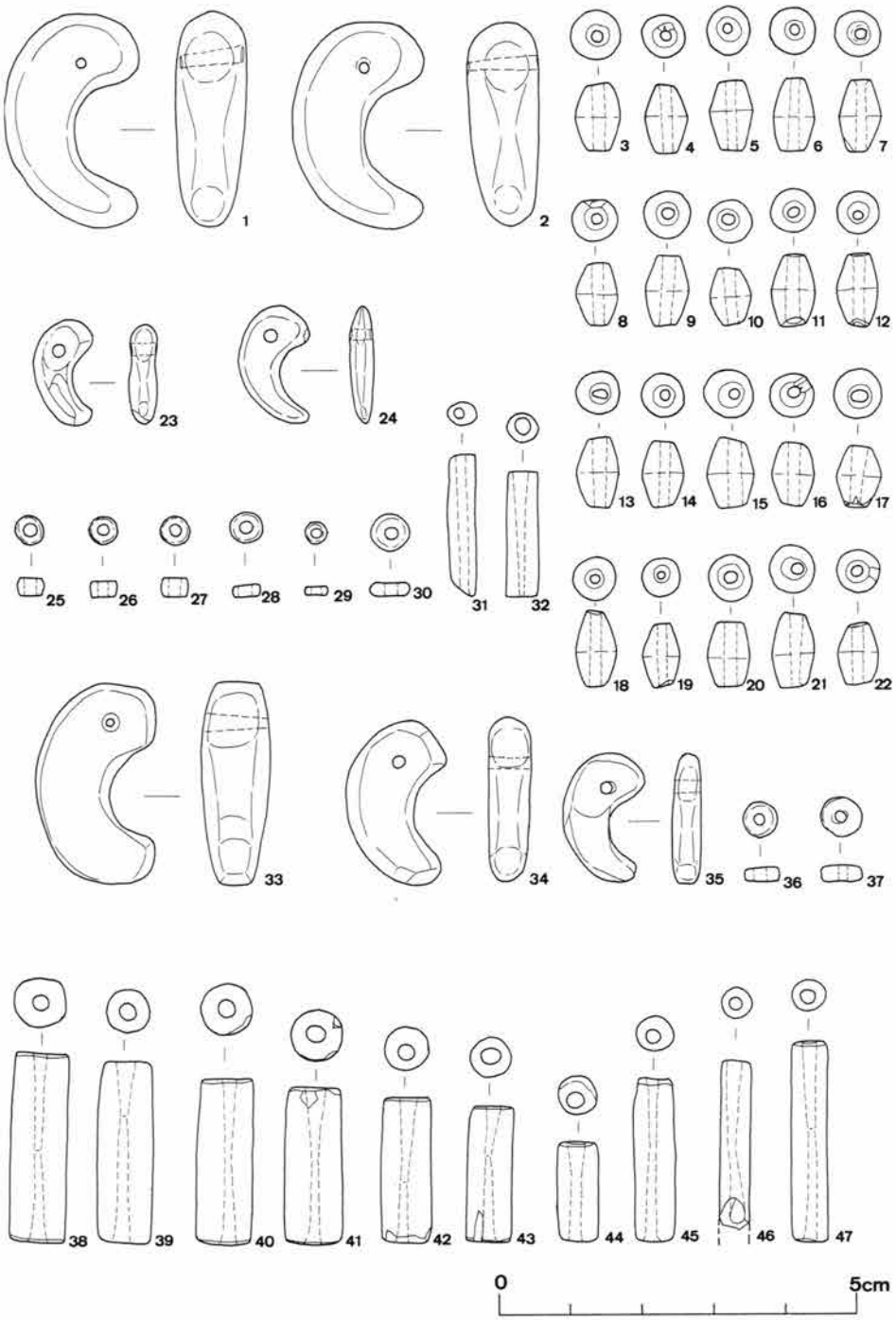
⑤**鉄斧**(第98図6)　3号墳第4主体部から出土したものである。肩に段のない袋状鉄斧で，厚い鉄板を曲げて柄挿入部を造っている。全長8.0cm・茎部幅3.4cm・刃部最大幅4.5cmを測る。

⑥**針状鉄製品**(第98図7)　1号墳第5主体部から出土した。細い棒状を呈し，現存長4.2cm・径約0.2cmを測る。

竪櫛(第99図)　普甲6号墳から2点出土している。いずれも本体である竹は，朽ちてなくなっており，ムネ表面に塗られた黒漆の被膜のみ遺存している。左は，ムネ幅4.0cm，右は，2.0cmを測る。

玉類(第100図)(注33)　1～22は，普甲1号墳第2主体部から出土したものである。1・2は，滑石製勾玉である。「C」字形を呈し，全体によく丸みを帯び，ていねいに仕上げられている。片面穿孔であり，色調は淡灰緑色を呈する。3～22は，滑石製棗玉である。図示した16点を含め総数47点が出土している。大きさ・形態には顕著な差異は認められないが，全長9.00～10.20mm・径6.00～6.45mmのものが全体の約72%を占める。すべて片面穿孔である。

23～32は，普甲1号墳土坑1から出土したものである。23・24は，滑石製勾玉である。図示した2点のほか，頭部を欠いたもの1点がある。頭部は広く，尾部は細くなっており，全体的に扁平な造りである。色調は，暗灰緑色を呈する。25～30は，滑石製臼玉である。形態的には，やや厚手のもの(25・26)と扁平で側面が丸く仕上げられているもの(28～30)



第100図　出土遺物実測図(5)

がある。後者は，小玉とも言うべきものである。31・32は，管玉である。前者は，滑石製であり，後者は，碧玉製である。双方とも片面穿孔である。

33～47は，普甲4号墳から出土したものである。33は，翡翠製の勾玉である。全体的に丸みを帯び，ていねいな造りである。色調は白濁した半透緑色を呈する。34は，勾玉であるが，材質は不明である。色調は，黒斑のある白色を呈する。35は，滑石製勾玉であり，23と同様に扁平なものである。いずれも片面穿孔である。色調は，暗灰緑色を呈する。36は，滑石製小玉である。37は，ガラス小玉である。38～47は，管玉である。いずれも両面穿孔であり，材質には碧玉(38～44)・緑色凝灰岩(45)・滑石(46・47)の3種類がある。後二者は，前者に比べ細身の造りである。　（森　正・石崎善久）

6. ま　と　め

普甲古墳群は，2本の尾根上に裾を接するようにして総数13基の古墳が分布している。今回は，北側の尾根に分布する7基の調査を行った。また稲荷古墳群は，普甲古墳群の北側の尾根上に総数19基の古墳が分布している。そのうちの4基の古墳の調査を行った。以下調査成果について，主に普甲古墳群についてのまとめを行い，若干の問題点を提示して結びとする。

立地についてみると，竹野川が形成する沖積平野に向かってのびる低位丘陵の稜線上にそれぞれの古墳が裾を接するように連接して築造されている。このような立地は当地域においては，弥生時代後期に盛行する墳墓形態である方形台状墓以来のものであり，基本的に相違点はない。

墳丘は，盛土が行われているものはなく，1～3号墳では尾根主軸に直交する溝によって区画しているのみであり，尾根両側の裾は判然としない。4～7号墳では，傾斜の急な尾根稜部を削りだし平面台形の平坦面を造成しているが，それ以外の斜面部分は，自然地形のままである。いずれの場合も，埋葬施設を設けるための一定区画のされた墓域を確保することに主眼が置かれているために，墳形は定形化していないものと考えられる。

埋葬施設は，普甲古墳群においては総数16基を検出した。4～7号墳においては，1墳丘1主体が厳密に守られている。これに対して1～3号墳では，複数主体部を持つ傾向にある。なかでも1号墳は，第5主体部以外は小規模な土坑墓6基で構成されている。

木棺の構造には，組合式箱形あるいは割竹形のものを確認したが，その細部の構造をうかがい得るものはなかった。箱形木棺のなかで4号墳の例は，棺内に仕切り板を想定し得るものである。この種の木棺は，丹後地域においては大宮町有明3号墳，弥栄町宮の森3号墳第2主体部(注34)，岩滝町日ノ内古墳(注35)において確認されている。なかでも日ノ内古墳第1主

体部では2体あるいは3体を同時に埋葬した可能性が高く，あるいは今回の例も，2体の埋葬を意図した構造であるのかも知れない。また，6号墳・7号墳においては規模・構造の類似した割竹形木棺が採用されていることは，注意を促す。

出土遺物は，鉄製武器類(剣・刀・鏃)，鉄製農工具類(斧・鉋)，装身具類(玉・竪櫛)，土師器がある。土師器を除いては，いずれも墓坑内あるいは，棺内から出土したものである。鉄製品は，3号墳第4主体部で(剣・斧・鉋)が，6号墳で(剣・鏃)がセットで出土している。鉄鏃は，いずれも棺上あるいは棺側に置かれていたものであり，棺内に持ち込まれてはいない。玉類では，1号墳第2主体部出土の滑石製玉類が注目される。小規模な土坑墓からの出土であり，壇状の施設上で散らばって出土している。

また，土坑1については，その性格が今一つ明確ではないが第2主体部に伴う何らかの墓上祭祀に係わるものである可能性も残しておき，今後の検討課題としたい。4号墳出土の土師器類については，その出土状況からテラス上において，埋葬に係る祭祀が行われたものと考えられる。埋葬に係る祭祀の1例として興味深いものである。

各古墳の築造順序については，出土遺物が少ないこともあり明確にすることはできない。ただ注意されるのは，1号墳第5主体部と2号墳主体部，4号墳と5号墳，6号墳と7号墳のそれぞれ2基ずつ，墓坑の形状・棺の構造・主体部の方位といった点で類似性が認められる点である。なかでも6号墳と7号墳については，先にもふれたように群内で唯一割竹形木棺を採用している。さらに，6号墳出土の鉄鏃が長頸鏃への過渡的な段階に位置づけられると考えられることからも，群内において新しい要素を持つものと判断できる。さらに，1～3号墳が複数主体部を持つのに対して，4～7号墳においては，1墳丘1主体が守られていることも後出的な要素として捉え得るものである。

以上のことから，当古墳群の形成過程については，大略2基ずつが相前後して尾根上部から先端に向かい，順次築造されたものと考えられよう。

最後に築造時期についてふれておく。4号墳からは唯一土師器が出土しているが，当地域における土師器編年の確立していない現段階では即断できない。造墓の年代の一点が5世紀前半から中葉にあるものと幅をもって考えておき，今後の資料増加と検討に待ちたい。

稲荷古墳群では，17号墳周溝出土の土師器があり，6世紀前半頃と考えられる。同墳出土の鉄鏃も大型化したものがあり，6世紀代に下るものとして大過なかろう。

(森　正)

付表8　普甲古墳群出土玉類計測表　（単位：mm）

出土地	No.	器種	全長	直径	孔径	図No.
1号墳第2主体部	1	勾玉	29.20	9.70	1.80	1
	2	〃	28.90	9.80	2.10	2
	3	棗玉	9.30	6.15	2.10	3
	4	〃	8.85	6.00	1.95	4
	5	〃	破		損	
	6	〃	9.25	6.05	2.05	
	7	〃	10.15	6.30	2.05	5
	8	〃	10.40	6.45	2.05	
	9	〃	9.90	6.25	2.00	6
	10	〃	9.95	6.20	2.10	7
	11	〃	9.20	6.20	1.90	
	12	〃	7.70	6.10	1.90	8
	13	〃	9.35	6.25	1.95	9
	14	〃	8.70	6.20	2.00	
	15	〃	破		損	
	16	〃	7.70	6.05	2.00	10
	17	〃	10.05	6.40	2.20	
	18	〃	9.20	6.10	2.10	11
	19	〃	10.00	6.40	2.00	13
	20	〃	9.90	6.00	1.90	12
	21	〃	9.25	6.25	2.00	14
	22	〃	9.95	6.45	2.20	15
	23	〃	9.00	6.45	1.90	
	24	〃	8.70	6.05	1.95	16
	25	〃	8.40	6.10	2.05	17
	26	〃	9.55	6.05	1.90	18
	27	〃	8.30	5.40	1.60	
	28	〃	8.60	5.90	1.80	19
	29	〃	9.30	6.25	2.05	
	30	〃	破		損	
	31	〃	8.75	6.15	2.00	
	32	〃	8.60	6.05	1.90	20
	33	〃	10.05	6.40	1.90	21
	34	〃	8.10	5.90	1.95	22
	35	〃	9.70	6.20	1.90	
	36	〃	9.95	6.35	2.10	
	37	〃	9.95	6.20	2.00	
	38	〃	10.00	6.05	2.10	
	39	〃	9.25	6.20	1.90	
1号墳第2主体部	40	棗玉	10.00	6.15	2.00	
	41	〃	9.00	6.10	2.05	
	42	〃	9.20	6.00	1.90	
	43	〃	9.25	6.40	1.85	
	44	〃	9.60	6.10	2.00	
	45	〃	9.15	6.05	2.00	
	46	〃	8.95	5.95	1.95	
	47	〃	10.15	6.10	1.95	
	48	〃	9.00	6.30	1.85	
	49	〃	9.95	6.30	1.90	
	50	〃	9.50	6.10	1.80	
1号墳土坑1	1	勾玉	10.45	3.40	2.15	23
	2	〃	10.60	3.20	1.90	24
	5	管玉	19.90	4.10	1.10	31
	10	〃	17.85	4.25	2.15	32
	3	臼玉	2.35	4.20	2.00	25
	6	〃	1.35	3.50	1.45	29
	9	〃	2.55	4.50	2.00	26
	7	〃	1.40	4.25	1.40	28
	4	〃	2.00	5.45	2.00	30
	8	〃	2.55	4.20	1.90	27
4号墳主体部	12	勾玉	28.25	9.25	2.75	33
	11	〃	23.40	5.70	1.55	34
	2	〃	18.50	4.05	1.90	35
	13	小玉	1.85	4.80	1.90	36
	6	〃	2.75	5.30	1.45	37
	1	管玉	26.40	7.55	2.15	38
	10	〃	26.00	7.20	2.15	39
	7	〃	24.10	7.30	2.15	40
	14	〃	22.00	7.20	2.55	41
	4	〃	20.90	6.40	2.00	42
	3	〃	19.25	5.90	2.05	43
	8	〃	14.10	5.50	2.50	44
	9	〃	23.20	4.50	1.50	45
	15	〃	24.95	4.50	2.25	46
	5	〃	28.50	4.80	1.95	47

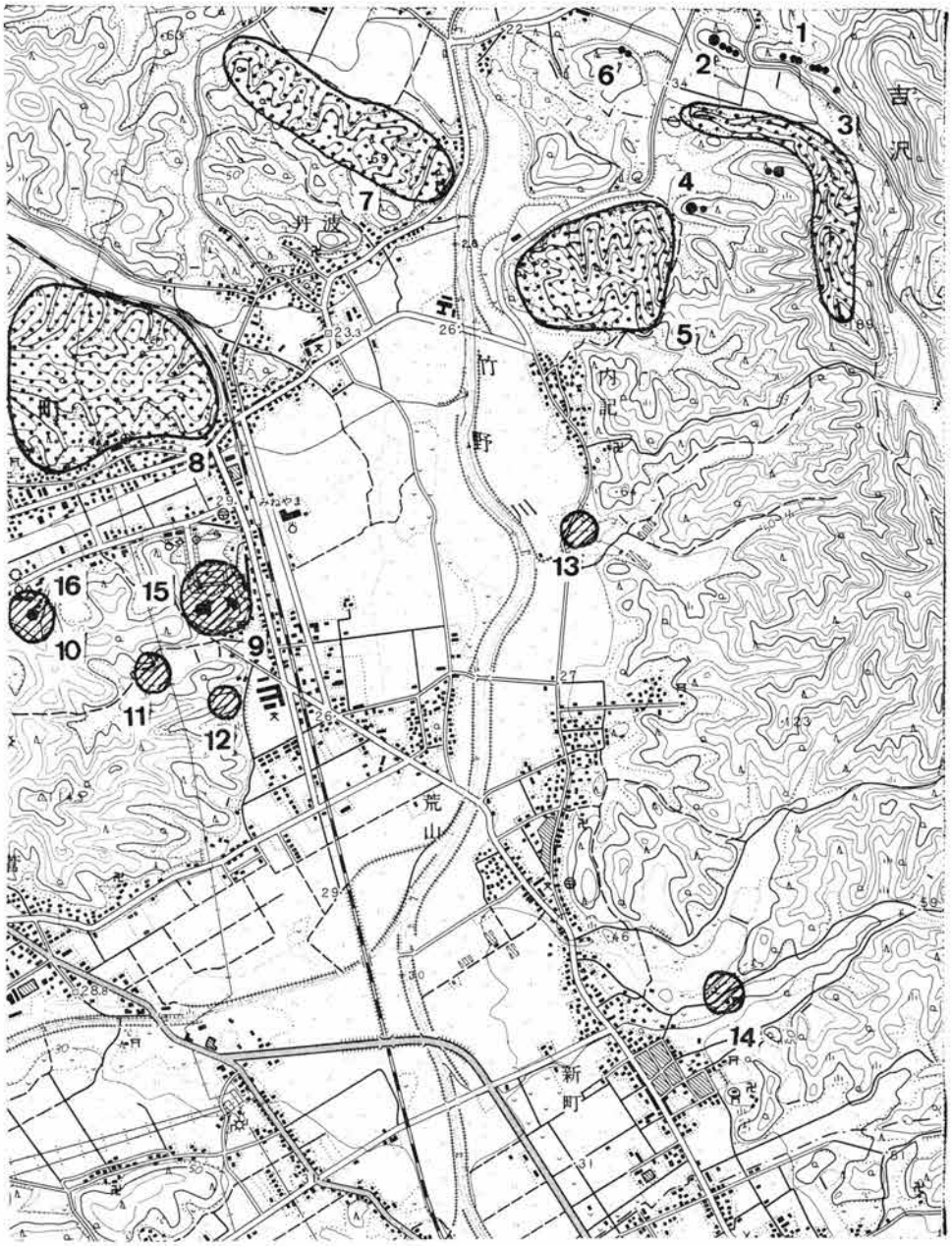
(3) 新ケ尾東古墳群

1. 位置と環境

新ケ尾東古墳群は，京都府竹野郡弥栄町字吉沢小字半坂，坂場に所在し，丹後半島最大の河川である竹野川中流域の右岸の丘陵上に位置する。竹野川は，高尾山・鼓ケ岳の山系に源を発し西南方向へ流れ，大宮町南部で北流し日本海へ注ぐ。延長30kmの河川である竹野川流域には，多くの遺跡が存在するが，ここでは中郡盆地の遺跡についてふれてみる。

まず，縄文時代の遺跡としては，裏陰遺跡(注36)・正垣遺跡(注37)・谷内遺跡(注38)がある。出土遺物の中には押型文土器をはじめとして，縄文時代全般にわたる土器片等がある。弥生時代前期には，有舌尖頭器ならびに陶塤の出土で知られる途中ケ丘遺跡(注39)がある。竹野川の沖積低地から標高40mの丘陵上にいたる，広い範囲に営まれている。多数の住居跡とともに，弥生時代全時期の各器種の土器・鉄器・加工痕のある木片が採取された。その中には貝殻綾杉文の施された土器や，玉づくりの工具，玉原石等も含まれる。母村的役割をもつ遺跡である。これよりややおくれて，扇谷遺跡(注40)が存在する。二重の環濠をもつ高地性集落である。特に内濠は，V字形で850mにもおよぶ。遺物はこの内濠より出土したものが多く，途中ケ丘遺跡と同様の陶塤やガラス工房の存在を予想させるガラス原料もある。この扇谷遺跡の南方丘陵上には，弥生時代の方形台状墓が検出された七尾遺跡(注41)が存在する。この他カジヤ遺跡でも方形台状墓3基が検出された。そのすぐ東に立地しているのが，古墳時代前期に造営されたカジヤ古墳である。丹後地方最大級の円墳で，径70mを測る。竪穴式石室1基，木棺直葬墓3基がある。碧玉製腕飾りセットや方格渦文鏡等が出土した。女性の人骨出土で話題となった大谷古墳(注42)は，古墳時代中期の帆立貝式古墳である。内部施設は組合式石棺で，その内面にはベンガラが塗りこめられていた。また，これと平行して初期群集墳である小池古墳群(注43)(約60基)が登場する。古墳時代後期の古墳としては，やはり丹後半島最大規模の横穴式石室を内部主体とする新戸古墳があげられる。前方後円墳であり，石室には奥壁より突き出た一枚石によって石棚がつくられている。また，同時期造営の桃谷古墳群(注44)では，漏斗状のガラス製耳璫や金銅製空玉等が採取されている。この耳璫は，中国漢・六朝代の古墳から出土しており，前に述べた陶塤とともに大陸と丹後との文化交流を想像させる貴重な資料である。本古墳群周辺では，谷を隔てた南側にはスクモ塚古墳群(38基)(注45)，桃山古墳群(2基)(注46)，この谷筋先端付近では，上野古墳群(2基)，新ケ尾古墳群(4基)が存在し，古墳が比較的密集した場所となっている。

(松井政子)

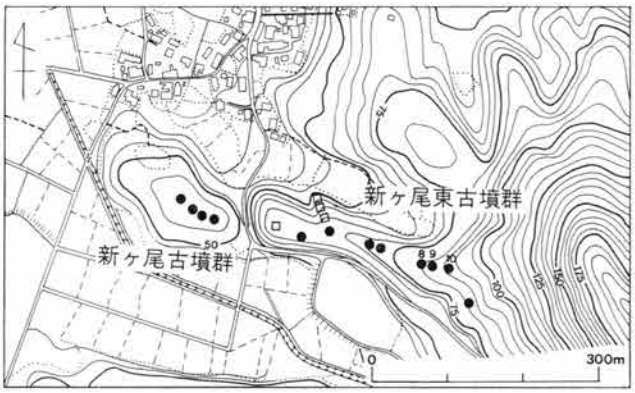


第101図　周辺遺跡分布図

1. 新ケ尾東古墳群　2. 新ケ尾古墳群　3. スクモ塚古墳群　4. 桃山古墳群
5. 名木山古墳群　6. 上野古墳群　7. 湧田山古墳群　8. 杉谷山古墳群
9. 八幡山古墳群　10. カジヤ古墳群　11. 八幡池遺跡　12. 七尾遺跡
13. 荒山遺跡　14. 新町遺跡　15. 扇谷遺跡　16. カジヤ遺跡

2. 調 査 経 過

新ケ尾東古墳群は，竹野川の一支流である入山川右岸の東西にのびる低丘陵上に立地する。この丘陵は，尾根先端付近で道路により2分割されており，分割された先端側の丘陵には，4基の古墳が存在し，新ケ尾古墳群と登録されていた。



第102図　新ケ尾・新ケ尾東古墳群分布図

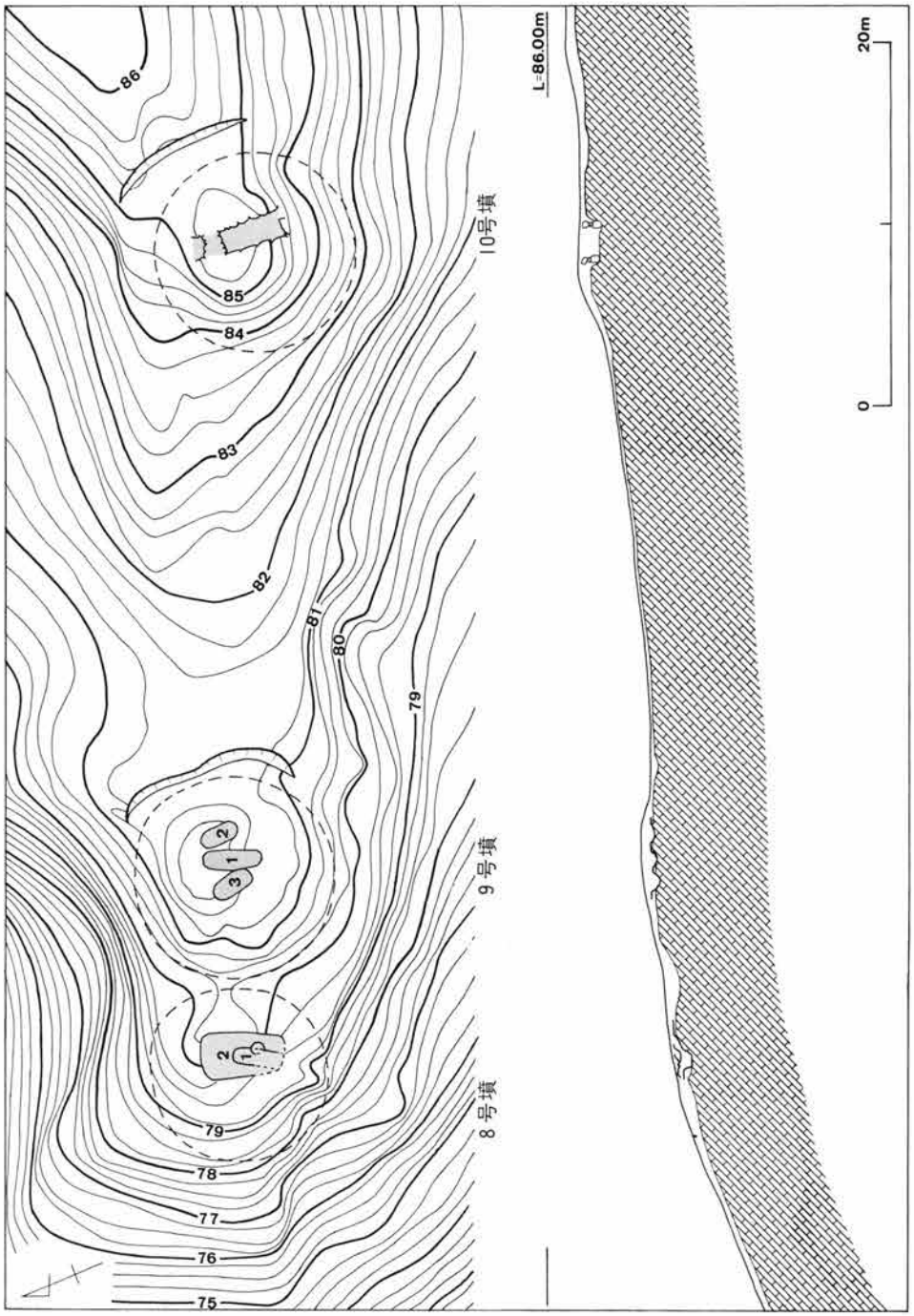
高位側では，階段状地形を呈するものや，古墳が11基確認されていたが命名されておらず，1～4号墳までが，先端の新ケ尾古墳群と古墳番号が重複しており，混同をさけるため新たに高位側のものを新ケ尾東古墳群とし，古墳名称の整理を行った。また，調査中周辺の分布調査を行ったところ，10号墳より東側の南に張り出した小支尾根にも1基古墳が存在し，新ケ尾東古墳群は12基からなる古墳群となった。

調査は，道路建設により切土される部分に位置する8～10号墳が対象となり，古墳の埋葬施設を検出するとともに，その築造方法を明らかにし，周辺の遺構の有無を確認することを主な目的として，墳丘およびその周辺をも含めて掘削を行った。そのため，掘削面積は約700m²に及んだ。

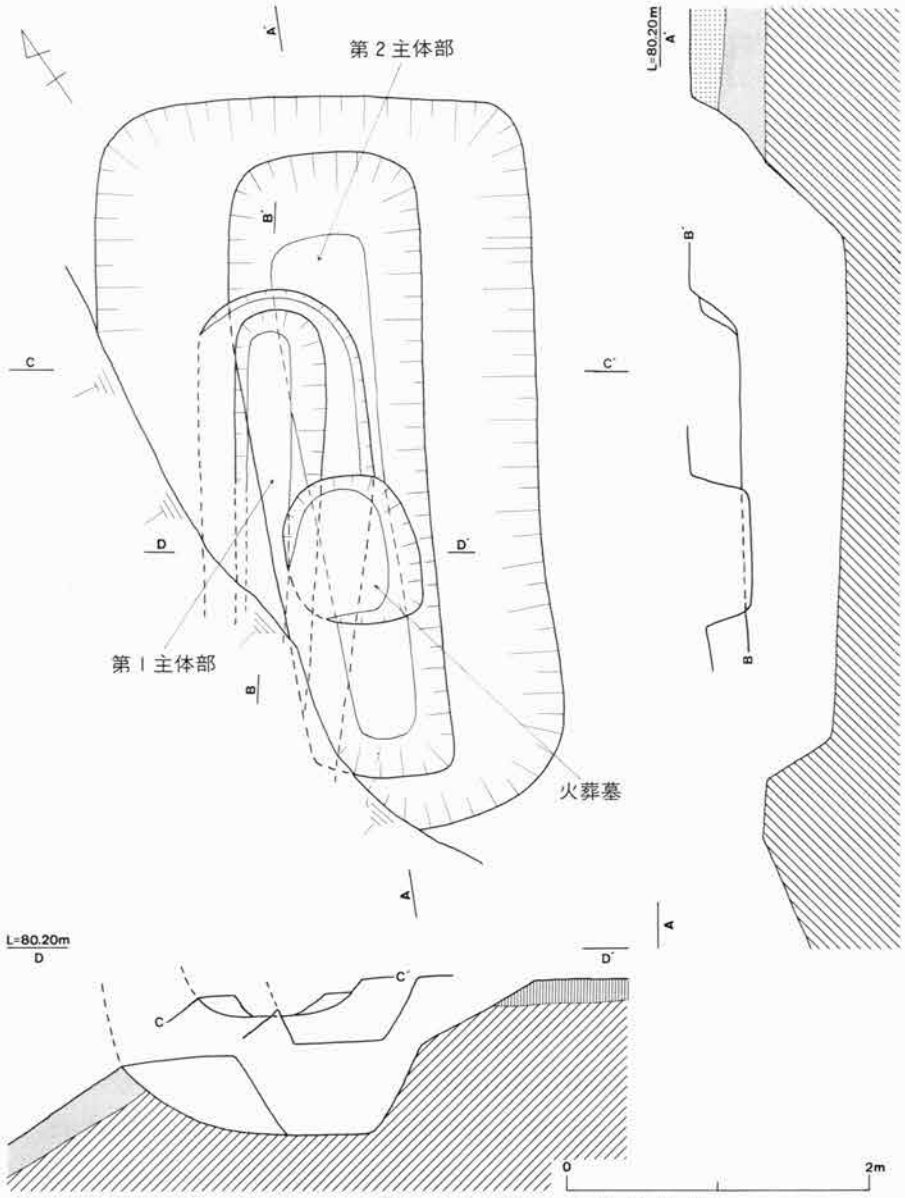
現地調査は，樹木伐採より開始し，伐採の終了した昭和62年10月6日より8日まで地形測量(50分の1，25cm等高線)を行った。掘削作業は，10月6日に器材の搬入を行い，8日より掘削を開始した。掘削は，すべての墳丘表土を除去したのち，埋葬施設の検出・掘削作業に入った。その結果，小規模な地山削り出し成形ののち，盛土を行って構築された墳丘をもつことが判明した。埋葬施設は，7・8号墳は木棺直葬墳であり，それに伴う主体部5基を検出し，10号墳は竪穴系横口式石室を内部主体としていた。実測作業・写真撮影はその都度行い，昭和63年1月25日には，発掘器材のすべての撤収を行い調査を終了した。なお，現地説明会は，昭和62年11月25日に行った。

3. 調 査 概 要

①**新ケ尾東8号墳**(第103図)　調査地最西端に位置し，尾根稜部に築造されているが，8号墳と近接していることや，墳丘南側1/3が削平されており，墳丘高がほとんど認められない。墳丘築造方法は，8号墳との間に幅約1m・深さ0.25mの墳丘を1/3周する溝により

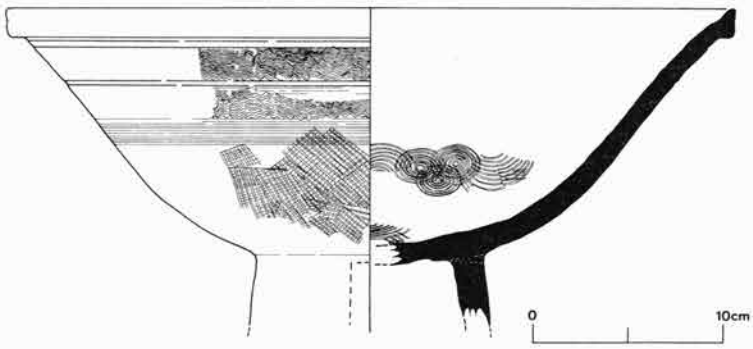


第103図　新ケ尾東8・9・10号墳地形図



第104図　新ケ尾東８号墳主体部実測図

基底部を削り出した後，一部墳頂部平坦面を削り出すが，西側は盛土により平坦面を造っている。この盛土層と，地山層との間には，炭化物混じりの黒色土層(旧表土層)が認められ，古墳築造に際して，山焼きを行っている可能性がある。被葬者埋葬後，さらに盛土を施したと考えられるが，墳丘が削平されているため，表土直下が遺構面となっていた。これらのことから，残存する部分から規模を求めると，直径10m，西側からの高さ2mとなる。８・９号墳とも竹野川流域(峰山町・弥栄町中心部)を見渡すことのできる位置にある



第105図　新ケ尾東８号墳出土遺物実測図

が，10号墳は奥まったところに位置するため，これらに遮ぎられ視界が悪い。

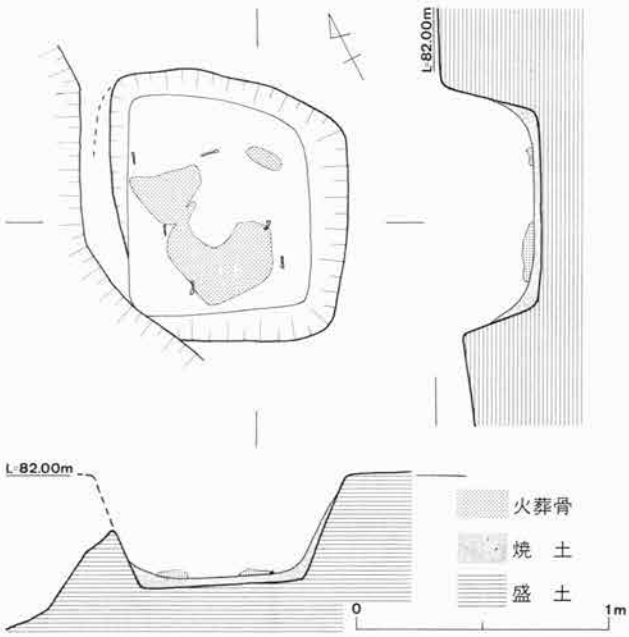
埋葬施設　墳頂部中央で同じ場所に重なり合った大小２か所の墓坑と，南西端で一部墓坑と切り合い関係を有する火葬墓１か所を検出した。墓坑は，先のものを第２主体部，後のものを第１主体部とした。

第１主体部(第104図)　墳頂部中央で検出した木棺墓で，主軸はN37°Eで尾根に直交する。墓坑は，隅丸長方形を呈し，地山削平面より穿つが，南西側約2/3が火葬墓および後世の削平を受け消失している。墓坑現存長辺1.25m×短辺1.12mで，木棺部分は，現存長辺1.25m×短辺55cm，検出面からの深さ0.25cmを測る。木棺部分側壁は「⊔」字形をなし，底面は水平面を保つ。

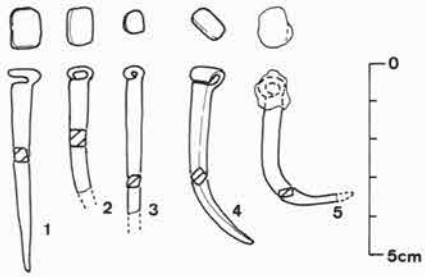
遺物は，墓坑検出面において須恵器器台(第105図)，小片化した須恵器片が認められ，東側溝中からは，須恵器杯身・杯蓋片が出土した。

第２主体部(第104図)　第１主体部の下層より検出した木棺墓で，主軸はN26°Eで尾根に直交する。墓坑は，北西側が幅広い隅丸長方形を呈し，南西側墓坑端および西側を消失する。墓坑現存長辺5m×短辺2.9mで，木棺部分は，長辺4.15m×短辺1.25m，検出面からの深さ1mを測る。木棺部分側壁は「⊔」字形をなし，底面はやや北東下がりの傾斜をもつ。小口穴等は存在しなかったが，組合式木棺が考えられる。遺物は有していなかった。

火葬墓(第106図)　第１主体部検出面において炭・焼土の混じる墓坑を検出した。墓坑は，南西側約1/3程度を欠くが，一辺約1mの隅丸長方形を呈し，深さ約0.38mの規模を有する。墓坑上には，配石等は認められず，墓坑内埋土は，灰・炭・焼土とともに火葬骨が混入していた。墓坑側壁下半および底面は，淡赤褐色に焼けているが，高熱を受けたような状態は示していなかった。墓坑掘形底面より約3～4cm上面に，火葬骨が厚さ約3～4cm程度に密に集まっており，その周囲には鉄釘６本(第107図)が認められた。鉄釘の出土した部分を観察すると火葬骨が方形状に集まっており，木櫃に火葬骨を納め埋葬していたとも考えられるが，墓坑側壁が焼けていることや，鉄釘が出土した周辺でも火葬骨が認められることから断定はできない。



第106図　新ケ尾東8号墳火葬墓実測図



第107図　火葬墓出土遺物実測図

鉄釘(第107図,図版第70)は,頭部先端を扁平に叩き,水平に曲げた方形のもの(1)と,頭部先端を扁平に叩き,内側に強く巻き込む巻頭形のもの(2～5)が出土した。遺物は,鉄釘と火葬骨しか出土しなかったが,立地,釘等から中世墓と考えられよう。

②新ケ尾東9号墳(第103図)

8号墳の東隣に位置し,非常によく整った円墳で,直径11m,高さ2mの規模を有し,調査前は円錐台形を呈していた。墳丘築造方法は,8号墳と同様であり,東側1/2は地山削り出しにより,西側は旧表土面に直接盛土を行い円錐台形を成形し,主体部埋葬後さらに約0.6mの盛土を施す。東側には,墳丘を1/3周ほどする幅1.5～2m・深さ0.7mの尾根と区画する溝が設けられている。

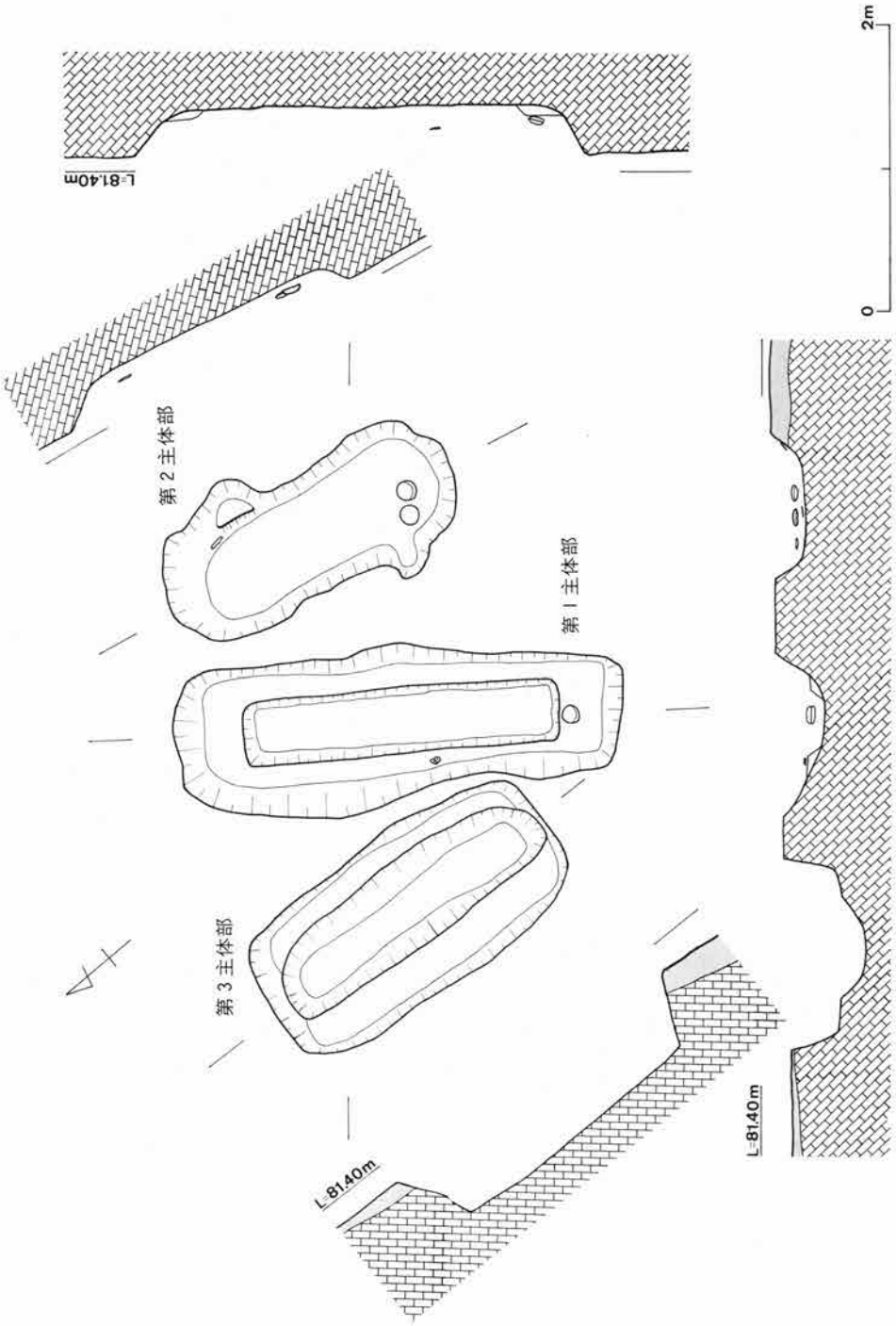
埋　葬　施　設

墳頂部中央で,3か所の墓坑を検出した。

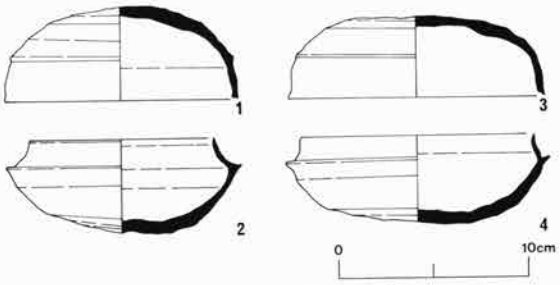
第1主体部(第108図)　墳頂部中央に位置する木棺墓で,主軸はN37°Eで尾根に直交する。墓坑は,隅丸長方形を呈し,盛土中より穿ち,長辺3.15m×短辺約1m,木棺部分は長辺2.25m×短辺0.45m,検出面からの深さ0.35mを測る。木棺部分側壁は「⊔」字形をなし,底面は水平面を保つ。組合式木棺の使用が考えられる。

遺物は,木棺部分検出面西側中央側壁寄りで切先を北東に向ける鉄鏃2(第110図1・2),南西端より杯身・杯蓋がかぶさった状態で1セット出土した(第109図1・2)。遺物出土状況から頭位は南枕と考えられる。

第2主体部(第108図)　第1主体部の東側で検出したもので,その主軸はN11°Eでほぼ南北方向に置く。墓坑は,地山削平面より穿ち,掘形・底面ともやや不整形な隅丸長方形を呈し,長さ2.3m×幅0.9m・深さ0.3mの規模を有する。墓坑掘り込み側壁は,「⊔」字形



第108図　新ケ尾東9号墳主体部実測図

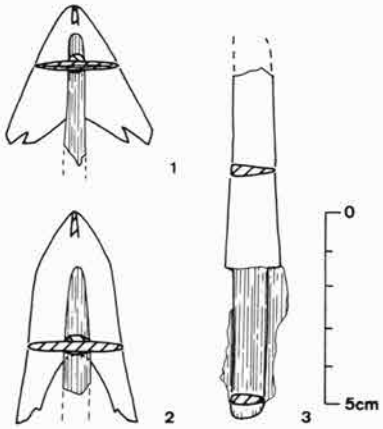


第109図　新ケ尾東9号墳出土遺物実測図(1)

をなし，底面は水平面を保つ。

遺物は，墓坑南端底面より須恵器転用枕として，杯身・杯蓋(第109図3・4)が伏せ並べられた状態で出土した。また，墓坑北端近くの北西壁寄りでは，切先を北に向けた刀子(第110図3)が出土している。

木棺痕跡は認められなかったが，被葬者の埋葬は行われたようで，遺物の出土状況からすると，頭位は南枕と考えられる。



第110図　新ケ尾東9号墳出土遺物実測図(2)

第3主体部(第108図)　第1主体部の西側に位置し，その主軸はN3°Eでほぼ南北方向に置く二段掘形を有する木棺墓である。墓坑は，盛土中より穿ち，長さ2.4m×幅1.15mの規模を有し，隅丸長方形の平面形を呈する。木棺部分掘形は，長さ2.25m×幅0.6m，検出面からの深さ0.5mを測り，南・北側掘形は，墓坑掘形と重なっている。木棺部分側壁は「⊔」字形をなし，底面は水平面を保つ。形状から組合式木棺の使用が考えられる。遺物は有していなかった。

頭位方向については，遺物が出土していないことや，墓坑，木棺にもその特徴がみられないことから決定することができないが，第2主体部と墓坑主軸が同じであることから，南枕であった可能性も考えられる。

出　土　遺　物

9号墳出土の遺物には，須恵器杯身・杯蓋の土器類と，鉄鏃・刀子の鉄製品がある。

a 土器(第109図，図版第67)　1・2は，第1主体部よりセットで出土したもので，1は杯蓋で，口径12.5cm・器高4.9cmを測る。天井部と口縁部の境にはやや鈍い稜をもつ。口縁端部内側には明瞭な段を有し，天井部は丸味を帯び高い。外面天井部は回転ヘラ削りを施す。2は杯身で，口径9.8cm・器高5cmを測る。立ち上がりは内傾し，端部は丸くおさめる。受部は短く端部は尖る。体部は，底部に回転ヘラ削りを施す。

3・4は，須恵器転用枕として第2主体部から出土したものである。杯蓋3は，口径13.6cm・器高4.3cmを測る。天井部と口縁部境の稜は，1よりもなお鈍くなる。天井部上位は回転ヘラ削りを施す。4は杯身で，口径12.4cm・器高4.6cmを測る。立ち上がり

は２より低いが端部は立つ。受部は外上方にのび，端部は丸くおさめる。体部は，低部のみ回転ヘラ削りを施す。

須恵器の型式をみると，１・２は加悦町入谷西Ａ１号墳出土の最も古い型式のものと同じ様相を示すもので，田辺編年のTK10型式，中村編年のⅡ型式Ⅱ段階に併行するものと考えられる。３・４のセットはそれに続くもので同未定型式，Ⅱ型式Ⅲ段階に併行すると考えられる。

b 鉄製品(第110図，図版第69)　鉄製品は鉄鏃と刀子があり，いずれも第２主体部より出土したものである。

鉄鏃１は，三角形を呈する無頸鏃である。逆刺は重抉で，中央部に矢柄の木質が残る。鏃身長3.7cm・幅3.9cmを測る。２は，長三角形を呈する無頸鏃である。逆刺は１よりも小さい重抉で，中央部に矢柄の木柄が残る。鏃身長5.6cm・幅3.2cmを測る。

刀子３は，切先を欠損するが，両関で茎部に柄の木質が残存する。現存長9.2cm・刀身幅0.7cm・棟の厚さ0.3cmを測る。

③新ケ尾東10号墳(第103図)　９号墳の南南西23mの尾根稜部に位置する。９号墳との間には空間があくため試掘を行ったが遺構等は存在しなかった。新ケ尾東古墳群中最高所に位置するが，尾根の奥まったところに位置するため，眺望は８・９号墳に比して劣る。調査前の段階では，周辺に人頭大の石が散乱しており，墳頂部中央には，長さ1m×幅90cm程の石材が１石認められた。このようなことから横穴式石室の存在が考えられたが，石材の散乱等により墳頂部が削平されている可能性が考えられた。石材の散乱については，昭和30年頃，山林の手入れに来て奥壁付近の石材を抜きとりカマドを作ったという話があり，その時点で石材が露出していたわけであり，それよりも早い時点で，墳丘の削平・天井石の抜き取りが行われていたことになる。

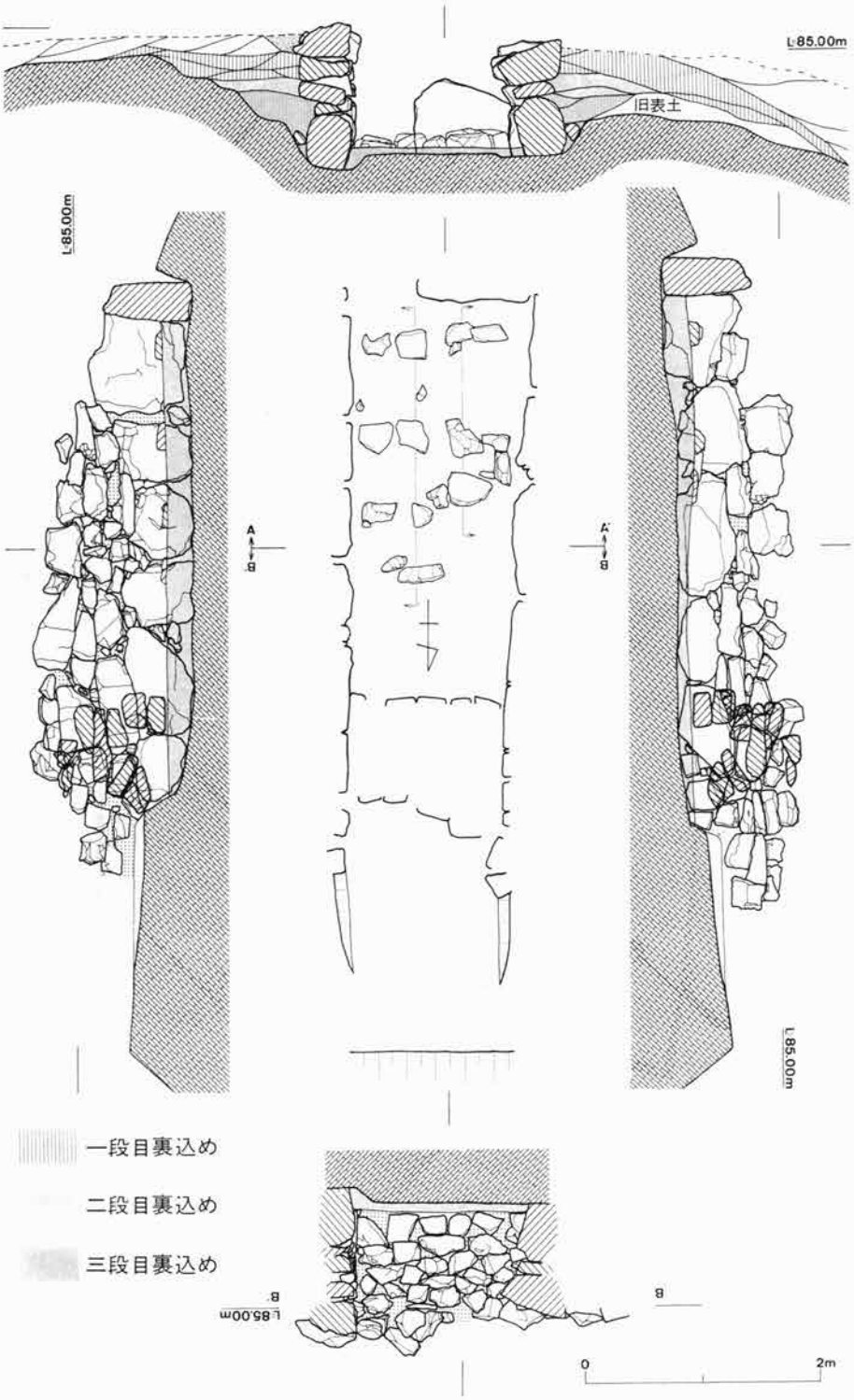
墳丘自体は，前記したことなどにより墳頂部は削平されていたが，よく整った円形を呈し，基底部まで確認することができた。

尾根高位側には，尾根と区画するやや円形を描く幅2m・深0.2mの浅い溝状の削り出しが認められた。墳丘の一部が尾根南斜面に入るため大きく見えるが，直径11m，南側からの高さ2.3mを測る。

墳丘の盛土は，石室の構築とともに併行して行われている。

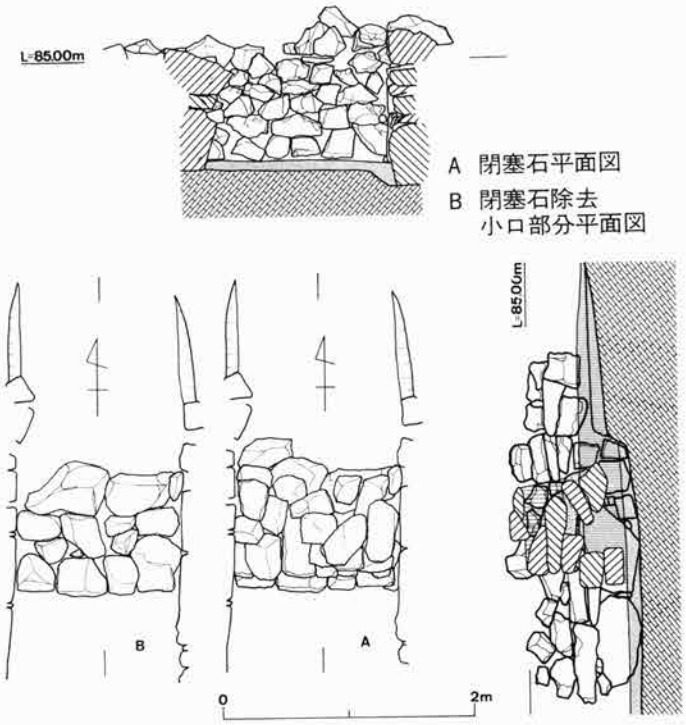
なお，墳丘東肩部および溝状の削り出し中や，石室前面の丘陵斜面からは，須恵器杯身・杯蓋片が出土しており，何らかの祭祀が行われていた可能性がある。

埋葬施設(第110・112図)　本古墳の埋葬施設は，無袖式の竪穴系横口式石室である。使用されている石材は，安山岩であり，本古墳より尾根高位側，入山川右岸の丘陵上で採取で



第111図　新ケ尾東10号墳石室実測図

きる石材である。石室は，調査前に墳頂部で認められた石材が，天井石であることが判明したが，片方が完全に閉塞部内側に落ち込んでおり，他に天井石は認められなかった。代って天井石抜き取りの際に割れた石くず，それに伴い玄室内に落ち込んだ側壁等により石室は完全に埋まっていた。破壊の度合は奥壁側がひどいため，南側から石材の除去を開始したものと思われる。



第112図　新ケ尾東10号墳閉塞石実測図

石室は，墳丘中央部よりやや東寄りに造られ，北方向に開口する。石室の全長5.1m，玄室長3.4m，奥壁幅1.54m，閉塞部(小口)幅1.32mで奥壁側が広くなっている。

石室を構築するにあたっては，丘陵高位側を削平し，溝状の浅い掘り込みを設け，尾根と区画したのち，尾根に直交する「] 」の字形墓坑を掘るが，丘陵高位側は地山削平面より，低位側になる西側は，黒褐色土の旧表土面より墓坑を穿っている。墓坑掘形は，両側壁・奥壁ともゆるやかであるが，石材を安定させるため，玄室床面よりさらに一段掘り込まれている。掘形内裏込めの状況は，淡赤褐色粘土・黄褐色粘土(地山)と旧表土(黒褐色土)が交互に入る縞状堆積で薄くつき固められている。羨道部は，削り出し面が，墓坑掘削面となるため掘形は有さず，削り出し面に直接石材を置く。

玄室奥壁は，最下段は2石により構成されていたと思われるが，後世の石材抜き取り時に壊れたものか基底石しか残存しないが，側壁に使用されている大きめの石材と同規模程度のものを使用している。

玄室側壁は，東側壁が6石，西側壁が7石で基底を構成するが，いずれも横長の石材を据える。東側壁では2石が基底石の上面の高さを合わすため立てて使用されており，西側壁北端では，同じく基底石上面の高さを合わすため立て積みする。二段目以上は，基底石

第113図　新ケ尾東10号墳遺物出土状況

より小さめの石材を横積みし，隙間には小石を詰める。一見すると乱雑であるが，横目地が三段通るのが窺える。

玄室床面には，2石ずつ3列側壁に平行して並べた棺台2列が検出された。棺台は，東側が約1.6m，西側が約1.5mで西側が短い。

奥壁より後方約3.4mのところに横口部(第112図)がある。横口部は，5石の基底石で2段，約40cm積み上げ，さらにその上に約80cm程閉塞石を積み上げる。横口部の前面には，墳丘外へのびる溝状の遺構も検出した。この溝状遺構は，北上りの傾斜をもつ墓道状遺構と考えたが，横口部の石積みが最下段の2石は，床面に対し垂直に積み上げる小口壁と，斜め上方に石積みを行う閉塞石との区別は明瞭となった。また，溝状遺構の掘形上面は，横口部側壁の最下部であり，小口壁の上面と一致することや，玄室側壁基底石上面と同じ高さにそろえられている。さらに小口壁と溝状遺構の間には，約2.5cmの地山を削った段差が認められるが，この段差部分の側壁基底石をみると，両側壁とも石材が小さくなり，特に西側壁では，2石を充塡して補っている。このことは，両側壁とも南側から5石まで基底石を据えたのち，地山を削りこの段差ができたと思われるが，掘形のスペース，後に小口部分を作るため，影になるので石材の大きさにこだわらなかったのかも知れない。

このようなことからすると，この溝状遺構は，本来もう少し南側にのびており，石室構築の際，石材搬入路として使用されたと考えられる。

石室構築後，床面が整地され，小口壁が積まれているが，この小口壁と段差の間は石室裏込めと同じように，黄褐色粘土と黒褐色土が交互に入る縞状堆積で薄くつき固められていた。小口部分から，段差の設けられたところまでは，小口壁に使用した石材より大きめの扁平な石材を両側壁間を埋めつくす長さ1mにわたり敷きつめていた。それに伴い，溝状遺構も横口部側壁基底石まで水平に埋め戻されている，小口部分に石敷きを設けること

から，横口部から玄室へは階段状に降りる構造であったと考えられる。

横口部側壁は，玄室内で使用されている石材よりもさらに小さく，基底石は2石で2～3段積みであるが，玄室側石積みとは合わず，独立した積み方となっている。

閉塞は，小口壁より上方0.2mまでとその上0.6mまでとは積み方に差があり，断面観察でもその差が歴然としており，2次期にわたり閉塞された痕跡が認められた。また，落ち込んでいた天井石から考えると，追葬時に壊した閉塞は約0.6mとなりかなり狭い。閉塞は，天井石の下に閉塞するのではなく，天井石を外側からおおう形で閉塞している。天井石は，落ち込んでいたものから復元すると，玄室上には4石架構されていたものと思われるが，横口部は天井石を架構しない。

遺物出土状況(第113図)　石室内より出土した遺物の総数約50点である。それらは,東側棺台付近，西側棺台付近，小口付近の3群に分けられるが，小口付近に集中する遺物と西側棺台との間でも，高杯と鉄鏃が出土している。

東側棺台付近では，奥壁より2列目と3列目の棺台付近に集中しており，刀・刀子・鉄鏃・鎌が出土し，鉄鏃は前記した場所で出土した1本を除きすべてここより出土したものである。また，2列目棺台上では，土師器高杯も出土した。出土状況は，刀を除き鉄鏃類は，破片化して分散したり，切先方向もまちまちでこの場所に集められたような状態であった。

西側棺台付近では，南側の棺台上より刀子，その下では，管玉・切子玉・鎌が出土し，棺台北端においては土師器高杯が，西側壁寄りでは高杯片が出土した。

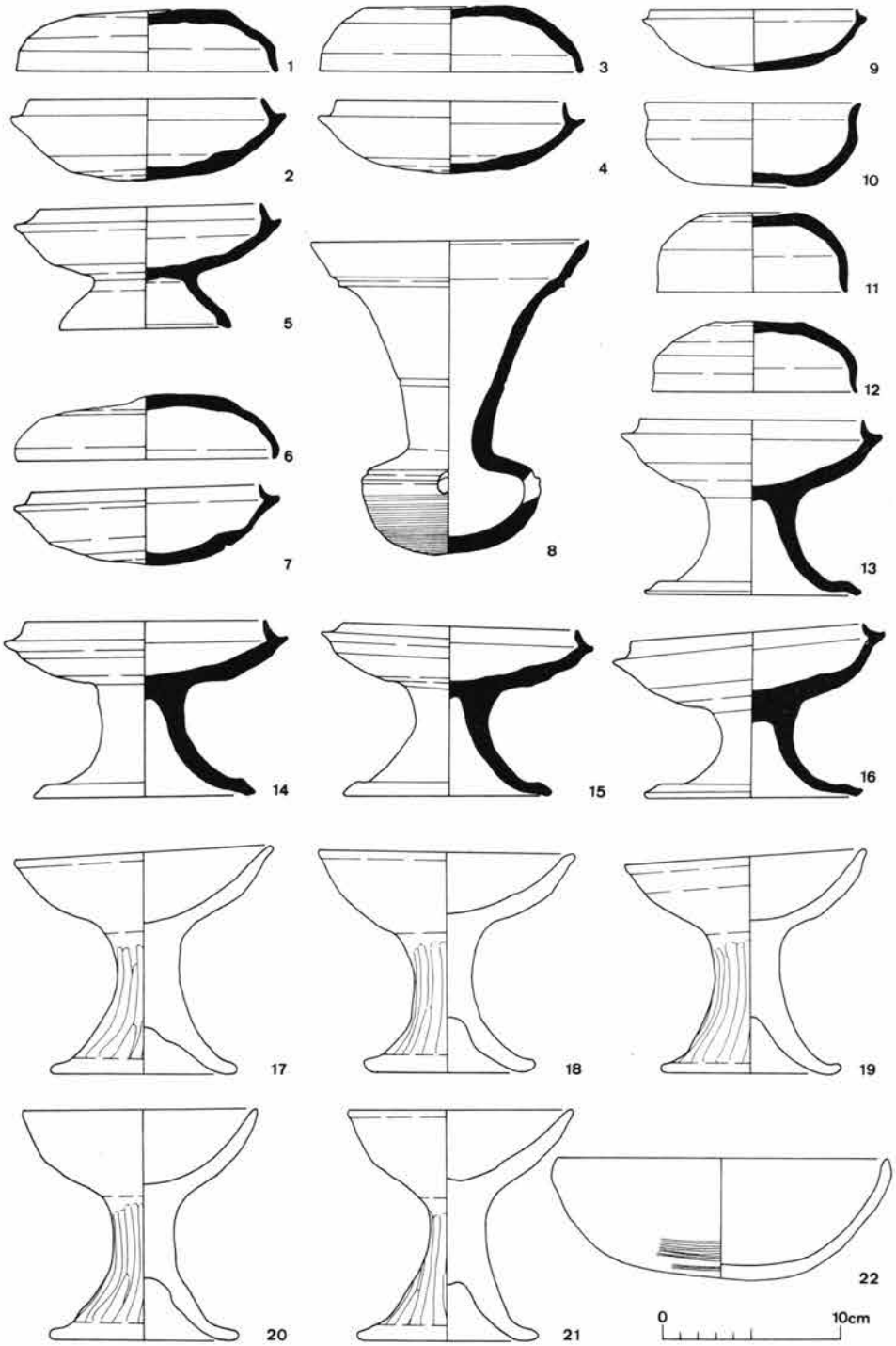
小口付近は，最も多くの遺物が出土したところであるが，すべて追葬時にかたづけられたような状態で，出土状況は土器が重ねられたり積みあげたりしてあり，出土した高さもまちまちである。須恵器杯身・杯蓋・高杯・甕・土師器高杯・杯が出土し，これらの土器の中に混じって金環・刀子・のみ等も出土した。

その他，前記したように，墳丘東肩部および溝状の削り出し中や，石室前面の丘陵斜面からは，須恵器杯身・杯蓋・甕片等も出土している。　(増田孝彦)

出土遺物　10号墳より出土した遺物には，須恵器・土師器の土器類，鉄刀・刀子・鉄鏃・鎌・鑿等の鉄製品，玉類・金環等の装身具がある。

a 土器(第114図，図版第67・68)　土器には須恵器と土師器がある。須恵器は，蓋杯・高杯・甕，土師器は，高杯・椀が出土した。

須恵器は，蓋杯の形態から4類に細別できる。I類は1・2・5で，1の蓋は口縁部と天井部とを分けるわずかの稜の痕跡を残す。口縁端部はやや鋭がり気味である。2の杯身は下部1/3に回転ヘラ削りを施し，やや内傾する立ち上がりをもつ。5の高杯は，2と同様



第114図　新ケ尾東10号墳出土遺物実測図(1)

の杯身に短脚を加えたもので，脚端部は肥厚する。

Ⅱ類は３・４で，３の蓋は，１に比して稜の痕跡はさらに鈍い。口縁端部は丸くおさめる。４は底部に回転ヘラ削りを施し，立ち上がりはやや内傾したのち，直線的に立ち上がる。

Ⅲ類は６・７で，６の蓋は，口縁端部が内湾する。７の杯身は，立ち上がりが低くなるもので整形も粗雑である。

Ⅳ類は９～12で，９の杯身は，さらに立ち上がりは低くなり，法量も小さくなる。10は杯で，口縁部に強いナデを施す。11・12は蓋で口径が小さくなるものである。

次にその他の器種として，８は鼎で，頸部は体部から直線的に外方へ立ち上がり，一条の沈線を境に外反気味に口縁下部の稜へ続く。体部最大径の位置に円孔を穿ち，以下にカキ目を施す。13～16は高杯で，４は同様の杯身に短脚を加えたもので，脚端部は屈曲して広がるものである。

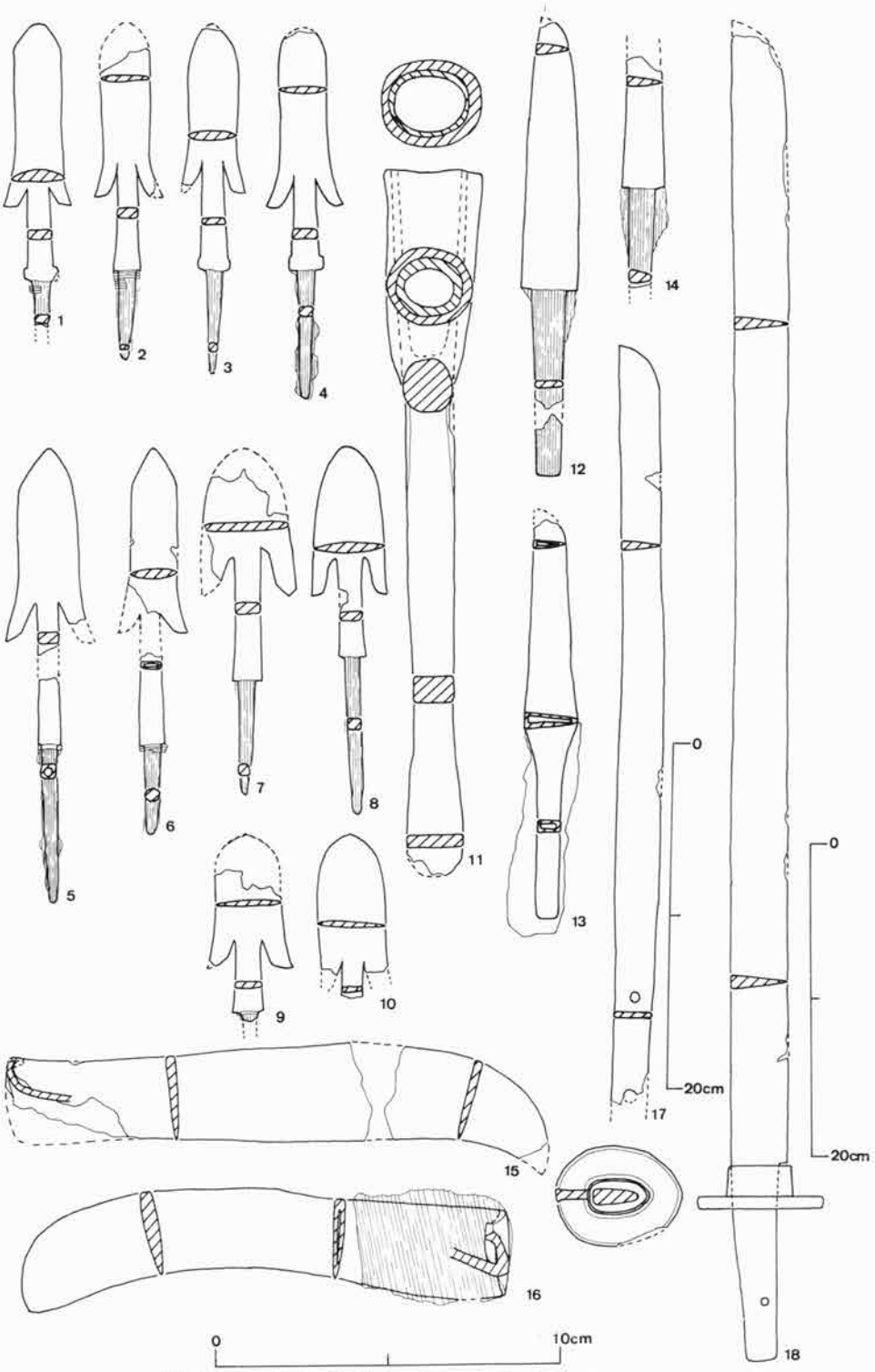
土師器　17～21は高杯で，上半は円柱状で下半は「ハ」の字状に広がる脚をもつ。脚部外面にヘラ削り痕が残る。22は椀で，口縁端部は上方へつまみ上げられる。内外面とも磨滅が著しいが，外面に一部ハケ目が残る。

10号墳より出土した須恵器は，もっとも古い様相を示す１・２・５は，大宮町太田鼻２号横穴[注47]出土のもっとも古い様相を示すものよりもやや古いと思われ，従来の須恵器編年にあてはめると，田辺編年のTK43型式，中村編年のⅡ型式Ⅳ段階に併行すると考えられる。また，もっとも新しいと思われる９～12は，同２号横穴の新相を示すものと同時期と思われ，田辺編年のTK217型式，中村編年のⅡ型式Ⅳ段階にあてはまる。

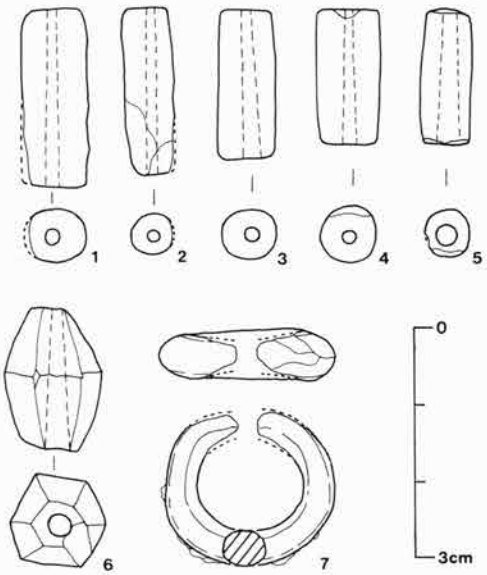
b 鉄製品（第115図，図版第69・70）　鉄製品には，鉄刀・刀子・鉄鏃・鑿・鎌がある。

鉄刀（17・18）　17は，茎部を一部欠損する現存長44.1cmのやや小ぶりの直刀である。茎は刃部に比してやや幅を狭めるが，関は不明瞭である。目釘穴が２か所認められる。18は，大ぶりの直刀で，切先をわずかに欠損する。全長82.5cm・茎部11.9cm，刀身断面は二等辺三角形を呈し，関近くで幅3.5cm・厚さ0.8cmを測る。関は直角に刃側のみにつく。鋒は幅2.1cm・厚さ0.15～0.2cmの断面倒卵形のものである。鐔は長径8cm・短径6.5cm・厚さ0.5～0.7cmの板状を呈する。茎の厚さは中央部で0.6cmで，目釘が確認できる。

刀子（12～14）　12は，切先と茎の一部を欠損する。刃に対し直角につく両関で，茎部には柄の木質が残存する。13は，切先を一部欠損する。関は斜めの削り関で，刃部は関部分で最大幅となる。茎部の黄白色の付着物は，鹿角製の柄と思われる。現存長12cmを測る。14は刃部と茎部の過半が欠損している。両関で，棟側は直角につくが，刃側はやや斜めである。茎部には柄の木質が残る。現存長6.6cmを測る。



第115図　新ケ尾東10号墳出土遺物実測図(2)



第116図　新ケ尾東10号墳出土遺物実測図(3)

鉄鏃(1～10)　総数11点出土している。いずれも平根式の短頸鏃である。1～6は，鏃身の幅が狭く縦長であり，1・3・4は棘状突起をもつ。4の全長は10.7cmを測る。7～10は，鏃身の幅が広く長さの短いもので，8の全長は10.6cmを測る。

鑿(11)　袋柄式の鑿で，袋断面は二重の円形で，柄の装着口楕円形となる。袋内部には，木質が残存する。頸部断面は長方形を呈し刃部の幅はやや広がる。全長20.6cmを測る。

鎌(15・16)　いずれも長方形の鉄板の一方に刃をつけるもので，刃部先端が湾曲する曲刃鎌である。基部には，柄を装着するための折り返しが見られる。15は，復元全長15.6cmを測る。16は，基部に木質が残存しており，その木目から柄は刃に対して鈍角に装着されていたものと考えられる。全長14.3cm・基部幅2.8cm。中央での刃部幅2.5cm・厚さ0.35cm。断面は，中央部分がやや膨む。

c 装身具(第116図・図版第70)　装身具は，管玉・切子玉の玉類と金環が出土した。

玉類(1～6)　いずれも，西側棺台の中央よりやや南側よりで出土したものである。1～5は管玉で，1・2は緑色凝灰岩製で磨耗が著しい。1は直径0.7cm・長さ2.35cm，2は直径0.55cm・長さ2.2cmを測り，淡黄緑色を呈する。いずれも片側穿孔である。3～5は，碧玉製であり濃緑色を呈する。形がややいびつであるが，表面はていねいな仕上げである。直径0.65～0.75cm・長さ1.8～1.95cmを測り，いずれも片側穿孔である。

6は，水晶製切子玉で，一部表面を欠損する。長さ1.9cm・幅1.2～1.3cm。片側穿孔である。7は，銅地金銅張の金環であり，銅地金は中実で，「C」字形のほぼ円形に曲げ，表面に金の薄板を貼りつけたものである。一部表面の金箔がめくれ，銅地金が細くなっており全体的に残りはよくない。長径2.2cm・短径2.05cmを測る。対になる金環は出土しなかった。

4. ま　と　め

新ケ尾東古墳群は，出土した遺物から6世紀中頃に築造された木棺直葬墳2基と6世紀

後半に築造された竪穴系横口式石室を内部主体とする古墳であった。新ケ尾東古墳群の分布状況を見ると，2～4基程度を1つの単位として近接して築造され，4グループほど形成しており，単独墳として認められるのは，10号墳南東に位置する古墳群のみである。また通常石室の開口方向を考えた場合，10号墳の場合南開口を連想するが，実際は北に開口しており，南枕となっている。主軸についてもほぼ南北に置き，木棺直葬墳についても，須恵器転用枕の出土から南枕，主軸が南北にとれないものでは，南方向が枕となる共通性があり，調査した古墳で見る限り共同体の中で南枕を採用することがひとつの指針となっていたと考えられる。

竪穴系横口式石室を内部主体とする古墳は，京都府北部では，天田郡夜久野町流尾古墳(注48)，福知山市池ノ奥4号墳(注49)，宮津市梯倉山1号墳(注50)，与謝郡加悦町入谷西A－1号墳(注51)の4例が知られるが，いずれも6世紀前，中頃の築造であり，現時点では当地域の横穴式石室導入以前の段階であり，その分布も分散している。このほかに，竪穴系横口式石室と考えられるものに，昭和62年度に当調査研究センターが調査した，遠所1号墳(注52)が本古墳と同様な形態をなしていた。また，当古墳群の谷一つ隔てた南側の丘陵に広がる，スクモ塚古墳群中の28号墳(峰山町内記・弥栄町吉沢)は，京都府教育委員会が調査を行い，竪穴系横口式石室を示唆する内容をもっていた。いずれも，本古墳群と同様の6世紀後半段階の築造である。

遠所1号墳は，全国的にも横穴式石室盛行期にそれを受容せず，特異な石室を採用していることから，新ケ尾東古墳群を形成した集団がどのような性格であったか，類例のある地域との交流関係の中でその結びつきを考えていく必要があろう。

（増田孝彦）

(4) 鳥　取　城　跡

1. 位置と環境(第117図)

鳥取城は，熊野郡久美浜町大字浦明小字鳥取に所在する。鳥取城の存在する浦明周辺は，「小天橋」によって日本海と隔てられた久美浜湾に面し，海成段丘が発達する。この海成段丘上には，縄文時代から人々の生活の足跡を留める。鳥取城の西方約500mにある浦明遺跡は，縄文時代中期から古墳時代に至る複合遺跡で，昭和54年の調査では，弥生時代中期から古墳時代後期に至る溝・竪穴式住居跡が検出されている。北西約300mには，現在は破壊されて姿を留めていないが，長柄横穴群があった。また北方約2kmの海岸には，貨泉の出土などで有名な函石浜遺跡がある。

2. 遺跡の概要(第118・第119図)

鳥取城は，一色氏の属将，栗田内膳正の居城で，天正十年に細川藤孝の家臣，松井康之の手によって落城したとされる。「一色軍記」・「丹哥府志」には水取山と記されているが，「熊野郡誌」では水取山を鳥取山の誤りとし，鳥取城として記載されている。

このように，鳥取城は古くから城跡として注意されてきたが，これは主に山上にある土塁や堀切・石列と，その下部にある郭状の平坦地が城として認識されていたにすぎない。しかし，丘陵先端付近の標高16～19mの地点で広い平坦地が認められ，城に関係する何らかの施設の存在が予想されたため，試掘調査を行うこととなった。

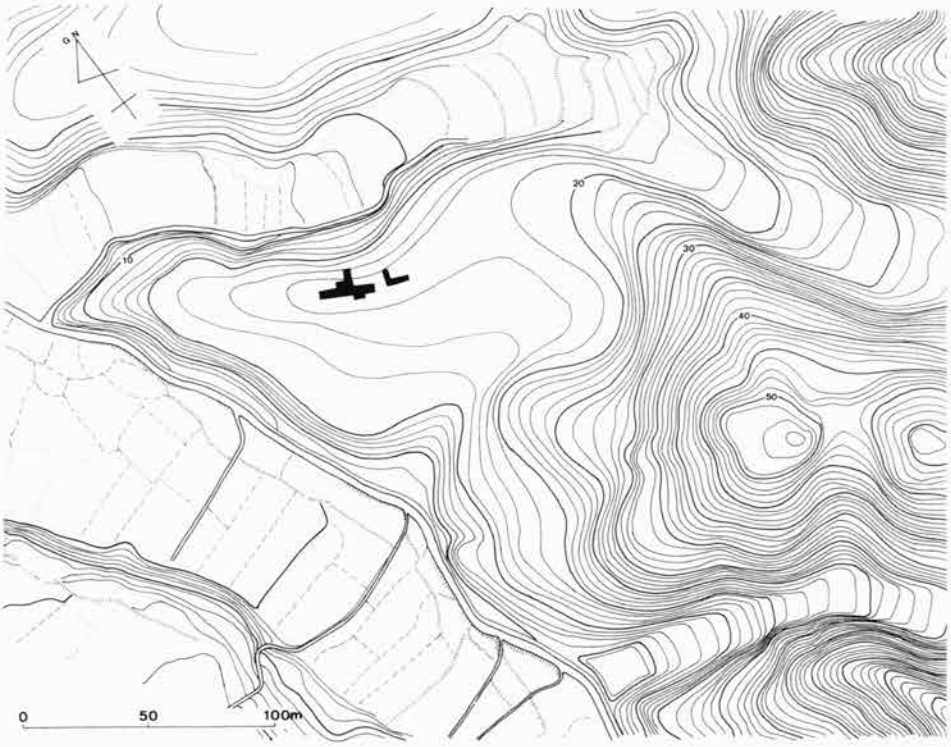
調査は，平坦地のほぼ中央に，T字とL字の2か所のトレンチを設定して行ったが，ピットを検出したため随時トレンチを拡張した。

検出した遺構には，掘立柱建物跡・土坑・溝・ピットがある。

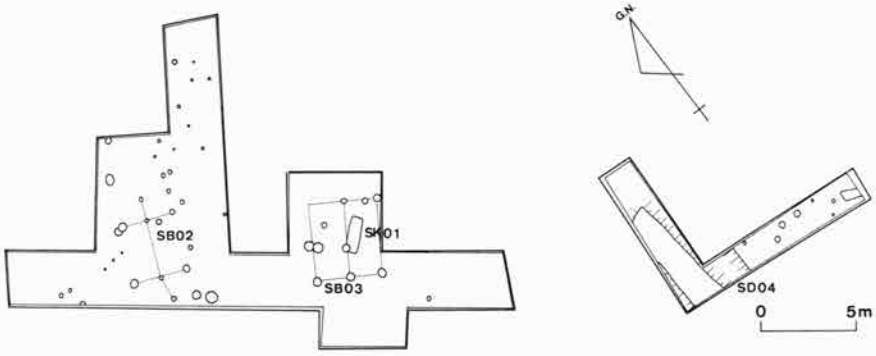
SB02　1間×2間の建物跡である。四隅の柱穴は直径40cm程度だが，中央の柱穴は直径20cmと小型である。この小型の柱穴に同規模の柱穴が付随する。門である可能性が考えられる。

SB03　すべての柱穴は検出し得なかったが，南西の柱列では柱痕を検出している。

第117図　調査地位置図
1. 鳥取城　2. 函石浜遺跡　3. 長柄横穴群
4. 浦明遺跡



第118図　鳥取城跡地形測量図



第119図　トレンチ実測図

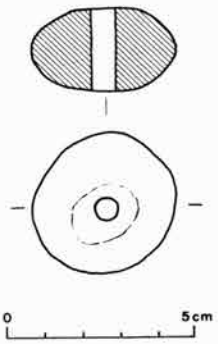
2間×2間の建物跡と思われる。

SK01　2m×0.9m・深さ15cmの長方形の土坑である。形状から，土坑墓の可能性が考えられる。ここからは白磁片が出土している。

SK04　幅1.1m・深さ20cmの溝である。溝は一旦埋まってから掘り直されている。平坦地がやや狭くなる部分までのびており，平坦地を区画する意味を持っていたと思われる。

遺物には，白磁・青磁・瓦質土器・算盤玉状土製品・須恵器・土師器がある。いずれも細片であり，図示し得たのは算盤玉状土製品のみである。

算盤玉状土製品(第120図)は，径3.5～3.8cmの楕円形を呈し，厚さは2.2cmである。直径6mmの孔を穿つ。紡錘車，もしくは土錘と思われる。時期は不明である。



第120図　出土遺物実測図

3. ま　と　め

今回の調査では，柱穴の中から土師器が数点出土している。しかし，いずれも細片のため，建物の時期を特定することができなかった。遺構の中で時期を推定できるのはSK01で，ここから出土した白磁は13世紀のものと思われる。このSK01を切って，SB03の柱穴が掘られており，SB03は13世紀以降の時期とすることができる。このことは，文献の示す城の年代と矛盾しない。またトレンチ周辺にも，土塁や桝形状の地形が確認できることから，調査地が城の一部であることはほぼ間違いないだろう。恐らく根城の性格を持っていたものと思われる。

出土遺物から見ると，出土量の最も多かったものは須恵器で，城に関係する遺物は少なかった。須恵器は，古墳時代のものが多く，調査地周辺に古墳があった可能性が考えられる。現状から観察すると，古墳状の隆起は認められないが，城を造った際に古墳を破壊していることが考えられる。

（荒川　史）

(5) アバ田古墳群

1. 位置と環境

アバ田古墳群の所在する新庄地区は，熊野郡内で最も広い開析谷を持つ川上谷にある。この川上谷の上流部が旧川上村にあたる。旧川上村域には多くの遺跡があり，特に古墳の分布の密な地域である。

前期古墳は，川上地域では確認されていないが，隣接する島の丘陵端部に全長40mの前方後円墳である島茶臼山古墳がある。

中期古墳では，新庄の対岸にあたる芦原に芦高神社古墳がある。またアバ田古墳群の東方400mには，一辺約50mの方墳である権現山古墳がある。

後期にはいると，新庄地区の南側の谷にあたる伯耆谷に須田古墳群が形成される。この須田古墳群は，5世紀末から6世紀後半にかけて形成された古墳群で，130基余りの古墳が知られている。この内発掘調査されているのは湯舟坂2号墳で，金銅装双龍環頭大刀のほか多くの遺物が出土している。

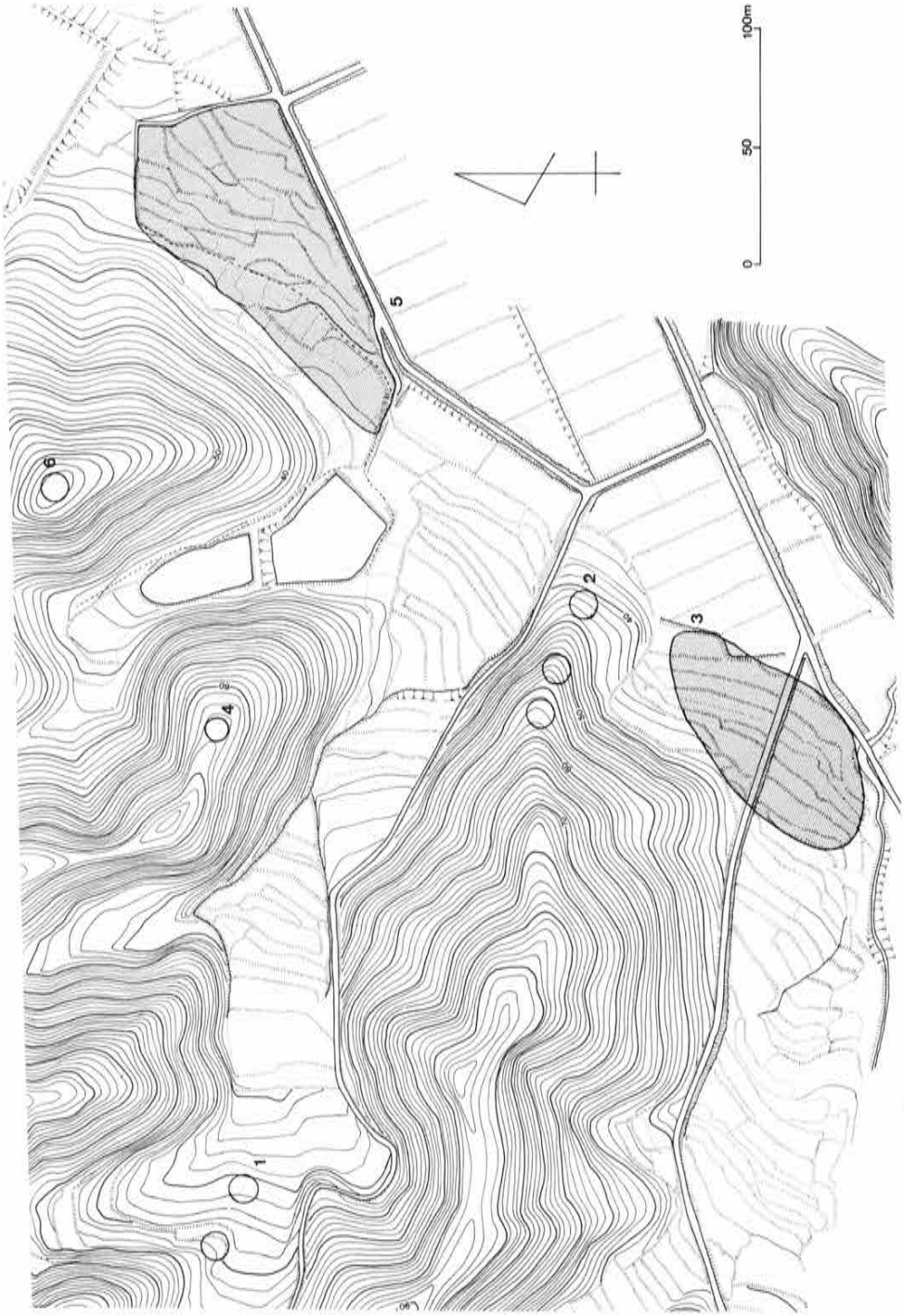
第121図　調査地位置図

1. アバ田古墳群　2. 島茶臼山古墳
3. 権現山遺跡　4. 崩谷古墳群
5. 湯舟坂2号墳

アバ田古墳群のある新庄地区では，これまで権現山遺跡が知られていたのみで，遺跡の

付表9　新庄1団地内遺跡一覧表

番号	遺跡名称	種別	遺跡の概要	備考
1	アバ田古墳群	古墳	横穴式石室2基(古墳時代後期)	本概要
2	崩谷古墳群	古墳	横穴式石室2基・木棺直葬墳1基（古墳時代後期）	昭和62年度京都府教育委員会調査
3	クズレ谷遺跡	散布地	ピット，須恵器（杯・甕・円面硯）土師器（椀・甕）（古墳時代～鎌倉時代）	昭和62年度当調査研究センター試掘
4	アバ田東1号墳	古墳	円墳・直径10m，須恵器（提瓶・甕）（古墳時代後期）	〃
5	アサバラ遺跡	散布地	竪穴式住居跡，土坑・溝 土師器（甕・高杯）須恵器（杯・高杯・紡錘車）（古墳時代～）	〃
6	アバ田東2号墳	古墳	円墳か	



第122図　新庄1団地内遺跡分布図

分布はほとんど知られていなかった。しかし，国営農地の開発に伴う分布調査によって，アバ田古墳群や崩谷古墳群をはじめとして，多くの古墳や城跡が丘陵上に分布することがわかった。さらにアバ田古墳群調査中にも，アサバラ遺跡・クズレ谷遺跡・アバ田東1・2号墳を発見した。このことによって，新庄地区では少なくとも古墳時代以降にやや安定した緩斜面に人々が住み，周辺の丘陵上に古墳を築いていることが明らかになってきた。

2. 調査の経過

アバ田古墳群の調査は，7月9日に慰霊祭を行い，まず1号墳から着手した。1号墳は，石材が散乱しており，開口する方向すら判断できない状況だったため，まず石材が散乱しているか所を中心に表土を掘り下げた。その結果，北に開口する石室であることがわかった。その後転落した石材を除去し，石室内を掘り下げていった。墳丘は，開墾などによって大きく改変されていたため，トレンチによって調査を行った。

2号墳は，天井石まで残っており，石室および遺物の残存状況は良好と思われた。しかし，石材が小さく，北西側の側壁が1m以上も石室内に倒れ込んでいた。また，袖部付近にタモの巨木があり，石材の隙間に根をはっていた。このタモの木を取り除くと，石室が崩れる可能性が考えられた。そこで，タモの木は残しておいたため，側壁の上部は掘り切れなかった。墳丘は，天井石まで削平を受けているものの，1号墳に比して残存状況は良好と思われ，石室を中心に約160m²の範囲の表土を除去し，一部断ち割りを入れて調査を行った。掘削作業は11月9日に終了し，11月11日に実測等のすべての作業を終了した。

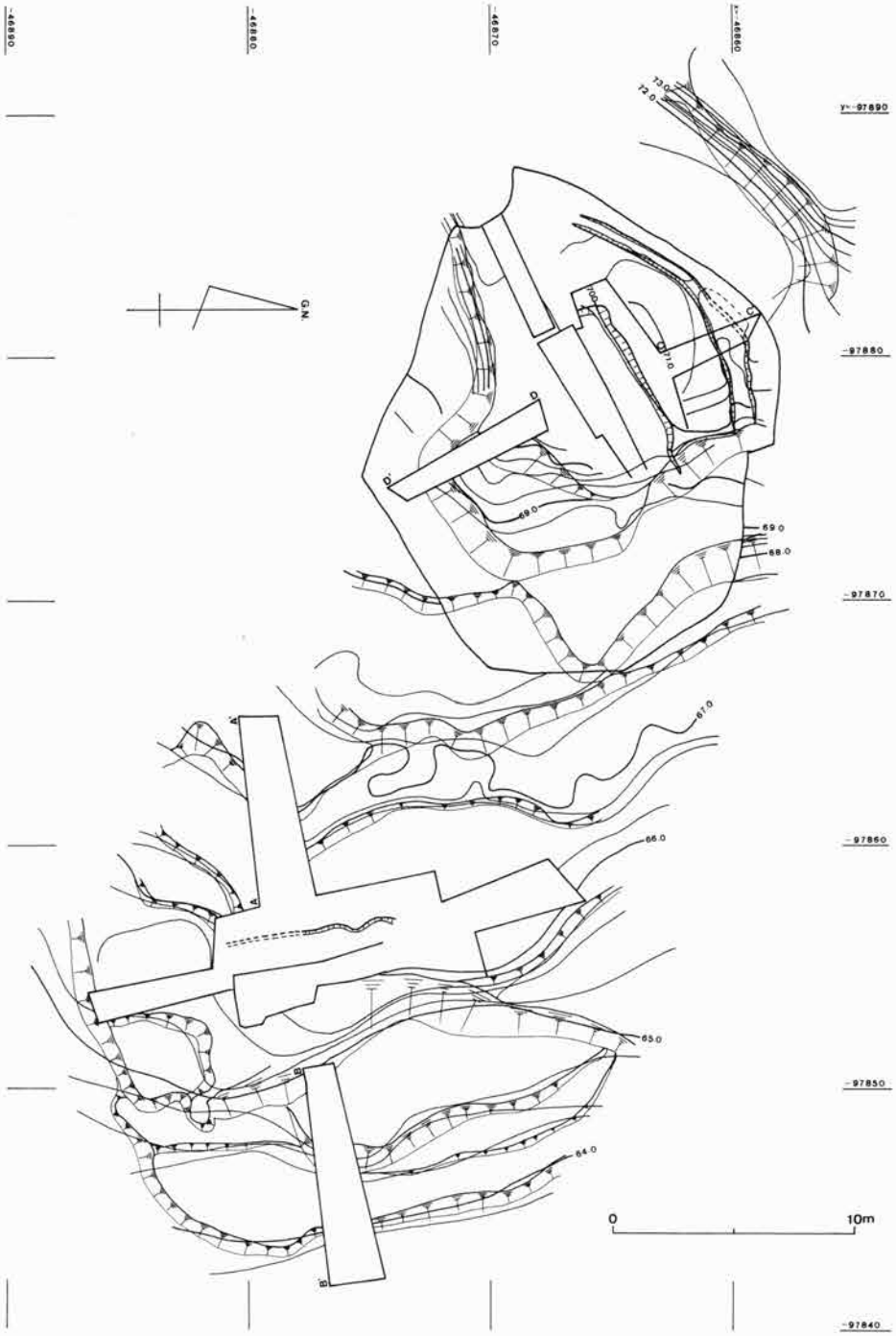
3. 遺跡の概要

①1号墳の調査(第123～128図，図版第73・74・77・78)

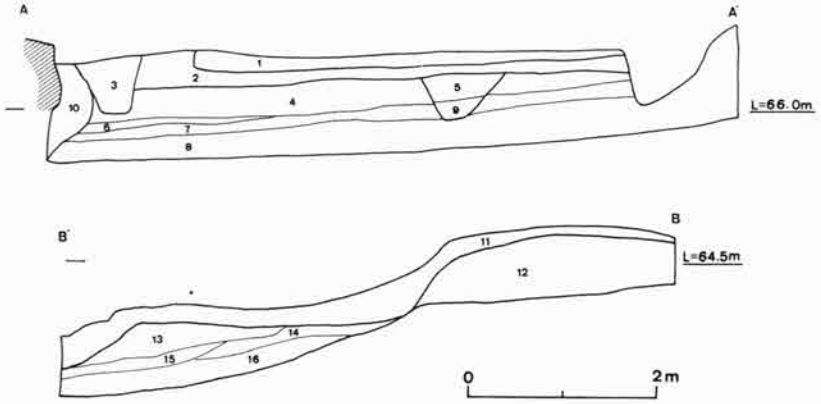
墳丘(第123・124図)　1号墳は，狭長な谷にはりだした尾根の先端に位置する。墳丘は，開墾等によって封土の大半が失われており，石材が散乱している部分のみ，わずかな隆起を見せているだけであった。しかし，墳丘の基底が残存している可能性も考えられたため，玄室の西方・東方・南方・北西方の4か所にトレンチを設定した。

西方のトレンチでは，淡茶褐色土層から掘り込んでいる掘形と溝のラインを断面で確認した。この淡茶褐色土層は，黒褐色土層の上にあり，黒褐色土層が古墳築造段階の表土とも考えられた。しかし，2号墳の断ち割りで，黒褐色土層が2層あることを確認し，古墳築造以前の旧表土であることがわかった。おそらく古墳を築造する際に整地して，表土を削っているものと思われる。

東方のトレンチでは，開墾による削平のためか，遺構は全く検出しなかった。



第123図　アバ田古墳群地形測量図



第124図　アバ田1号墳墳丘断面図

1. 暗茶褐色粘質土　2. 茶褐色土(やや砂質)　3. 茶褐色土(やや粘質)　4. 淡茶褐色土(やや砂質)　5. 茶褐色土　6. 黒灰色土(やや砂質)　7. 黒褐色土　8. 淡赤褐色粘質土(礫多く含む)　9. 淡黒灰色土　10. 淡黒褐色土　11. 表土　12. 暗茶褐色粘質土　13. 暗茶褐色粘質土(12より粘性弱く，こぶし大の礫含む)　14. 茶褐色粘質土　15. 暗茶褐色粘質土(13に比べ礫は少ない)　16. 茶褐色粘質土(バイラン土の白色砂粒を含む)

南方のトレンチにおいても，奥壁の石材が後方に倒れるほど削平されており，掘形・溝等は検出しなかった。

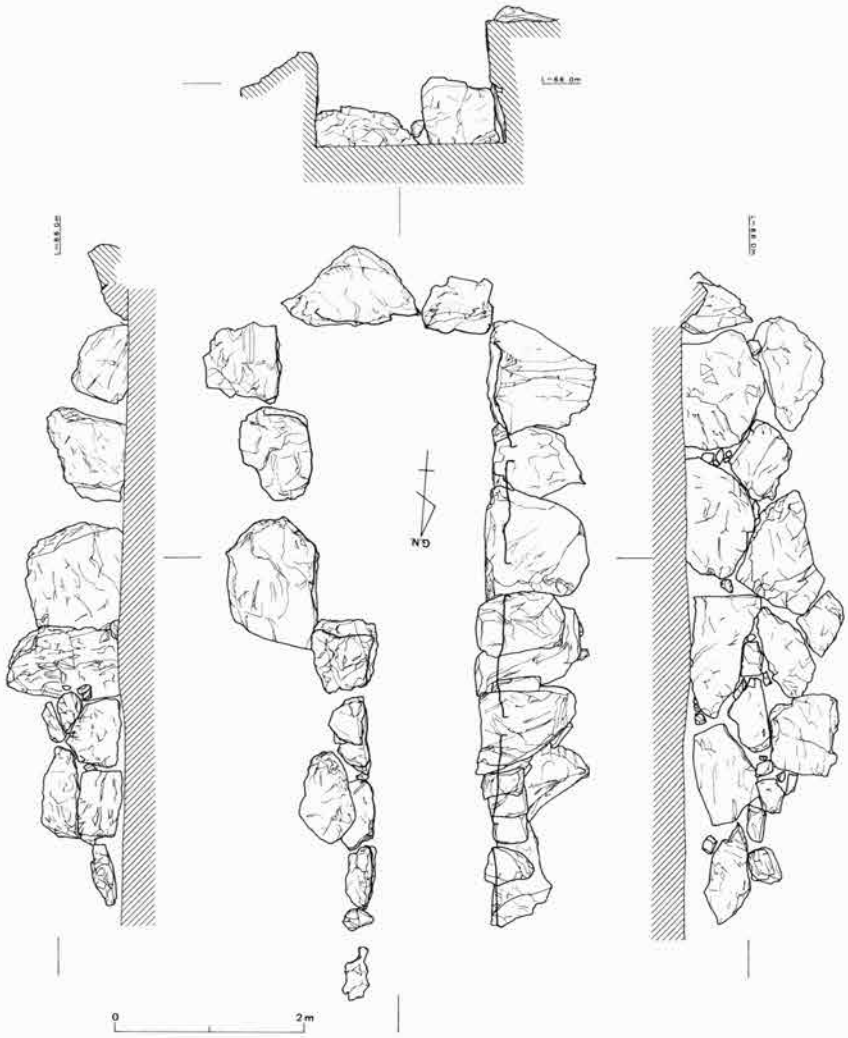
北西方のトレンチにおいても遺構は検出しなかった。

このような状況のため，墳丘の規模・形状等を明確にし得なかった。しかし，2号墳の形状から，円墳の可能性が高いことと，東方のトレンチで検出した溝が1号墳の周溝とすると，直径約12mの円墳と考えられる。

埋葬施設(第125図)　本古墳の埋葬施設は，奥壁から羨道に向かって右側に袖をもつ，片袖式横穴式石室である。すべて付近で採取できる凝灰岩の自然石を使用している。石材は幅が0.6～1.2mの大きさのものを，3段もしくは4段積んでいたと思われる。しかし削平によって封土を失い，右側壁は石室の外側に倒れていた。左側壁は石室内に倒れ込んでいるが，その際に破砕したものか，石室内は凝灰岩の石屑が床面直上まで堆積していた。この石屑の堆積層からは，糸切り底を持つ土師器が出土しており，平安時代頃には石室の破壊が始まっていたものと思われる。

石室は北に開口し，座標北によればN-5°-Wである。石室の全長は6.3m・玄室長3.1m・玄室幅2m・羨道長3.2m・羨道幅1.4mを測る。現存する玄室の側壁は，最も高い部分で1.64mを測る。

石室の掘形は，石室東方で検出したのみで，墓坑の形状は明確にできなかった。しかし，石室の方向が尾根と直交することや，尾根の幅が狭いことから，「コ」の字状の墓坑では



第125図　アバ田1号墳石室実測図

なく階段状に丘陵を削って石室を構築した可能性が考えられる。

奥壁は，基底の1段のみが残る。1号墳の石材の中では中型の石材2石を立てて使用する。

奥壁から羨道に向かって右側の玄室側壁は，基底の1段のみが残る。大型の石材3石で構成する。

奥壁から羨道に向かって左側の側壁は，玄室と羨道の明確な区別がない。下段は大型の石材5石を立てて使用する。下段の石材の上部は，おおまかに高さを揃えている。羨道部の石材は，高さを合わせるためか床面より浮いた状態になっている。石材と石材の隙間には，小型から中型の石材を詰めている。上段は，大型の石材を横にして積んでいる。積み

方に規則性は見られない。羨道部の石材は，やや小型化する傾向が見られる。壁面はやや内傾する。

玄室の平面形態は長方形を呈する。玄室床面積は6.2m²である。床面には，敷石・排水溝等の施設は見られなかった。

羨道は，左右両壁とも平行にのびる。奥壁から羨道に向かって右側の側壁は，袖石に大型の石材を立てて使用するが，それ以外の石材は，玄室の石材に比べ小型のものを使用する。下段は3石の石材を用いる。上段は，下段と同様の大きさの石材を積んでいるが，それによって生じたV字形の隙間には小型の石材を充塡する。

羨道部の床面にも，排水溝等の施設は見られなかった。

遺物出土状態(第126図)　石室内から出土した遺物は，総数約50点である。このうち鉄製品はわずかに鉄鏃1点で，残りのすべてが須恵器・土師器の土器類である。横穴式石室の副葬品の内容としては異例であり，石室が開口している段階に持ち去られた可能性も考えられる。しかし，遺物の出土状態を見てみると，土器類は完形もしくはそれに近いものがほとんどであり，大きく移動した形跡は認められない。おそらく，最終埋葬時の状況を示しているものと考える。

石室内の遺物は，おおよそ3つのグループに分けられる。奥壁付近にまとめられた一群・玄室中央に散在する一群・袖部付近にまとめられた一群の3グループである。

奥壁付近には，左隅に6点の杯身・杯蓋が片付けられた状態で出土している。それぞれ3点ずつ出土しており，これらはセット関係にあるものと思われる。右隅には，杯蓋が1点のみ出土している。

玄室中央では，4点の杯身・杯蓋が内面を上にした状態で出土している。これらの土器は，その場に置かれた状況を呈している。この一群が最終埋葬の際に副葬された土器であろう。この4点の土器の横に，杯身・杯蓋・高杯が重なって出土しているが，これらの土器も最終埋葬の際の副葬品と考えられる。

袖部付近は，最も土器が密集しているところで，約25個体が出土している。これらの土器は雑然と積み上げられた状況を呈している。おそらく追葬段階に移動させられたものであろう。土器の組成の点では，他のグループの組成が杯身・杯蓋がほとんどであるのに比べ，有蓋高杯や土師器の高杯・椀がある点で大きく異なる。この袖部の土器が，1回に副葬されたのかは明らかではないが，同じ古墳への埋葬でも，初期の埋葬あるいは追葬の段階によって，副葬される土器のセットが異なっていることを示すものと思われる。

これらの土器群のほかには，羨道部中程の右側壁よりで短頸壺が1点と，前底部で高杯が1点出土している。

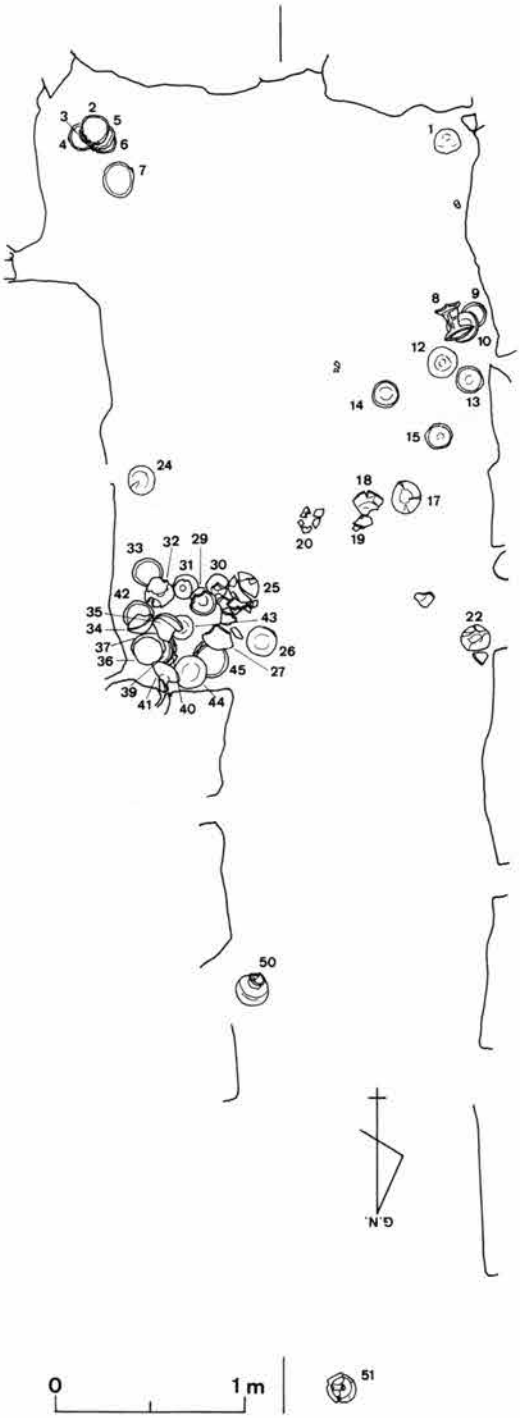
出土遺物(第127・128図，図版第77・78)　1号墳の出土遺物には，土器類と鉄鏃がある。以下，個々について説明する。なお，各遺物の番号は，遺物出土状況図の番号と一致する。

(a)土器　土器には，須恵器と土師器がある。出土位置別に説明していく。なお，杯身・杯蓋は主に口径によって分類する。

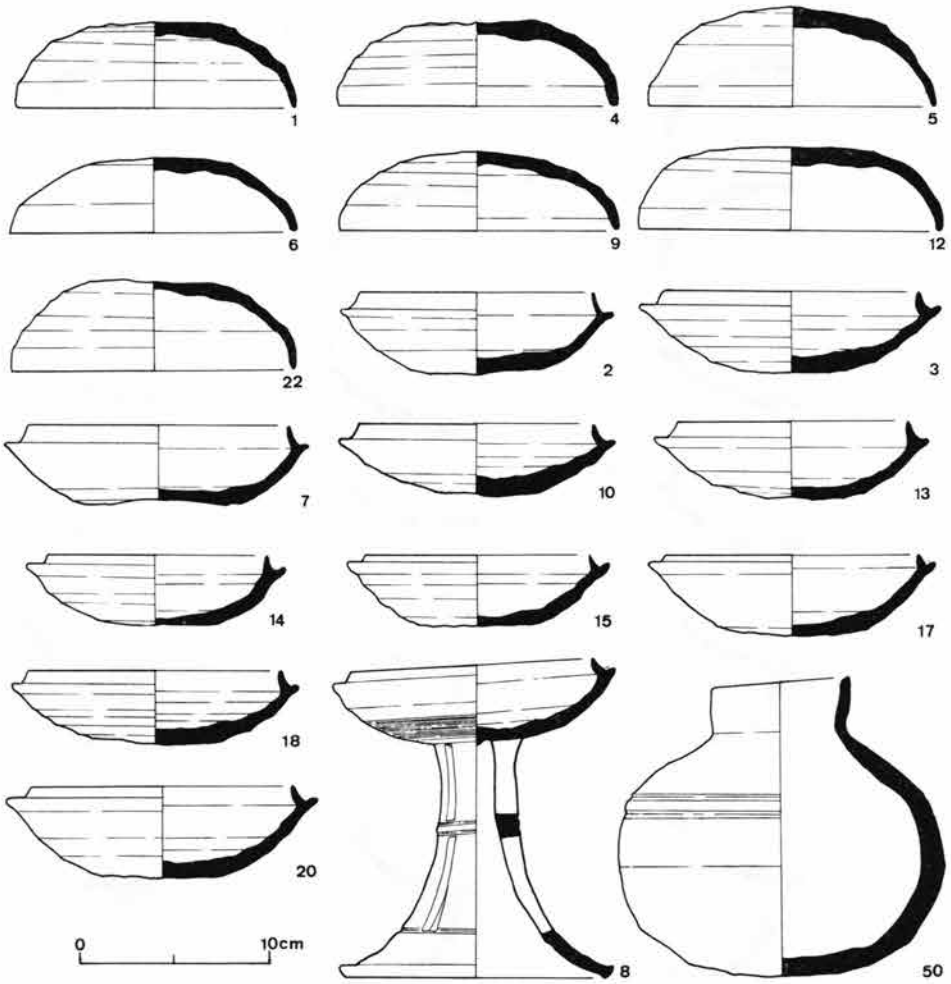
第127図1～7は，奥壁付近から出土した土器である。須恵器の杯身・杯蓋のみが出土している。杯身は，2が口径12.6cmとやや小型で，残りの2点は13.6～13.9cmとほぼ同じ大きさである。杯蓋は4点とも15cm前後で，同様の口径を持つ。1と7には，体部内面に同心円文の当て具痕が残る。

第127図8～22が，玄室中央出土の土器である。須恵器の杯身・杯蓋・高杯がある。このグループの杯身はおおよそ2つのタイプに分けられる。つまり，10～15の12cm前後のものと，17～20の13.5cm前後のものである。杯蓋は，15cm前後のもの(9・22)と，やや大型の15.9cmのもの(12)がある。高杯は有蓋高杯で，長脚に2段の透しを持つ。透しは3方にある。脚部には透しと透しの間に2条，下段の透しの下部に1条の沈線を持つ。杯部にはカキ目を有する。

第128図は，51を除いて袖部付近の土器である。須恵器の杯身・杯蓋・高杯



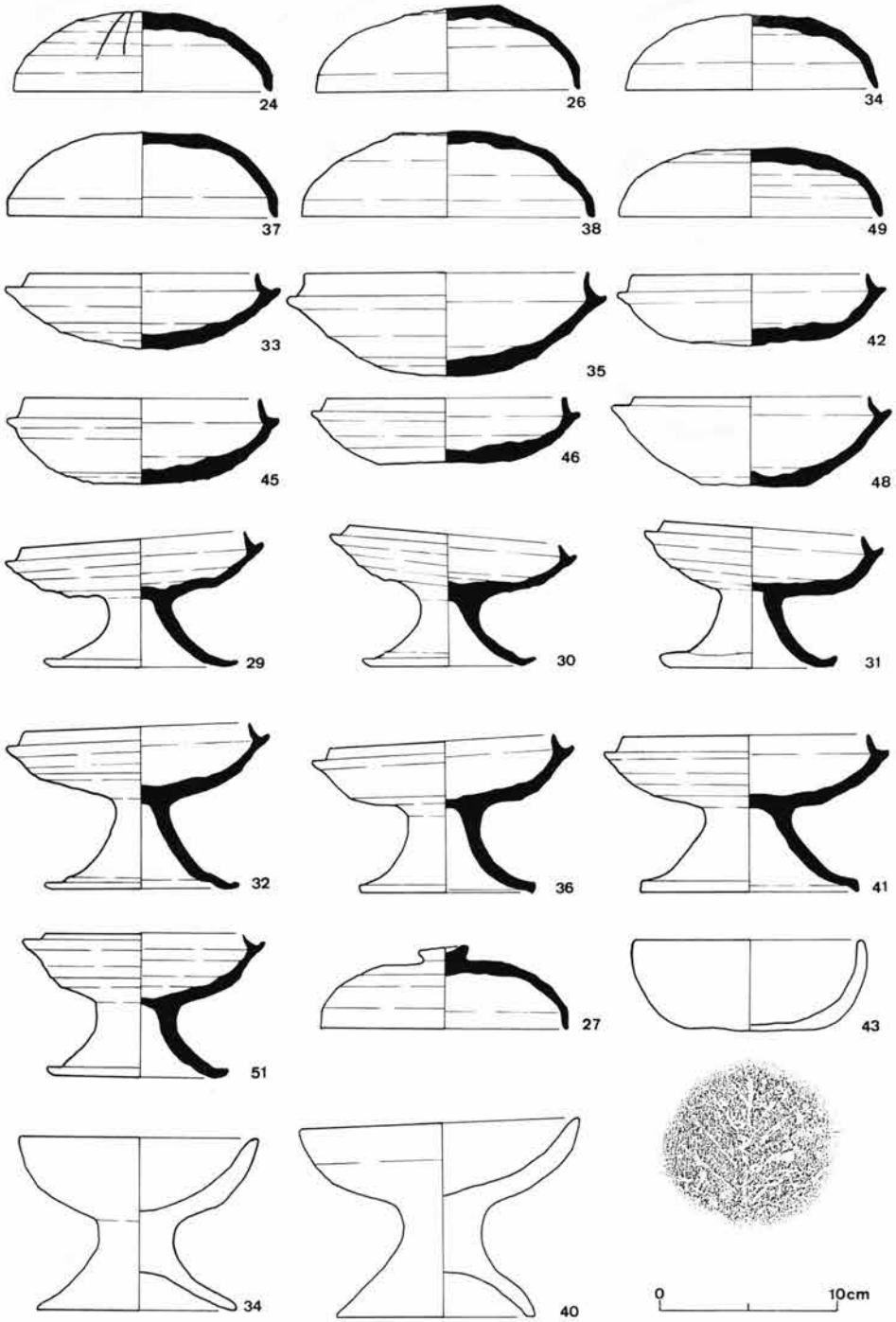
第126図　アバ田1号墳遺物出土状態図



第127図　アバ田1号墳出土遺物実測図(1)

・高杯蓋，土師器の高杯・椀がある。杯身は，35が口径16.2cmと大型で，他は13.3cm前後である。杯蓋は14.3cm前後のもの(24・34)・15cm前後のもの(26・37・49)・16.4cmのもの(38)の3つのタイプがある。24には「ハ」の字状のヘラ記号がある。高杯はすべて有蓋高杯である。外反ぎみに開く脚部を持ち，すべて透しは持たない。脚部端部に違いが見られ，端部を外上方に折り曲げるもの，横方向にのびるもの，下方に折り曲げるものの3種がある。高杯蓋は，中央に凹部を持つつまみを有する。土師器の高杯は2点ある。34は，内湾する杯部とハの字状に開く脚部を持つ。40は，34と同様に内湾する杯部を持ち，脚部も内湾ぎみに開く。椀は，平底から内湾ぎみに立ち上がる体部を持つ。外底面には木の葉の圧痕が残る。

第127図50は，羨道部から出土した短頸壺である。わずかに内湾する口縁を持ち，口縁端



第128図　アバ田1号墳出土遺物実測図(2)

部は面を作る。球形の体部に2条の沈線を持つ。体部下半は不定方向のヘラケズリを施す。

第128図51は，前底部から出土した高杯である。石室内出土の高杯と類似する形態であるが，杯部の立ち上がり等はやや退化する傾向が見られる。

これらの土器の年代であるが，出土状況から判断すると，玄室中央から出土している土器群が最終追葬時の副葬品と考えられる。そこで，この土器群とその他の奥壁付近にまとめられていた土器群や袖部にまとめられていた土器群とは，時期差があるものと判断できる。先に，口径によって蓋杯を分類したが，玄室中央の土器群には他の土器群に見られない小型化したタイプの杯身を含んでおり，形態的にも裏付けられる。奥壁付近の土器群と袖部付近の土器群との関係は，出土位置の違いから先後関係がある可能性も考えられるが，土器の形態からは差を見いだせなかった。土器の型式からは，大きく2時期と捉えるのが妥当であろう。

1号墳出土の土器を，従来の須恵器編年に当てはめると(注53)，TK209型式に位置付けることができ，前述した玄室中央の土器と他の土器との時期差はTK209型式内の時期差と捉えることができる。

(b)鉄製品　1号墳から出土した鉄製品は，鉄鏃1点のみであった。細片のため詳細は不明であるが，柳葉鏃と思われる。

②2号墳の調査(第129～138図，図版第75・76・79～81)

墳丘(第123・129図)　2号墳は，1号墳の北西，丘陵上部に位置する。2号墳も1号墳と同様に開墾によって削平を受けていたが，裾部と天井石までに限られており，比較的墳丘の残りは良好だった。そこで古墳の範囲の表土を除去したところ，一部で周溝を検出した。

古墳の北西，丘陵基部の部分には崖面があり，丘陵をカットした痕跡が認められる。周溝は丘陵をカットした後に，その部分にのみ掘削される。周溝は，幅0.7～1m，深さ0.4mを測る。谷側は自然の地形を利用して墳丘を大きく見せているが，周溝等の施設は見られず，古墳の範囲を確定できなかった。しかし，丘陵側の周溝から判断すると，2号墳は直径約12mの円墳と考えられる。

墳丘の盛土は，石室北西の丘陵側では整地した後に行っており，黒褐色土や地山である花崗岩のバイラン土がブロック状に積まれている状況を，断面で観察できた。石室南東の谷側では，古墳築造段階の表土の上に盛土を行っている。

なお，周溝の溝底から須恵器の甕が出土しており，何らかの祭祀が行われた可能性がある。

埋葬施設(第130図)　2号墳の埋葬施設は，奥壁から羨道に向かって右側に袖を持つ片

袖式横穴式石室である。石材は1号墳と同様に，付近で採取できる凝灰岩を用い，1石のみ安山岩を使用する。石室は，天井石まで残存していたが，奥壁から羨道に向かって左側壁は，1m以上も石室内に倒れ込んでおり，また玄門部分に生えていたタモの木の根によって，石材が動いている状態だった。そのため，本報告では左側壁の図面は載せなかった。

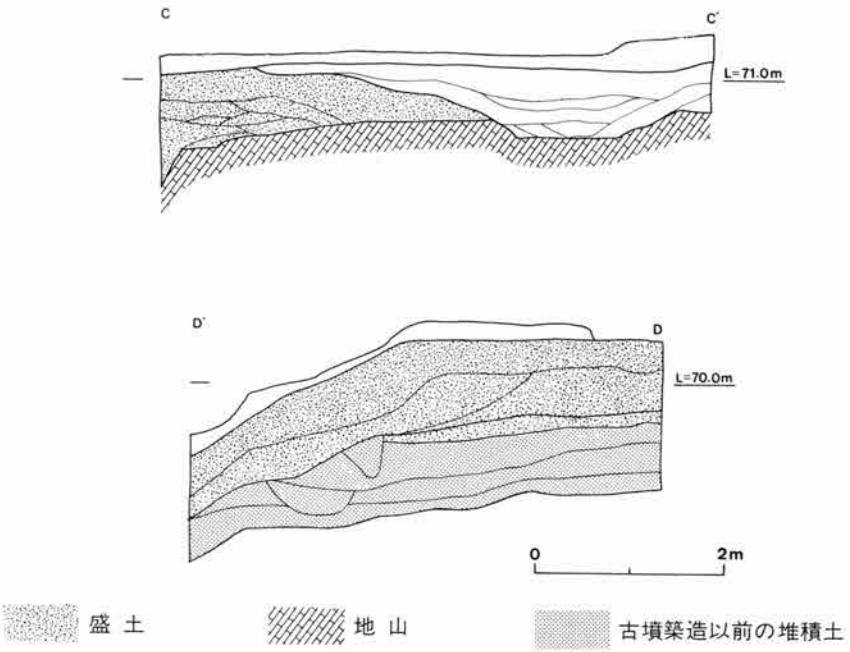
石室は，北東方向に開口し，玄室の主軸は座標北によればN-29°-Eをとる。石室の全長は6.9m・玄室長4.4m・玄室幅1.9m・羨道長2.5m・羨道幅1.2mを測る。現存する玄室の側壁は，最も高い部分で1.9mを測る。

石室を構築するにあたっては，前述したように丘陵をカットし，整地をした上で墓坑を掘る。墓坑は，丘陵の線と直交するようにL字状に掘る。そのため石室の右側壁は，表土の上に直接石材を積む。

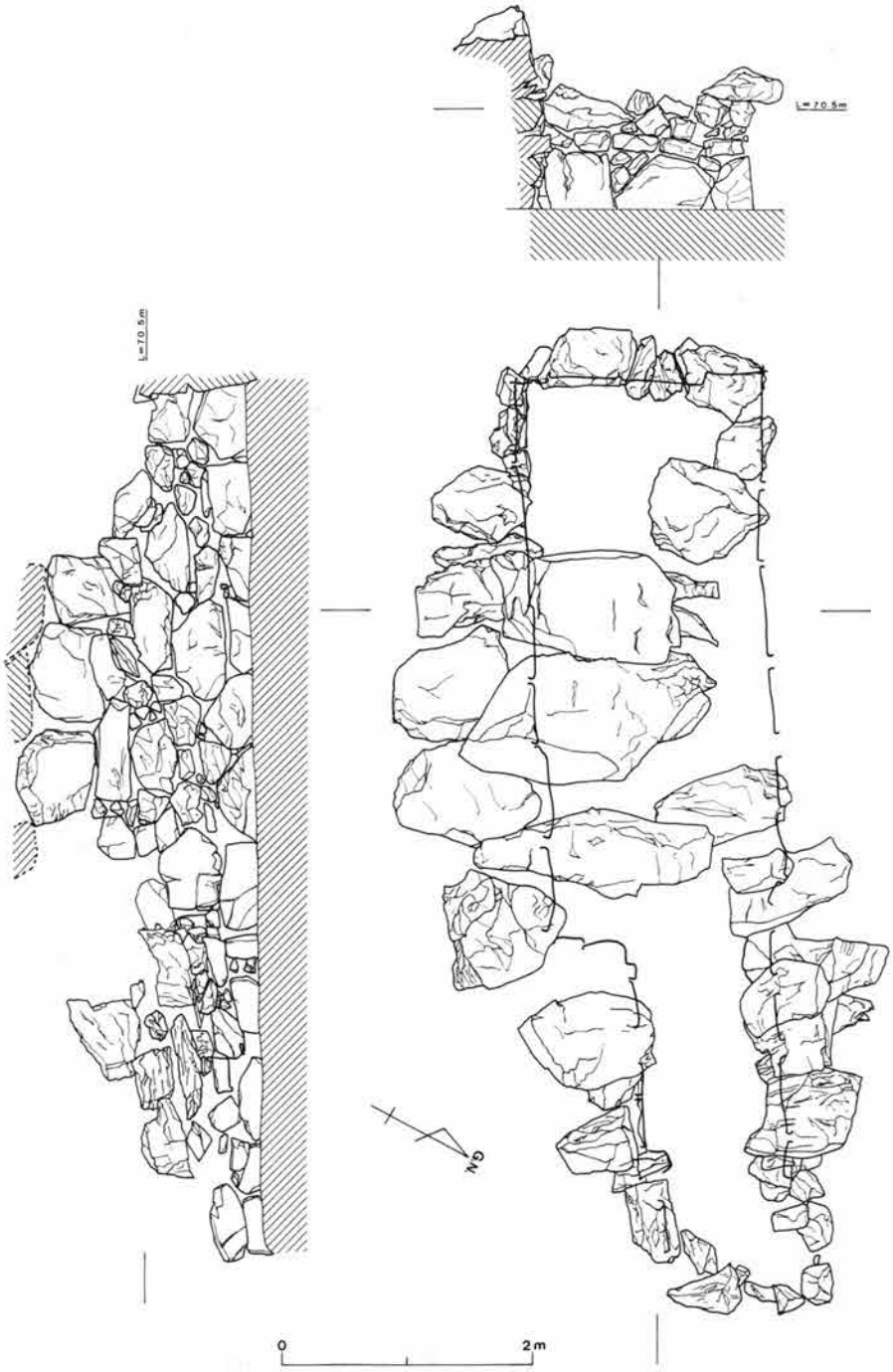
奥壁は3段程度が残る。基底は，中型の石材3石で構成する。石材の隙間には小型の石材を詰めて高さを揃える。2段目は，小型の方形の石材を積んで高さを揃える。3段目は石材の大きさも異なり，規則性は認められない。

玄室の右側壁は，中型の石材7石で基底を構成する。最上段には大型の石材のみを並べているが，基底との間は小型や中型の石材を乱積みしている。

玄室の平面形態は長方形を呈するが，徐々に北側に曲がっている。床面積は8.36m²である。床面には排水溝等の施設はなかった。



第129図　アバ田2号墳墳丘断面図



第130図　アバ田2号墳石室実測図

羨道は，両側壁ともやや北に角度を振っているが，右側壁がその度合いが強く，開口部ではやや閉じぎみになる。

羨道右側壁は，５石の基底で構成する。袖石は小型の石材２石で構成する。方形の石材を用い，広い平坦面を玄室側に向けて置く。羨道右側壁は扁平な石材を多用し，段ごとに高さを揃えながら積んでいる。最上段に大型の石材を使用するのは玄室と同様である。

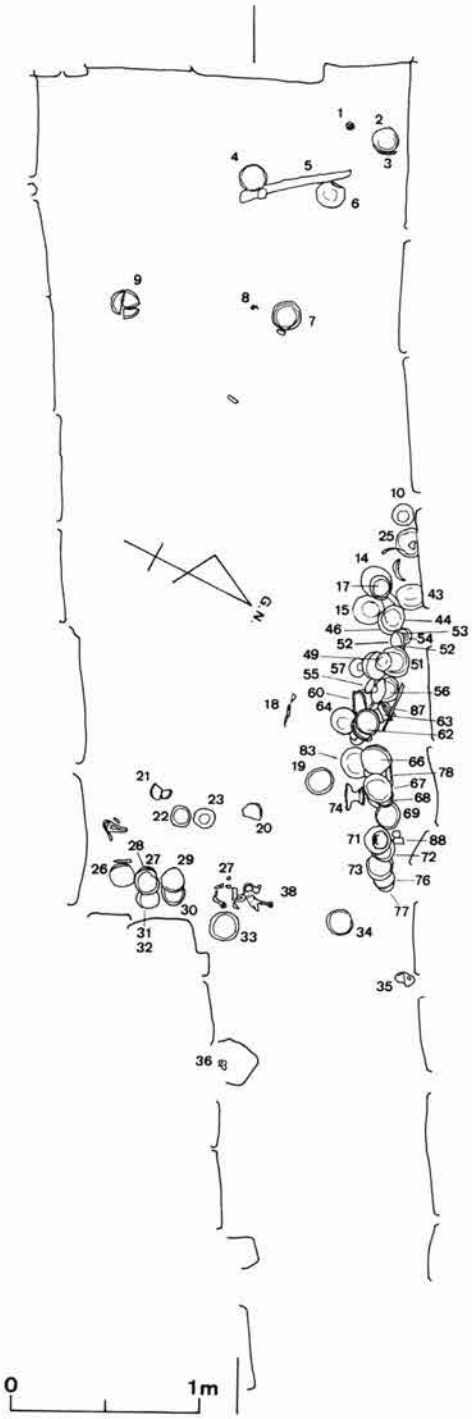
羨道左側壁は，タモの木の根のため掘り切ることができず，上部は明確でない。基底は４石以上で構成される。袖石に対応する部分の石材は，玄室側より内側に入っており，袖を意識しているのかもしれない。しかしこの部分は，基底石付近まで石室の内側に倒れ込んでおり，それによる変形の可能性もある。

羨道床面には，排水溝等の施設は見られなかった。

羨道前面には，開墾の際の削平によって，大きく段差がついている。そのため，前底部の状況は明確にし得なかった。またこの部分には，天井石と思われる石材や，やや小型の石材が転落しており，羨道が本来はもっと長く，後世に羨道前面がカットされている可能性がある。

遺物出土状態（第131図）　石室内から出土した遺物は，総数約90点にのぼる。遺物の残存状態は良好で，最終追葬の段階から大きく移動させた形跡は認められない。

石室内の遺物は，おおよそ３つのグルー



第131図　　アバ田２号墳遺物出土状態図

プに分けられる。つまり，玄室奥壁よりの一群，袖部付近の一群，玄門から玄室中央部にかけて積み重ねられた一群である。

奥壁よりの部分では，須恵器・鉄刀・勾玉・紡錘車などが出土している。この一群は，出土しているレベルが床面より高く，追葬段階の遺物と考えられる。

袖部付近では，須恵器・馬具・鉄斧などが出土している。馬具は，土器の下から出土している。ここの遺物も，床面よりやや高い位置から出土している。

玄門から玄室中央にかけての部分が，最も大量に遺物が出土した地点である。ここから出土した遺物は，石室内出土の遺物のおよそ半数を占める。側壁に密着するように，雑然と積み重ねられていた。遺物のほとんどが土器であるが，鉄鏃・刀子も土器に混じって置かれていた。

以上の遺物のほかには，羨道玄門よりの左側壁に鉄斧が立てかけられた状態で出土している。また，右側壁では鞍が出土している。

出土遺物(第132～138図，図版第79～81)　2号墳から出土した遺物には，須恵器・土師器の土器類，鉄刀・鉄鏃等の鉄製品，玉類，土製品がある。

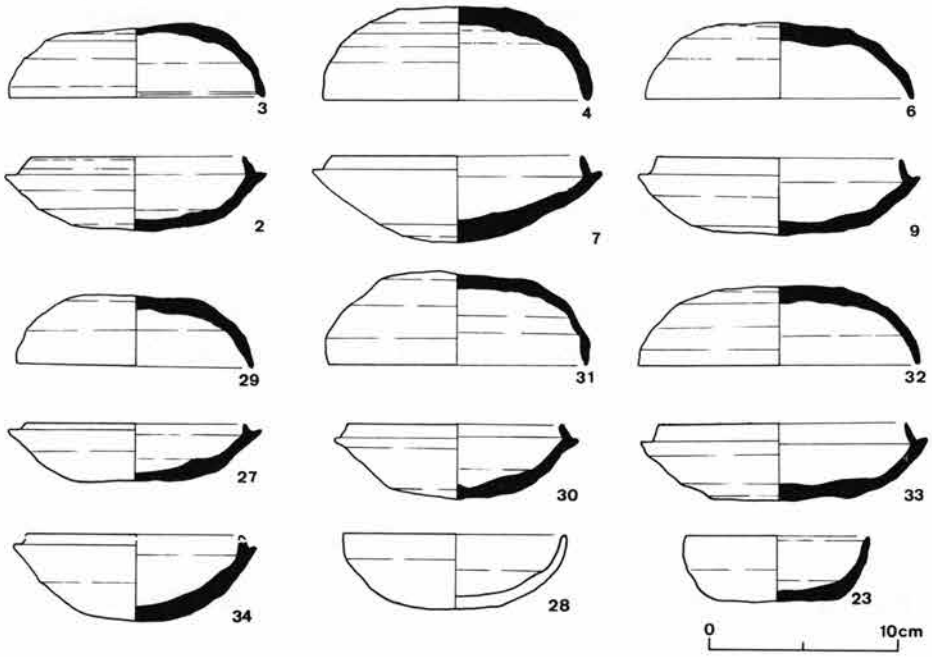
(a)土器(第132～135図，図版第79～81)　土器には，須恵器と土師器がある。以下出土位置ごとに説明していく。

第132図2～9は，玄室の奥壁寄りの部分から出土した土器である。杯身と杯蓋のみが出土している。1号墳と同様に，口径によって分類すると，杯身・杯蓋とも2つのタイプに分類できる。杯身では，13.4cmの3と，14cm前後の4・6の2タイプである。杯蓋では11.4cmの2と，13cm前後の7・9の2タイプである。

第132図23～34は，袖部付近から出土した土器である。須恵器の杯身・杯蓋・椀，土師器の椀がある。2号墳から出土した土師器は，この椀1点のみである。杯身は，小型化しヘラケズリが施されていない27・30・34と，13.4cmの33の2つに分けられる。杯蓋3点は29が12.4cm，31が13.6cm，32が14.8cmである。須恵器の椀は，平底からやや内湾ぎみに立ち上がる。土師器の椀は，丸味を帯びた底部から内湾ぎみに立ち上がる。口縁端部に強いナデを施す。

第133・134図は，玄門から玄室中央にかけて出土した土器である。杯身・杯蓋・高杯・高杯蓋・短頸壺・長頸壺がある。

杯身は概ね4タイプに分けられる。まず16に見られる，口径が15cmを越えるものがある。次に43・45・51・58・73・84の口径14cm前後のものがある。この一群は底部にヘラケズリを施す。そして45・56・69・79の口径13cm前後のもの，49・54・72・77の12cm前後のものがある。この2タイプには，ヘラケズリを施すものと施さないものがある。杯蓋



第132図　アバ田2号墳出土遺物実測図(1)

も，杯身に対応して4タイプに分けられる。14の口径17cmを越えるもの，44・52・60・78・83の15.5cm前後のもの，19・50・64・66・67・68・71・83の14.5cm前後のもの，46・76の13.5cm前後のものの4種である。調整方法も杯身と同様で，19のグループでは必ず天井部にヘラケズリを施しているが，後二者はヘラケズリを施すものと施さないものがある。

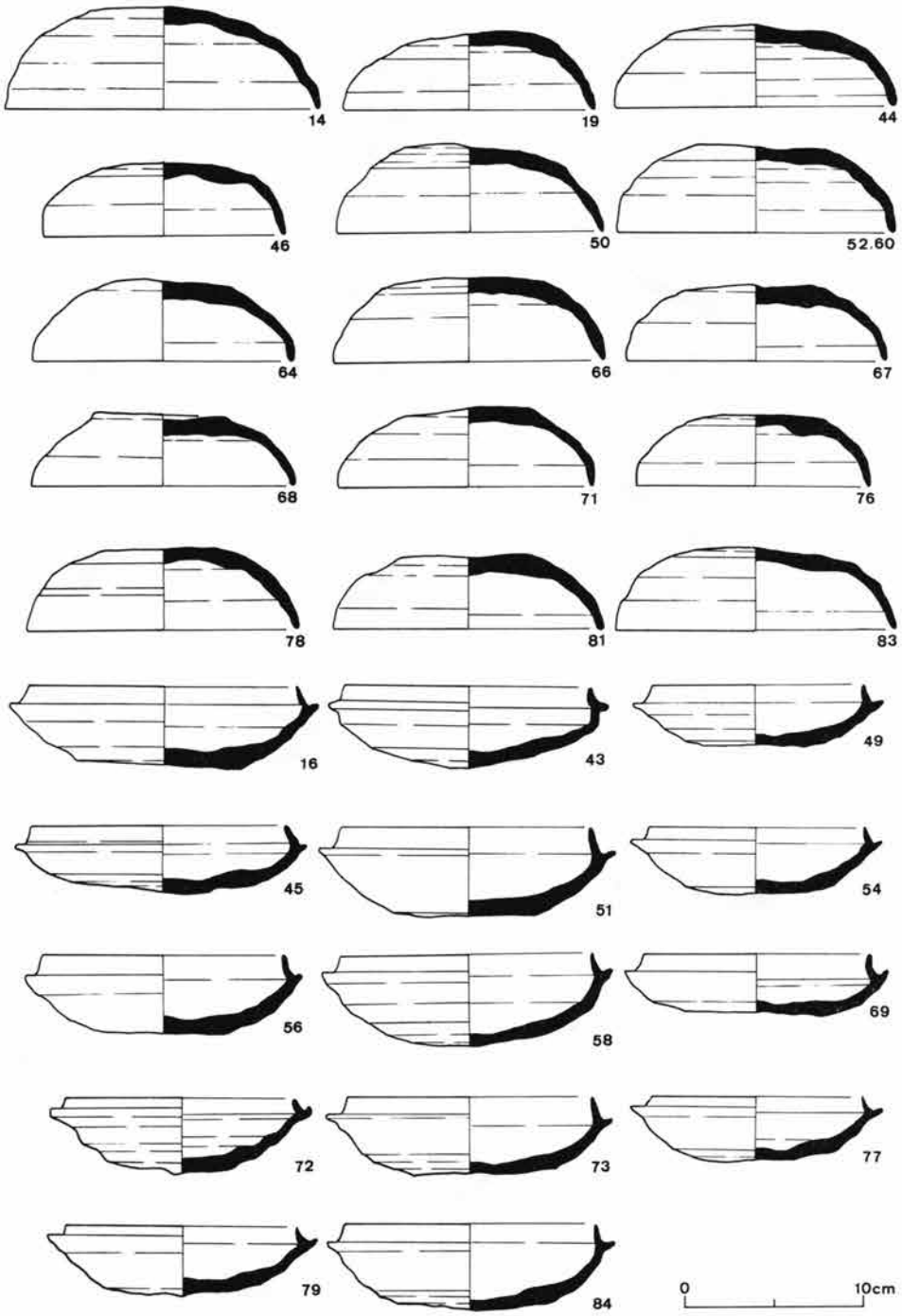
高杯には，有蓋高杯と無蓋高杯がある。有蓋高杯は，脚部の形態から2つのタイプに分けられる。11・15・74・75・88は，杯部との接合部から外反して下方にのびたあと，屈曲する。屈曲部には，1条の沈線を施す。55・62・63・65は，大きく外反して開く脚部を持つ。焼成も異なっており，前者は焼成不良で淡黄褐色を呈し，後者は良好で青灰色を呈する。いずれのタイプにも透しはない。

無蓋高杯も2つのタイプに分けられる。10・47・48・53は，小型の高杯である。17は，長脚に2段の透しを持つ。透しは2方にある。体部には2条の突帯を持つ。

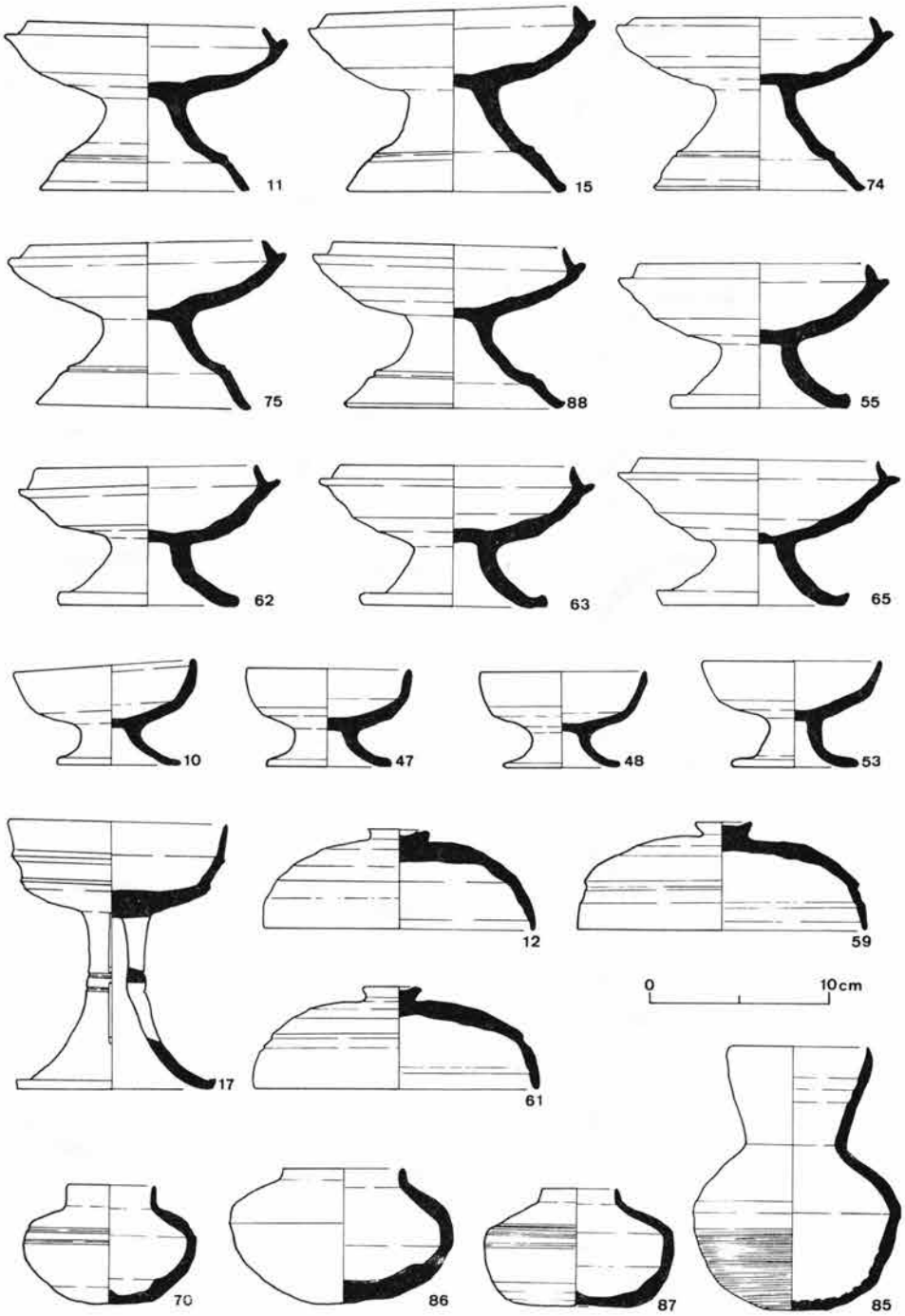
12・59・61は，高杯蓋である。中央が窪むつまみを持ち，59・61は，天井部と口縁部の境に明瞭な段を持つ。

70・86・87は，短頸壺である。70は，やや扁平な球形の体部を持ち，肩部に2条の沈線を持つ。86も，やや扁平な球形の体部を持つ。体部下半は不定方向のケズリを施す。87は，平底ぎみの底部を持つ。肩部に，幅の狭い工具によるカキ目を施す。

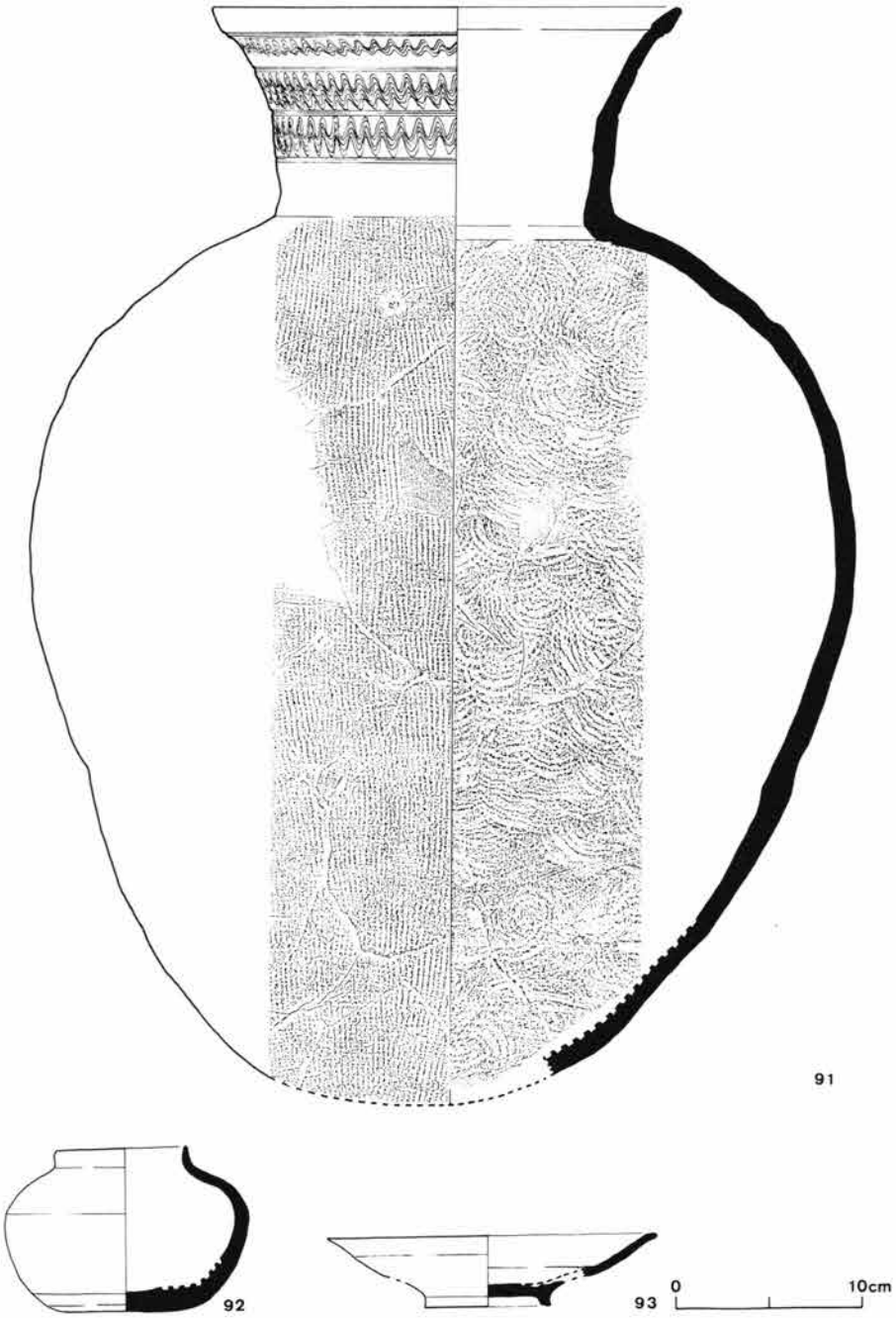
85は長頸壺である。体部下半にカキ目を施す。



第133図　アバ田2号墳出土遺物実測図(2)



第134図　アバ田2号墳出土遺物実測図(3)



第135図　アバ田2号墳出土遺物実測図(4)

石室内から出土した土器は，蓋杯で見ると，玄門から玄室中央にかけて出土した土器を4タイプに分類できるようである。この4タイプを口径の大きいものから順にA・B・C・Dとすると，奥壁の土器群はCタイプとDタイプになる。袖部の土器群もCタイプとDタイプである。出土位置から判断すると，玄門付近の遺物が最も古く，次に袖部付近の遺物，最後が奥壁付近の遺物の順になる。このことから，時期が下るにつれて口径の大きいA・Bタイプがなくなり，口径の小さいC・Dタイプのみになる傾向が読みとれる。

従来の須恵器編年にこれを当てはめると，A・BタイプはTK209型式の古い段階とすることができる。Dタイプは蓋と身が逆転する直前の段階，つまりTK209型式の最も新しい段階にあたる。第134図59・61の高杯蓋は，やや古式の様相を呈しており，TK43型式にさかのぼる可能性もある。

第135図は，石室以外から出土した遺物である。91は，周溝内から出土した甕である。外反する口縁を持ち，口縁端部はわずかに肥厚する。口縁は，3条の沈線によって区画し，その中に3条の波状文を描く。体部外面は平行叩き，体部内面は同心円文の当て具痕を残す。92は，天井石横の墳丘内から出土した短頸壺である。93は，周溝の上層から出土した緑釉の皿である。釉はハケによって塗られており，京都系のものである。

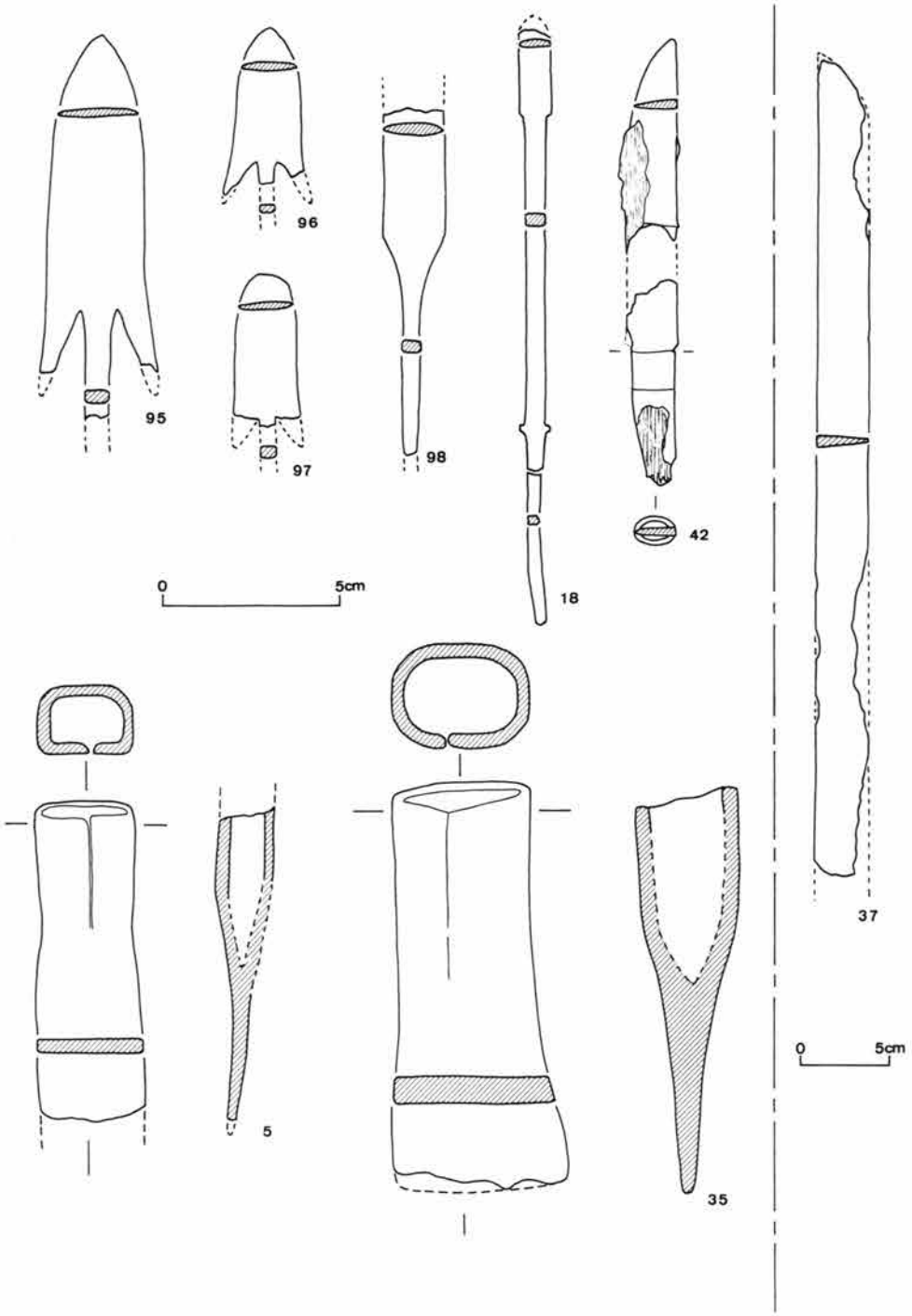
(b)鉄製品(第136・137図)　鉄製品には，鉄刀・鉄鏃・馬具・刀子・鉄斧がある。

鉄刀(第136図37)は，刀身の一部と柄を欠損している。残存長は46.6cmである。刀身の断面形態は，二等辺三角形を呈する。

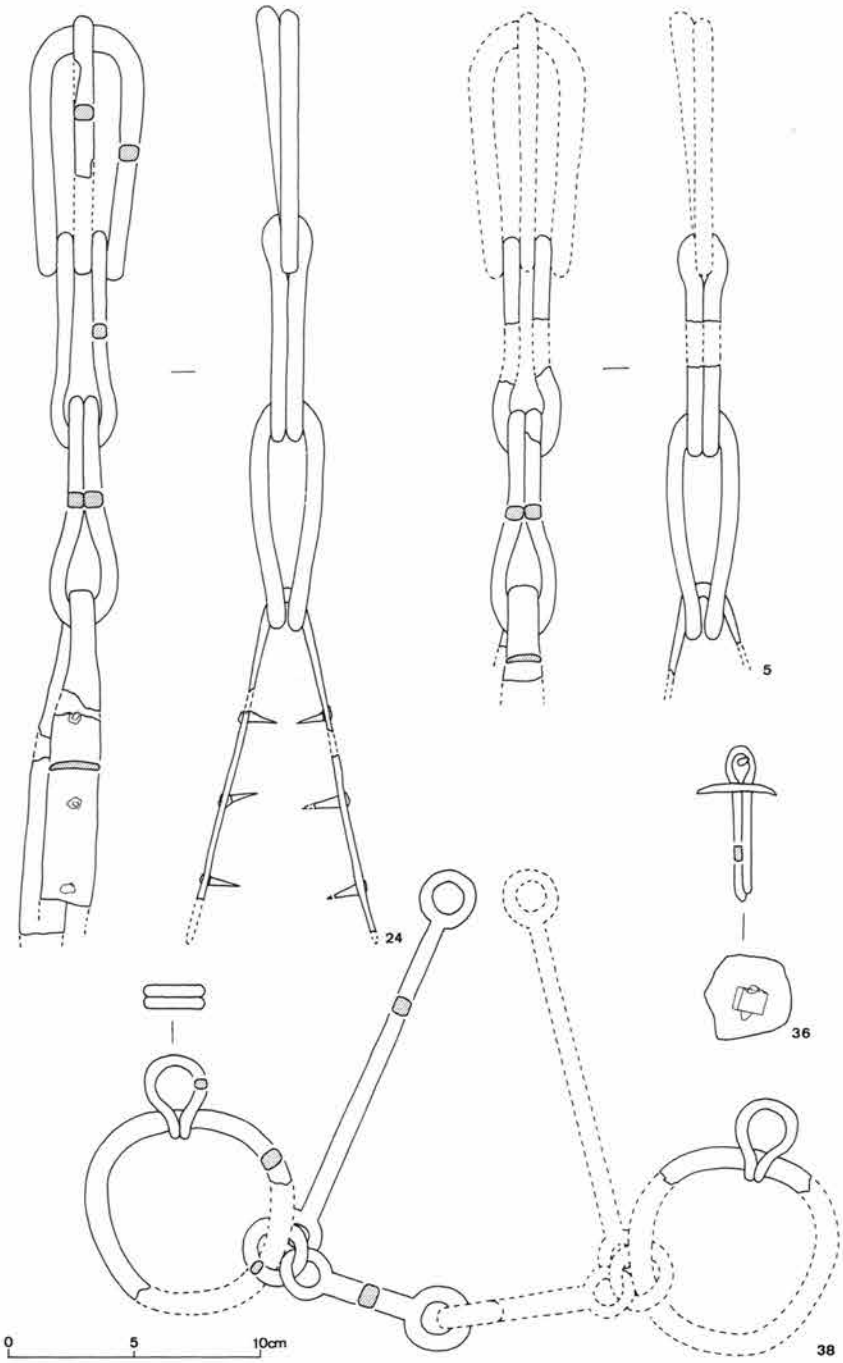
鉄鏃には4つのタイプがある。95・96・97は，柳葉式で逆刺を持つものである。大型のものと小型のものがある。98は鏃身の先端を欠損している。柳葉式と思われる。18は長頸鏃である。棘篦被を持つ。

馬具(第137図)には鐙と轡と鞍がある。鐙は2点ある。木製壺鐙につく金具である。V字の鐙靼金具と鉸具を，2連の兵庫鎖で連結している。24の鐙靼金具は先端を欠損している。残存長は12.8cmである。6本以上の釘によって鐙に装着している。屈曲部分は，幅を狭くし，厚みを増している。兵庫鎖は，下部が9.2cm，上部は9.5cmを測る。鉸具は輪金の全長が10cm，刺金全長10.3cmを測る。5は欠損部分が多く全容を知り得ないが，24と同様の構造と思われる。

轡(38)は，いわゆる環状鏡板付轡である。鏡板・銜・引手は遊環を介して結合される。鏡板は方形の鉄材の円環で，兵庫鎖1連をこれにつけて立聞にしている。鏡板の直径は，残存している部分で8.1cmである。遊環は楕円形の鉄材の円環で，直径2.5cmである。銜は，方形の鉄材を用い，全長8cmである。引手は方形の鉄材を用い，全長15.5cmである。手綱につながる環は，「く」の字状に折り曲げる。



第136図　アバ田2号墳出土遺物実測図(5)



第137図　アバ田2号墳出土遺物実測図(6)

鞍(36)は，1点のみ出土している。輪金は欠損している。座金具は欠損部分が多く原形を留めない。円形であった可能性がある。現存する座金具の直径は，3.5cmを測る。足は方形の鉄材を折り曲げ，輪金の基部を通している。現存長は6.2cmである。

刀子(42)　1点ある。刀身を一部欠損しているため，全長は不明である。刀身の断面形態は，ややふくらみを持った二等辺三角形である。関は，刃と棟の両側にある。関の部分は，鏇のような痕跡が認められるが，柄の断面が鏇の部分まで食い込んで見えるため，有機質のものを巻いていたのかもしれない。刃部と柄には一部木質が残っている。

鉄斧(5・34)は3点出土しているが，ここでは2点のみを図示した。いずれも袋状鉄斧である。5は全長9.1cm，幅は刃部で3cm，上端で2.7cmである。35は全長11.5cm，幅は刃部で5cm，上端で3.9cmを測る。

(c)土製品(第138図1)　土製品は，紡錘車が1点出土している。陶製である。直径は，上面で2cm，下面で3.3cmを測る。孔の直径は8mmである。厚さは2cmを測る。

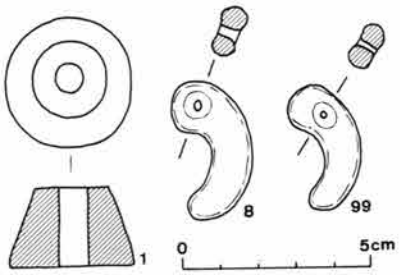
(d)玉類(第138図8・99)　玉類では勾玉が2点出土している。いずれも碧玉製で，片面穿孔である。

4. ま　と　め

①墳丘と石室

本古墳群は，南東にのびる丘陵の先端に営まれた古墳群である。古墳の立地については④・⑤に詳しいので，ここでは概略のみ述べることとする。調査の結果，1・2号墳とも直径約12mの円墳であることがわかった。この墳丘規模は，丹後地域においては中規模の古墳とすることができるだろう。1号墳においては，削平によって当時の墳丘の状況を窺う術もないが，2号墳では，斜面の角度を最大限に利用し，大きく見せていたものと思われる。

石室は，いずれも片袖式横穴式石室である。しかし，石材や玄室の平面形態等で相違点が見られる。まず石材では，1号墳が比較的大型の石材を使用するが，2号墳では小型の石材を多用する。平面形態では，1号墳が方形に近い長方形で，玄室長を100とした時の玄室幅の指数は64.5であるが，2号墳は玄室が長くなり，指数は43.2である。畿内における横穴式石室の編年では，正方形に近いものが古く，時代が下るにつれて玄室幅に対する玄室長が長大化する傾向が認められている。これによれば，



第138図　アバ田2号墳出土遺物実測図(7)

1号墳が古く2号墳が新しいということになるが，遺物の観察の結果では，むしろ2号墳がわずかに古くなる。久美浜町内の横穴式石室で，アバ田古墳群に先行すると思われる古墳に，須田古墳群中の平野古墳・湯舟坂2号墳(注54)がある。これらの古墳の玄室平面の指数は，前者が52.2，後者が42.8となる。このことから，アバ田古墳群では畿内の横穴式石室の変遷とは対応しないことが指摘できる。このことは，丹後の他の地域の主な横穴式石室にも言え，6世紀後半とされる大宮町三本松古墳は指数35.5，6世紀末の丹後町大成7号墳は43.2，7世紀初頭の大成8号墳は55.5である(注55)。この状況は，地方における横穴式石室の受容の一側面を示すものと思われる。

②出土遺物　アバ田古墳群から出土した遺物は，1号墳で約50点，2号墳で約90点にのぼる。これらの遺物の内訳は，須恵器・土師器の土器類・鉄刀・鉄鏃・馬具・工具類・土製品・玉類がある。この中では，土器が多数を占めており，横穴式石室の副葬品としては鉄製品や装飾品の数量が少ない感がある。

土器は，蓋杯・高杯・短頸壺等が出土している。これを，湯舟坂2号墳の土器の組成と比較してみる。まず注意されるのは，瓶・台付長頸壺がアバ田古墳群から出土していない点である。次に，湯舟坂2号墳では多数出土している長脚の有蓋高杯が，アバ田古墳群では全く見られず，今度は逆にアバ田古墳群に多い短脚の有蓋高杯が，湯舟坂2号墳に見られない点があげられる。アバ田古墳群と湯舟坂2号墳とは，直線距離にして1.5kmしか離れておらず，また追葬の期間も重なる部分が多い。しかし副葬された土器の内容は，大きく異なっていることがわかる。この原因としては，埋葬儀礼の相違，須恵器生産地の相違等が考えられる。前者については現在の資料では解明するのが困難な問題である。後者についても，丹後の須恵器生産の状況が明確でないため，生産と消費の関係を明らかにし得ない。今後の分布調査等の進展によって，徐々に明らかになるものと思われる。

馬具では，遊環式で兵庫鎖立聞の轡が出土している。環状鏡板付轡の中でも兵庫鎖一連を立聞とする鏡板は類例が少なく，岐阜県西洞山6号墳例(注56)・長野県吹上山の神古墳例(注57)・大分県飛山4号横穴例(注58)・奈良県新沢160号墳例(注59)・長野県塚穴原1号墳例(注60)などがある。しかし，西洞山6号墳例・吹上山の神古墳例は引手・鏡板結合式，新沢160号墳例・塚穴原1号墳例は引手・銜結合式である。飛山4号横穴例は連結形態は不明である。遊環式で兵庫鎖立聞の鏡板を持つ例は，宮崎県久見迫6号地下式横穴例(注61)・静岡県浜北市出土例(注62)がある。この2例は多連の兵庫鎖を持つ。このことからアバ田2号墳の轡の形態は，初出と思われる。遊環式の出現は，6世紀前葉と考えられ，また一連の兵庫鎖を立聞とする鏡板は，6世紀中葉から出現する。これらの要素を合わせ持つアバ田2号墳の轡は6世紀中葉以降とすることができる。

③古墳の年代と埋葬回数

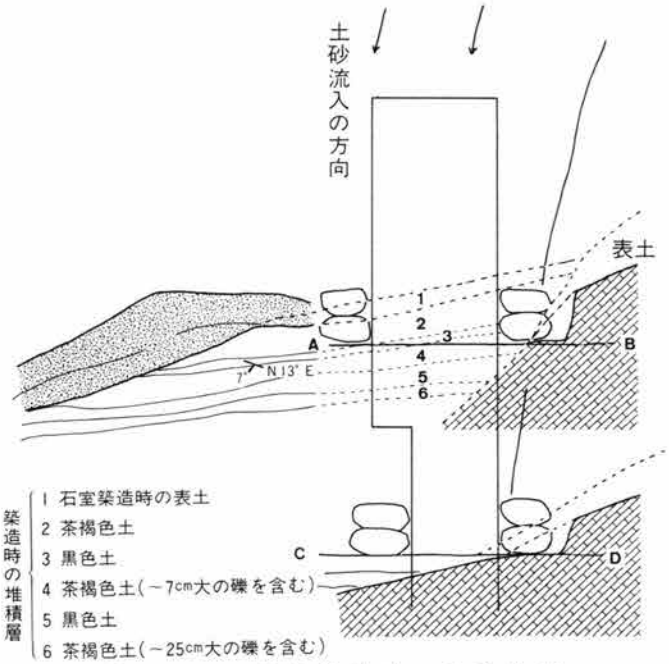
アバ田古墳群から出土した土器は，先にも述べた通り，1・2号墳ともTK209型式に位置付けられる。しかし，2号墳から出土している高杯蓋は，TK43型式に遡る可能性もあり，2号墳が先行して築造されたものと思われる。これに遅れて1号墳が築造されるが，大きな時期差はなくいずれも6世紀末頃と思われる。

埋葬の回数は，遺物の出土状態から，3回以上と考えられる。土器型式では，最も新しいものでもTK217型式に位置付けられるものはなく，7世紀前葉には最終追葬が行われ，以後使用されていない。古墳の使用が短期間に限られるのが特徴である。同じ谷筋にある崩谷古墳群でも，築造時期はややアバ田古墳群より古いが，最終追葬はほぼ同時期に行われている。谷の入口にあるアサバラ遺跡・クズレ谷遺跡の試掘調査を行ったが，ここでも7世紀中葉から後葉の遺物は見られず，新庄地区の集落の盛衰を示しているのかもしれない。

（荒川　史）

④墳墓築造時の環境

国営農地新庄1団地は，新庄の奥の谷のなだらかな花崗岩の丘陵地を拓くもので，この丘陵は久美浜町栃谷から兵庫県との県境にかけて花崗岩を不整合に覆う，栃谷安山岩質凝灰岩の急峻な山塊に接する。基盤岩の花崗岩は等粒状黒雲母花崗岩(注63)で，宮津花崗岩ともいわれているが，風化がすすみ丘陵は風化丘陵である。栃谷安山岩質凝灰岩は新生代第三紀中新世の八鹿累層に対比されるもので，丹後では弥栄町等楽寺火山岩を作った時代に相当する。

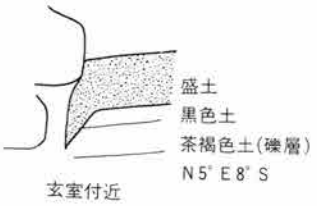


第139図　2号墳築造時の堆積状況

崩谷1号墳は丘陵の突端にあり，風化した花崗岩の斜面を整地して石室を築いた。アバ田1・2号墳はここから狭いアバ田谷を約300m上がった小さい丘陵の先端で，谷から流れ出した堆積層の上に築かれている。

アバ田1・2号墳地の堆積状況を示す。2号墳

墳墓床面を基準としてみると，地山(花崗岩風化土)と堆積土砂層との接触は羨道入り口(右側)からは約76°Wの方向にある。2号墳の玄室でのA－B断面をみると，一番下の石は約15°で傾斜する地山とこれに接する堆積層との接点に置かれている。堆積土は茶褐色土層・同角礫層(～7cm大の角礫を含む)・黒色土層(礫なし)・茶褐色角礫層(～25cm大角礫を含む)と，安山岩質凝灰岩の風化土に起因する粘質な土層の互層である。赤褐色土層の走向傾斜はN13°Eで，本谷から右側の小谷に向かって大量の土砂(分級されている)の押し出しが見られる。含まれる礫はいずれも安山岩質凝灰岩の角礫である。2号墳構築前にはこれらの上に多少の風化土はあったであろうが，石室築造作業は地表より深さ30～50cm，幅3.5mを掘り下げてから石積みが行われたようである。



1 茶褐色土(礫層)
2 灰色粘質土
3 黒色土(N26°W8°S)
羨道入り口

第140図　1号墳築造時の堆積状況

2号墳より約2.5m谷側に下ったところにある1号墳は，ほぼ北に開口する墳墓であるが，トレンチの堆積状況からすると，玄室奥から1.5mの位置では表土(約70cm)の下に粘質黒色土層・茶褐色角礫層・灰色の粘質土が整合的に続いている。ここでは表土層が黒色土・茶褐色土層を切断していること，羨道北側の断面で見ると，羨道入り口の石が茶褐色角礫層を切って据えられているので，これらの層は墳墓構築前にすでに堆積していたことを示す。これは2号墳の黒色土層(3)と茶褐色角礫層(4)に対比されるので，2号墳に見られる1・2層はここではすでに流出してなくなっている。これらの地層の走向傾斜の測定から玄室側では土砂は谷をまっすぐに流れ，羨道側では右側の小谷に向かって堆積している。

1・2号墳構築(6世紀後半)以前に堆積していたこの堆積層がいつのものか知る手掛かりはないが，当時本谷がことに1号墳の位置より低い谷をなしていたであろうとはいえ，土砂流の直撃を受けそうな位置になぜ築造されたのか思うに苦慮する。

⑤古墳築造に用いられた石材

アバ田1・2号墳，崩谷1号墳に用いられた石材の大きさを分類すると付表10のとおりである。

崩谷1号墳は一辺が1mをこすような大きなものが多く，玄室の奥(正面)には3.2m×1.4m，側壁には2.2m×2.2m，2.2m×1.1mというような巨石を積み上げ，目地詰めにも50cm以上のものを用いていた。アバ田古墳群では崩谷1号墳に比べて小さいとはいえ，

付表10　石室築造に用いた石材(玄室，羨道側壁材)

石室名	石質	石材の大きさ			備考
		50cm以上	50～20cm	20cm以下を含む計	
アバ田1号墳	安山岩質凝灰岩（A）	32.1	10.7	32.6	（A）熔結性で長石の小さい斑晶がみられる。
	〃（B）	39.3	3.7	55.8	（B）〃 斑晶はみられず密な質をなす。
	〃（C）	7.1	7.1	11.6	（C）熔結度が高く，堆積時にできた晶洞には玉ずいの結晶がみられる。岩石の表面は節がみられる。
アバ田2号墳	安山岩質凝灰岩（A）	31.8	22.7	43.9	
	〃（B）	10.6	28.8	50.8	
	〃（C）			2.3	
	〃（D）	1.5	1.5	1.5	（D）熔結度が高く，3～4cmの礫を含む凝灰岩質集塊岩
	黒雲母花崗岩（E）	1.5	1.5	1.5	（E）等粒状黒雲母花崗岩
石室名	石質	石材の大きさ			（F）微晶花崗岩
		100cm以上	100～50cm	50cm以下を含む計	
崩谷1号墳	安山岩質凝灰岩（A）	29.4	25.0	55.1	アバ田2号墳は北側の玄室，羨道の玄室，羨道の石材は調査からはずした。石材の大きさは石室内部で観察される大きさである。
	〃（B）	14.7	11.8	26.1	
	〃（C）	1.5	1.5	2.9	
	〃（D）	7.4	1.5	8.7	
	黒雲母花崗岩（E）	4.4	1.5	5.8	
	微晶花崗岩（F）		1.5	1.4	

1号墳では1.2m×1.0m，1.3m×1.2mという大きなものもあり，50cm以上のものを主材にしている。2号墳は大きなもので70cm×70cm，80cm×50cmというものもあるが，50cm以下のものまで主材に使うというような小さい材料で築造されていた。

石材の種類はアバ田1・2号墳・崩谷1号墳ともに安山岩質凝灰岩(熔結性)を主体に築造し，2号墳は個数にして全体の1.5%，崩谷1号墳は7%程度の黒雲母花崗岩が用いられているに過ぎない。安山岩質凝灰岩は微細な長石の斑晶をもつもの(A)と，ほとんど斑晶のない緻密な質のもの(B)が80%以上をしめる。中には熔結度が強く堆積時の高温とガスによる晶洞が筋状にあらわれ，ここに玉髄の結晶のみられるもの(C)，あるいは3～4cmの礫を含む凝灰岩質集塊岩(D)がわずかに用いられている。

テレビ塔のある後背山地は安山岩質凝灰岩の山地で，アバ田の谷筋を上っていくと，花崗岩との不整合面近くでは凝灰岩質集塊岩，その上に当地に最も多い長石の斑晶をもつものあるいはそれのない緻密な凝灰岩があり，熔結度の高いものや，集塊岩をその中に挟んでいる。アバ田1・2号墳は最も近いこの谷からの落石や，岩の壊れるものは壊して運ん

できたものと思われる。崩谷1号墳は丘陵の先端部にあり，アバ田谷には花崗岩の石材が得られ難いことから，玄室正面の花崗岩など主要なものは別として求めやすい谷筋から運んできたのではなかろうか。　（徳田　新）

注1　増田孝彦・三好博喜・鵜島三寿「国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第24冊―1（財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

注2　調査参加者(順不同・敬称略)

昭和61年度(東部地区)

調査補助員　佐伯英樹・鵜鳥三寿・藤井健介・近藤浩一・中鼻新吾・今谷成亮・稲岡淳之・津金崇樹・加野敏男・藤本効三・中西俊文・井本有二・赤川真弘・横島勝則・下垣内英徳・吉岡英一郎・森　正・上田裕子・北川万佐江・船越正美・丸山啓子・山副志保美・西門恵子・下岡美佐子・松井政子・吉岡美保・小笠原順子

作　業　員　高原与作・田中　正・大江晴源・田中寿男・岡崎武雄・榎並繁夫・井篠　務・堀江健治・平井直樹・吉岡　博・田中金次・吉岡義雄・川戸與志男・岡本　治・片西　弘・森戸一雄・山中晴男・東　健一・片西英雄・松本さよ・工藤八重子・吉岡とめ・東宇かね・田家もと枝・田家好乃・岡崎美津恵・田中静枝・田家春枝・野場恵美子・古川ナヲ

調査協力者　小滝初代・赤司　紫・丹新千晶・山本弥生・森本須都子・西津しのぶ・谷口勝江・能勢鈴美・吉岡治作・中西哲郎

昭和62年度(東部地区)

調査補助員　佐伯英樹・近藤浩一・田中史生・笠原勝彦・山崎　誠・浅井達也・稲岡淳之・福山　誠・川上厚志・川口智志・吉岡英一郎・三木英樹・津金崇樹・岩崎浩一・中鼻新吾・松室孝樹・石崎善久・日生下民夫・大崎康文・長尾政樹・麻本幸伸・岡井重延・新井秀明・藤安志朗・赤川真弘・大嶋和彦・田中由美・松井政子・丸山啓子・西門恵子・船越正美・森　睦美・千葉智子・正村美和子・五味田育子・南口由佳・高野陽子・室田雅子・多田明子

作　業　員　井篠　務・高原与作・堀江健治・榎並繁夫・岡崎武雄・田中寿男・片西　弘・片西英雄・岡本　治・尾瀬修一郎・東　修・森戸一雄・北垣輝一・下野金治・平林稲男・藤原重太郎・平林宏充・平林秀夫・平林嘉志郎・平林愛治・平林平左衛門・平林順二郎・藤原末治・上田忠志・吉岡　博・松村重明・山副　同・川戸利雄・坪倉勇一・林栄三郎・東　健一・川戸義昭・吉村　保・藤原鋭太郎・橋本金夫・松本郁雄・室田重夫・辻村精作・田中　正・吉岡輝男・松田正行・松本長人・吉岡　稔・松本さよ・工藤八重子・吉岡とめ・岡本房枝・岡崎美津恵・平林しま・平林芳枝・平林志げ子・平林直美・平林好子・藤原ヒサエ・高原　好・坪倉文枝・梅田千代・谷口勝江

調査協力者　藤原恵子・西津しのぶ・寺内あゆみ・岡田峰子・橋ますえ・森本須都子・後藤嘉一郎

昭和62年度(西部地区)

調査補助員　山本元昭・小林浩司・杉本　智・村田順一・浜田康之・山岡英治・二宮一郎・増馬千春・三井小百合・吉田浩子・早光照子・喜多久恵・丸山啓子・松井政子・小笠原順子

作　業　員　南　政雄・西村好一・戸田初三郎・森口敏治・森口支栄規・奥田治夫・河口松太郎・松井康明・平野石松・奥垣政行・笹井秀雄・山添圭三・宮下哲男・西山辰王・山添善男・西岡　保・岡下昌隆・岩瀬貞雄・吉田徳夫・川端兼夫・岡辻　京・西山善治・田中照夫・今井勝治・吉岡之郎・田中誠一・浅井美代助・畠中光枝・平林千代子・奥田とめ・河口茂子・西村美恵子・浅井雪枝・黒田てる子・山口たか・稲葉みね子・岡野三代・辻田松枝・松田秋江・田沢順子・和田百合子・松田きぬ江・西山ミツ・西山久枝・井藤ふゆ

調査協力者　宮下祐子・仲瀬三恵・安川貴代美・安田由美子・松宮やす江・小滝初代・丹新千晶

注３　長谷川達「京都府北部の縄文時代遺跡」(『京都府埋蔵文化財論集第１集一創立五周年記念誌一』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987

注４　平良泰久「丹後竹野遺跡」(『京都府丹後町文化財調査報告』第２集　丹後町教育委員会) 1983

注５　平良泰久他「丹後大山墳墓群」(『京都府丹後町文化財調査報告』第１集　丹後町教育委員会) 1983

注６　梅原末治「竹野村産土山古墳の調査(上)・(下)」(『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第20冊・21冊　京都府)

注７　高橋美久二「大成古墳群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報 (1968)』 京都府教育委員会)　1968

注８　平良泰久・久保哲正他「丹後地域昭和57年度分布調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1983)』京都府教育委員会)　1983

注９　田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981・『陶邑古窯跡群Ⅰ』平安学園考古学クラブ，1966

注10　中村　浩『陶邑』Ⅲ(『大阪府文化財調査報告書』第30輯)　1978

注11　樋口隆康「峰山桃谷古墳」(『京都府文化財調査報告』第22冊　京都府教育委員会)　1961

注12　奥村清一郎・新納　泉他『湯舟坂２号墳』久美浜町教育委員会　1983

注13　注12に同じ。

注14　滝口　宏編『上総金鈴塚古墳』　1952

注15　穴沢咏光氏より御教示いただいた。

注16　樋口隆康「網野町岡の三古墳」(『京都府文化財調査報告』第22冊　京都府教育委員会)　1961

注17　注12に同じ。

注18　注７に同じ

注19　杉原和雄他『裏陰遺跡発掘調査概報』(『大宮町文化財調査報告』第１集)　1970

注20　荒川　史「隼上り古墳群」(『京都府遺跡調査報告書』第７冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987

注21　柴垣勇夫「特殊須恵器の器種と分布」(『愛知県陶磁資料館研究紀要』６愛知県陶磁資料館) 1987

注22　釋　龍雄・林　和廣『奈具遺跡発掘調査報告書』(弥栄町文化財調査報告第１集　弥栄町教育委員会)　1972

注23　金村允人・杉原和雄『いもじや古墳・奈具岡遺跡発掘調査報告書』(弥栄町文化財調査報告書第３集　弥栄町教育委員会)　1982

川西宏幸・山田邦和ほか『奈具遺跡発掘調査報告書』(財)古代學協會　1985

奥村清一郎・林日佐子『奈具遺跡第３次発掘調査報告書』(弥栄町文化財調査報告書第４集　弥栄町教育委員会)　1986

注24　中谷雅治・田中光浩・林　和廣・杉原和雄・釋　龍雄ほか『坂野一坂野丘遺跡・坂野４号墳発掘調査報告書一』(弥栄町文化財調査報告書第２集　弥栄町教育委員会)　1979

注25　平良泰久・常盤井智行・黒田恭正ほか『丹後　大山墳墓群』（丹後町文化財調査報告第1集　丹後町教育委員会）　1983

注26　岡田晃治・肥後弘幸・細川康晴ほか「国営農地開発事業関係遺跡昭和61年度発掘調査概要〔1〕帯城墳墓群Ⅱ」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1987)』京都府教育委員会）　1987

注27　樋口隆康「冑形埴輪の新出土例」（『考古学雑誌』42-1　日本考古学会）　1956
京都大学文学部『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第2部　1968

注28　堤圭三郎「太田2号墳発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1970)』京都府教育委員会）　1970

注29　増田孝彦・三好博喜「国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第24冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1987

注30　注29に同じ。

注31　三好博喜「西小田古墳群発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第24冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1987

注32　注23に同じ

注33　玉類の材質については，京都府立山城郷土資料館橋本清一氏の御教示を得た。

注34　注29に同じ。

注35　岡田晃治・肥後弘幸・細川康晴「弓木城跡発掘調査概要」（岩滝町文化財調査報告第7集　岩滝町教育委員会）　1985

注36　杉原和雄「裏陰遺跡発掘調査概報」（『大宮町文化財調査報告』第1集　大宮町教育委員会）　1979

注37　竹原一彦「府営ほ場整備関係遺跡(1)正垣遺跡」（『京都府遺跡調査概報』第22冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1987

注38　藤原敏晃「府営ほ場整備関係遺跡(2)谷内遺跡」（『京都府遺跡調査概報』第22冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1987

注39　釋　龍雄他「途中ケ丘遺跡発掘調査報告書」（『峰山町文化財調査報告』第3集　峰山町教育委員会）　1977

注40　田中光浩他「扇谷遺跡発掘調査報告書」（『峰山町文化財調査報告』第10集 峰山町教育委員会）　1984

注41　田中光浩，林　和廣「七尾遺跡発掘調査報告書」（『峰山町文化財調査報告』第8集　峰山町教育委員会）　1982

注42　奥村清一郎「大谷古墳」（『大宮町文化財調査報告』第4集　大宮町教育委員会）　1987

注43　鈴木忠司，植山　茂他「小池古墳群」（『大宮町文化財調査報告』第3集　(財)古代學協會・平安博物館）　1984

注44　注11に同じ。

注45　岡田晃治「国営農地開発事業関係遺跡昭和61年度発掘調査概要〔4〕スクモ塚古墳群」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1987)』京都府教育委員会）　1987

注46　三好博喜「国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡 (2) 桃山古墳群」（『京都府遺跡調査概報』第24冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1987

注47　岡田晃治「国営農地開発事業関係遺跡昭和61年度発掘調査概要〔6〕大田鼻横穴群」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1987)』京都府教育委員会）　1987

注48　衣川永一『夜久野の古墳』　1969　京都府立丹後郷土資料館「丹波夜久野の文化財」1976

注49　大槻真純，崎山正人「池の奥古墳群」（『福知山市文化財調査報告書』第7集　福知山市教育委員会）　1985

注50　大石　信・佐藤晃一「倉悌山1号墳の記録」（『宮津市文化財調査報告』1　宮津市教育委員会）

1980

注51　佐藤晃一「入谷西A1号墳—調査の概要—」(『加悦町文化財調査概要』2　加悦町教育委員会) 1983

注52　増田孝彦「昭和62年度発掘調査略報　7.遠所古墳群(1号墳)」(『京都府埋蔵文化財情報』第26号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987.12

注53　田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981

注54　奥村清一郎他『湯舟坂2号墳』(『京都府久美浜町文化財調査報告』第7集　久美浜町教育委員会)　1983

注55　『後期古墳について』(両丹技師の会・但馬考古学研究会交流会資料)　1985

注56　『各務原市史』

注57　土屋長久「北佐久郡望月町吹上山の神古墳について」(『信濃佐久平古氏族の性格と祭り』同刊行会)　1975

注58　真野和夫他『飛山』大分県教育委員会　1973

注59　網干善教他『新沢千塚古墳群』奈良県立橿原考古学研究所　1981

注60　米山一政他『塚穴原1号古墳発掘調査報告書』(『上田市文化財調査報告書』9　上田市教育委員会)　1976

注61　石川恒太郎他『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(1)』宮崎県教育委員会　1972

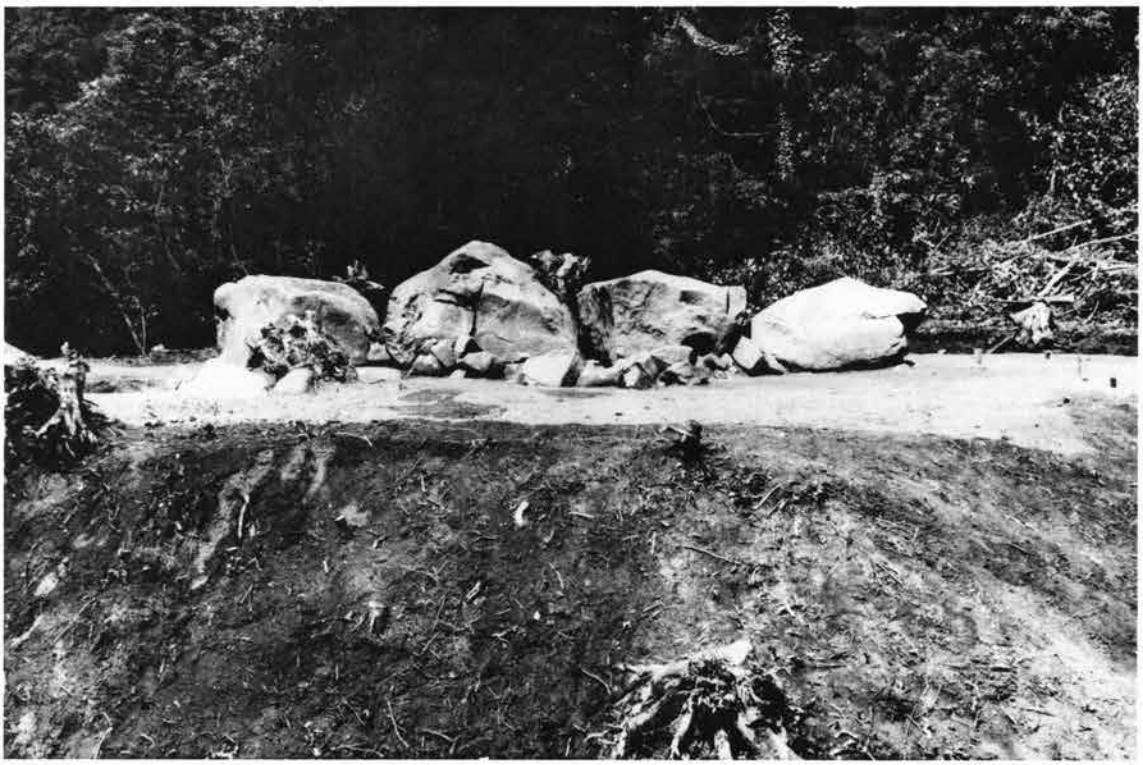
注62　小野山節『京都大学文学部博物館考古学資料目録』2　京都大学文学部　1968

注63　等粒状黒雲母花崗岩は比治山峠のものをK・Ar法で測定した結果約6,000万年前(引原海清),峰山町大成のものでは14,600万年前のものとなっている。

図　　版

図版第１　　高山古墳群・高山遺跡

(1)　高山３号墳調査前全景（南東から）



(2)　高山３号墳天井石（南東から）

図版第２　　高山古墳群・高山遺跡

(1)　高山３号墳石室全景（南南西から）

(2)　高山３号墳棺台周辺遺物出土状況（南南西から）

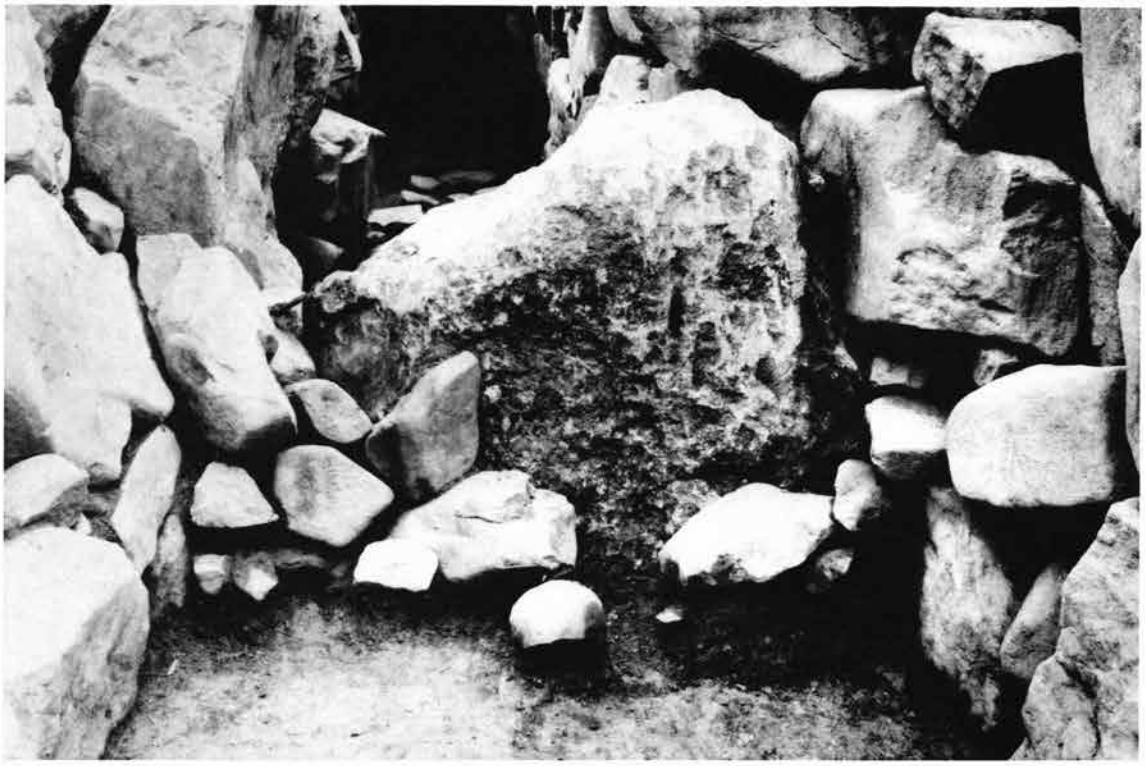
図版第３　　高山古墳群・高山遺跡

(1)　高山３号墳棺台周辺遺物出土状況部分（南南西から）

(2)　高山３号墳玉類出土状況（東北東から）

図版第４　高山古墳群・高山遺跡

(1)　高山３号墳閉塞石内側遺物出土状況（北から）



(2)　高山３号墳閉塞状況（南南西から）

図版第５　高山古墳群・高山遺跡

(1)　高山４号墳調査前全景（西から）

(2)　高山４号墳石室全景（西から）

図版第6　高山古墳群・高山遺跡

(1) 高山4号墳玄門部遺物出土状況（東から）

(2) 高山4号墳溝全景（南から）

図版第７　　高山古墳群・高山遺跡

(1)　高山５号墳調査前全景（南東から）

(2)　高山５号墳石室全景（南東から）

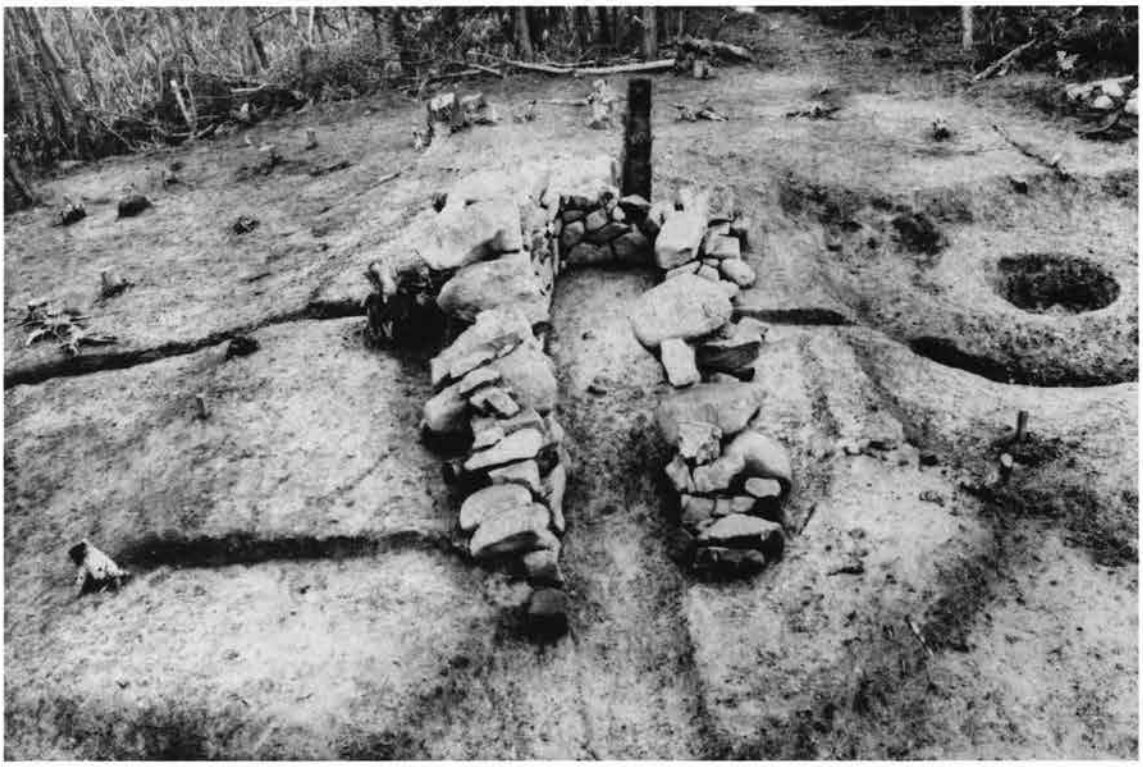
図版第８　高山古墳群・高山遺跡

(1)　高山５号墳玄室敷石（南東から）

(2)　高山５号墳袖石付近遺物出土状況（東から）

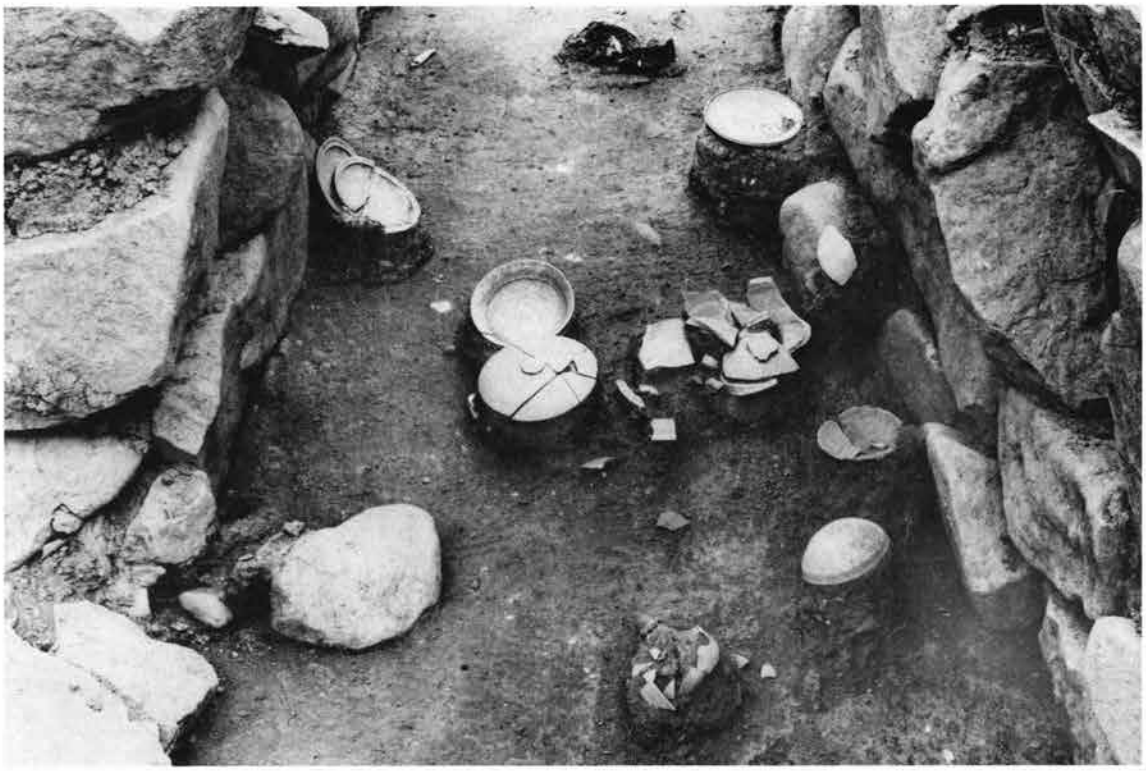
図版第９　　高山古墳群・高山遺跡

(1)　高山６号墳調査前全景（南東から）



(2)　高山６号墳石室全景（南東から）

図版第10　高山古墳群・高山遺跡

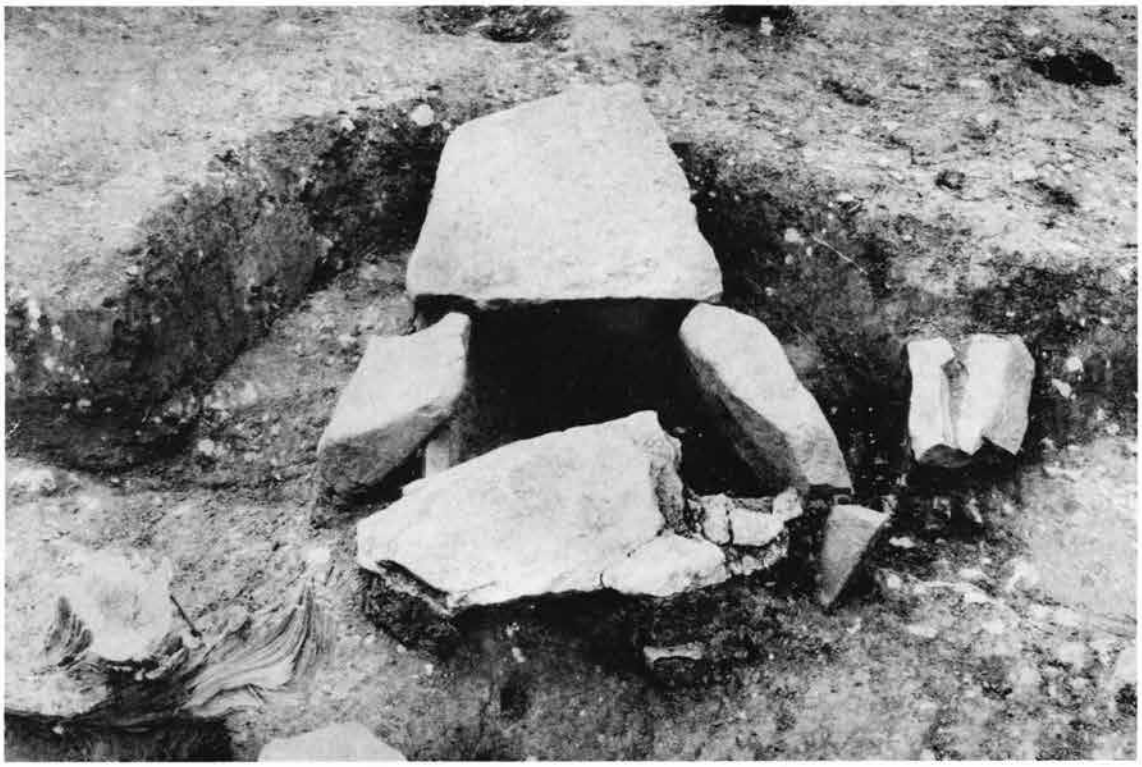


(1) 高山６号墳閉塞部付近遺物出土状況（北西から）

(2) 高山６号墳奥壁付近遺物出土状況（南東から）

図版第11　高山古墳群・高山遺跡

(1)　試掘地A(高山遺跡)住居跡全景（北西から）



(2)　試掘地A(高山遺跡)石組みカマド（南西から）

図版第12　高山古墳群・高山遺跡

(1)　高山４号墳周辺の積石・集石（北東から）

(2)　高山４号墳周辺の積石・集石（北から）

図版第13　高山古墳群・高山遺跡

(1)　高山５号墳周囲集石全景（北東から）

(2)　高山５号墳周囲集石９部分（西から）

図版第14　高山古墳群・高山遺跡

(1)　高山５号墳周囲の集石除去後の墓坑（北東から）

(2)　高山５号墳周囲の集石墓坑９の人骨出土状況（北東から）

図版第15　高山古墳群・高山遺跡

(1)　高山７号墳調査前全景（北西から）

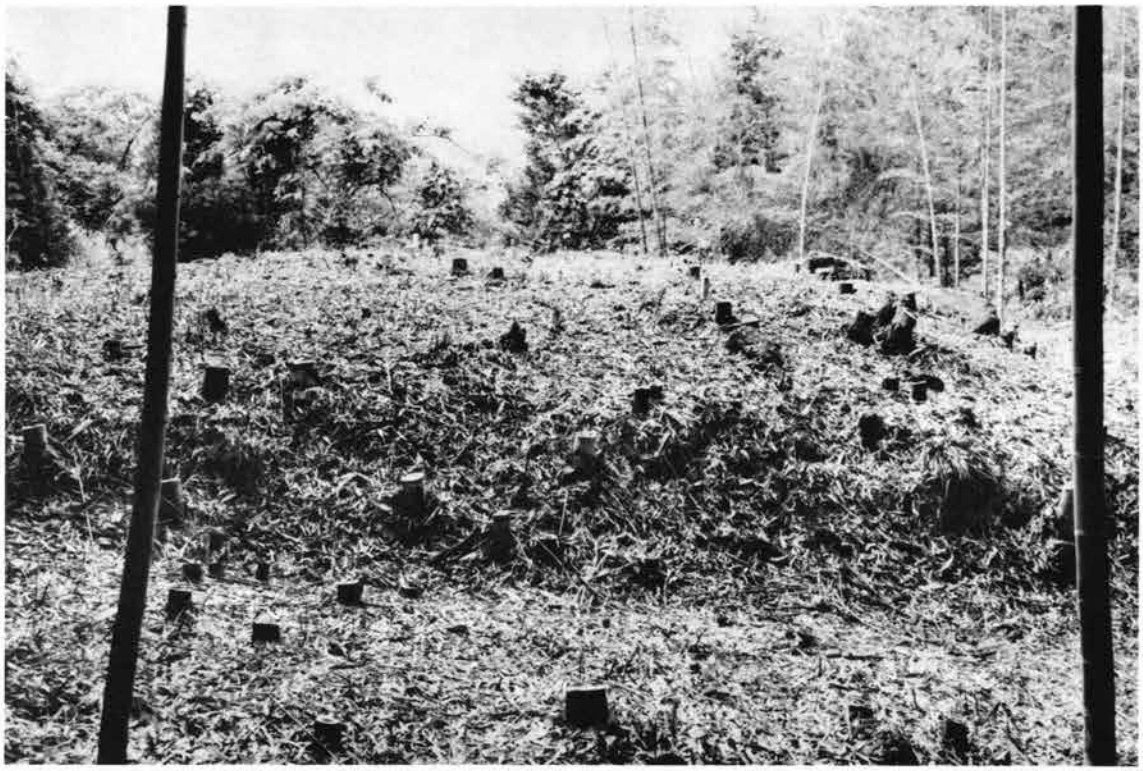
(2)　高山７号墳石室全景（南南西から）

図版第16　高山古墳群・高山遺跡

(1) 高山７号墳閉塞状況（南南西から）

(2) 高山７号墳遺物出土状況（西から）

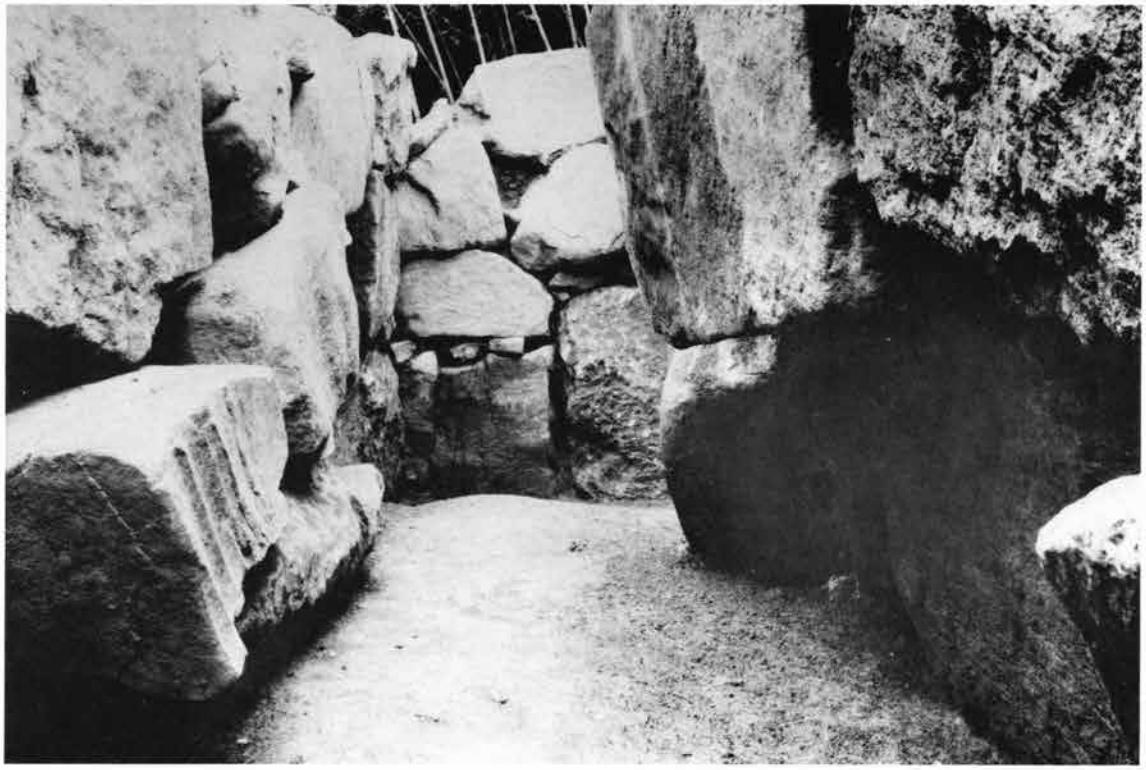
図版第17　高山古墳群・高山遺跡



(1) 高山12号墳調査前全景（北東から）

(2) 高山12号墳石室全景（南から）

図版第18　高山古墳群・高山遺跡



(1) 高山12号墳東側壁内傾状況（南から）

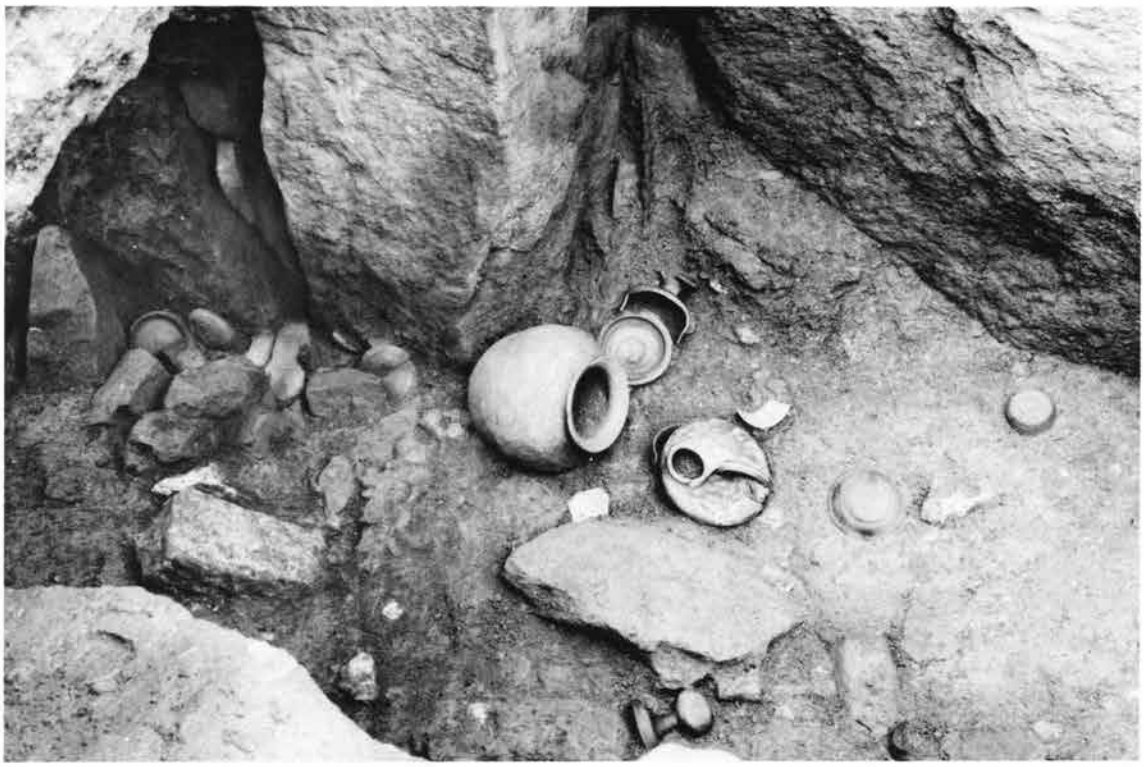
(2) 高山12号墳東側壁内傾状況（北から）

図版第19　高山古墳群・高山遺跡

(1) 高山12号墳環頭大刀柄頭龍文出土状況（北西から）

(2) 高山12号墳石材除去後の東側壁，玄室床面石列（南から）

(1)　高山12号墳環頭大刀柄頭出土状況（東から）



(2)　高山12号墳袖石付近遺物出土状況（北東から）

図版第21　高山古墳群・高山遺跡

(1)　高山12号墳玄門部遺物出土状況（北西から）

(2)　高山12号墳玄門部西側遺物出土状況（北東から）

図版第22　高山古墳群・高山遺跡

(1)　高山12号墳玄室内遺物出土状況（北から）

(2)　高山12号墳袖石部分遺物出土状況（北東から）

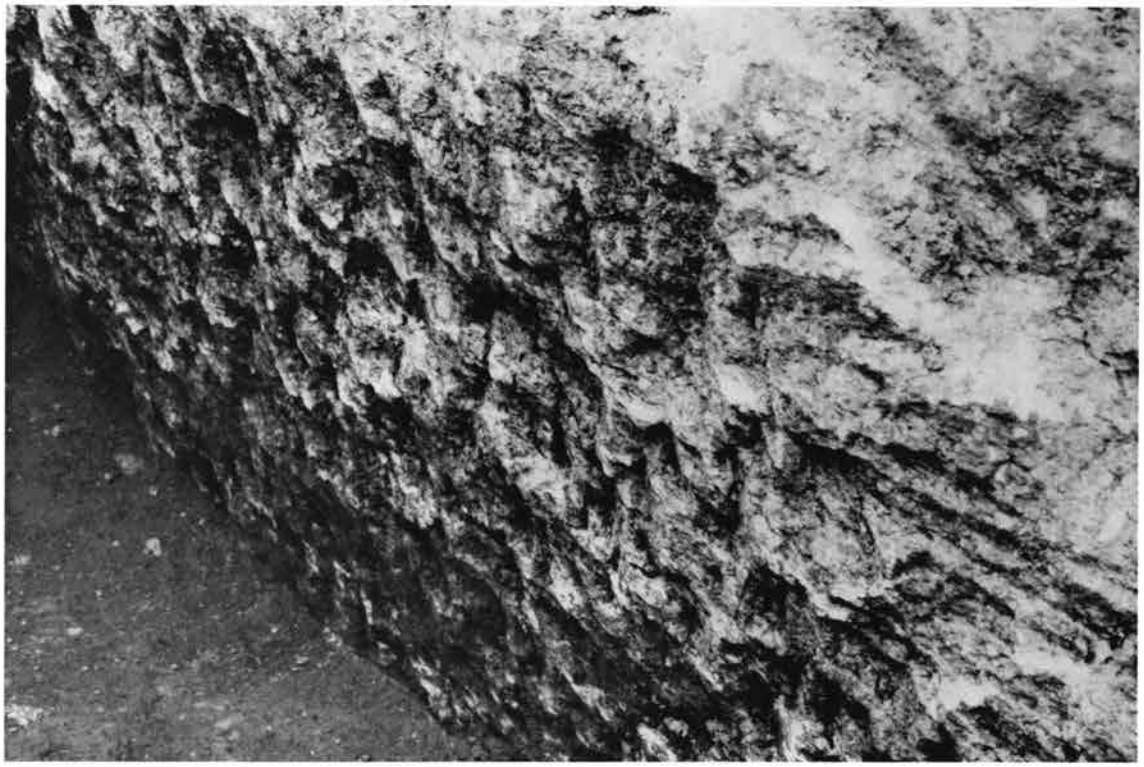
図版第23　高山古墳群・高山遺跡

(1)　高山12号墳閉塞状況（南から）

(2)　高山12号墳石室前面遺物出土状況（北西から）

図版第24　高山古墳群・高山遺跡

(1) 高山12号墳玄室奥壁（南から）

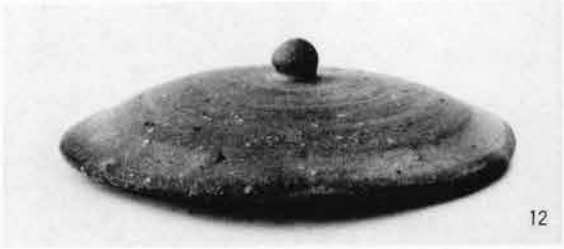


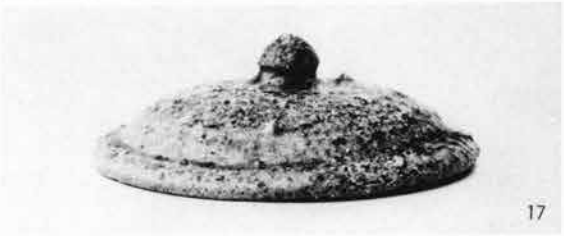
(2) 高山12号墳玄室基底石鑿跡（北東から）

図版第25　高山古墳群・高山遺跡

(1)　高山12号墳玄室と袖石（北から）

(2)　高山12号墳石室全景（南から）





３号墳出土土器(1)（番号は実測図番号に対応）

22

20

21

25

24

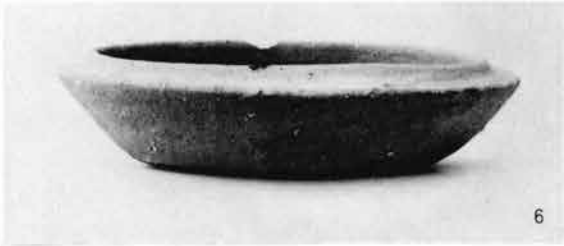
29

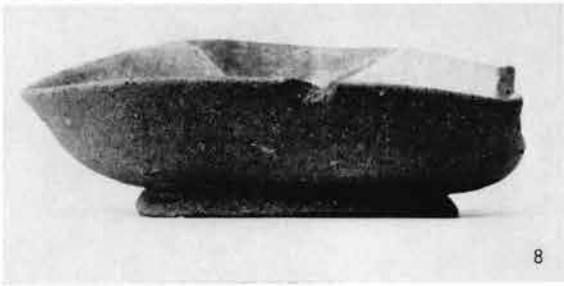
3号墳出土土器(2)

1

3

9


6


8

13

18

15

16

17

4号墳出土土器

5号墳出土土器

16

30-12

1

10

4

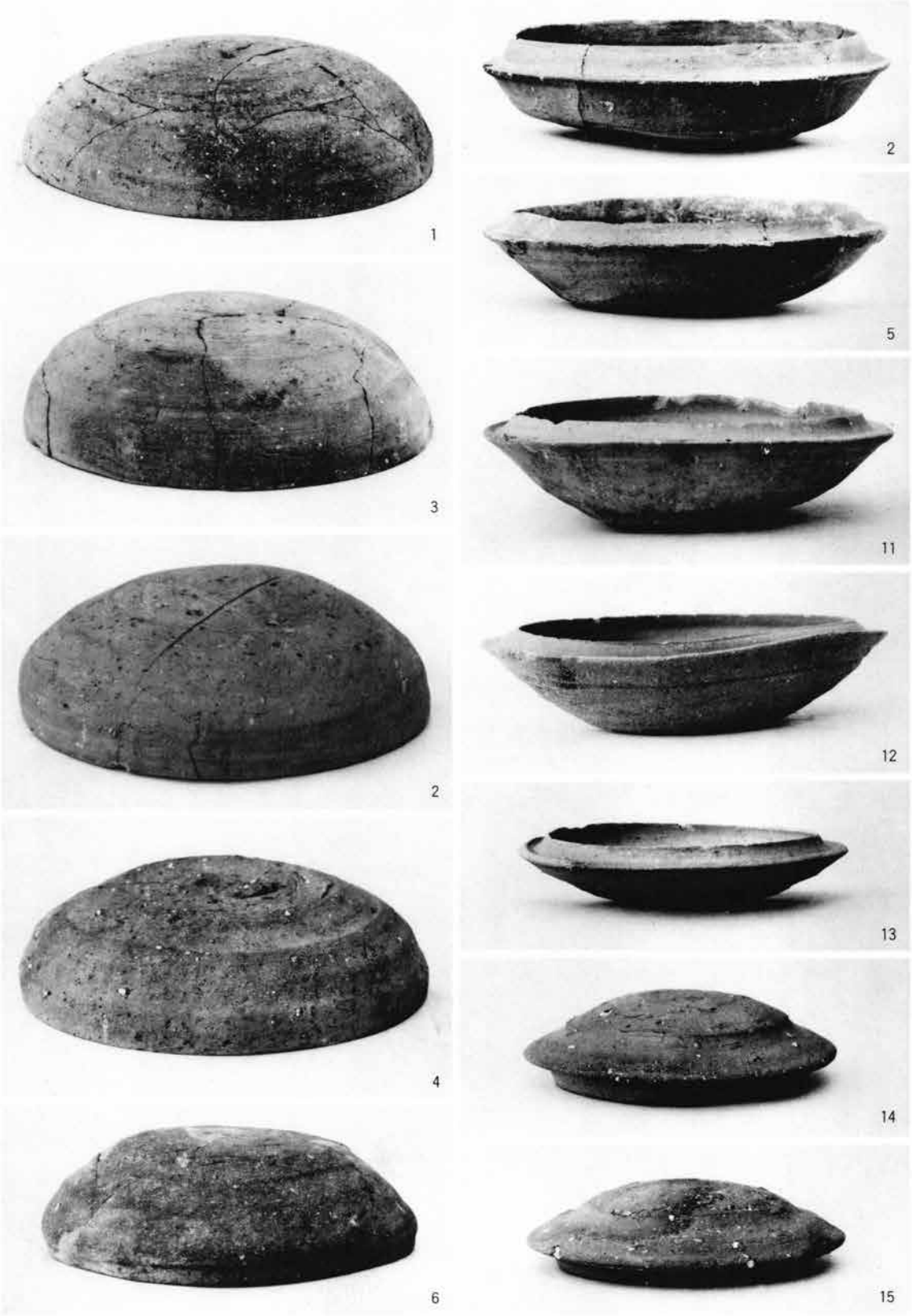
38-12

6

7

11

5・6号墳出土土器



7・12号墳出土土器

27

28

29

31

25

32

12号墳出土土器(1)

12号墳出土土器(2)

33

34

1

2

39

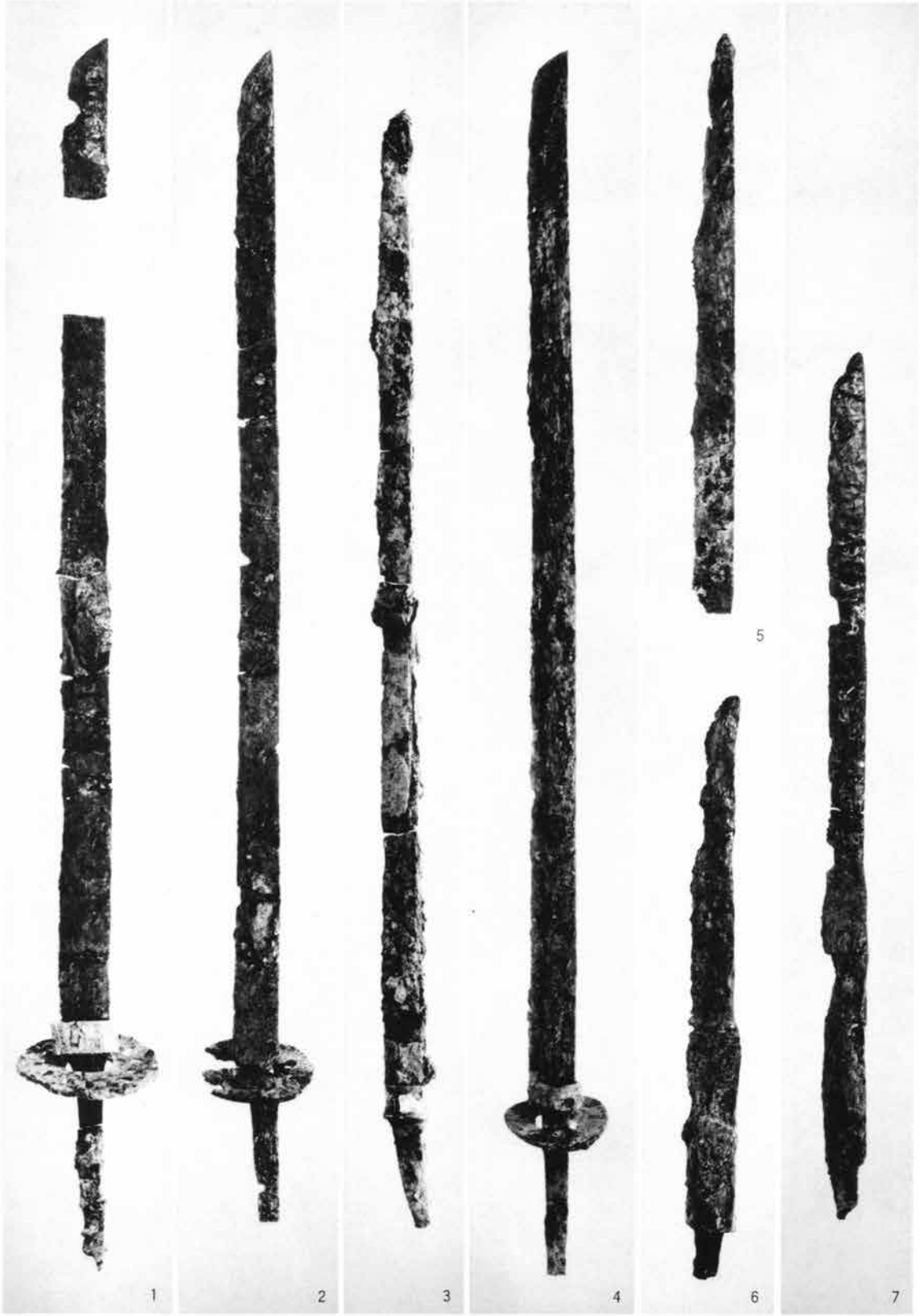
40

42

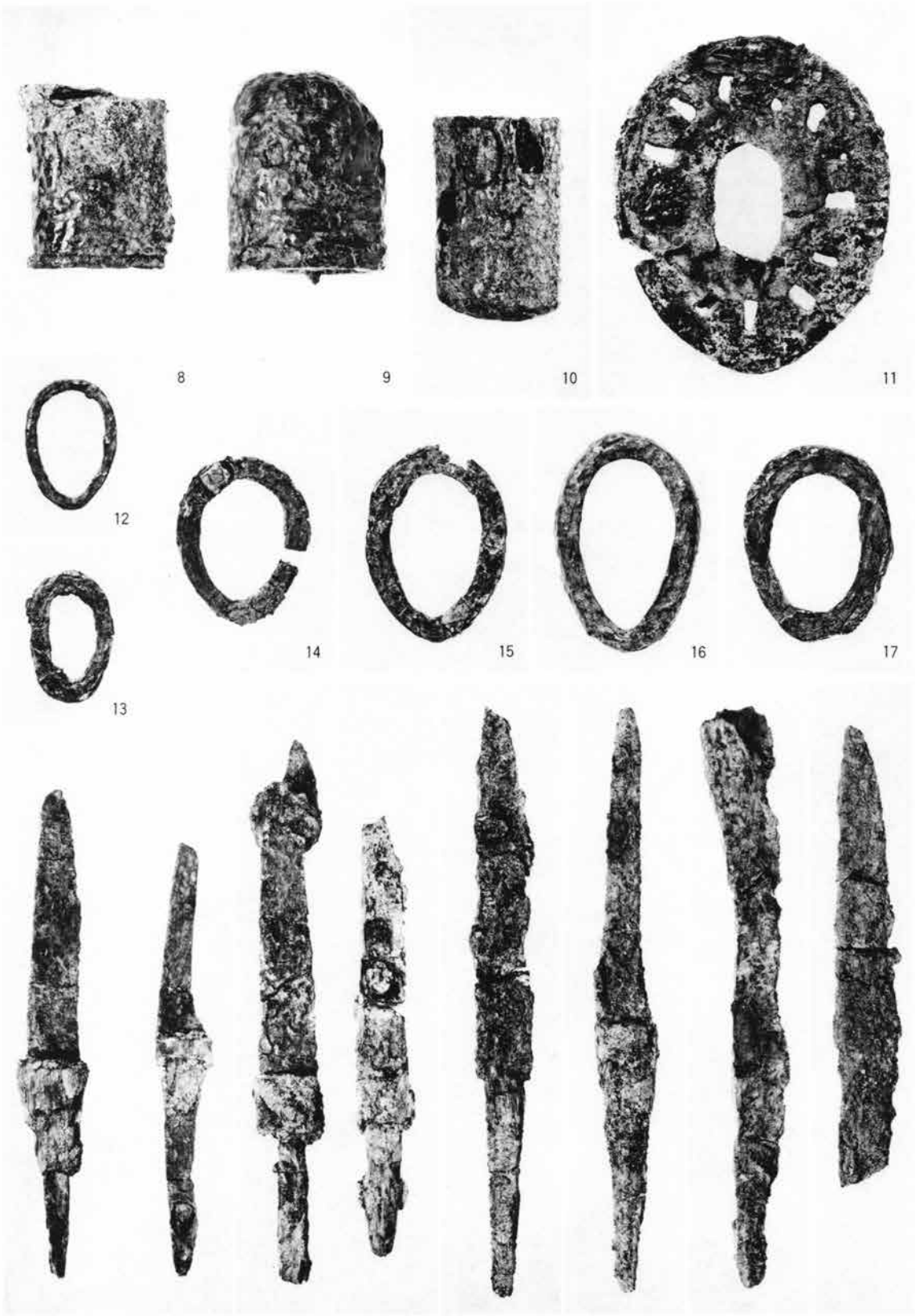
44

43

12号墳・住居跡出土土器

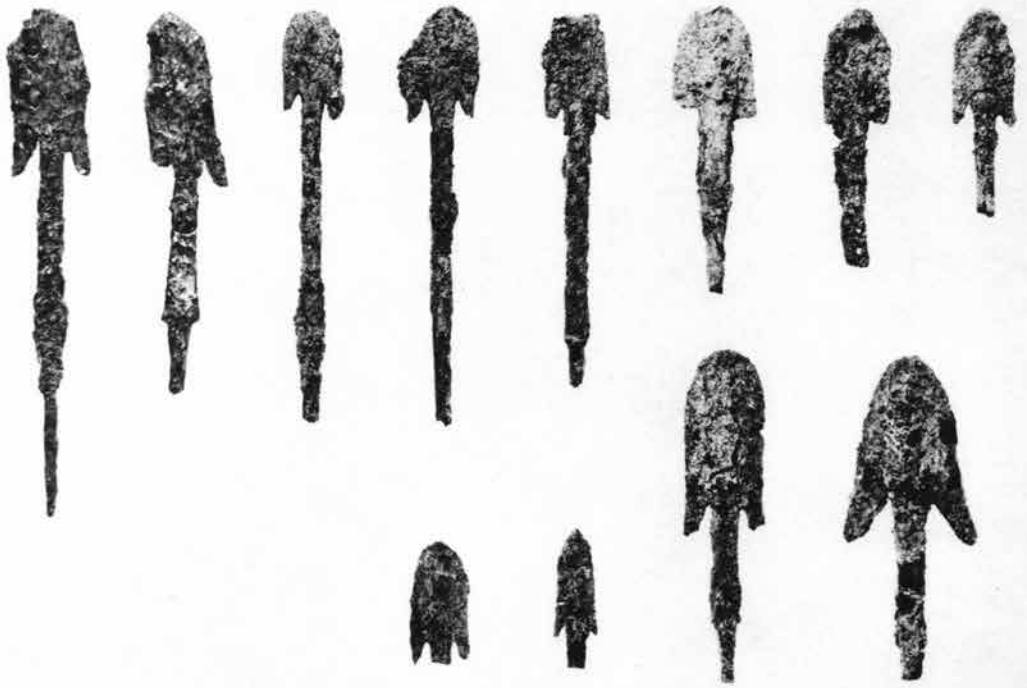


出土遺物(1)直刀



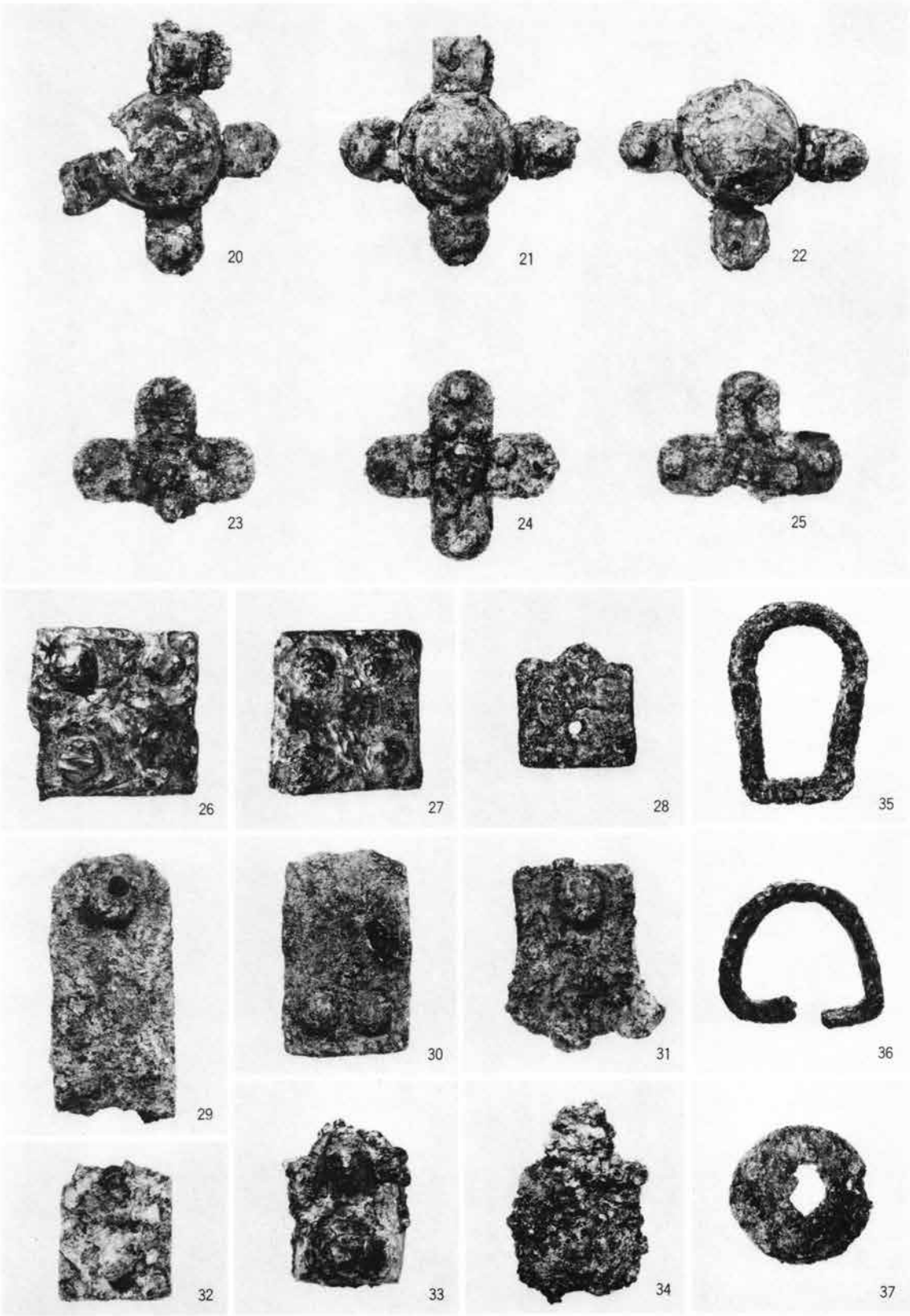
出土遺物(2)方頭・円頭大刀柄頭・刀装具・刀子

18



19

出土遺物(3)鉄鏃



出土遺物(4)辻金具・革金具・鉸具

38

39

40

41

42

43

44

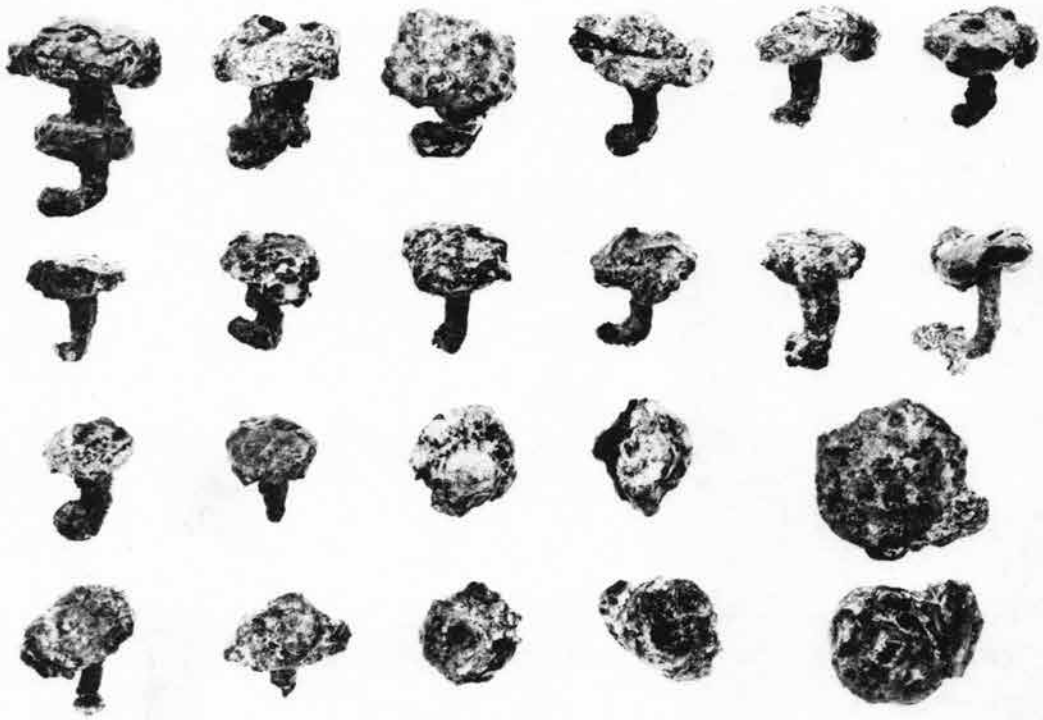
45

46

出土遺物(5)鉸具・鞍金具

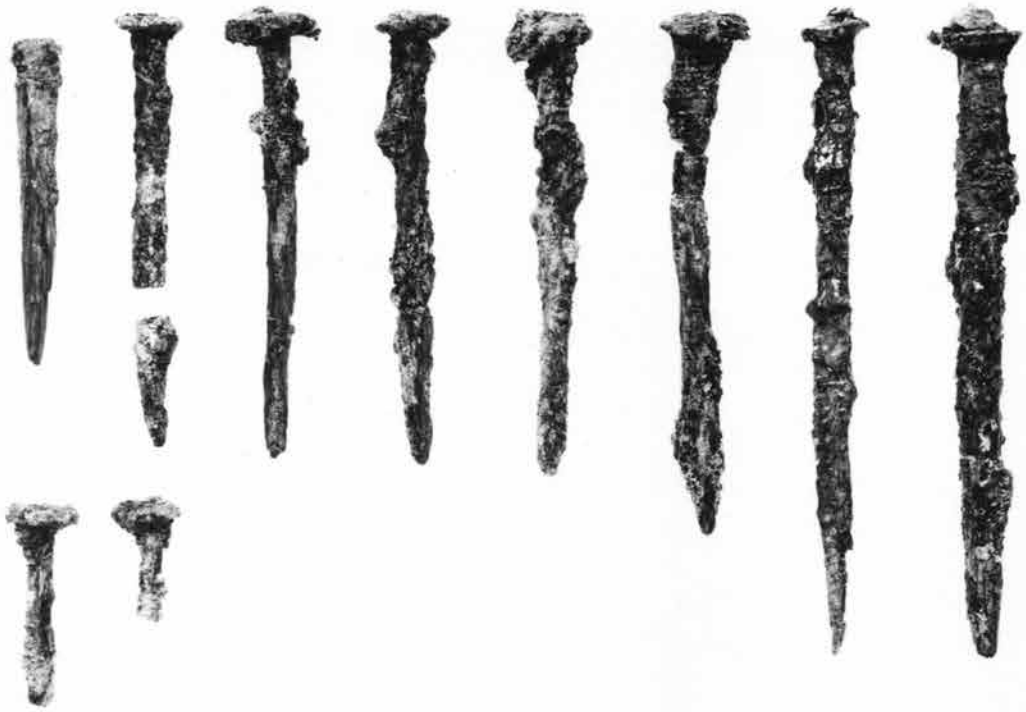
出土遺物(6)鐙・轡・鉄斧

53

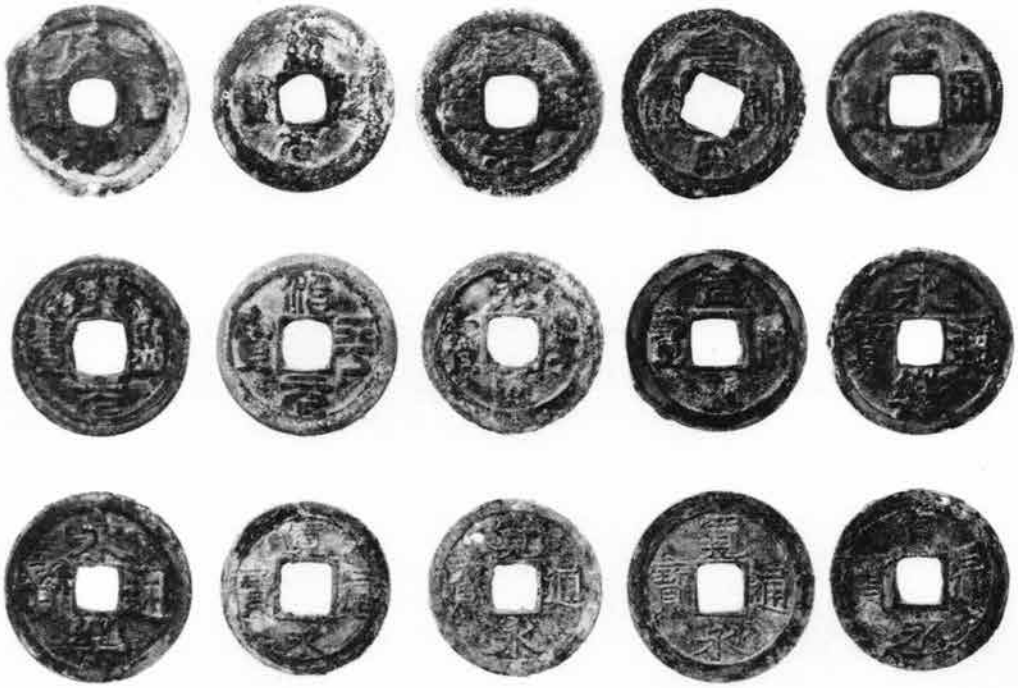


54

出土遺物(7)留金具・鋲

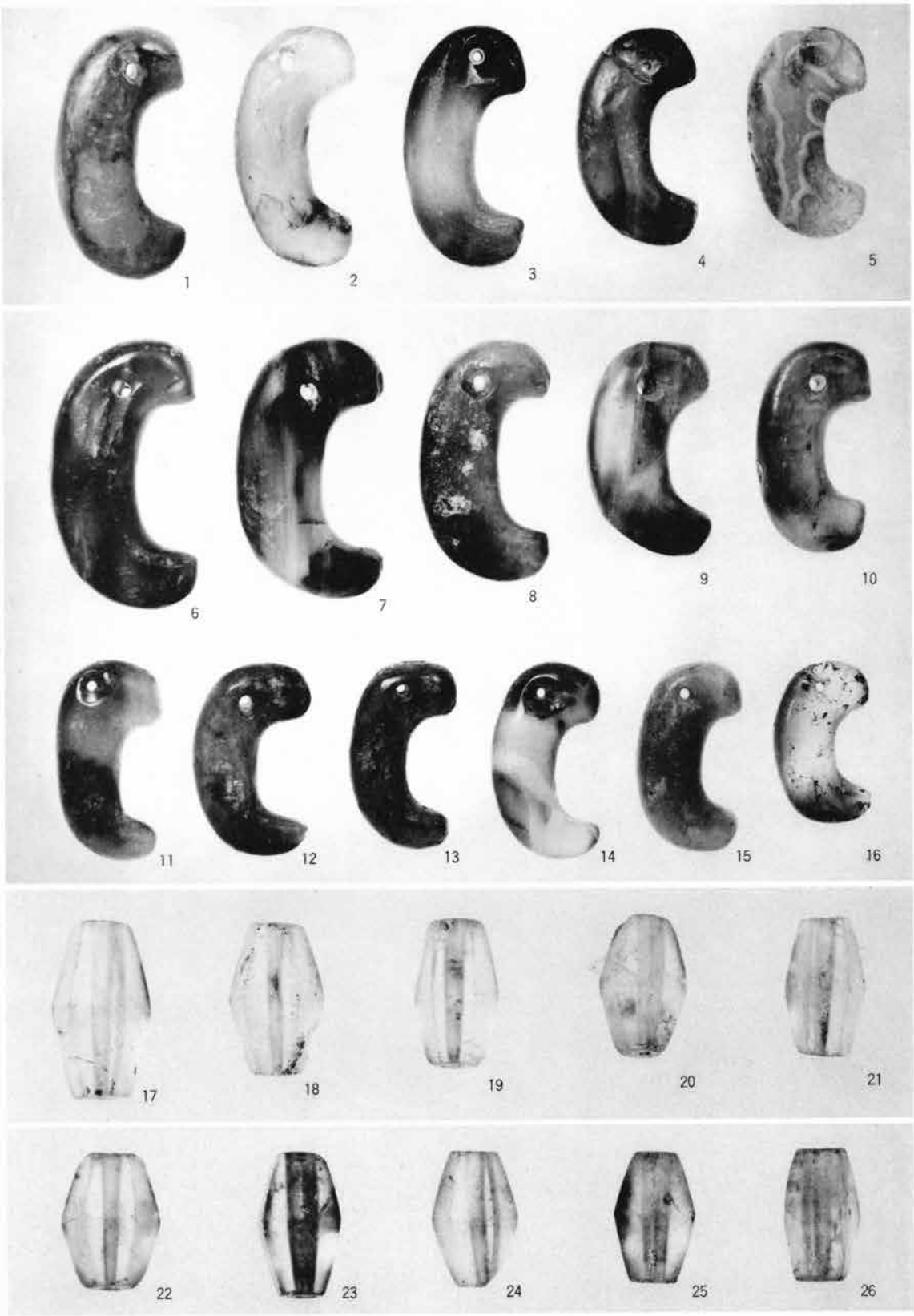


55



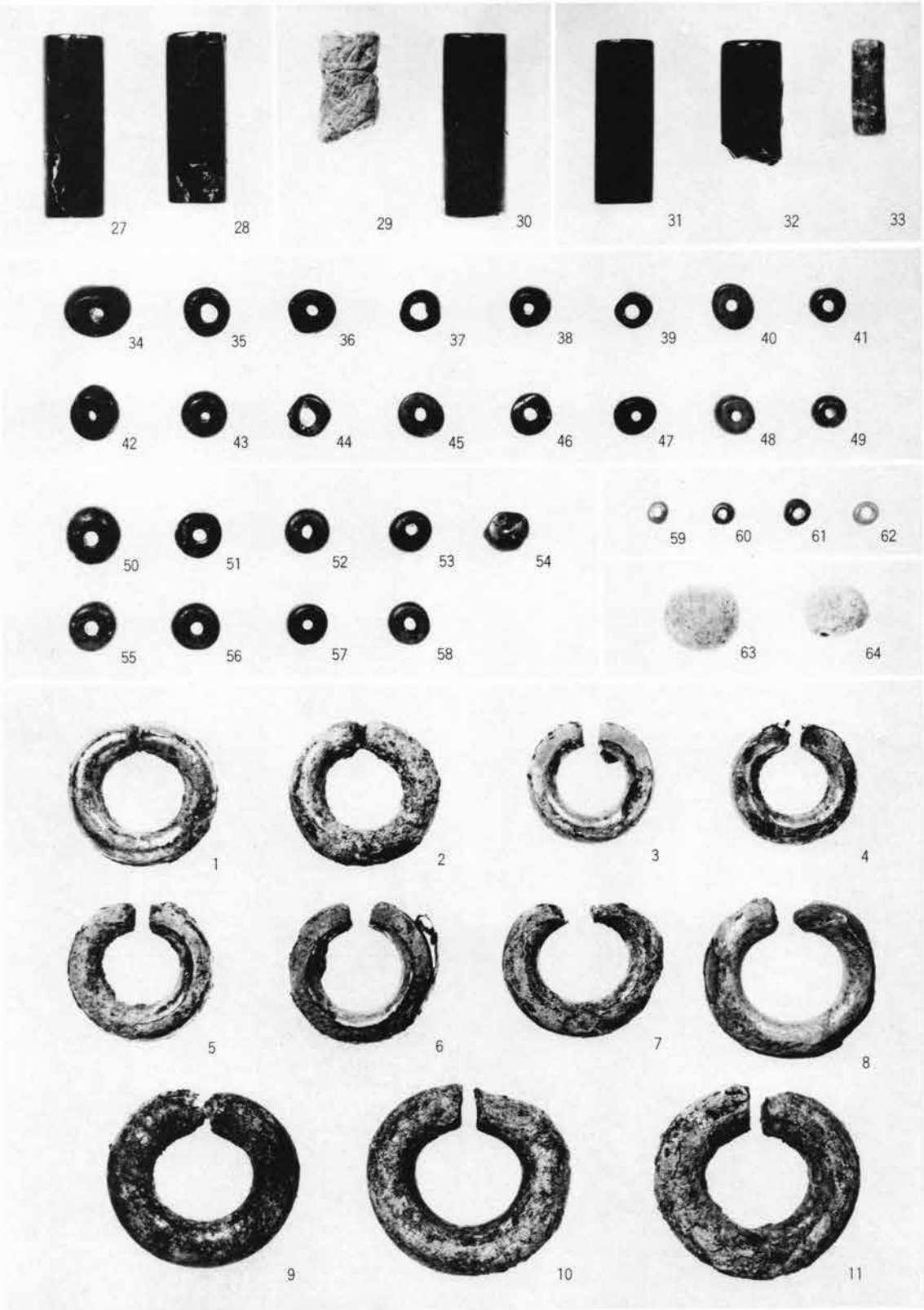
56

出土遺物(8)釘・古銭



出土遺物(9)玉類

図版第44　高山古墳群・高山遺跡



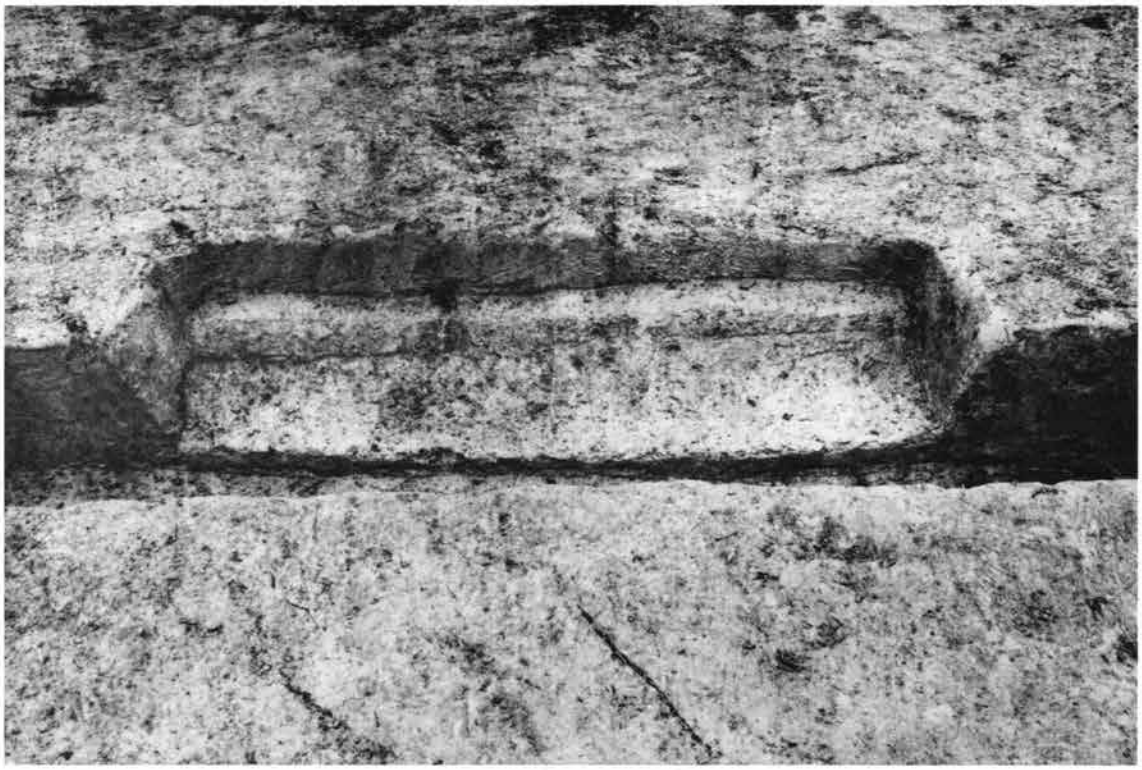
出土遺物(10)玉類・金環

図版第45　普甲古墳群・稲荷古墳群

(1)　普甲１～３号墳調査前（東から）

(2)　普甲１～３号墳調査後（西から）

図版第46　普甲古墳群・稲荷古墳群

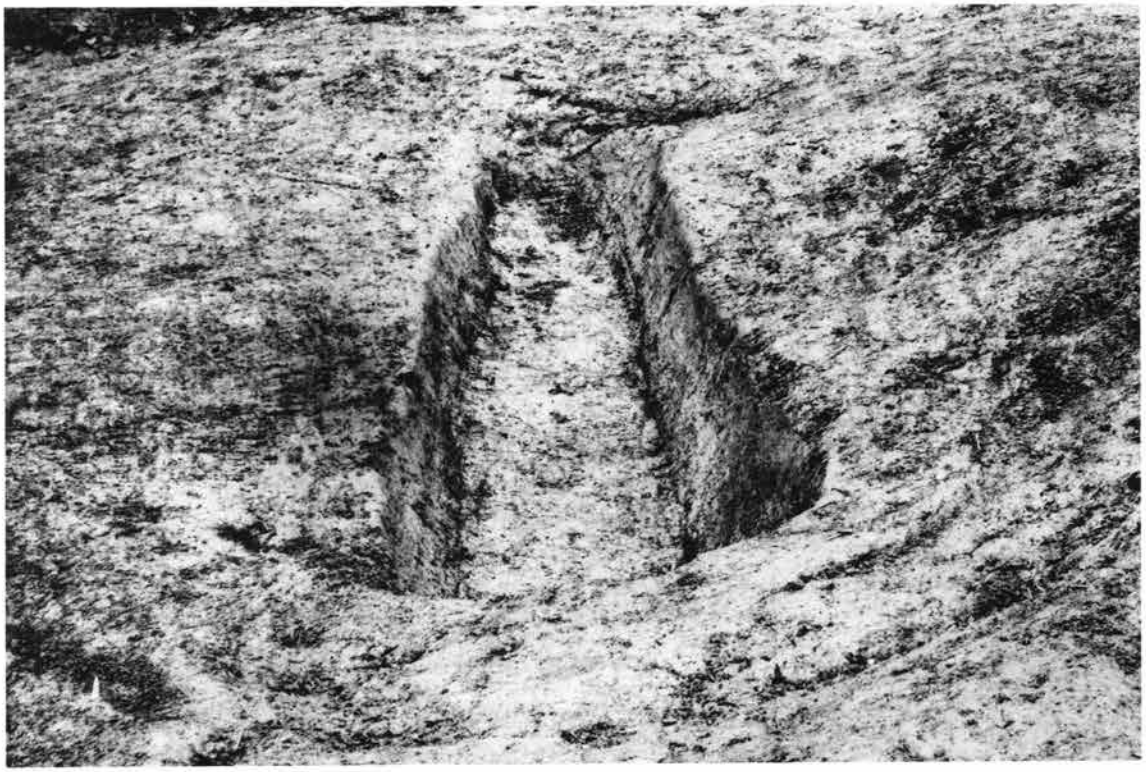


(1)　普甲１号墳第１主体部

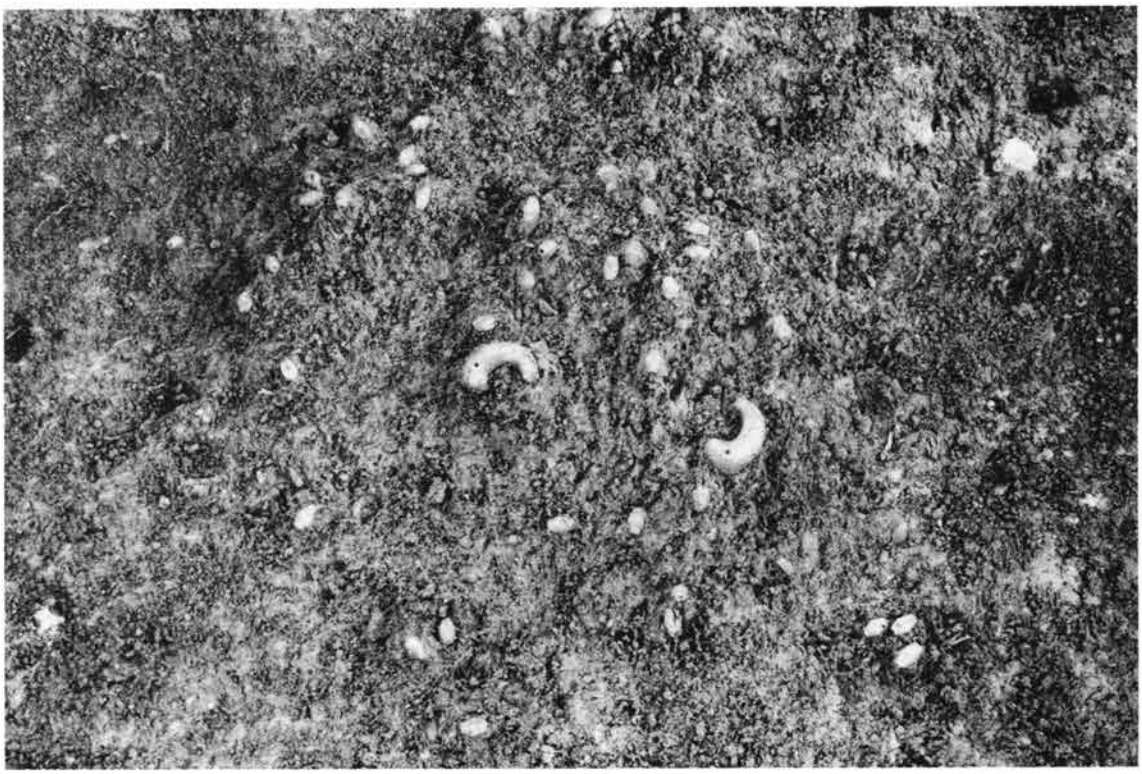
(2)　普甲１号墳第２・３主体部

図版第47　普甲古墳群・稲荷古墳群

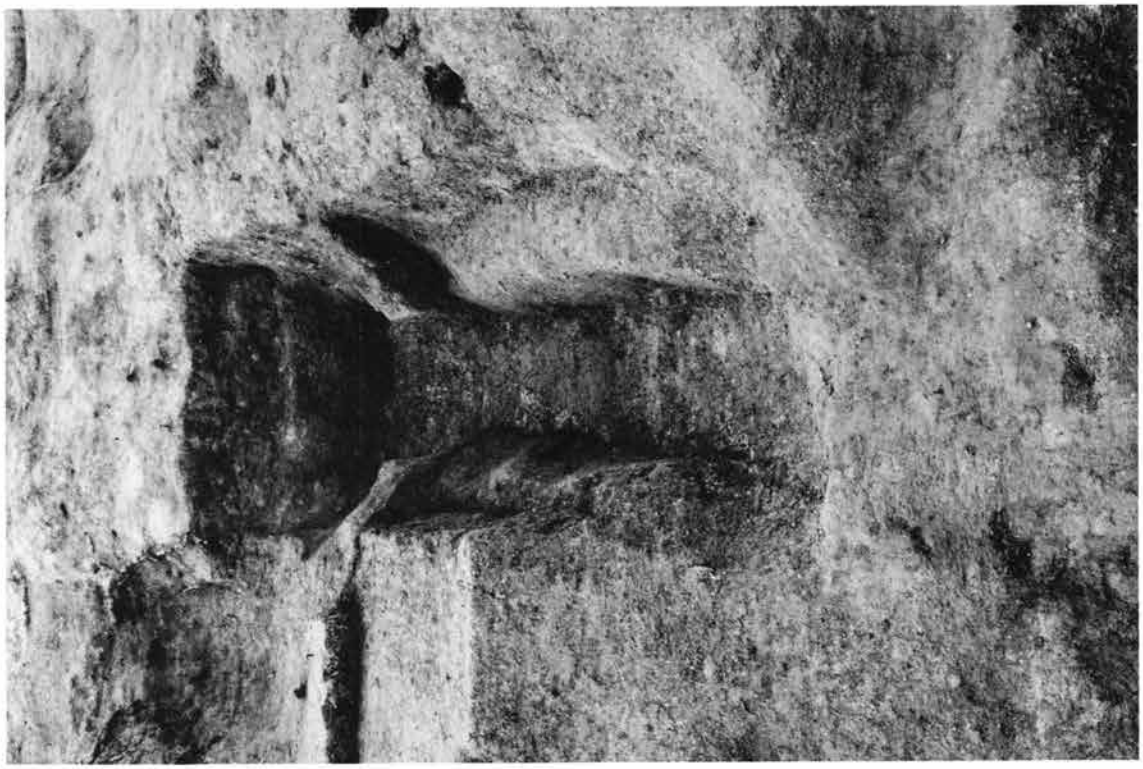
(1)　普甲１号墳第４主体部



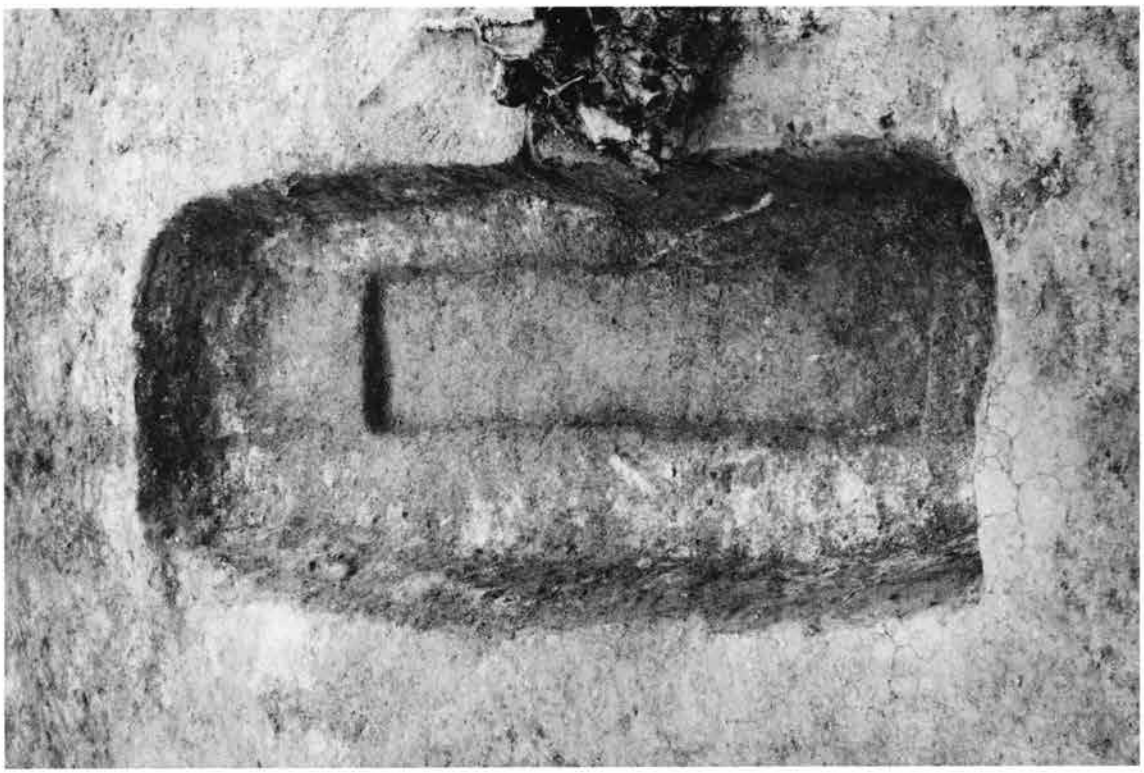
(2)　普甲１号墳第７主体部



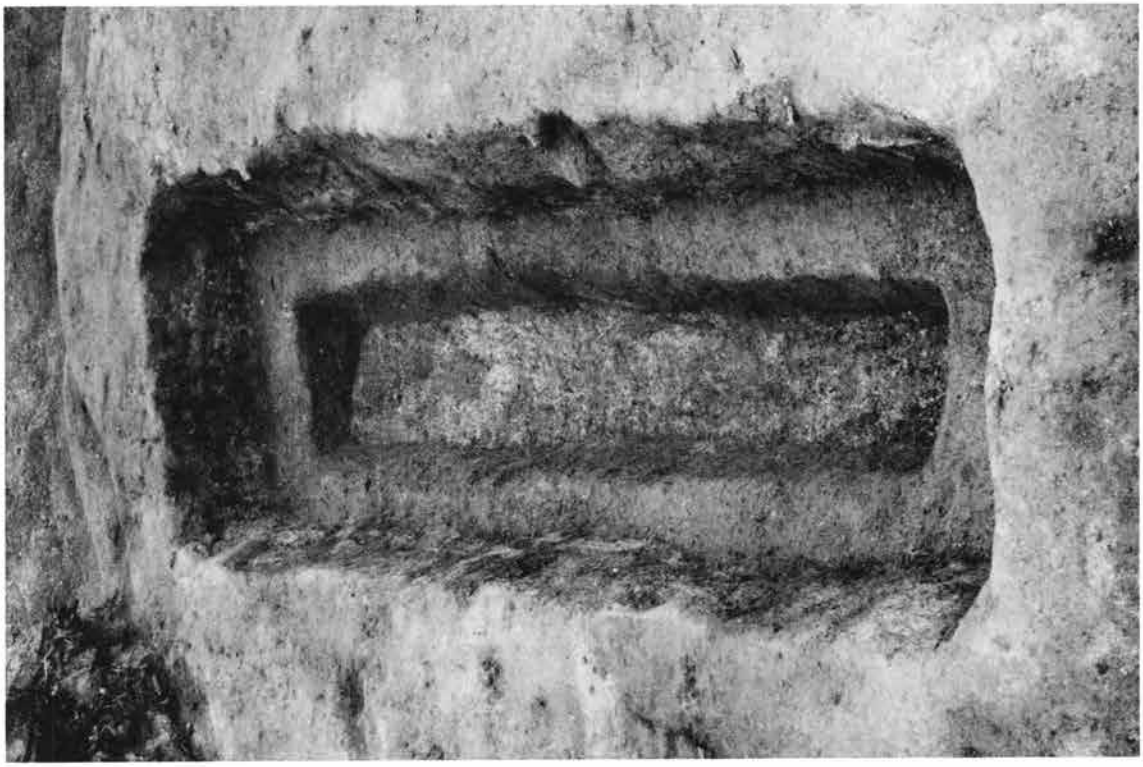
(2)　普甲１号墳第２主体部玉類出土状況



(1)　普甲１号墳第６主体部



(2)　普甲１号墳第５主体部

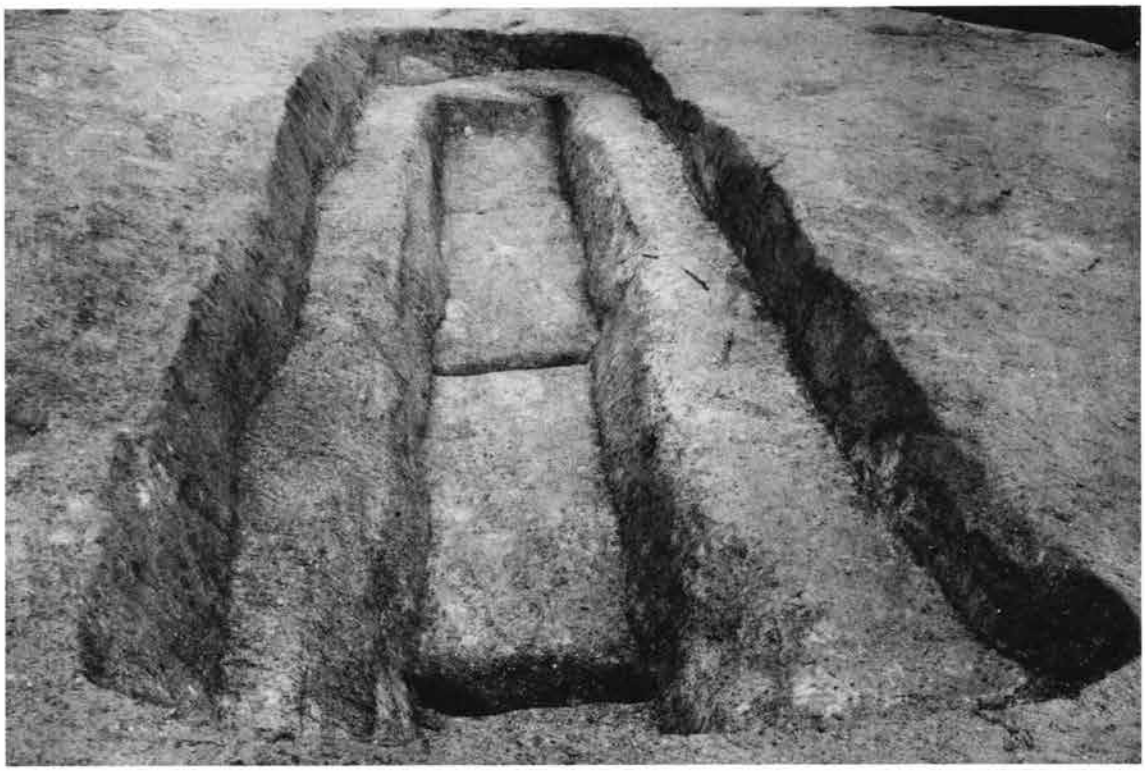


(1)　普甲２号墳主体部

(1)　普甲３号墳第１～３主体部

(2)　普甲３号墳第４主体部（南から）

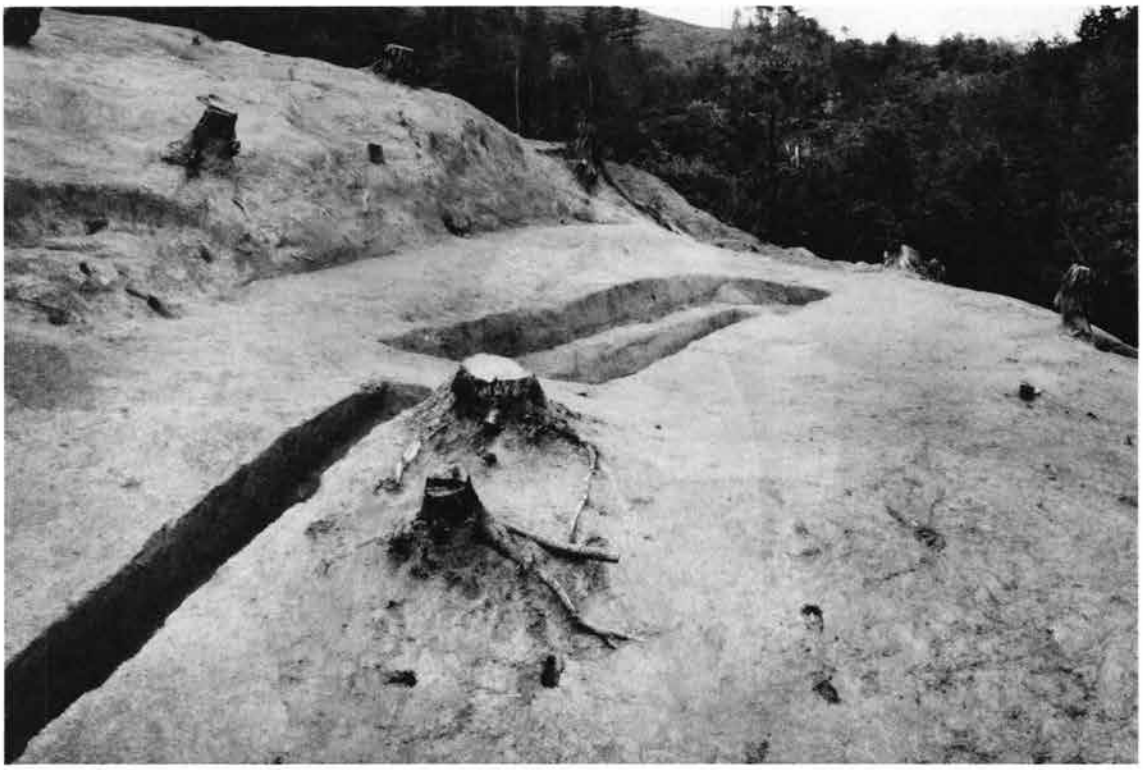
図版第51　普甲古墳群・稲荷古墳群



(1)　普甲４号墳主体部

(2)　普甲４号墳玉類出土状況

図版第52　普甲古墳群・稲荷古墳群

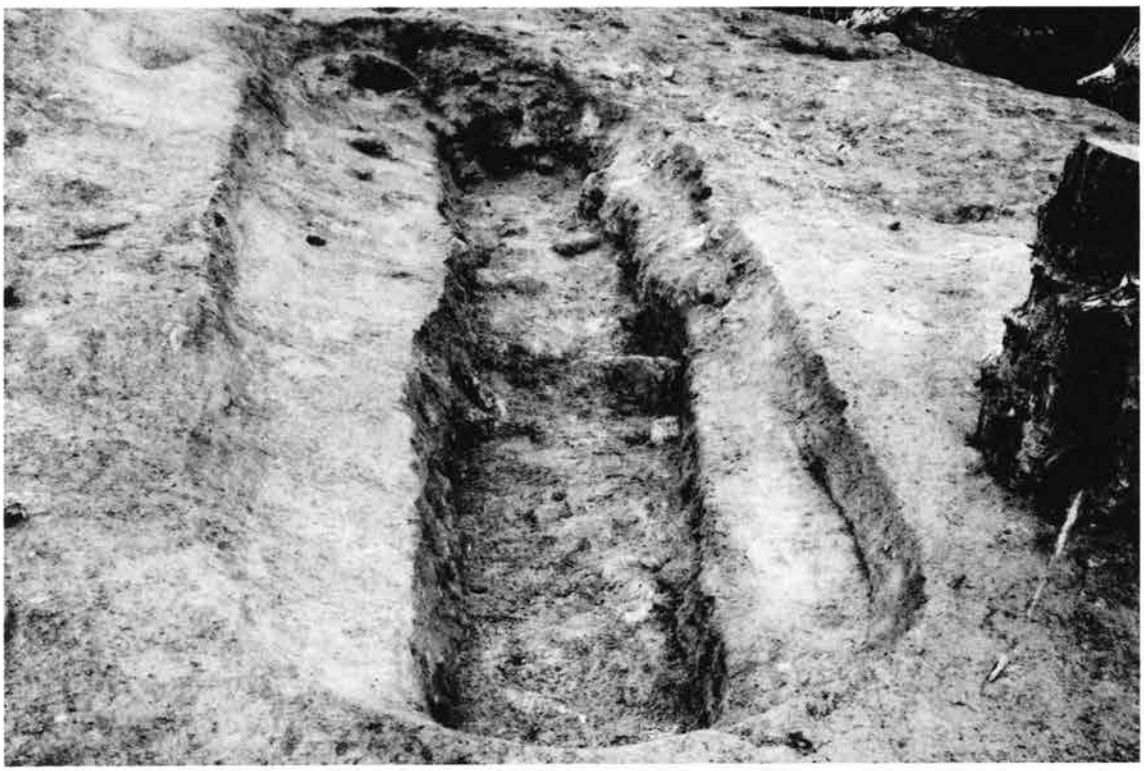


(1)　普甲４号墳（南から）

(2)　普甲４～７号墳遠景（東から）

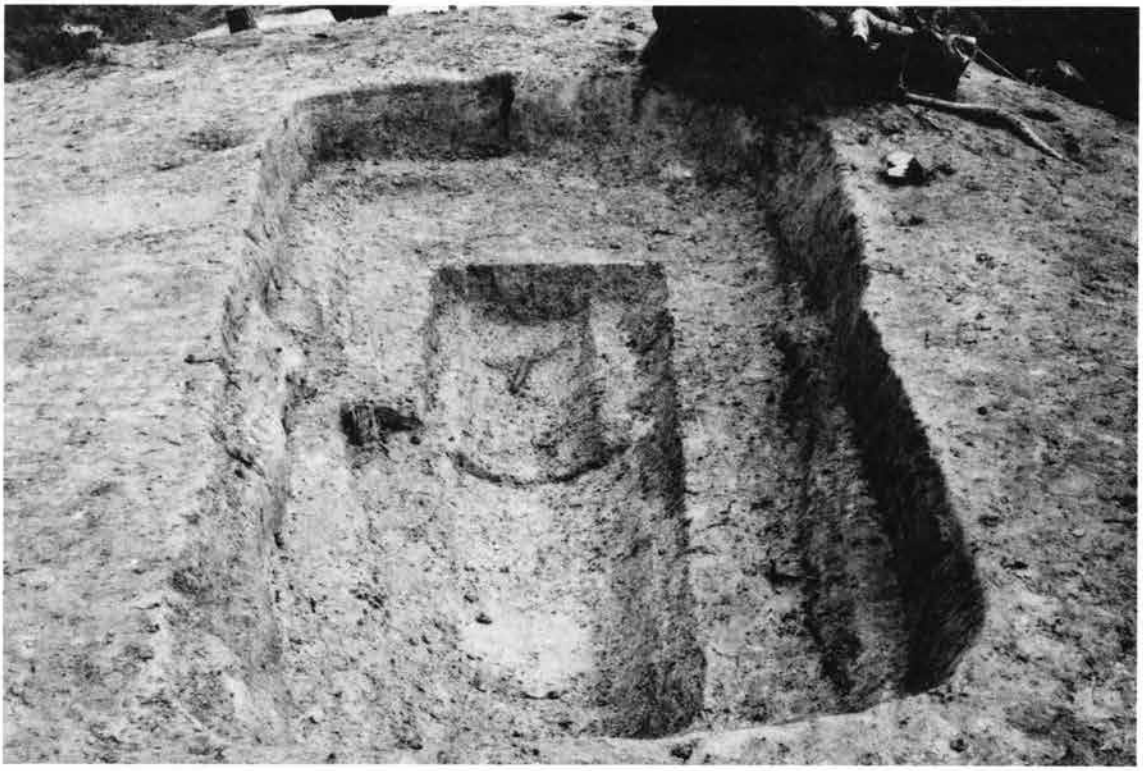
図版第53　普甲古墳群・稲荷古墳群

(1)　普甲５・６・７号墳（西から）

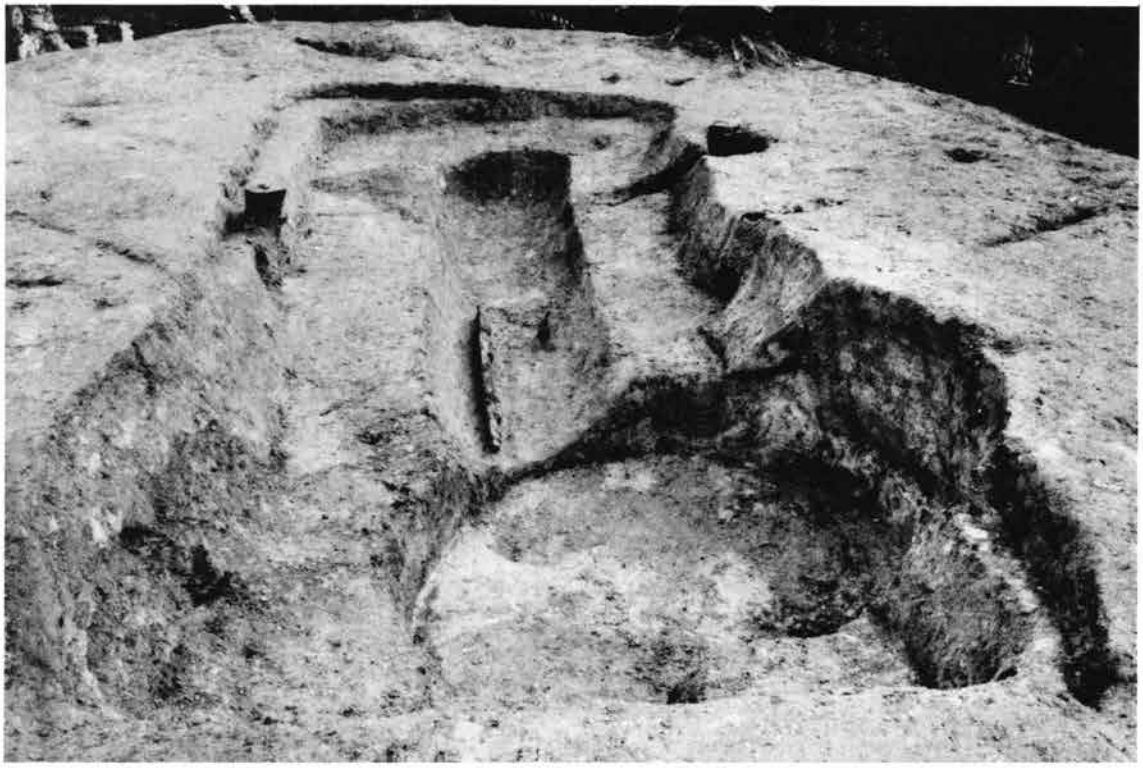


(2)　普甲５号墳主体部

図版第54　普甲古墳群・稲荷古墳群



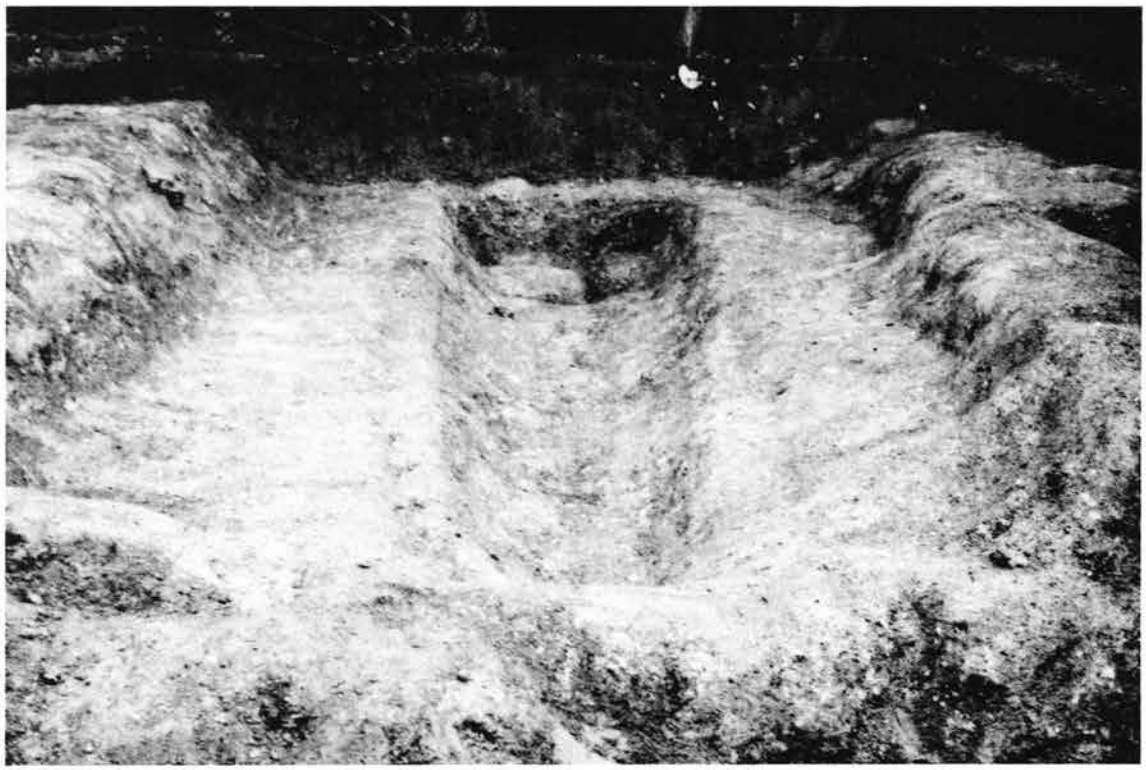
(1)　普甲６号墳主体部



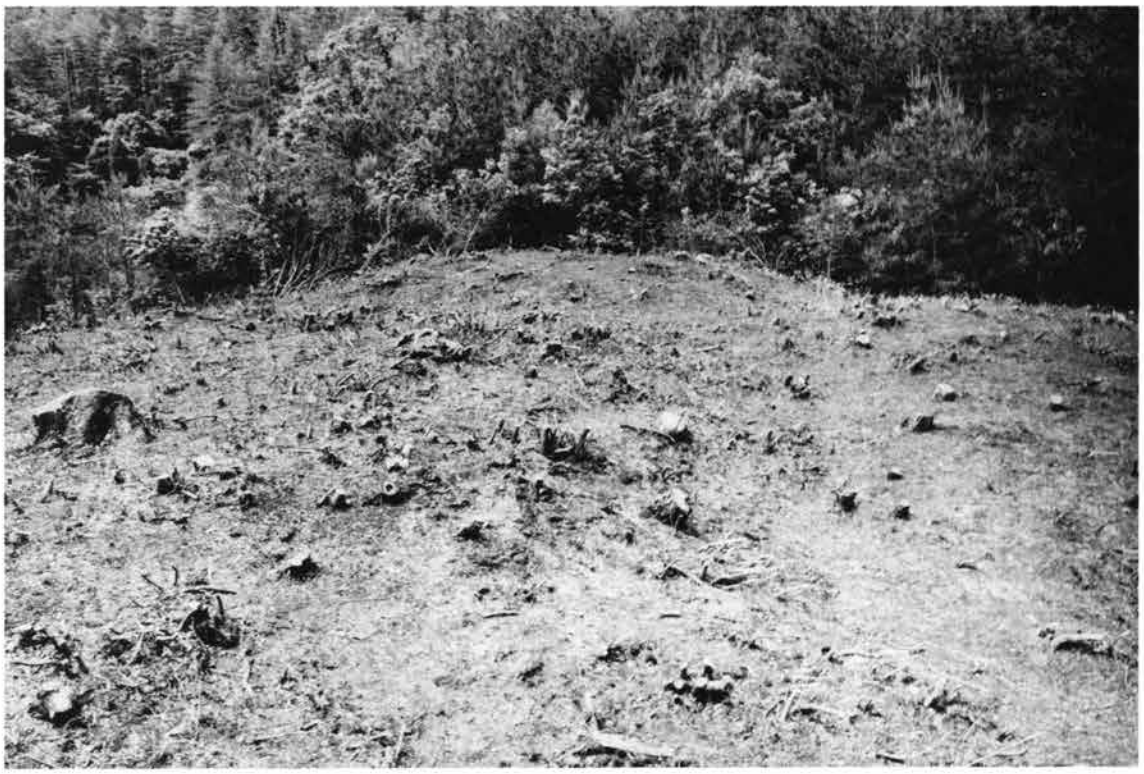
(2)　普甲７号墳主体部

図版第55　普甲古墳群・稲荷古墳群

(1) 稲荷15号墳（西から）



(2) 稲荷15号墳主体部



(1) 稲荷17号墳調査前（東から）

(2) 稲荷17号墳調査後（西から）

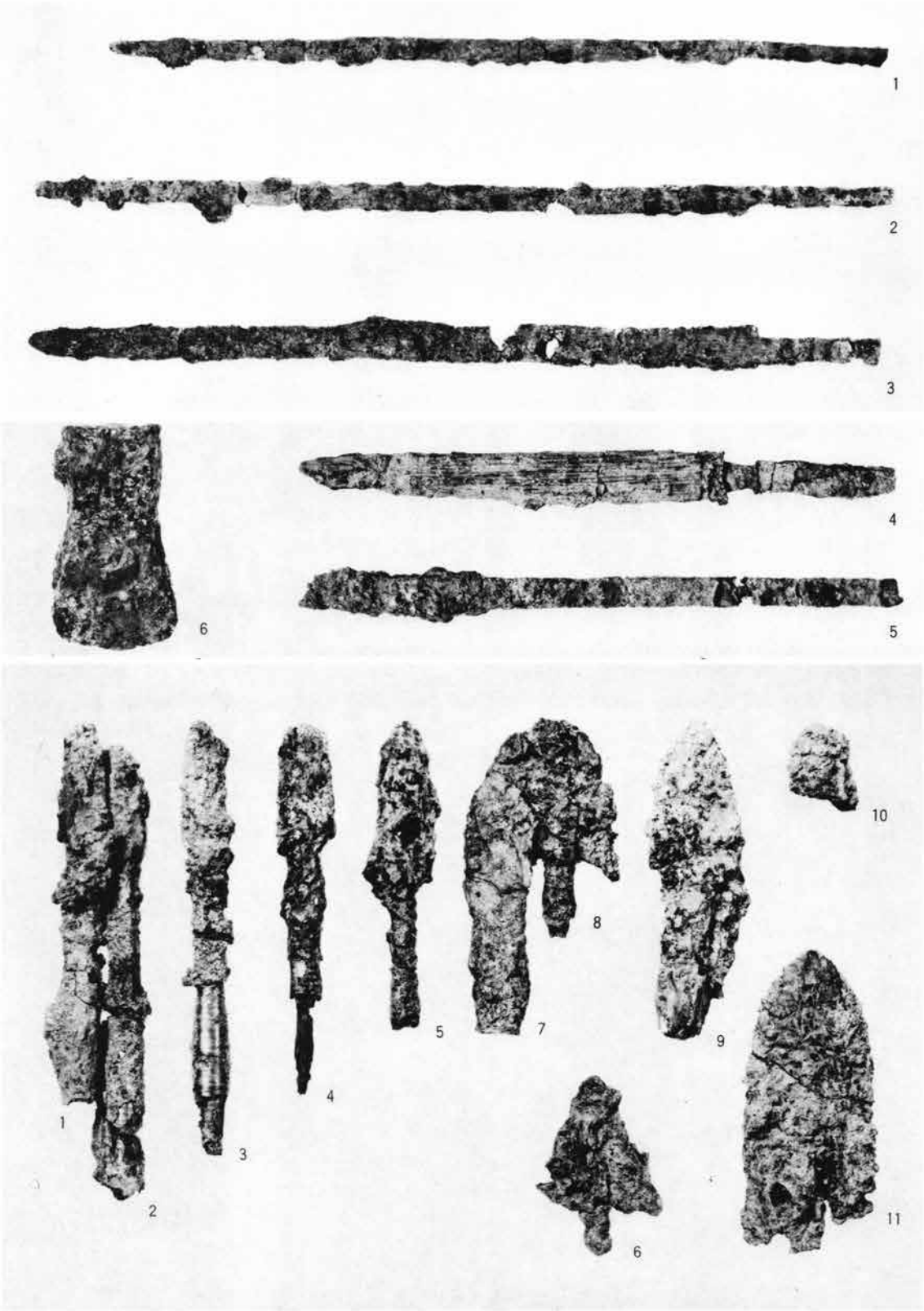
3

2

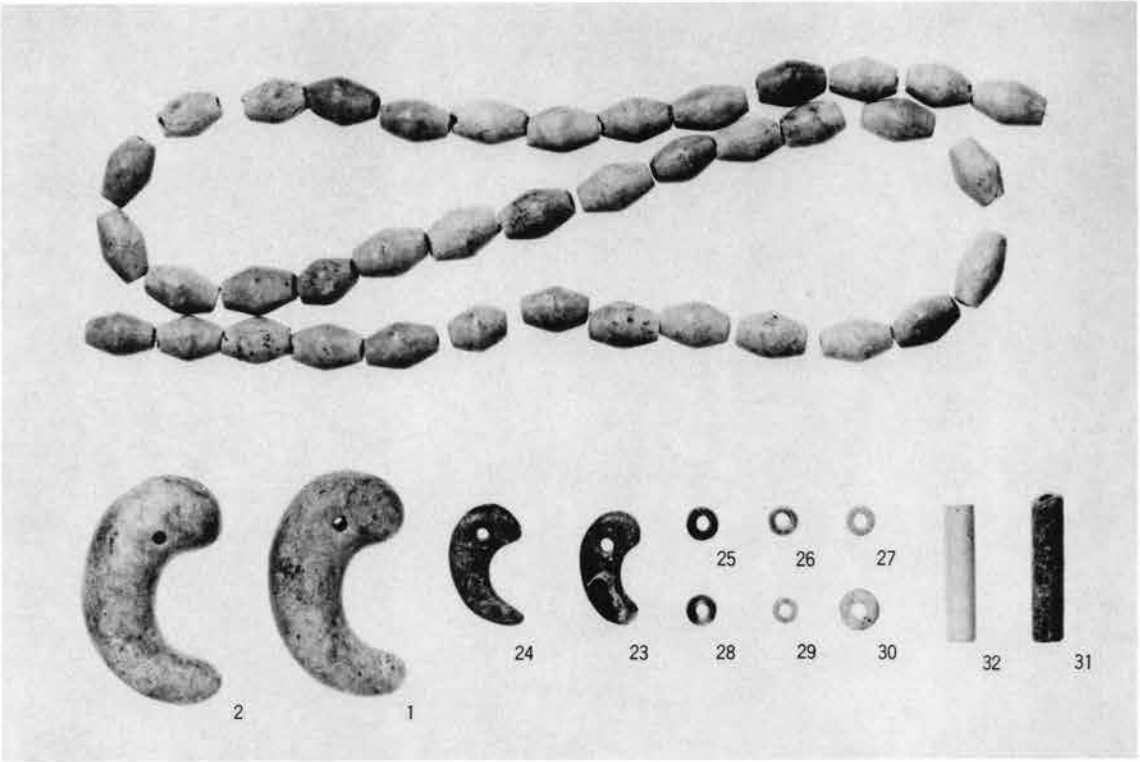
1

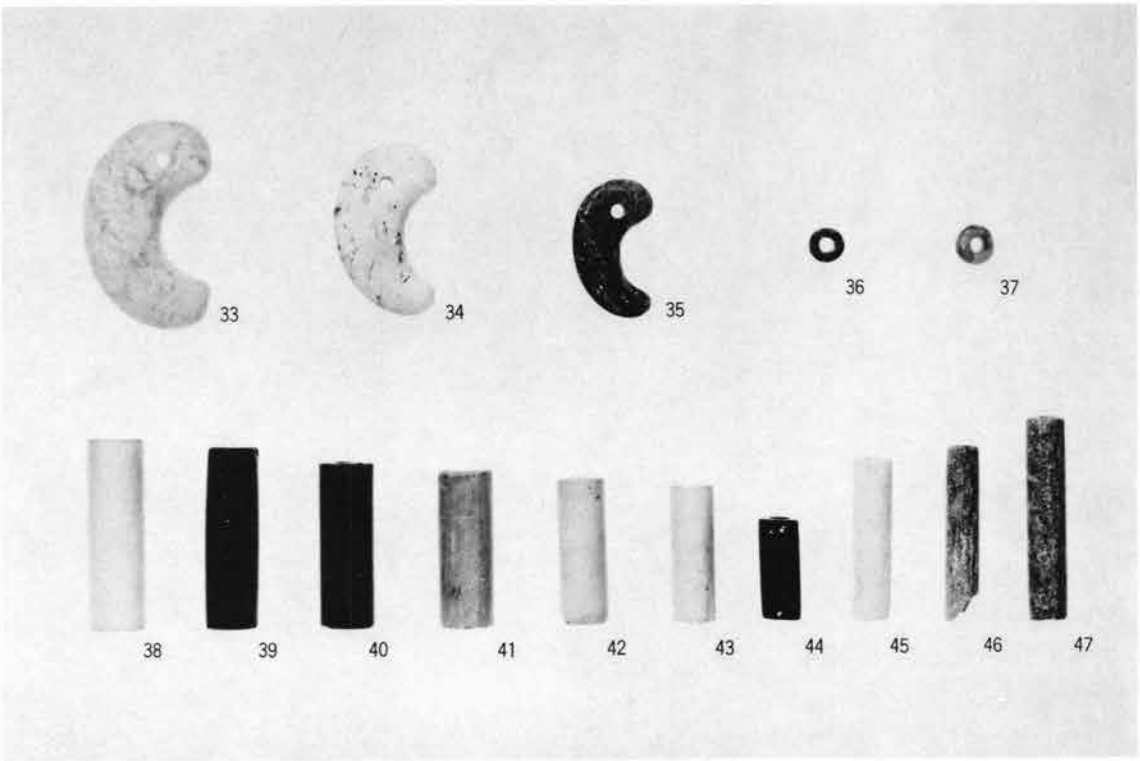
4

出土遺物(1)土器・竪櫛



出土遺物(2)鉄製品


2
1
24
23
25
26
27
28
29
30
32
31


33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47

出土遺物(3)玉類

図版第60　新ヶ尾東古墳群

(1) 新ヶ尾東８号墳調査前全景（北西から）

(2) 新ヶ尾東８号墳火葬骨出土状況（南から）

図版第61　新ヶ尾東古墳群

(1) 新ヶ尾東８号墳第１主体部（北東から）

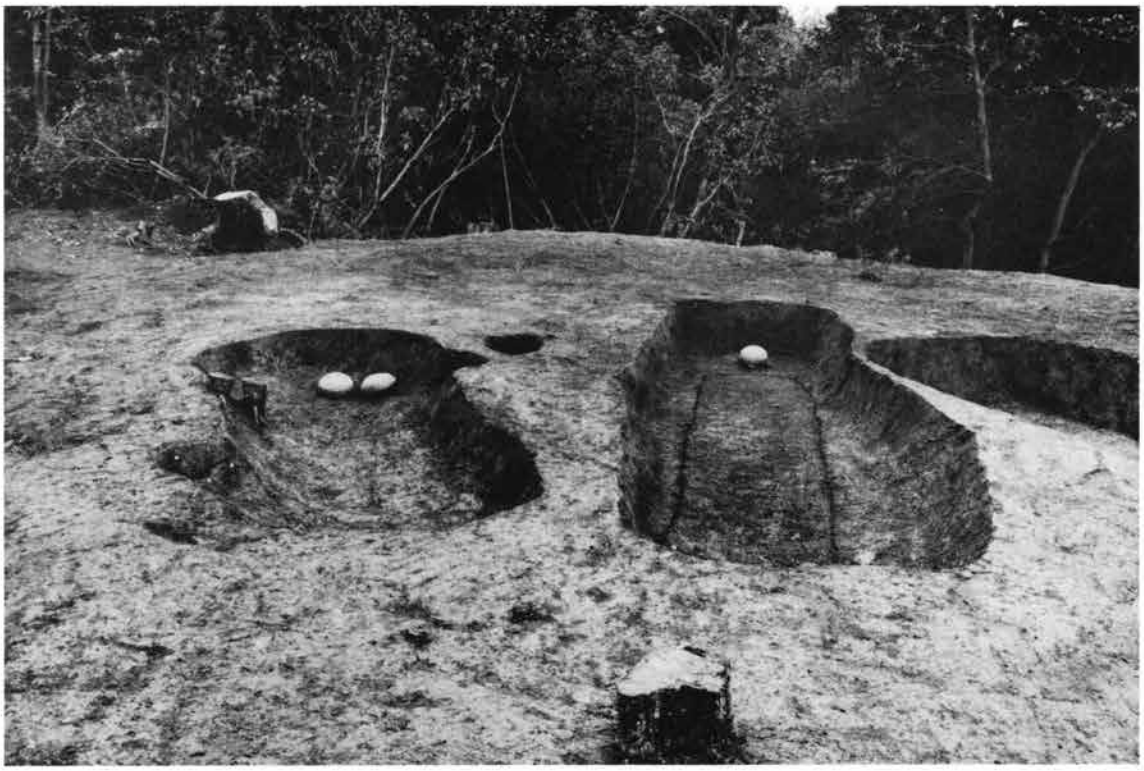
(2) 新ヶ尾東８号墳第２主体部（北東から）

図版第62　新ヶ尾東古墳群

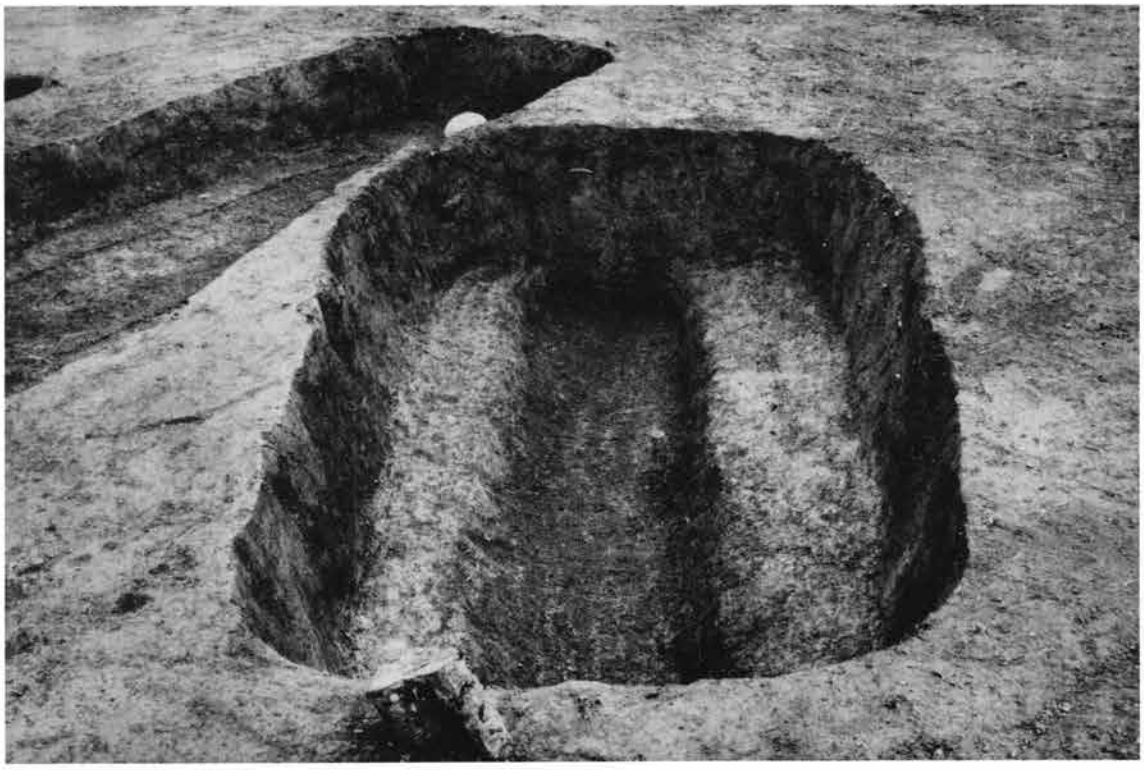
(1)　新ヶ尾東９号墳調査前全景（東南東から）

(2)　新ヶ尾東９号墳主体部全景（東南東から），奥側は８号墳

図版第63　新ヶ尾東古墳群



(1) 新ケ尾東９号墳第１・２主体部，右が第１主体部（北東から）



(2) 新ケ尾東９号墳第３主体部（北から）

図版第64　新ヶ尾東古墳群

(1) 新ヶ尾東10号墳調査前全景（西北西から）

(2) 新ヶ尾東10号墳石室全景（南から）

図版第65　新ヶ尾東古墳群

(1)　新ヶ尾東10号墳遺物出土状況（南から）

(2)　新ヶ尾東10号墳遺物出土状況（西から）

図版第66　新ヶ尾東古墳群

(1) 新ヶ尾東10号墳石室全景（北から）

(2) 新ヶ尾東10号墳閉塞状況（南から）

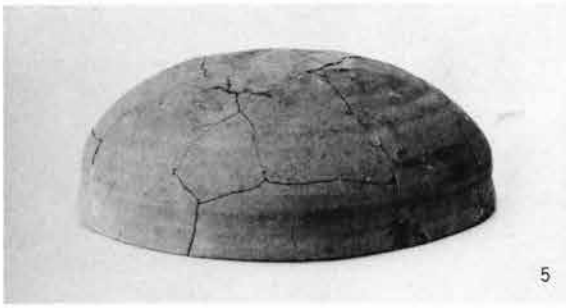
図版第67　新ヶ尾東古墳群

1

2

3

4


5

6

7

8

9

10

11

出土遺物(1)土器

12

15

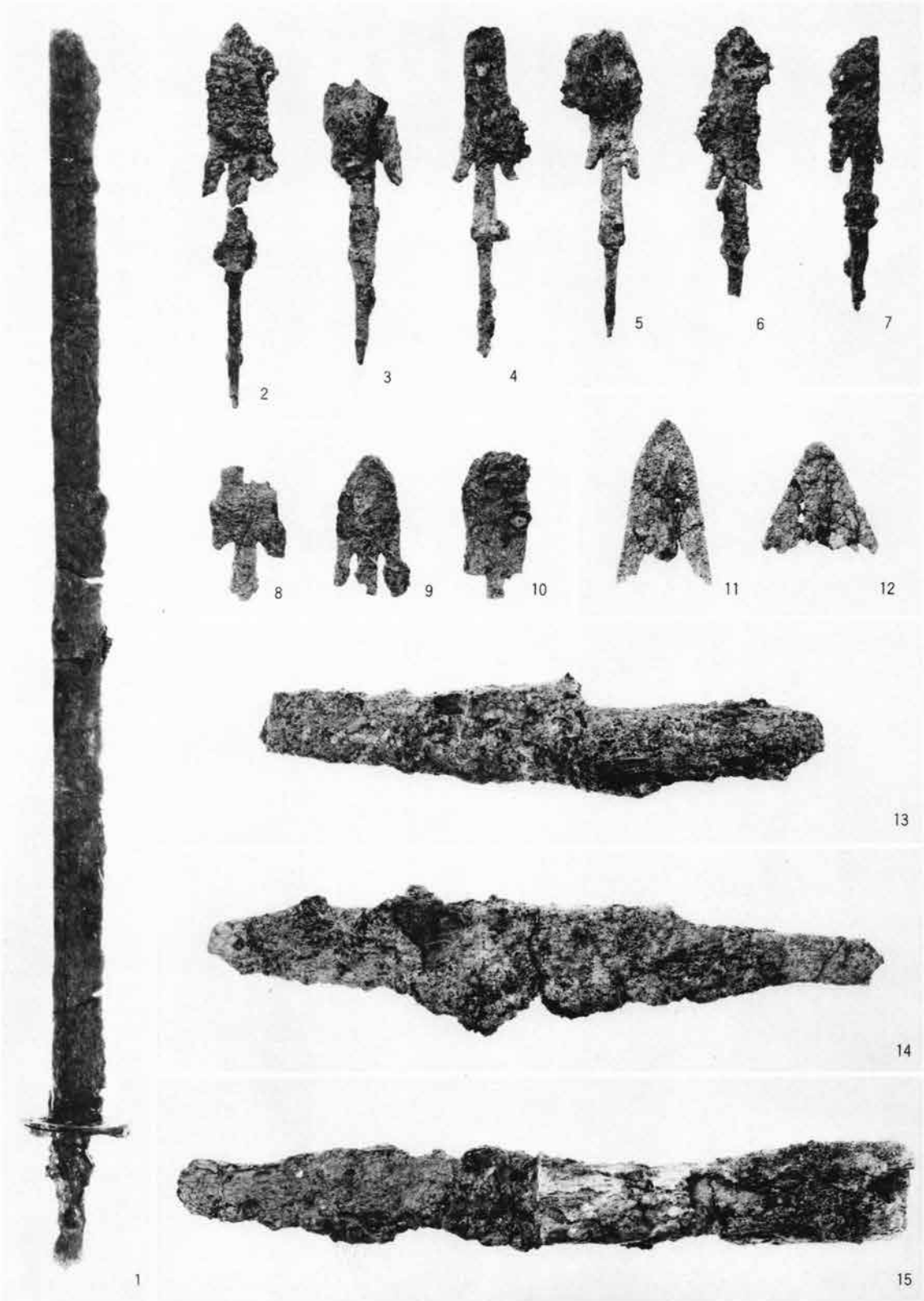
13

16

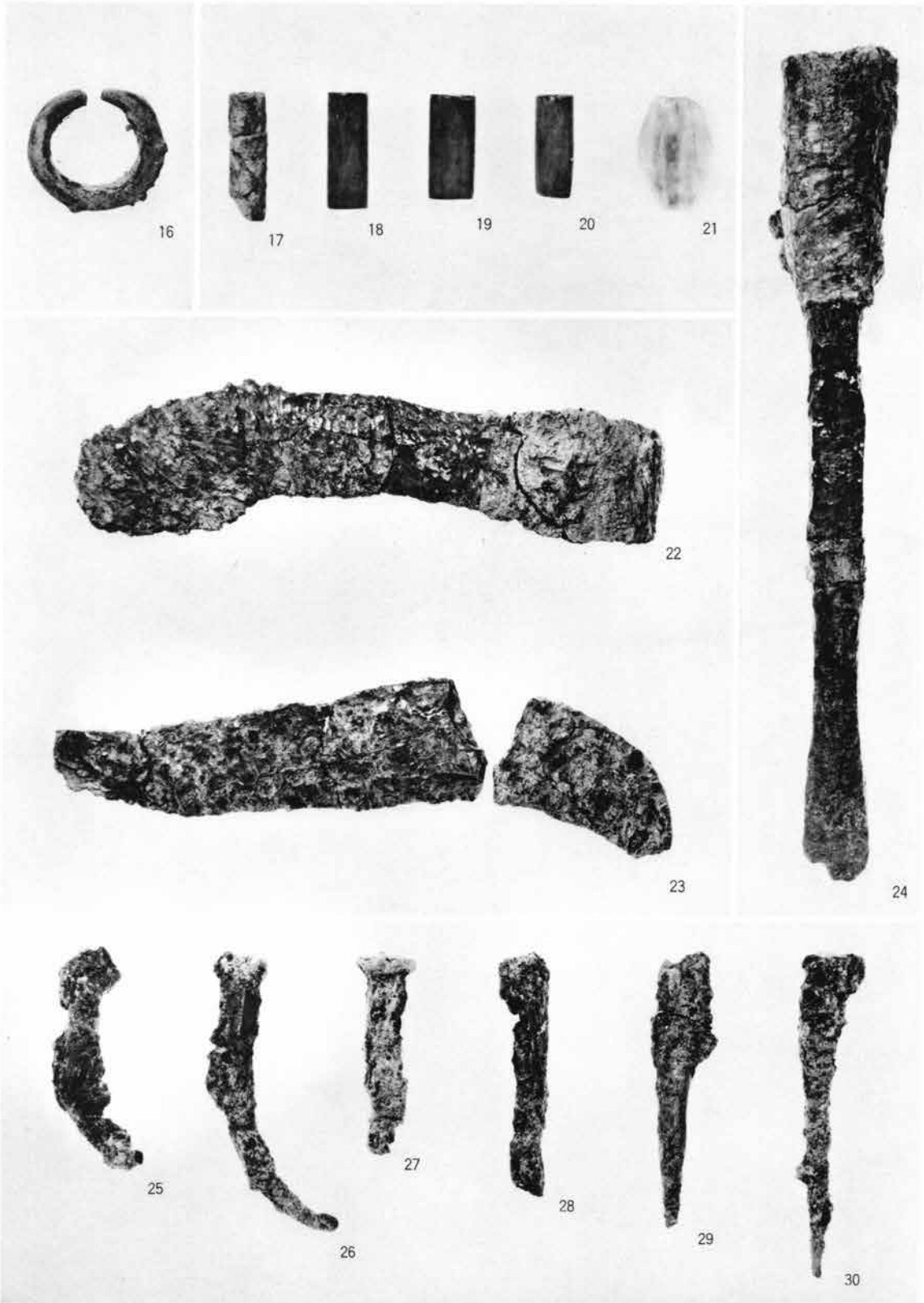
14

17

出土遺物(2)土器

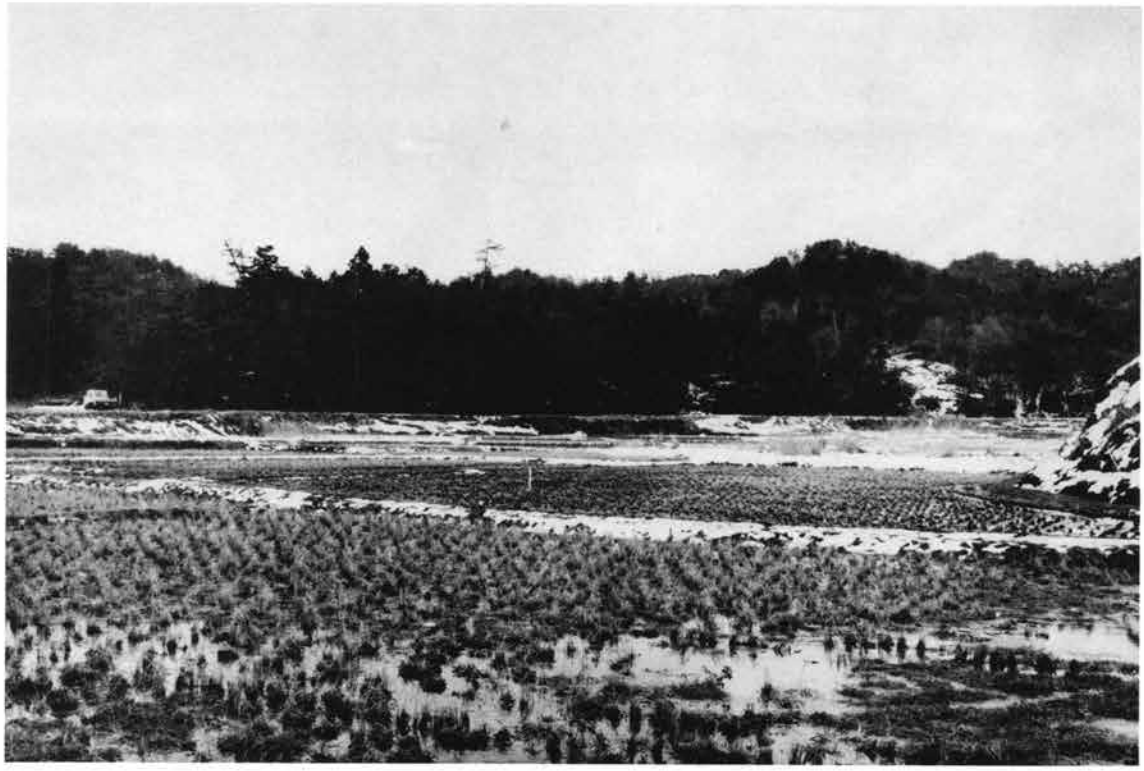


出土遺物(3)直刀・鉄鏃・刀子



出土遺物(4)金環・玉類・鎌・鑿・釘

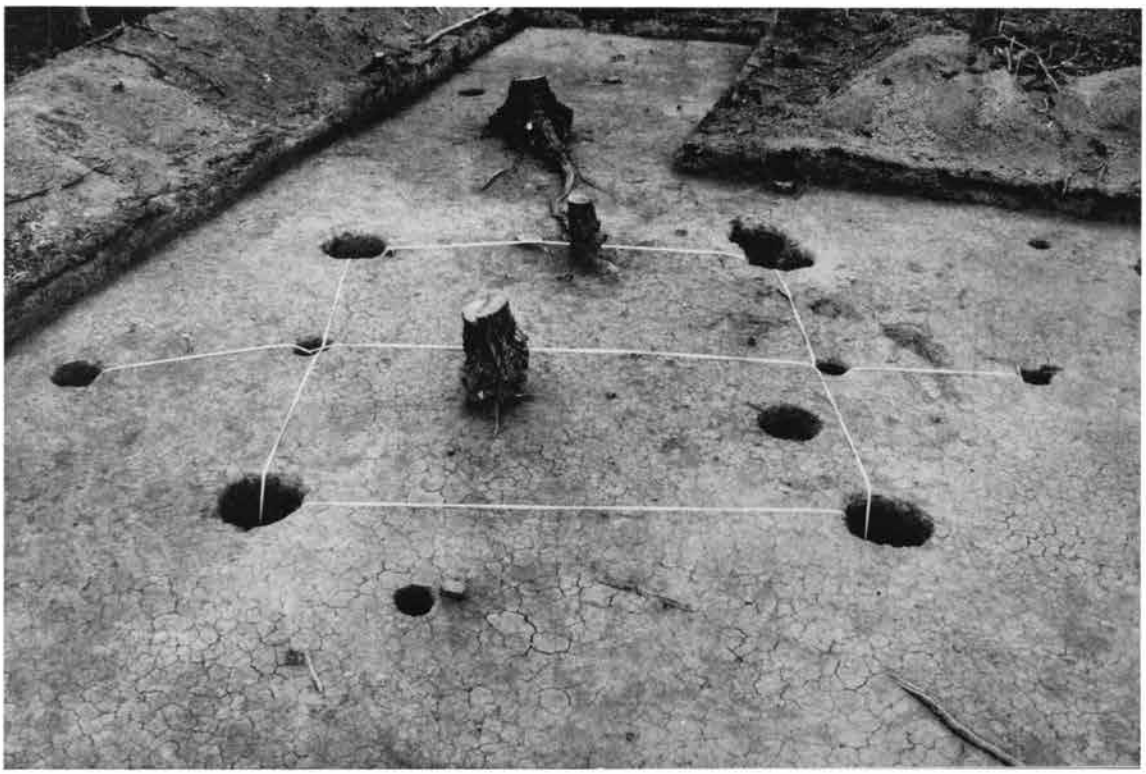
図版第71　鳥取城跡



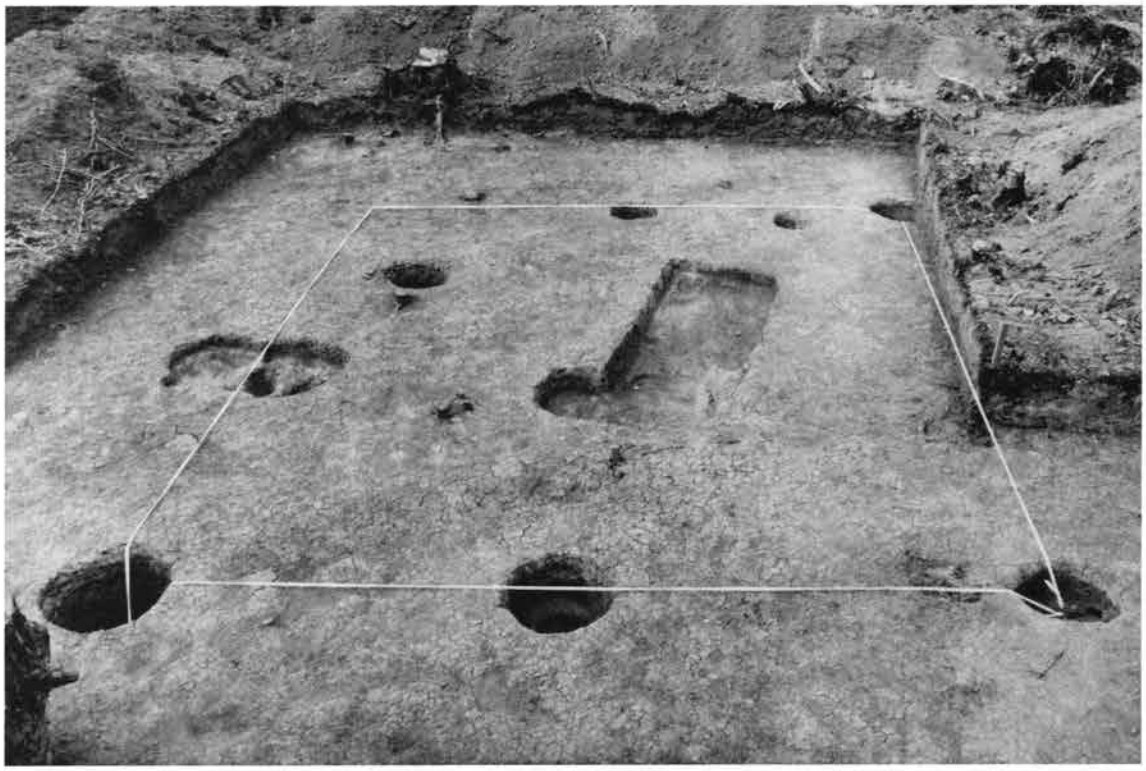
(1) 鳥取城跡遠景（西から）

(2) 第1トレンチ主要部全景（南東から）

図版第72　鳥取城跡



(1)　ＳＢ02全景（東から）



(2)　ＳＢ03・ＳＫ01全景（南から）

図版第73　アバ田古墳群

(1)　1号墳調査前全景（東から）

(2)　1号墳石室全景（北から）

図版第74　アバ田古墳群

(1)　1号墳石室内遺物出土状態（南から）

(2)　1号墳石室全景（北から）

図版第75　アバ田古墳群

(1)　2号墳調査前全景（北東から）

(2)　2号墳石室全景（北東から）

(1)　2号墳石室内遺物出土状態（羨道部から）

(2)　2号墳石室内遺物出土状態（玄門部）

図版第77　アバ田古墳群

1号墳出土遺物(1)
須恵器

24

49

45

48

31

41

40

27

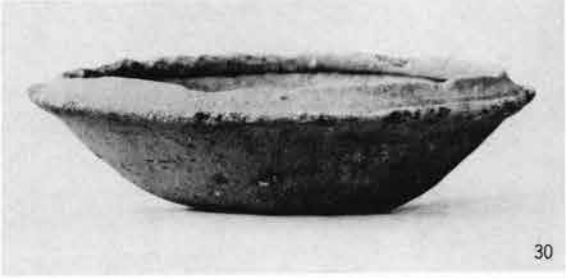
43

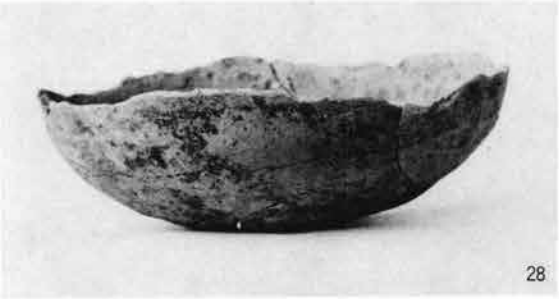
1号墳出土遺物(2)
須恵器・土師器

3

29

2


30


28

23

44

52・60

16

77

2号墳出土遺物(1)
須恵器・土師器

11

63

10

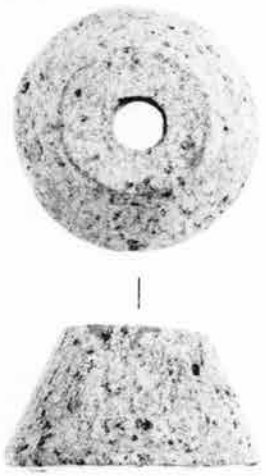
59

17

85

2号墳出土遺物(2)
須恵器

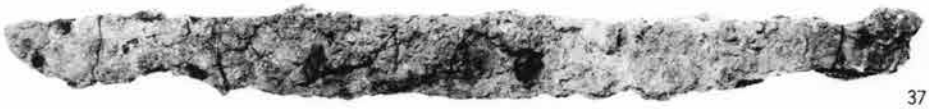
87


1

92

99

8


37

95

24

38

35

2号墳出土遺物(3)
須恵器・紡錘車・勾玉・鉄器

京都府遺跡調査概報 第29冊

昭和63年3月25日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617 向日市寺戸町南垣内40の3
TEL (075)933-3877

印刷　中西印刷株式会社
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155 (代)